



永遠の海

ロシア

第1章

小学生の頃、僕がどういう子供だったかという、友達とのジャンケンに負けて、ランドセルを五つも六つも抱きかかえさせられているっていう、そんな子供だった。

まず、子供たちはみんな急いで学校の玄関口に集まると、そこでジャンケンをした。ここで最初に負けると、小学校の校門まで、重いランドセルをずっと引きずっていかなければならない。そして次に校門から信号機を渡って、角のコンビニのところでまたジャンケンをする。その次のジャンケン地点はピンク色をした壁の、アンデルセンの童話にでもでてきそうな、ラブホテルだ。そうやって子供たちは順々に自分の家へと辿り着き、うまくすると、一度もランドセルを肩に背負うことなく、自宅へと帰り着くこともできた。

あれは僕が小学校三年生くらいの時だったろうか。ジャンケンに五回か六回連続して負け、最後には悔し涙に暮れたという記憶がある。べつに黒いランドセルを重たい思いで幾つも背負われたことが悔しかったわけではない。それはあくまでゲームなのであって、正しいルールにのっとって敗者の役割を果たしているのであるから、当然やむをえないことなのである。

僕はただ単に、自分の運のなさが悔しかったのだ。

夏川なんて、このゲームが子供たちの間で流行り始めて以来、一度もその双肩にランドセルの革が食いこんだことがないし、それどころか、鬼ごっこをしても、駆けっこをしても、とにかく他のどんな遊びという遊びをしても、彼には僕のように惨めな役回りがまわってきたことはなかった。

運動会の騎馬戦では、他のどの生徒よりも数多くの体育帽を奪いとり（僕は彼の下のほうで彼の片足を支えていた）、学芸会では主役を演じるほどの人気ぶりを見せつけ（その時僕は科白のひとつもない紅葉の精のひとりだった）、極めつけは彼が野球部のエースとしてマウンドに立つ、その凛々しい勇姿とってよかったです（ちなみに僕は野球部では補欠で、しかもライトを守っていた）。

当然このような男は女の子にも人気があり、端から見ても、憎らしいくらいにもてまくる。

僕は彼の住む町内から一区画隔てた隣の町内に住んでいたけれど、彼の両親の鼻の高さは、近所の家々の食卓の話題としてよく上るほどだったのである。

僕とこの^{なつかわすぐる}夏川優は幼稚園から高校に至るまでずっと同じ学校に通っていて、何度か同じクラスになったこともあるが、僕は夏川と親しい間柄になったようなことは一度としてない。というよりも、夏川は僕にとって親しい関係を結ぶほどの魅力を持ちえていない人物だったとっていい。

誤解のないように一応念のために言っておくと、僕は夏川に対して嫉妬の情なんてものを抱いたことは一度としてないし、彼に対して劣等感を抱いたなんていうことも皆無だった。繰り返すけれど、僕は彼を羨しいなんて思ったことは、ただの一度としてない。このことは事実であり、また紛れもない真実だ。しつこいようだけど、これは本当のことなんだ。

ここで夏川の奴が一体どういう奴だったか、もっともわかりやすいと思われるエピソードを披

露したいと思う。

これも小学校三年生くらいの頃のことだったと思うんだけど、例のラブホテルの角のところで、奴は彼の手下たちと一緒に目当ての女の子がやってくるのを待ち受けていた。

ラブホテルのぐるりはいやらしいピンク色の塀で囲まれていて一べつにピンク色という色がいやらしい色だっていうんじゃない。ただそのラブホテルの壁が、見るからにいやらしい、媚びたピンク色をしてたんだ一その下から雑草が懸命に窮屈なコンクリートの割れ目に頭を覗かせていた。

奴らは女の子たちがやってくるなり、なんの前触れもなく突然、その可哀想な雑草どもに向けて立ち小便をしゃがってね、女の子たちはサイテーとかなんとか言って、それぞれ走り去っていったんだっけ。で、夏川の奴はといえば、本当は見たいくせに、とかなんとか、セクハラまがいのことを平気で追いうちかけるように言いやがるんだ一つまり、彼は小学生の頃からそういう奴だったんだよ。

まあそれにしてもしかし、女っていう生き物にはつくづく見る目のないのが多い。

夏川の日本人離れした彫りの深い顔立ちだとか、成績の良さだとか、クラスにおける発言力だとか、そんなものにいとも簡単に心を奪われてしまうんだからな。

高校生の頃、奴がつきあっていた女の子をふたりばかり知ってるけど、ひとは間違いなく夏川のそういった見てくれに騙されたのであろうことを僕は知っている。

その娘は吉川雪乃といって、僕と同じ陸上部の女の子だった。そして僕はその娘のことを実はちょっとだけいいなと思っていたりなんかした。

校舎とグラウンドの外回りを走っている時なんかは、お互いに時々ペースを落としながら、色々な無駄話をして、仲良くなったんだ。

「吉川、今日は心なしかいつもより胸がでかいじゃん」

「うん。今日はね、厚いパッドの入ったブラしてるんだよ」

吉川も僕も、ぜえぜえ息切らしながら走ってんのに、そういうあけっぴろげな会話をしたりして、楽しかったのを今もよく覚えている。

これは高校生の僕が大分あとになって知ることだけど、女の子の胸っていうのは服の上から見ただけじゃてんであてにならないんだよな。あまり詳しくは知らないけど、寄せて上げるブラとかなんとか、外からは抜群に形良く見えるのとかがあるらしくて、僕の数少ない経験からすると、逆に小さそうに見える娘が実は脱いだら結構あった、なんてことがあったりするものなんだよ。

吉川の場合はさ、ちょっとぐらい厚いパッドの入ったブラを着用してても、まるっきり少年体型でね、僕はよく彼女のことを貧乳扱いしてからかったものだった（僕が「微乳」というと、彼女は決まって「え？もしかして美しい乳？」といって聞き返してくるので、微乳といわずに必ず貧乳といわねば駄目なのだ）。

僕は決して自惚れの強いほうではないと思うんだけど、吉川もさ、ちょっとしたきっかけさえあれば、僕とつきあってみてもいいかなくらいには思ってたと思うんだ。

僕が朝練の時とかにへばっていると、吉川は臆面もなくよくこんなことを聞いてきたもんだっ

「きのうの夜、寝る前にやりすぎて疲れてるんじゃないの？」

で、僕は彼女にこう答えるわけ。

「いや、夜はいくらやってもいいんだけど、朝はね、一発抜いただけでも疲労感がひしひしと……」

ドスケベとかバカとか、長谷部くんたらサイテーとか言われていつもどつかれたけど、僕は僕で先に聞いてきたのはそっちだろって感じで、汗に濡れた吉川の背中をべったり叩き返したりとかしてさ、楽しかったよ、本当に。

僕が思うに、女の子には二通りのタイプがいて、吉川みたいにいくらエッチな話をしてもオープンに返してくれる娘と、そんな話する人ってサイテーよ、みたいにマジな目線で返してくる娘とがいるんだよな。

僕だって誰にでも彼にでもマスターベーションの話なんかしたりしないし、そんなところまで突っこんだ話をした女の子は、吉川が初めてだった。

僕は生来から悠長でのんびりした性格の持ち主だったから、高校一年の時はずいぶん、まだ吉川とこのままいい友達でいるのも悪くないって、そんなふうに思ってたんだ……ところがだよ、ある日突然、夏川の野郎が横からしゃしゃりでてきて、吉川に告白しちまったんだ。

いやあ、あれは見物だったよな。

走り疲れてグラウンドのトラックの脇にへたりこんだ吉川に向かって、夏川の奴、どでかい声で告白しやがったんだから。あの腹の底からのグラウンド全体に響き渡った声は、体育会系特有の産物としか言いようがない。

「好きだあああっ！頼むっ、つきあってくれっ！」

夕暮れの校庭、傾きかけた陽の光のせいではなく頬を紅潮させた青年、そして驚いた表情で彼を見返す、額に汗の光る彼女……三十年くらい前の青春映画にありそうなシチュエーションだよな、まったく。完璧に決まっちゃったよ、ふたりとも。

吉川はすぐには返事をしなかったけど、彼らが学年中の公認のカップルになるのに、さほどの時間はかからなかった。

これはね、僕の誤解と偏見にまみれた見解なんだけど、甲子園を目指す高校球児ってのは、恋愛してるような暇なんてないんじゃないかって思ってたんだ。それなのに夏川は、君のことばかり考えていては予選の一回戦で負けることにもなりかねない、とかなんとか言って、吉川のことを口説き落とすしちまったんだよ。

そしてこれはそのあとすぐに判明したことなんだけど、夏川って実は相当な脚フェチ野郎だったんだよな。吉川はそりゃあどう大目に見ても胸はなかったけど、ハードルを飛び越える足っていうのがどうにもこうにも綺麗でさ、一年の時から陸上部の走るカモシカっていう異名をとってたくらいだった。しかも顔の中では吉川は特に瞳が綺麗で、野性の子鹿のバンビみたいに、大きな黒目がちの可愛らしい瞳をしてたんだ。

僕は自分でも一体どうしてしまったのかよくわからないんだけど、一度だけ、そのことで夏川をぶん殴ってしまったことがある。

僕が校舎の屋上の隅っこのほうで、秋の風流なそよ風に吹かれながら菓子パンなんぞを食って

いた時に、それは起こった。

夏川とその間抜けな仲間たちが僕のあとからやってきて、自分たちのつきあっている女の話なんかを شدしたんだな。それでやったとかやらないだとか、童貞の僕には刺激の強すぎる話を شدしたんで、僕が席を外そうと思った時のことだった。

「雪乃って脱がせてみたら本当に胸がないんだよな。太った相撲とりのほうがまだしも揉みがいがあるっていうかさ、時々ホモの気分も味わえるってくらい……」

今でもはっきりと覚えているけど、それは本当に一瞬の出来ごとだった。

よく自分の中にこんな馬鹿力があつたなつてびっくりするぐらいの勢いで、夏川の奴を殴り飛ばしてたんだ。頭に一気に血が上つてそれが白熱すると、右手に弓の弦を引き絞つた時みたいな力が集中してさ、次の瞬間には……つて感じだった。

夏川の間抜けな仲間たちは夏川の仇をとるでもなく、そろいもそろつてぼかんと間抜け面を並べていたつて。

かろうじて奴らよりも僕のほうが事態を飲みこむのが一瞬早くて、僕は返り討ちにあうなんてこともなく、その場を退出することができていたんだけどね。

そしてその翌日、僕は吉川に何故夏川を殴つたのかと詰問され、手痛い平手打ちをくらうことになる。理由なんて僕自身よくわからなかつたし、わかつたところで、うまく説明するなんてことは多分できなかつただろう。

確かに僕は吉川のことを好きだつたけど、だからとつて夏川の奴なんかに嫉妬して眠れぬ夜を幾夜も過ごしたとかなんとか、そんなことは全然なかつたし、本当にあれは衝動的というか、瞬間的な出来ごとだつたんだ。

その後、夏川はといへば、僕に殴られたことについて何ひとつ口外しなかつたし、僕自身にしてもあやまろうだなんて、いまだに思いもしない。なにしろ僕は奴が死んで墓に葬られたあとも、一度として奴の墓前に手を合わせたり、線香の一本でも上げてやろうという気にすらなつたことのない男だつたからね。

結局吉川と夏川は高校二年に進級する前に別れ、僕は一年の終わり頃、陸上部の顧問である、タテヤマ＝モミアゲ＝プレスリーという長つたらしい仇名の先生に退部届けを提出した（館山先生は大抵、モミアゲかプレスリーカルパンと影で呼ばれていた。仇名の由来は説明するまでもないと思うので省略しておこう）。

べつにふたりが別れたことと僕が退部届けを出したということには、特別な因果関係はない。ただ、吉川のやつ、夏川と何かがあるたびごとに僕のところに相談しにきやがるからさ、正直いつ最後には彼女と顔を合わせるのも嫌になつてきてしまつたんだよ。

もし――もしもだけど、仮に僕があのまま陸上を続けていたとしたら、吉川とつきあうつていうことになつてたかもしれないけど、僕にはどうしてか、それだけは我慢のならないことのように思つて仕方なかつたんだ。それに、一番の理由はもちろんそんなくだらないことじゃなく、僕には自分がなんのために走っているのか、さつぱりわからなくなつてきてたんだよ。ある日、体育館で腿上げなんぞをしている時にね、ふとなんでこんなことやってるんだつて疑問符が無数にわいてきちまつてさ、部活の練習を途中でほつぱりだして抜けだしてたんだ――それが二学

期の終わり頃の話で、それ以降部の練習には顔もださずじまいで終わったんだ。

陸上はね、僕が唯一誇れる体育会系の競技だったのに、どうしてあんなふうになんの脈絡もなく辞めちゃったのか、七年以上経った今でもよくわからない。まあだからといって続けていればよかったなとは思えないけど、僕は頭の中が真っ白になるまで走るより、もっと違う何かになりたかったんじゃないかって思うんだ——たぶんね。たぶんだけど。

そして僕は週に三日、某レストランでウェイターのアルバイトを始め、二年の時のクラス編成で、またしても夏川と同じクラスになってしまったのだった。

この二年の時のクラスは、夏川の野郎を教室から弾きだしたとしても、いい意味で最悪のクラスだったよ。

女どもは女狐よろしくよく喋りやがるし、男はボンクラかスケベのどっちかしかいやしないんだからな——もちろん、例外的な人物も片手の指が何本か折れる程度にはいたけどね。しかもその上クラスの担任がルパンときた日には、どうしてくれようホトトギスって感じだったよ。

しかもプレスリー、春休みの間に子作りに励みすぎたらしくて、一学期早々ヘルニアで入院しまっただもんな——結婚して半年にもならない新婚家庭にヘルニアは悲劇だよな。

「やりすぎたよな——絶対やりすぎなんだよ、不二子とさ」

「なんのやりすぎなんだよ。フラフープかなんかか？」

「も——先生たちきっと毎晩超激しくって、のぼりつめるのと同時にボキっていうのだったりしてね」

「ああん、ああん、そこそこ……ボキってやつ？」

まあはっきりいってクラスの連中はどいつもこいつもこんな感じで、館山先生が入院したっていう知らせを聞いても、誰ひとりとして同情を示すような生徒はいなかったね。まさに自業自得って感じで、かなりの長い間笑い話の種にされてたくらいだよ。

それで代わりに副担の飯塚っていう日本史の先生がプレスリーの代行をやってたわけだけど、彼は生徒たちの間でかなり小声で「レイプマン」と噂されている先生だった。

なんでも昔、本校の女生徒のひとりを強姦して、その女の子が卒業するのと同時に責任をとって結婚したとかしないとか……真偽のほどはよくわからなかったけど、先生がうちの高校の卒業生と結婚したということだけは、確かに事実であるようだった。

まあ僕は担任なんて、館山先生でも飯塚先生でも、べつにどっちでもよかったんだ。保健体育の授業でモミアゲの下ネタ話が聞けないのはちょっとばかり残念な気がしないでもなかったけど、飯塚先生は性犯罪者とはとても思えないくらい、きちんとした立派な、優しいいい先生だったしね。

僕のクラスは普段は馬鹿なことばかり喋ってるような連中ばかりだったけど、これでもいざって時にはまとまりがあるっていうか、意外に団結力があるんだ。それが我がクラス最大の長所であり短所でもあるっていうかね。つまり、男女を問わずあんまり仲が良すぎるもんだから、普段の授業の時はただうるさいだけの、先生方の頭を悩ませるクラスだったとっていい。当時の先生方にもし一番手を焼いたのはどこのクラスだったかって聞いたとしたら、なんといつても一

番やかましかったのは二年D組だったって、みんな口を揃えて答えると思うよ。

まあうちのクラスの男子と女子じゃあ、まず恋愛関係になるなんていうことはなかったね。実は誰それが彼それにほのかな恋慕の情を抱いている……なんてことが発覚した日には、クラス全員からの口撃に撃沈されて、うまくいくものもうまくいかなかったから。みんな余計なことばかり口出しして、ろくな手助けしかしやしないんだから。そしてそんな中、二-Dで唯一カップルを成立させていたのが、誰だろう、夏川優と山田真莉絵^{やまだまりえ}だった。いわゆる〈別格カップル〉というか、まあそんな感じだったよ。

「うちのクラスの女子って本当に色気ってもんがねえよなあ。橘と山田以外はさ」

「しかもその山田ちゃんも夏川の馬鹿とつきあってるんだもんなあ……知ってるか？あのふたり、とうとう最後までいっちゃったらしいよ」

福島がそう言うと、佐々木は目の色を変えて、気が狂ったように屋上のフェンスを揺らしている。

「嘘だろ！？やめてくれよ。あの山田の豊満な肉体が夏川ごときの汚れた魔の手にいよいよにされてるだなんて、想像しただけでも自殺したくなるよ、俺は」

「じゃあここから飛び降りろよ、佐々木は」

僕が突っこむと、一緒に昼休みを過ごしていた福島と秀川は笑った。

「お前ら知らないのか！？去年の体育祭の時、アンカーで颯爽と走った山田真莉絵の胸の揺れ具合を……吉川が最後の最後で抜かされたのは、足の速さで負けたんじゃないくて、胸の大小の比較で負けたんだって、俺はいまだにそうにらんでるよ」

「どういう理論だよ、それは」

再び佐々木の科白に突っこみつつも、僕はその時のことを思いだすと、微かな胸の痛みを覚えた。帰宅部で、特別体を鍛えてるってわけでもないだろう山田に、陸上部の走るカモシカは追い抜かされたのだ——しかもそれはダブルの意味での敗北だった。

大体その頃から夏川の野郎は吉川と山田とに二股をかけていて、吉川が悔しさのあまり泣いていたのを、僕はかなりの長い間忘れることができなかった。

山田真莉絵は美人で可愛らしくて、何をやらせてもソツつてもものない、僕から言わせると、とてつもなく計算高い女だった。

誰にも見抜かれてないと思ったら大間違いだ——僕はそんな意地の悪い目で山田のことを観察していて、正直って内心、夏川とは反吐のでそうなくらいお似合いのカップルだと思っていた

。

でも僕はてっきり山田は、秀川ねらいだとばかり思ってたんだよな——一年の頃から生徒会の集まりだとかなんとか、ふたりが一緒にいるのを廊下やなんかでよく見かけていたから。

僕は秀川が山田の魔手に陥落しなくてよかったって、実はかなり本気でほっと胸を撫でおろしたりなんかしてたんだ。秀川とは二年になってから初めて同じクラスになったんだけど、彼は僕にとってとんでもなくとびきりの〈いい奴〉だった。

僕は秀川のことを廊下なんかで見かけるたびに（こいつは絶対にいい奴だ。話す機会さえあれば、僕はこいつと絶対に気が合うだろう）と直感的にわかっている、実際に同じクラスになっ

てみると、そのことが正夢のように見事に的中したというわけなのだ。

僕は秀川のことがとても好きだった——といっても、誤解しないでほしいんだけど、ホモだとかゲイだとか、そういうことでは一切なしに、純粹に友達としてだよ。僕は純粹に友達として秀川のことを尊敬しているし、僕は冗談でよく秀川に愛の告白をしてしまうほど、彼のことを愛していた。

「フッ。愛してるぜ、ヒデリン」

「俺もだよ、アツシ……でもヒデリンはよせ」

僕が彼の肩を抱き寄せると、秀川はいつも決まって僕の手を振り払い、まるで汚いフケでも落とすみたいに肩のところを払っていた。

「ひどいわっ、もうアタシのこと、愛していないのねっ」

「ごめんよアツシ……俺はこれでも一応、ノーマルな人間なんだ……」

まあはっきりいって確かに、冗談にしても気色の悪い会話だよな。

ひでかわゆきひで

秀川幸秀は不動の学年トップを一年の頃からずっと保持していて、体育万能の、誰からも好かれているという、ちょっとそこらへんにいない男だった。そして僕はといえば、秀川に唯一冗談を言わせることのできる男として、ちょっとだけ有名だったりしたのだ。

彼は口数の多いほうでは決してなかったけど、何故か僕とふたりきりの時だけは、常日頃どういったことを考えているかとか、わりに親しい佐々木や福島にさえ言わないことまで話してくれて、僕は彼の考え深さにただひたすら感服するばかりだった。

彼は宇宙について造詣が深く、アインシュタインの相対性理論だとか、ホーキングの宇宙を語るだとか、そんな本ばかりが彼の部屋の本棚にはひしめいていた。

環境問題のことだとか、僕だったらせいぜい本を読んで、その表面をなぞっただけでわかったような気持ちになり、具体的な解決策を生活の中でどう講じなければならぬかとか、それほどの危機感を抱いたりはしないだろう。でも秀川の奴は違うんだな。奴はプラスチックのゴミを捨てたらそれが最終的にどういう運命を辿るのかということについてきちんと理解し、またその理解を行動に移してきちんと示すような男なんだよ。

おかげで僕は彼の知識レベルに追いつくため、彼の勉強の邪魔にならない程度に彼の部屋へお邪魔しては本を失敬し、すっかり読書中毒患者と化してしまった。

自慢じゃないけど僕は、それまで活字の本というものを一冊としてまともに読破したことがない、夏休みの読書感想文に毎年苦しめられ続けたような男だったのだ。しかし、秀川の存在は僕のこうした考えをすべて変え、僕も秀川に追いつこうとすることで、彼に多少の影響力を及ぼしたのではないかと推察される。とはいっても、かなり一方的に近い形で、僕は秀川から影響を受けた。

彼の存在がなければ、僕は間違いなく作家になろうだなんて思わなかっただろうし、実際、作家なんてものになれもしなかつただろう。

秀川は僕よりもはるかに優れた文才を持ちながら、医大受験のために筆を折っていた。そして彼が数えきれないほど多くの英単語を覚え、センター試験に頻出の問題を繰り返し解いたりしてる間に、僕はただ屁の足しにも糞の足しにもならないような駄文を綴っていたことになる。

そしてその後、彼が世のため人のために働くようになってからも、僕は彼に読んでもらってもいいような小説は、本当の意味ではまだ書けていないような気がしている。

それとここにもうひとつ、秀川幸秀という人物を雄弁に物語るに相応しい、ひとつのエピソードがある。

佐々木のやつが、AVをクラス中に貸し回してたんだけど、秀川にも半ば無理やり押しつけるような形で、貸したことがあったんだ。「まあ、いいからいいから。遠慮するな」っていう感じでさ。その手の本とかビデオとか、嫌いな男はまず100%いないとっていいし、いくら硬派の秀川でも興味のわかないはずはないって、僕も そんなふうに思った。

それで、秀川が礼を言って佐々木にビデオを返した時、佐々木がこう聞いたんだ。

「受験勉強もいいけど、時々ほっと一息抜いとけよ。このビデオにでてくる女、結構そそるだろ？茶髪の娘と黒髪の娘と、どっちがよかった？」

秀川は返答に困ったような顔をしていて、僕だけじゃなく、佐々木にも福島にもたぶんわかったんじゃないかな。秀川はそのビデオをじっくりたっぷり舐めつくすように（それがビデオのサブタイトルだった）鑑賞したりなんかしなかったんだ。しかも彼は——もちろんこれは僕の勝手な憶測だけど——そういうものを見たいとさえ 思ってなかったんだよ。逆にそういうことに興味を抱かないと変人だと思われるから、借りたまでのことだったんだ。

僕はね、その次の瞬間には自分の馬鹿な体験談をはじめて、その場の空気を取り繕うことにうまく成功した。

「この間さ、母親のいない隙になんとかエロビデオを見ようと計画したんだよな。ずっと母親がでかける機会を狙って、玄関のドアが閉まった瞬間、速攻ビデオのスイッチ入れて見はじめたんだけど、十分くらいした最高にいいところで、母親が帰ってきたんだよ。もう慌ててテレビのスイッチ切ってジーンズのジッパー上げて、なんとか自然体を装うことに懸命だったよ。母親は忘れ物をしたとかなんとかいってまたすぐに出ていったけど、あの時はほんと、最高に焦ったよな」

佐々木は僕の話にやけに共感を示してくれたけど、彼は秀川にAVを貸したことを後悔してるらしく、佐々木は二度とその手のものを秀川に渡そうとはしなかった。まあだからといって佐々木は秀川に対して距離を置くということもなく、馬鹿馬鹿しくてくだらないエッチな話を相変わらず彼にも僕にもし続けていたけどね。

秀川はいい意味でちょっと変わっていて、年のわりにかなり老成しているようなところがあったから「ふむふむ。こういうのが十代の青少年の性というものなのだ」といったような感じで、僕や佐々木や福島の話に耳を傾けていたのかもしれない。

一応、秀川の名誉のために弁明しておくけど、彼は決して女性とできないといったようなわけでも、性欲のかけらもない聖人君子なわけでもなんでもない。その証拠に彼は医大の研修先で看護学生と恋に落ち、ラブラブな関係を五年後の同窓会で明らかにすることになるのであるが、それはまた後日の話である。

さて、時間は高校二年の夏休み前のこととなる。

僕が期末テストで赤点を三つとり、補習の授業に追われている頃、夏川は地区大会の決勝で負けて、惜しくも甲子園への切符を逃していた。

その夏川の野球人生最後の試合は我が校の先発で、九回裏までは4-0、うちの学校が甲子園初出場間違いなし、と応援席にいた誰もが思ったことだろう。

そして九回の裏――押し出しの1失点とまさかの逆転ホームランを相手チームの主峰に叩きつけられ、夏川たちの夏は終焉を迎えることになる。

僕は今もテレビに映っていた夏川のクローズアップされた顔を忘れることができずにいるくらいだ。

眉毛の濃い、坊主頭の凛々しい面差しの青年が――このさわやかさは詐欺だな、と麦茶を飲みながら僕は思ったけど――鼻水をたらしながら、嗚咽を洩らして、悔し涙に暮れていたんだ。

「来年こそは今年の雪辱を必ず晴らしたいと思います」

泥で汚れたユニフォームと帽子とで、夏川は懸命に涙を拭っていたけど、この時にはもう彼にはわかっていたはずなんだ。来年なんて、永遠にやってくることはないんだっていうことが。

「また来年に向けてがんばれよ」

「残念だったな」

「惜しかったけど、でも本当にいい試合だったと思うよ」

夏川は一体どんな気持ちでこれらの慰めの科白を聞いていたのか、いくら想像力を働かせてみても、僕にはいまだに理解することができない。

僕は彼に何も言わなかったし、カワイソウとかなんとか、これっぽっちも思っただけはなかった。お気の毒さま、くらいには確かに思っていたと思うが、たまには挫折を味わってみることも必要なんじゃないのかって、どこか冷めた目で彼の小さくなってる背中を見返してたんだ――本当の意味での挫折を知らなかったのは、僕のほうだったにも関わらずね。

そして夏川は終業式のあった七月二十四日、級友にも美人のガールフレンドにも骨肉腫に蝕まれていた右腕にも別れを告げて、厚岸海岸へ身を投じて死んだ。

第2章

夏川が自殺した、と連絡網が回ってきた時、そんな馬鹿な、と僕は思った。まさかあの計算高くてずるがしこい、嫌ったらしい野郎が自殺なんていう繊細な選択ミスを犯すとは、僕には到底信じられなかった。

僕は彼のために流す涙を一粒たりとも持ちあわせていなかったのだから、通夜の席でむせび泣くといったような、みっともい真似はできなかつたし、終始一貫して無表情だった。

秀川がクラス代表として素晴らしく感動的な弔辞を読み上げると、誰もが感極まったようにハンカチや制服の袖などで目頭を押さえていたっけ——その文章を読んでいる秀川自身は眉ひとつ、眼鏡ひとつ動かさずに坦々とした口調であったにも関わらずね。生前、夏川に対してまったく好感を抱いてなかった佐々木までが、額を床にこすりつけんばかりにして泣いているのには驚いたよ。

人間ってというのはさ、普段から泣きたいことが結構あったとしても、なんとかこらえて可能なかぎりふんばろうとする生き物だろ？だから堂々と涙を流してもなんら構わない、いやむしろそのほうが好ましいという機会を与えられると、必要以上にそうしてしまうってところが、どこかにあるんじゃないだろうか……なんてね。自分でもわかってはいるんだ。自分がどんなに冷徹で嫌な奴かってことは。級友の死にこみあげるものさえ何もなくて、ただ義理だけで線香を上げにくる男——それが僕だった。夏川は僕に形式的な焼香なんてされても、有難くも嬉しくもなんともないに違いなかったけど、僕はもしかしたら怖かったのかもしれないな。クラスのみんなから級友の葬式にも参列しないだなんて……ってそんなふうになじられるのが。

もちろん僕のように悲しそうなふりをしているだけって生徒は、他にも何人かいたと思うけど、僕がはっきりと覚えているかぎりでは、泣いていなかったのは秀川と山田のふたりだけだったような気がする。

隣のクラスの吉川なんて、棺にすがりつかんばかりにして号泣してるのに、山田真莉絵ときたら、沈鬱な表情を浮かべるのに全神経を集中しているといったような、そんな感じだった。

夏川の葬式に参列した、何も知らない遠い親戚の人などは多分、吉川雪乃のことを夏川の彼女だと思ったに違いない。なりふり構わず号泣している吉川に対して、山田は時折涙をこらえるような仕種で悔しそうに下唇を噛んでいるだけだった。

——夏川。本当に馬鹿だよな、おまえってやつは。両天秤なんてかけたりせずに、どうして吉川の気持ちをもっと大切にしていやらなかったんだよ。あんなこっぴどかしい大告白までしてつきあったくせに、なんでなんだよ……吉川は今晚あたり、おまえのために神さまにお祈りでもして、それから心の中でおまえに語りかけながら、泣いて眠るだろうよ。吉川はそういう女なんだよ。僕はちゃんと知ってるんだ。だからこそ好きだったんだ。人の恋路の予定を大幅に狂わせたくせして、何もかもほっぽりだして死の道を選びとるなんて、やっぱりどう大目にみても最低なやつだよ、おまえは。この世の中で、僕の次くらいに。

しつこく繰り返すようだけど、僕は夏川の死後、高校を卒業して数年が過ぎても、奴のために涙を流したことは一度もない。あいつなんかのために涙を絞りだして泣くくらいなら、刻んだ玉

葱でも目に張りつけて苦悶することのほうがまだしも有益だと、僕は断言しよう。

そして僕はかなり本気でそう思っているにも関わらず、高いバス料金を支払って、しかも片道二時間もの時を費して、夏川が身を投げた海岸にまで行ってみようというのだから、相当の変人としかいいようがないね、我ながら。

僕はやつが灰になって天に昇った三日後、釧路駅のバスターミナルから厚岸行きのバスに乗り、二時間あまりの時を、ただ車窓を移り変わる景色だけ眺めて過ごそうとした。

長方形の広い車内には運転手と僕のふたりだけで、つい先日バス会社で何故ストライキが行われたのか、如実に物語っているかのような客の混み具合だった。そして見るからに人の良さそうな運転手は、バスが釧路の街中を抜けて、だんだんに家屋がまばらになってくるあたりにさしかかると、あんまり寂しいからラジオでもかけようかと言って、話しかけてきた。

「お客さん、厚岸のどのへんにまで行くんだい？」

運転手は地元のFM局にチューナーを合わせながら、そう聞いた。

「……厚岸に、海を見にいこうと思ってるんですけど、どの辺りで下車するのが一番いいでしょうか？」

「うーん、そうだねえ。海のどの辺を見たいのかにもよるけど……今もうちょっと待っててごらん。毎日この便に乗るお客さんで、厚岸の地理にとっても詳しい人がいるから、おじさんが聞いてみてあげよう。でも海が見たいだなんて、何か嫌なことでもあったのかい？例えば彼女にふられたとか……」

僕があんまり長いこと押し黙っていたので、運転手は凶星を指してしまったかと、気遣わしげな視線をミラー越しに投げかけていた。ただ僕は、適当に罪のない嘘をつこうとして、うまくそれが思い浮かばなかったただけなのだけれど。

「失恋とか、彼女にふられたとか、そんなことならよかったですけど……実はクラスメイトがつい先日、厚岸の海に身投げしてしまって、これからそのお参りに行くところなんです」

運転手はミラーに映る僕のうつむきかげんの顔を見ると、深く同情するように、白い手袋をはめた手で帽子をかぶり直している。

「おじさんも新聞で読んでその話は知ってるよ。可哀想なことをしたよねえ。野球ひとすじでやってきて、ガンのために片腕を切り落とさなくちゃならないだなんて、よっぽどつらかったんだろうなあ。聞けばこの間、テレビに大きく映ってた子だっていうんだもんなあ。おじさんも若い頃は野球やってたから、試合に負ける悔しさはわかるけど……それでもねえ、人生あきらめてほしくなかったよなあ」 おじさんはまるで哀悼の意でも表すかのように、また帽子をかぶり直していた。そして僕は何も言わずに沈黙したまま、おじさんの言葉の最後の部分にだけ、心から賛同していた。

おじさんはたぶん僕が友人の死を悼んでいると勘違いしたのかもしれない。ラジオのボリュームを少しばかり小さくして、それきり何も質問してはこなかった。

そして尾幌の停留所で、あずき色の着物をきっちり着込んだ白髪の老婦人とそのお嫁さんらしき人が乗りこんでくると、運転手は早速とばかりに僕の話をした。しかもそのおばあさんはわざわざ丁寧に海までの道程を、簡単な地図として描いてくれたのだった。

「あまり海ばかり見て、変な気を起こさんようにね」

おばあさんは紙片を僕に手渡す時、目尻と口許に笑い皺を作りながら、そんなことを言った。色艶のいい、健康そうなおばあさんで、このバスには、毎日神社へお参りをするために乗るのだそうだ。表面上はとてもそうは見えないが、二年前にガンの手術をしてから、体調が優れないのだという。

毎日決まった時刻に同じ便に乗るだけあって、運転手とおばあさんとそのお嫁さんとは、かなり気心が知れた仲のようだった。僕は三人の話の間に割りこもうとは思わなかったけど、そばで黙って聞いているだけでも、何故か不思議と楽しかった——釧路の病院に入院しているおばあさんの親戚のことだとか（もうあまり長くないらしい）、今年の昆布漁のことだとか、政府がなんといおうと景気は相変わらず良くないことだとか、話はすべて日常の些末なことに集約していたけれど、三人は終始和やかに途切れることなく世間話をしていた。

僕はバス料金を料金箱に入れて下車する時、もう一度おばあさんと運転手さんにお礼を言って、頭を下げた。

おじさんは帽子を軽く上げてクラクションを鳴らし、お嫁さんは窓から手を振ってくれた。

「気をつけんさいね」

おばあさんも手を振ってくれていたけれど、ただ道を尋ねただけなのに、ずいぶん親切というか、丁寧な別れの挨拶だった。

まあ終点間際だっというのに、間に乗った乗客が僕も含めて五人しかいなかったんだもん——しかも全員が顔見知り——これじゃあわざわざ釧路から二時間かけてやってきても、商売上がったりだよな、バス会社は。

釧路からバスに揺られて約二時間ほどの距離にある^{あつけし}厚岸という町は、昆布と牡蠣が豊富にとれるという以外、とり立てて何もない町だ。釧路と同じく漁師網と水産加工の匂いのする田舎町。人口は約一万三千人で、釧路の人口の約二十分の一程度という、実にのどかなところだ。僕は同じ漁師町でも、釧路より厚岸のほうがずっと好きだった。特に海の青さが釧路の海よりも生き生きと眼前に迫ってくるその力強さが。

おばあさんはわざわざ海までの道程を紙に書き記してくれたけど、実際にはその必要はまったくなかったのだ。ほとんど三方を海に囲まれているようなものなので、その青い輝きを目指していけば、嫌でも海へは辿り着ける。

そして海の近くまで歩いてやってくると、こんなに陽気でいい天気であるにも関わらず、海辺には人っ子ひとりいなかった——僕が夏川の死んだ岸壁にたどりつくまでの間に目にしたものはといえば、どこまでも穏やかに広がる茫漠たる紺碧の海と、寄せては返すその白い波頭、海の塩分を蒸発させる白熱の太陽、白銀の雲に隠された水平線、飛びかう海鳥の群れ——そんなところだったろうか。それから鼻孔をくすぐる潮風の匂いだとか、足元に散らばる貝殻だとか、とてつもなく海らしい支配の力が、浜辺にはえんえんと続いている。僕が海岸線沿いに道をずっと歩いてくると、海拔二十メートルくらいの岸壁の麓に、海で亡くなった死者たちを悼む、弔いの地蔵があるのが見えた。そしてその地蔵の膝元からは線香の煙りがたなびいており、白い百合の

花やリンドウなどの仏花が多く供えられているのも見えた。どうやら僕の前にも誰かがきたばかりなのらしい。

僕も地蔵の足元に置いてあるライターで線香に火を点けると、手を合わせて地蔵を拝むことにした。すると、不意に思い出の渦のようなものが僕の周囲をとり囲み始め、脳に刻みこまれた記憶のひとつが、鮮やかに甦ってきた。

小学三年の時と四年の時、僕は夏川と同じクラスで、そこに鈴木京子っていう女の子がいたんだ。鈴木は六つだか七つの時だかに母親を亡くしていて、毎朝必ず仏壇の前で祈ってから学校へくるのだと言っていたっけ。

クラスの中にね、嫌味たらしい鎖のついた眼鏡をしている、クソ生意気な悪ガキがいて、そいつが一度、鈴木のことを線香くさいってからかったことがあるんだ。それで鎖眼鏡のクソガキは仲間の何人かと鈴木の机を囲って、線香くさいって囃したてたわけだ。そこへ我らが正義の熱血漢、夏川優が登場して、奴らと喧嘩になったと、まあこういうわけ。女子の全員は泣いている鈴木のみ方だから、鎖眼鏡の野郎には当然勝ち目なんてあるはずもなく、言い負かされた負け犬にできたことはといえば、夏川に鈴木のことを好きなんだろうと、話の矛先を転じることぐらいだった。

夏川のやつ、耳まで真っ赤にして一生懸命否定してたけど、本当は好きだったんだよな、おまえは鈴木のことだ。僕には誰に教えられなくてもわかってたよ、おまえのちょっとしたさりげない仕種や何かで、鈴木だけに意味のある特別なサインを送ってたこと……まあ今はもうどうだっていいことだけど、夏川は生前そんなふうにして、たまにいいところを見せることもあるやつだった。

普段は自慢好きの鼻持ちならない野郎ではあったけど、そういった自分の欠点を覆い隠す技術というものは彼はよく心得ていて、僕は夏川のそういうところが一番我慢ならなかったんだ。他の連中は騙せても、僕だけはおまえの腐った性根を知ってるよ……僕はずっとそんなふうにおまえのことを思ってた。でも骨肉腫だ、ガンだ、手遅れだ、腕を切り落とさねば……ってそう言われた時、それはおまえにとって死を宣告されたも同じことだったのか？この夏にすべてを賭けてたってというのは本当なのか？

テレビの画面いっぱい映って、鼻水と一緒に涙を流していたおまえは最高に格好が良かったよ。もちろん嫌味なんかじゃ全然なく、本気で心から僕はそう思った——あんなにがむしゃらに格好良くなれる男には、僕は一生かかってもなれないかもしれないってね。僕はおまえのことが大嫌いだったけど、それでもお世辞なんかじゃなく、生きていてほしかったよ。死の境界線なんか踏み越えずに、片腕を失くしてでも戻ってきてほしかったよ。

僕はおまえのことが好きでも普通でも嫌いでもなく、本当に大嫌いだったんだ。僕の場合、反りの合う人間かどうかは、その人間の持つ匂いや雰囲気で一瞬にして嗅ぎわけることができる——いわゆる本能というやつでね。僕はおまえとは話なんてしてもまるきり無駄だって最初から決めつけていて、それはおまえにもわかっていたと思うけど、できれば僕はずっとおまえのことを大嫌いなままでいたかったよ。僕が今こんなうらぶれた海岸にまでやってきて地蔵と睨みあっているのは、おまえに別れを告げにきたとかなんとかそんなセンチメンタルなことでは全然なく、僕はただ目の前にある〈死〉という現象に興味をひかれてやってきたってそういうそれだけのことなん

だからな——そこのところだけはくれぐれも誤解なんかするなよ——僕におまえのことがわかってたみたい、おまえにも僕のそういうとこ、わかってたとは思いうけど……

「ねえ、もう二十分にもなるわよ」

僕はまるで瞑想を解かれた坊主みたいにはっとした。声を聞いただけではそれが誰とはわからず、後ろを振り返ってみてはじめて、背後にいる人物の名前が脳裏に閃いた——山田真莉絵だった。

「……いつからそこに？」

我ながら間抜けな質問だったと思う。そんなものは二十分前からに決まっている。

「あなたが線香を上げている時からずっと後ろに突っ立ってたわよ。長谷部くんはあたしのことが嫌いだから、わざと無視してあたしが立ち去るのを待ってるのかとも思ったんだけど、ちゃんと夏川に心の中で話しかけてるみたいだったから、見物させてもらったの」

僕は彼女の頭の良さと回転の速さに感謝した——何故って、今さら気まずい雰囲気無理にとり繕うような、七面倒くさいことはせずにすみそうだったから。

「山田も線香を上げにきたの？あ……もしかして、ここにある花とかも全部山田が持ってきたものとか……」

「まさか。冗談でしょ？それは夏川の親戚だとか、親御さんの持ってきたものだと思うわ。夏川のためにあたしが手折る花なんて、この世に一本たりともないに違いないもの」

——どういう意味だろう。

僕にはこの時、彼女のこの言葉の意味がよくわからなかった。それに深く追及しようとも思わなかったし……ただこの時僕は、山田も僕と同じように、彼女としてつきあっていながらも、彼のことをどこか軽蔑していたんじゃないかってそんなふうに漠然と思っただけだった。

「ねえ、どこに行くの？」

僕が山田の脇をすり抜けてどこかへ行こうとすると、彼女は僕の腕を強い力で引っ張った。そして彼女の胸のあたりに肘があたると、すぐに山田の腕を僕は振り払った。

「わかりやすい人よね、長谷部くん。なんでもすぐ顔にでるんだもん。秀川くんとは大違い」

なんて嫌な女だろうと、僕は山田に対して改めて思った。そしてこんなくそいまましい海岸からは早く離れるに限るとばかりに、早足でその場を去ろうとした。

「ちょっと待ってってば。べつにあたしのことは嫌いでもかまわないけど、ちょっと話をするくらいいいでしょ？夏川があなたのことをどう思ってたかとか、全部知ってるんだから、あたし」

山田のことを無視して、僕はただひたすらに黒い砂浜を歩き、わざわざこんなさびれた町にまで二時間もかけてやってきたことを後悔していた。

「無視しなくてもいいじゃない。あたしは長谷部くんのこと好きよ、長谷部くんがあたしのことを嫌いでも……ねえ、ちょっと聞いている？」

その手には乗るものかとばかりに、僕は歩く速度を速め、山田と大きく距離をとろうと思った。そんなふうに軽々しく好きだとか言ってくる女が、僕は今も昔も大嫌いだったからだ。

「ひどい人なのね、長谷部くん。一生懸命歩きにくいサンダルで追いつがろうとしている女の子をそんなふうに……きゃあっ」

僕との距離が広がるにつれて、山田は大声で怒鳴るように話してたけど、その最後にすっ転んでしまったらしいことが、振り返らなくてもわかった。

（わざとらしいんだよ）と思わなくもなかったけど、流石にそれは意地が悪すぎかと思い、仕方なく山田のいるところまで後戻りすることにする。

「やっぱり優しいんだ、長谷部くんて。絶対に振り返ってくれると思ってた」

僕が無言で山田の白いサンダルの砂をとり除き、座りこんでいる彼女の足元にそれを置くと、山田は中腰の、僕の瞳をのぞきこむような姿勢になった——その時僕は心の中で、山田の白いサンダルを両方とも海に放りこんでやろうかと思っていただけ。

「……なんだよ？」

僕が睨み返すと、山田は倒れこむようにして、僕の首筋に白い両腕を回してきた。彼女が全体重をかけて重力に身を任せると、彼女の体を支えきることが僕にはできなかった。しかも砂の上に背中が着いた瞬間、不覚にも一瞬目を閉じてしまい、柔らかい唇の感触がその時に重ねられていた。

「——キス、したくないの？」

僕は山田の体から、逃げるように身を引いた。そして今度こそなんの迷いもなく歩道への石段を駆け上がり、車道を通り切り、駅までの道を急ぐことにした——これが僕のファーストキスだった。

僕は真っ白になった頭のまま、かなりの距離を怒ったように歩き続け、ふと我に返った時、一度だけ後ろを振り返った。もしかしたら山田が後を尾けてきているかもしれないと思ったけど、彼女の姿はどこにもなかった。

そして厚岸駅でバスよりも電車のほうが速い時刻に通過するのを知った僕は、帰りは釧路駅まで電車で揺られることにしようと思ったのだった。

山田真莉絵のことは極力考えないようにと努めながらも、右肘のあたりに当たった柔らかい乳房の感触だとか、薄いピンク色をした貝のような彼女の唇だとかが嫌でも脳裏を掠めて、波の音がいつまでも耳から離れなかった。

白い、豊満な胸の谷間に見えるワンピースを着た山田は、学校にいる時とはまるで別人のように見え、その言動も学校で見せるはにかんだような微笑なんかとはほど遠かった。

彼女は女子たちが堂々と教室で猥談をしていても、いつも困ったような表情を浮かべるだけで、自ら直接参加したりするようなこともなかった——夏川が自分は山田とやりまくっているといったようなことを他でほのめかしていたにも関わらず。

僕には山田真莉絵のことがさっぱり理解できなかった。

学校では見せないような本性をむきだしにして——おそらくは今日見せたほうが本当に本物の正真正銘の山田真莉絵なのだろう——突然キスしてきたりなんかして、一体どういうつもりなのか、僕にはさっぱりわからなかった。

僕は夜、ふとんの中で、山田はただからかっただけなのだと、冗談半分に気まぐれであんなふうに振るまったのだと、ひたすら祈るように自分に言い聞かせながら眠った。

第3章

♪あったーらしーい あーさがきたっ
きっぽーのあーさーが
よろこーびに胸をひーらき
あおぞーら あ、お、げーっ……

今日は生憎の曇り空だったけど、なんともさわやかな早朝の歌だ。

夏川にとって、自分はもう死ぬのだと決めた終業式の七月二十四日、彼は限りない絶望と喪失感を胸に目を覚ましたのではないだろうか……夏川は校長のくだらない訓辞や説教を聞いている間も、飯塚先生が通信簿を順番に配っている間も、いつもと変わった様子など微塵も感じられなかった。それどころか、いつも一緒につるんでいる連中に自分の通信簿を自慢たらしく見せびらかしてさえいたのだ。その彼が何故——事件の真相は釧路の霧の中に包まれている……なんて、これじゃあ例のくそくだらないどっかのサスペンス劇場みたいだよな。

第一、僕の生まれ育った釧路っていうこの町は、比較的のどかで、事件とか惨劇だとか、ドラマが生まれるにはちょっとばかり不向きな土地柄なんだよ。

僕は人通りのほとんどない町の大通りを自転車で走りぬけ、駅裏にあるコンビニでおにぎりなんかを買ったあと、地下道へ下りる前に駐輪場へ自転車を止めることにした。

バスが発車するまでにはまだ時間が十分にある。僕は駅前のバスターミナルの中で座席のひとつに腰かけ、読みさしの本を開くことにしたけど、何故かちっとも本の内容に集中することができなかった。それで仕方なく本を閉ざし、溜息まじりにぼんやり考えごとをすることにした。

僕はね、この釧路っていう住みなれた町が大嫌いなんだ。

大体が大体、あの町のシンボルともいえるべき、駅の電光掲示板の下の看板——946なんて書かれた看板が堂々とぶらさがっているあたりからしていけないよ。いいかい、考えてもごらん。9・4・6だよ？いくら語呂あわせがいいからってそれはないだろうって思わないか？クルシンデ・シンデ・ジゴクへ行く——なんて、観光客にあまりいいイメージを与えないことは言うまでもないだろう。

地元に対して僕が持っているイメージはといえば、魚くさい港町っていうくらいなもので、生まれてから十六年間もずっと住んでいるにも関わらず、愛着なんてものは微塵もわいてきやしない。まあ釧路湿原なんかはなかなか悪くないと思うけど、故郷の良さなんていうものは、一度離れてみないとわからないものなのかもしれないな、特に僕みたいな小僧っ子にはね。

それでも時々、自分の住んでいる町をなんとか好きになろうと努力したこともあるよ。例えば、金の川の路と書いて釧路とか、ちょっとばかり無理があるけど、それなら好きになってもいいかもしれないとか、考えたことがある。それは僕が幣舞^{ぬさまい}橋っていう北海道の三大名橋のひとつを渡っている時に考えていたことなんだけど、ちょうど釧路川の河口のところのところにさ、オレンジ色の太陽が燃えていてね、川を綺麗な夕焼け色に染めてる時に思いついたことなんだ。その時一緒にいた佐々木や福島は、橋に四つある女の裸身像のことを話していて、ダッチワイフにするな

ら四人のうちの誰がいいかなんて、ロマンのかけらもないことを言ってただけだね——めずらしく秀川も自分は夏の像がいいなんて言っててさ、チャームポイントはどこかとか、どのあたりがそそののかとか、佐々木に突っこまれていたっけ。

厚岸行きのバスの運転席には、きのうと同じおじさんがいて、僕が整理券をとると（考えてみたらとる必要はなかったんだけど）、また帽子を片手で上げて、会釈をしてくれた。

「今日もまたお友達のお参りにいくのかい？」

おじさんはきのうと同じく、人好きのする笑みを浮かべて言った。

「まあそんなところですよ。きのうは本当にありがとうございました。おかげですぐにどこの岩場かわかったし、偶然だけど、そこで同じクラスの友達にも会えたし……」

そりゃあよかった、とおじさんは満足げにまたちょっと帽子をずらしている。このレオナルド熊に似ていないこともない運転手を相手に僕は時々世間話をし、あとはただ曇天を背景にした車窓の景色をぼんやり眺めるばかりだった。

今日は僕の他にも四名ほど乗客がおり、尾幌の停留所できのうのおばあさんとそのお嫁さんと乗車する間にも五名乗客が増え、きのうよりは若干車内の人口密度は高かった。

あずき色の和服を上品に着こなしたきのうのハイカラなおばあさんは、名前をスミレさんといい、隣の座席の僕に向かって簡単な自己紹介と身の上話をしてくれた。

スミレさんは太平洋戦争で、もとは炭坑夫をしていた最初の旦那さんを亡くし、その後再婚して厚岸の漁師のもとへ嫁いできたのだという。今はその漁師だった旦那さんも亡くなり、長男の息子夫婦と同居しているとのことだった。

「おばあちゃん、若い人にそんな話してもきっとつままないわよ」

おばあさんとは違って、言葉に訛りといったもののまるでないお嫁さんがそうたしなめた。でもスミレさんは僕が厚岸駅で下車するまで話をし続け、その間お嫁さんのことはまったく無視していた——どうも様子から察するに、お嫁さんのサツキさんにとっては、耳にタコができている話ばかりのようだった。

そして厚岸駅でバスを降り、スミレさんたちに手を振ると、僕は今日もまたきのうと同じように、海岸目指して歩くことにした。

砂浜に残るさざ波のあとを足でたどりながら、ふもとに地蔵のある小高い岩の上を見上げると、曇天を背に人影が見えた——彼女はきのうと同じ白いワンピースを着ていて、遠くから見ると、その姿は裸のように見えないこともなかった。

山田真莉絵は比喩などではなく、本当に透けるような白い肌をしていて、灰色の空と海に舞う、カモメの羽根のような白さで、岸壁の上に立っていた。

僕は山田と目があっても、負けないぞ、とばかりに目を逸らさず、自然とできたのであろう岩場の階段を上って彼女とその上で向きあった。

「絶対にくると思ってた」

山田は小憎らしいくらい綺麗で可愛らしい笑みを頬に浮かべて、麦わら帽子を斜めにかぶり直しながらそう言った。それから僕を手招きして、夏川が真逆様に落ちていったであろう岩の壁を見下ろすようにと合図した。

まるで吸いこまれるかのように、その時僕は砕ける白い波飛沫から目を逸らすことができなかった。山田が僕の体を揺すぶってくれなかったとしたら、もしかしたら僕は意識が遠のいていく感覚から抜け出すことができなかったかもしれない。それはほんの二、三十秒の出来ごとであったはずなのに、不思議な感覚で僕を前後不覚に陥らせた。波の動きや音は心地好いめまいを催させ、まるで催眠術にかかってとてもいい気持ちにさせられているみたいなの、そんな感覚だった。

「大丈夫？」

自分でもおかしなことに、膝がどうしようもなく震えて止まらなかった。僕は山田の腕にしがみつような格好で額の汗をぬぐい、体中の毛穴という毛穴から一気に汗が吹きだしていったあとの、気の抜けたような疲労感を味わっていた。

僕は年老いた人がするようなぎこちない動作で岩場の出っ張りのひとつになんとか腰かけ、それでやっと人心地着くことができたのだった。

「もしかして想像しちゃった？夏川の体が中空に踊り、硬い岩のひとつに頭がぶつかって頭蓋骨の割れるところとか……もしかしたら脳味噌が飛びだしていたかもしれないわね。それとも首が変な具合に曲がって折れるところか何かを想像したの？」

「……山田は、僕がくるまでの間、そんなことを想って海を見てたの？」

どうしても喉が震えるのを止められなくて、僕は片手で自分の首を締めつけながらそう聞いた。

「もう何十回となくシミュレートしたわ。地面を蹴る時の渾身の勇気だとか、岩に体を打ちつけた時の衝撃や、海に全身が呑み込まれる時の恐怖だとか、想像できうる範囲内のことはすべて想像したわ……でもそれも今日で終わりなの。長谷部くんがわたしを迎えにきてくれたから」

山田は麦わら帽子を脱ぐと、僕の汗ばんだ頭髪にかぶらせて、急ぎ足で岩の下へと降りていく。

ふわりと帽子をかぶせられた瞬間、山田の茶色い髪の毛のいい匂いがして、僕はfrisbeeを主人の元へ持っていく忠実な犬よろしく、彼女のことを追いかけていた。たぶん僕はきのうキスされた瞬間から彼女のことを半分くらい好きになっていて、残りの半分をどうしたらいいか、戸惑っていたのだ。

「今日もあたしがここへ来ているんじゃないかって、そう思ってきたんでしょう？はるばる釧路からバスに乗って……それとも電車？」

バスだよ、と僕は走る山田の背中に向かって答えた。山田はとっくにサンダルを脱いで砂浜を走ってたから、追いつくのが容易じゃなかった。帰宅部なんてやめて、陸上部に入ればいいのって肩で息をしながらかなり本気で思ったよ。

それで僕は山田に追いついた時、かなり乱暴に彼女の肩をつかんじゃってさ、振り向かせた時に白いワンピースの肩紐がはだけてしまって、目のやり場に困ってしまった。山田の着てるワンピースっていうのは、胸ぐりの大きく開いてるようなのだったから、あともうわずか何センチかでその全容が明らかになるっていうそんな感じで……。

「ごめん」

すぐにあやまって彼女の肩から手を離れたけど、反射的にそうしたっていうんじゃない、僕は山田と数瞬の間見つめあってから、意識的にそう言ったんだ。

「どうしてあやまるの？見たいなら見たいってそう言えばいいじゃない。キスしたいならそうしてもいいし、触りたいなら触りたいってそう言えば？あたし、長谷部くんのためだったらなんでもしてあげられると思うよ。裸になれっていうんだったら、今すぐにここで……なってあげようか？」

山田は刺激的な言葉で僕を挑発してきたけど、冗談じゃなく、彼女なら本気で必ずそうするだろうっていうのがわかるんだ——言葉尻や何かからね。ただ、黙ってさえいれば清楚な正統派女優みたいな容貌の彼女が、何故僕なんかに向かってそんなことを言うのか、そこがどうにも理解に苦しむところだった。

「……夏川にも、同じようなことをいって誘ったりしたのか？」

僕は努めて冷静さを装いながらそう訊いたけど、その瞬間、彼女の強い眼差しが怒りによってさらに激しく燃え立つのがわかった——でも僕は彼女にすごまれても、決してひるんだりするものかとはばかりに、山田の視線のすべてを真正面から受けとめた。

「教えてあげましょうか？あたしがどんなふうに夏川から誘われて、セックスするまでに至ったのかとか……もちろん長谷部くんがどうしても知りたいていうのなら、だけどね」

僕は素直に降参してうなずいた。正直、その手の話にはものすごく興味があったし、彼女の前でいまさら意地を張って見たところで、本心を見透かされてしまうに違いなかったから。

それで山田と僕は互いに砂浜に腰を下ろして、穏やかな波の打ち寄せる汀の彼方を、どちらともなく見返してたんだ。

山田は少しの間、記憶を整理するかのような横顔をしていたので、僕はいやらしくも彼女の綺麗な茶色の髪や蔦色の瞳、白い首筋なんかを時折盗み見るようにして、彼女から言葉が切りだされるのを待っていた。

「ほんとはね、あたし、夏川みたいななんてちっとも好みなんかじゃなかったのよ。だけどあいつ、言葉がうまくてね。それに騙されてしまったというか、絆されてしまったっていうか……あいつが骨肉腫だとかいうのに冒されてて悩んでいたのを知っていたのは、家族の人以外では多分、あたしひとりだったと思うわ。しかも『吉川にはこんなこと絶対に言えないけど、山田になら俺はなんでも話せてしまうんだ』なんてことを、あの顔と口とで言ってくるわけ。参ったわよ。その上『マリエが試合を見にきてくれさえしたら、俺は必ず地区大会で優勝して甲子園までいけそうな気がする』とか、すっかり気が弱ってるような調子で言ってくるんだもの。一時期はね、夏川の右腕のかわりに自分の片腕が切り落とされたならって、本気でそう思ったくらいだったわよ。ねえ、長谷部くんは知ってる？恋愛が燃えるのに一番大切な条件は何か？」

その時僕は、山田が真っ直ぐに海を見つめて話しているのをいいことに、彼女の胸の谷間をのぞき見ていた。それで山田が僕のほうを振り返るなり目があってしまい、急いで視線を逸らした——知らない、と僕は答えた。

「まずひとつ目はね、＜秘密＞よ。それにつけ加えて＜障害＞なんていうものがあると、恋はさらに激しく燃え上がるわね。夏川は最初のうち、あたしと吉川さんに二股かけてたってわけだけど、あたしはそんなこと全然気にならなかったわ。秘密を共有してるのは夏川とあたしであ

って、彼女じゃなかったから——ねえ長谷部くん、セックスって経験ある？」

「ないよ」

強い色の瞳をしてそんなことを聞く山田から、僕は再び視線を逸らした。

「誰かとつきあったことは？」

「それもないね」

ちょっとばかり居心地の悪い質問ではあったけど、見栄を張っても仕方ないので、このことも僕は正直に認めた。

「じゃあ秀川くんとできてるっていうのは本当？」

「ばっ……そんなわけないだろっ。確かに秀川のことは好きだけど、でもそれは本当に純粋に友達としてだよ。山田はいつも橘美樹とふたり一緒っていう感じで行動してるけど、だからってレズってわけじゃないだろ？それと同じだよ」

彼女は何故かつまらなそうに、肩をすくめている。

「ふうん。じゃあ美樹のことはどう思う？あの娘ね、長谷部くんのこと好きみたいよ？何せ交換日記の内容の半分以上は長谷部くんのことばかりなんだから。今日は二回目があったとか、掃除当番を手伝ってくれたとか、席替えで彼の斜め前の席になれたことが嬉しいとか、そんなことばかり書いてあるのよ！」

キャハハハハ、と山田は突然すっとんきょうな声で笑いだし、砂浜に倒れこむようにして寝っ転がった。そして砂浜に頬杖をつく、僕のほうを射竦めるようにして見上げてきた。

「で、どう？結構いい体してるわよ、あの娘。一緒に温泉に入ったりしたこともあるけど、細くて背もあんまり高くないわりには、胸もなかなかあるしね。親友としてはお買得のシールを貼って謹呈したいくらいなんだけど？」

「なに言ってんだよ。一度もろくに喋ったことすらないのに、スキもキライもあるわけないだろ？そりゃちょっとは可愛いなとか思わないこともないけどさ、それ言ったらうちのクラスの男子のほとんどは山田と橘のことをそんなふうにしてるよ」

僕は動揺を隠すためなのかどうなのか自分でもよくわからなかったけど、ぎゅっと強く砂を握りしめながら、彼女のほうから視線を背けた。

山田真莉絵と橘美樹はD組の美人双壁として男子たちの間では名高く、その片割れが僕のことを好きだなんて、山田は冗談を言ってからかっているのだとしか、僕には思えなかった。

「へえ、意外と見かけによらず奥手なんだね、長谷部くんて。他の男子だったら鼻息荒くしてよだれ垂らしそうな話だとあたしは思ってただけだね。まあ秀川くんは例外としても、佐々木くんあたりとかだったら特に」

——完璧に読まれてるなって、僕は思った。

「まあ美樹のことは美樹のこととして、あたしと夏川の話に戻ろうか。それとも長谷部くんのことを美樹がどのくらい熱烈に恋慕しているか、もっと詳しく聞きたい？」

いや、と僕は軽く首を振った。僕はなんとかして山田が嘘をついているものと思いこみたかったから——そしたら山田は複雑そうな顔をして、溜息なんか着いてたけど。

「素直じゃないね、長谷部くんは。もしかして結構強情っぽいほうだったりなんかする？そん

なことだと女の子のほうがいいって言ってるのに、意地を張ってやり損なうよ？」

「余計なお世話だよ。それより夏川のこと、話したくないんだっつらべつに無理にとは……」

ちょっとした照れ隠しのために、濡れて硬くなった砂の上に僕は絵を描き始めていた。山田はその抽象的な僕の落書きをのぞきこみながら、

「いいえ、全然よ」と笑う。「あたしの初めての相手は夏川で、吉川さんもたぶん夏川が初めての相手よね。でも夏川がそういうことを覚えたのって、随分早くかららしいわ。相手のことまではあんまり詳しく教えてはもらえなかったけど……まあだからといって誤解しないでほしいんだけど、あたしはここで夏川はセックスがうまかったなんてことを強調したいんじゃないのよ。むしろその逆でね、正直いって夏川にはセックスの才覚みたいなのがあるとは言いえなかったと思うわ……もちろんあたしも他の人としたことがあるわけじゃないから、はっきりしたことはわからないんだけど。ねえ、どうしてあたしがこんなことをあけすけに話してるか、長谷部くんにはわかる？」

いいや、と僕は首を振った。確かに山田の話は刺激的で、大いに興味と好奇心をそそられるところではあったけど、だからといって死んだ奴に対してセックスの才覚がないだなんて言い切ってしまうといいのかどうか、僕にはよくわからなかった。しかも夏川が生前嫌っていた奴に対して、彼女であった山田が密告するようなことを言うのはどうかとも思った——すると山田は何もかも見通している者のような目つきになって、こう続けた。

「これってね、遺言なのよ。夏川があたしに対してだけ残した遺書に書いてあったことなの。夏川が長谷部くんのことを本当は心の中でどう思ってたのか伝えてほしいって、そう書いてあったの……本当に馬鹿よね、あいつは。とんでもない大馬鹿のトンマ野郎よ。あたしなんかメッセンジャー業務を託さずに、生きてるうちに自分の口で長谷部くんと言えばよかったのに。『俺が死ぬのはマリエのせいでも誰のせいでもない。ただ俺は自分自身の犯した罪を償うために死ななきゃならないんだ……』なんて、本当に馬鹿みたいじゃない？馬鹿は死んでも直らないっていうけど、あいつは自分がどんなに馬鹿なのかも知らずに死んでいったわ。なんでもね、賭けだったんですって。『もしも甲子園の土を持って帰ることができたとしたら、片腕を失くしてでも自分は生き残り、もしそれが許されないなら海の藻屑となって空に消えよう……』そんなふうと思いつめながら一球一球投げていたんですって。馬鹿じゃない？たかが地区大会の決勝で負けたくらいで。しかもあんな不様な負け方して、格好悪いったらありゃしないわよ」

山田はやけに『馬鹿』を強調しながら、海と空に罵声を浴びせかけるみたいにして、夏川の＜死＞を嘲笑っていた。そしてそのあと暫くの間、彼女が片腕で目元を覆い隠すように顔を伏せていたから、僕はもしかしたら彼女が泣いているのではと心配になったけど——それは杞憂というものだった。次の瞬間、山田は勢いよく跳ねるように起き上がったかと思うと、僕の右腕に綺麗な静脈の浮きでている、白くしなやかな腕を絡ませてきた。柔らかくて弾力のある何かが肘に触れてくる。

「ねえ、したい？」

すぐそばで、甘い息遣いがそう囁いた。

「何を？」

「セックス」

「誰と？」

「あたしと」

「なんで？」

「なんででも。理由なんていらないでしょ？セックスの被害をこうむるのは往々にして女なんだから。あたしがいいといたらいいのよ。長谷部くんてこうして間近で見ると、結構いい男だったりなんかするし」

彼女がからかうように首筋に指で触れてきたので、僕は咄嗟にその華奢な指をとりのけていた。

「やめろよ。こんなことして一体何が目的なんだよ？」

「目的？誰かを好きになったり愛したりするのに目的なんているの？意外と子供じみたこと言うのね、長谷部くんて。少なくとも夏川なんかよりはもう少しわかってるかと思ったけど、ちょっと期待外れだったわ、今の発言は」

僕は山田に圧倒されていた――多分、きのう岩場の地蔵の前で会った時から。彼女はとても僕と同じ十六歳だなんて思えなかったし、高校生だなんて思えないくらいいい体つきをしていて――今日びのコギャルなんていう女の子たちはみんなそうだけど、山田の場合、大人なのは体だけじゃなくて、知能レベルっていうのも大人だったんだ。そしてそのことにすっかりたじろいでしまった僕は、彼女の前から逃げることにしかなかった。

「明日もまた必ずここへきて！絶対に約束よっ！」

無理に引きとめることも、追いかけてくるようなこともなく、山田は突然走りだした僕の背中にそう叫んだ。『ゼツタイニヤクソクヨ』――か。今にして思えば、随分残酷な科白を彼女も言ってくれたものだ。何しろ彼女は自分からさせた約束は死んでも僕に守らせようとしたけど、僕から彼女にさせた約束については、まるで効力のないおまじないのようにならなくてよかったんだから――過ぎてしまったこととはいえ、マリエのことを憎むことができていたとしたら、僕は今彼女のことを『思い出』というかぎ括弧つきの言葉の中に埋めることができたかもしれないのに……なんて、そんなメランコリックな気分にならずにすんかもしれないのに。

第4章

「それでね、その日、あたしは初めて夏川の家に入ったの。長谷部くんの家って夏川の家わりと御近所なんでしょ？じゃあ知ってるわよね。あの純和風の瓦屋根の豪邸。あたしの家ってば超貧乏くさい木造家屋なもんだから、目玉が飛びでて床に落ちるんじゃないかってくらいびっくりしたわよ——庭にしし威しのある家に上がったのなんて、初めてだったんだもの……ねえ、何笑ってるの？」

山田の話の腰を折らないために、僕は片手で口許を覆っていたんだけど、やっぱりばれてしまった。よく『トムとジェリー』なんかのアニメであるだろ？驚きのあまり目玉がバネ式に飛びだしてくるっていうギャグの手法が。あれを思いだしちゃったんだよな。

「べつになんでもないよ。山田の実家ってさ、厚岸なんだろ？もしかしてこの海辺の近郊にあたりなんかするの？」

僕はこの日ものこのこと、こんな昆布と牡蛎がとれる以外になんものとりえもない海岸の町へやってきていた——山田の御命令どおり。

「んー、まあ近くっていえば近くね。そう遠くはないけど。でも長谷部くん、間違ってもうちにきたいなんて言っちゃ駄目よ。あたしの家って冗談抜きで、本当に本物の木造家屋なの。恥かしくて友達なんてひとりも連れてこれないくらいオンボロちくて貧乏くさいのよ。しかも狭い家の中には半分アル中の賭博好きクソ漁師と所帯じみてる太った女と、くそ生意気なガキしかいないしね——あたし、自分でいうのもなんだけど、家族の中にもものすごく違和感を感じるのよね。小さい頃はよく自分は橋の下で拾われたに違いないって思ったもんだったわ。うちの両親と妹と弟を見てもらえばわかると思うけど、あたしだけ誰とも似てないの。妹なんてまるっきりあたしを厄介者扱いしてるわよ。夏休みや冬休みにあたしが釧路の下宿先から帰ってくるたんびにね。妹ってね、はっきりいってどう平たくいってもブスなの。だからお姉ちゃんが自分の分の美貌まで奪っていったって、何か勘違いしてるみたいなのよ」

山田のこの話は、僕にとってとてつもなく意外性をついたものだった。僕はおとついで一度として彼女と言葉を交わしたなんてことはなく——同じ教室の空気をずっと一緒に吸っていながら——他の男子生徒同様、山田に対してかなりいいかげんで偏見に満ちたイメージを持っていた。何しろ夏川が自殺してから初めて、彼女の実家が厚岸にあり、普段は学校近くの下宿先から通学しているということを知ったし、僕は彼女に対して『恵まれた家庭の苦労を知らないお嬢さん』といったような、勝手極まりない見解を押しつけていたのだ。

「どうしたの？黙りこくって。もしかしてみんなが言ってたことでも思いだした？夏川が死んだのにはあたしにも原因の一因があったんじゃないかっていう噂話のこととか？」

僕は山田と話してる間中、砂浜の砂を片手で掬ってみたり、いたずら書きをしたり、意味もなく小石を海に向かって投げてみたりしていた。彼女に対してどきどきしたり、気後れしたりなんかしているのを気取られたくないためだった。

「ねえ、なんとか言ったら？それともあたしと一緒にいるのが退屈なの？わざわざ釧路からこんな辺鄙なところまでやってきたりして、バス賃がもったいなかったとかっていうんなら、こな

けりゃよかったじゃない」

彼女が本気で怒りつつあるのを察すると、僕はようやく口を開きかけた――最初のうち、僕は慣れるようになるまでは、彼女と目と目を合わせて話すっていうことすら、うまくできなかったから。

「……ごめん。全然そなんじゃないよ。ただあんまり……」

「あんまり？」と、山田は好奇心に見開かれた大きな瞳で、怖じけることもなく僕の瞳をのぞきこんでくる。

「なんていうかさ、その、教室の中じゃ全然話したこともないのに、突然こんなふう打ちとけあって個人的なことまで話したりするのって、なんか不自然じゃないか？山田って学校じゃ見るからにおしとやかっていうか、橘と同じで、清楚な感じにふるまってるだろ？あれって演技なわけ？」

山田は神妙な顔つきで、首をひねっている。

「うーん、どうかなあ。学校にいる時のあたしも今ここにいるあたしもどっちも本当のあたしではあるんだけど、美樹と一緒にいるとね、どうしてもあんなっちゃうのよ。あたしはね、下ネタ系の話なんかに全然ついていけちゃう女なんだけど、美樹は違うっていうか、『どうしてみんなあんなにエッチなことを大っぴらに平然と話せてしまうんだろ？』って結構疑問に思ってるみたいよ。それどころかそういうふうにはできない自分に対して劣等感すら密かに抱いてるみたい。普通は逆であってしかるべきだとあたしなんかでさえ思うのにね。確かに、そういう意味ではあの娘は本物なのかもしれないわ」

へえ、と僕は妙に感心してしまった。今時希少価値な女だっていうか、まあうちのクラスの女子たちがあけっぴろげにすぎるっていう嫌いは間違いなくあると思うけど。

「ね、さっきからあたしばっかりお喋りしてるわよね？長谷部くんも聞いてばっかりいないで、何かお話してよ。長谷部くんは不自然だなんていうけど、あたしのほうはずっと長谷部くんとこんなふうにお喋りしてみたいって思ってたんだから。夏川なんてね、あたし以上にそういう気持ちが強かったみたいよ？だけど長谷部くんはあたしや夏川のいる方向に視線を送ることすらいまいましいっていう感じで、バリアみたいなものをずっと張ってたでしょ？他の人とは誰とでも気さくに笑い話したりしてるのに、あたしや夏川がそばを通りかかっただけで表情が一瞬硬くなるのよね。もしかして気づかれてないとも思ってた？ああいうのって陰で悪口たたかれるよりも、ある意味ではものすごく傷つくものなのよ――夏川みたいに鈍いやつは特にね。あたしはわりに聡い女だから、すぐにピンときたけど」

僕はなんとなく居心地があまり良くないというか、夏川に対して生まれて初めて自分自身を恥じていた――夏川を呑みこんだ、海の白い波頭を目の前にして。

「ごめんね。でも長谷部くんのことを落ちこませようと思ってこんなこと言ってるんじゃないのよ？ただ、わかってほしかったの。夏川はね、幼稚園の頃からずっと長谷部くんのことを意識してたらしくて、長谷部くんの注目を集めるために色々なデモンストレーションを長谷部くんの目の届くところでやってみせたりしたもんだって言ってたわ。はっきりいって吉川さんのことだってそうよ。夏川はなんとかして長谷部くんの関心を引きたかったのよ――変な話に聞こえるかもしれないけど、殴られて嬉しかったって夏川は言ってたわ。ずっと無視され続けるよりは、殴

られてでも接触してもらえらるほうがまだましだってそう言ったのよ。あいつね、吉川さんの前では相当無理して優しい男を気どってたんですって。できるだけいい男ぶって自分のいい情報が吉川さんから長谷部くんに伝わるようになって、かなり自分を作ってたらしいわ。そんなことから結局疲れ果てて別れることになってしまったんでしょけどね———応誤解のないように言っておくけど、夏川はホモ的な感情を長谷部くんに抱いてたとか、そんなことをあたしは遠回しに言いたいんじゃないのよ。ただ長谷部くんが秀川くんと厚い友情で結ばれてるみたいに、夏川も長谷部くんと仲良くしたかったのよ。ねえ、どうして長谷部くんは夏川に対してだけ態度が違ったの？あたしに対しては最初からいい感情を持てなかったのはよくわかるわよ。夏川は長谷部くんの好きな吉川さんを傷つけてあたしに乗り換えたわけだから。だけど夏川に対しては小さい頃からずっとなんでしょ？何か深い理由でもあるの？」

あまりにも面食らってしまって、僕は山田にどう返答したらいいのか、答えを探すことさえできなかった———夏川が僕と厚い友情で結ばれたがっていたって？僕の関心を引くためだけに、放課後のグラウンドであのこっぴどかしい大告白を吉川にしたっていうのか？冗談だろう、おい……僕とあいつの関係っていうのはもっと……。

真横からの凝視に耐えられなくなると、僕は仕方なしに隣の山田のほうを振り返り、それからそうしてしまったことを後悔した。山田は恨みがましい目つきで僕のほうを睨みつけていて、この場から逃げだしたいという強い衝動に僕は駆られてしまったぐらいだ。

「こんなことを言ったら山田をがっかりさせてしまうことになるのかもしれないけど、僕があいつを……夏川のことを無視っていうか、べつに故意に無視してたってわけじゃないんだぜ？ただなんとなく僕はあいつとだけは小さい頃から話しづらかったんだよ。それに夏川にはいつもとりまきっていうか、友達だってきちんと何人かいたし、何も僕があいつとわざわざ仲良くする必要なんて全然なかったんだ。そりゃあまあ時々は憎らしい奴だってちょっと思わないでもなかったけど……夏川は部活動にあれだけ勤しみながらも僕よりいつも成績が良かったし、あいつのポジションが常に注目を集めるピッチャーであったのに対して、僕の人生的ポジションはといえば、万年補欠かあってもライト以外に空きのできたためしはないって感じだもんな。しかもあんまり好きな顔立ちではないとはいえ、夏川はなかなかハンサムな奴だったし、山田みたいな美人の彼女もいて……ダサくてモテない男がひとりくらい口を聞かなかったからって、罰の当たる話でもないだろ？」

僕はひたすら海だけを見つめて弁解がましい話をしたけど、ちらりと横に視線を走らせた時、山田の表情が和らいでいるのが確認できて、少しほっとした。山田は返答いかんによっては絶対に許さないっていうような、怖い顔をしていたから。

「じゃあ長谷部くんは、夏川に嫉妬してたってこと？夏川がデモンストレーションを繰り返して長谷部くんの関心を引こうとしたみたいに、長谷部くんも軽蔑の眼差しを夏川に投げかけることによって自分の存在をアピールしようとしていたんだって、そうとってでもいい？」

正直って僕は、そんなことを絶対に認めたくななかなかった。この時だってそうだったし、五年以上もの時が経過した今だってそうだ。でも山田があんまり必死で不安げな表情をしているから———僕が首を縦に振らなければ、自分の存在理由すら否定されてしまうような———それでや

むなく僕は、彼女の言ったとおりを認めるしかなかった。

「そうとりたければそうとってくれてもいいよ。夏川が生きていたとしたら、僕は絶対にそんなことを認めたりなんかしなかったと思うけど……でもそれで山田が何かを納得できるっていうんなら、それでも構わないよ」

山田が瞳を潤ませてこちらを見つめていることに気づいてたけど、僕はあえて知らないふりをしとおそうと思った。

湿った砂の上になりがりと木片で巻き貝の絵を描きながら、夏川が何故死を選びとったのか、僕にはますますそのことが不可解な謎のように思えていた。こんなふうに泣いてくれる彼女がいながら、あいつは何故、海の底に潜ろうなんていう気を起こしたのか。

「ありがとう」

僕の指の間から小さな木片が零れ落ちた。山田が僕の脇腹を強く捉まえるみたいに抱きついてきたから、その弾みで片手が砂の上についてしまう。

僕はてっきり山田が僕の胸で泣くつもりなのかもしれないと勘違いしてたけど、彼女はもう泣いてなんかいなかった。ただ暫くの間両手でぎゅっと僕にしがみついて、深い思いに耽るように、両目を伏せてそのままの姿勢でいた——彼女のTシャツの背中を抱いてしまっているものなのかどうか、しばし思い悩む。でも白いTシャツの背にくっきりとブラジャーの形が浮きでているのを見ると、僕はその透かし彫りのような形を意識するあまり、結局彼女の体に手を回すことができなかった。山田が顔を上げると同時に、その線は彼女の茶色くて厚い髪に覆い隠されてしまったけど。

「……山田って髪染めてるんだっけ？」

彼女の真っ直ぐな栗色の髪は、陽の光に透けてとても綺麗で、まるで外国人のモデルみたいだって僕はその時思った。

「ううん、地毛なのよ、これって。小学生の頃にね、いじめられたこともあったわ。『外人は学校にきちゃ駄目だ』って、同じクラスの男の子にしつこく絡まれたりとかして。あと中学の頃にエセ熱血教師にいちゃもんつけられたこともあったっけ。朝礼のあとに『ちょっとこい』って髪の毛引っ張ってかれたかと思うと、水飲み場のところに頭突っこまれて蛇口ひねられたのよ。信じられる？しかも他の学年の生徒やなんかざろざろとすぐ横を通りすぎていく廊下のところだよ？カラーリングしてるにしても、今時髪の毛を水で注いだくらいで落ちる染料なんてあるわけがないのに……あのエネルギーをくだらない校則のためなんかじゃなく、もっと違う方向に向けてほしかったわよね。例えばいじめ撲滅キャンペーンのためだとか、もっと前進的な方向づけで」

僕は柔らかい山田の話し声を聞きながら、彼女の髪の毛に触れていいものなのかどうかまたしても迷っていて、彼女の話に相槌を打つことさえ忘れていた。すると山田はそんな僕の胸中を察したのか察しなかったのか、なかなか良くなりつつある雰囲気をもぶち壊しにするようなことを口にした。

「ねえ長谷部くん、これもしかしてウンコ？」

彼女は僕が砂の上に描いた貝の絵を指差すと、その上に湯気を示す波線を三本、木片で書き加えている。

「ばっ……馬鹿いえ。どっからどう見ても立派な巻き貝以外の何ものにも見えないだろ、これは。あのさ、山田は知ってる？右巻きの貝と左巻きの貝、どっち巻きの貝のほうが海には多いか？」

「うーんと……じゃあ左巻き？」彼女は直感によってそう答えたみたいだった。

「ブーッ、はずれ。海にある巻き貝のうち九十五パーセントはみんな右巻きなんだって。どうしてなのかまでは僕も知らないけど」

山田にウンコにされてしまった可哀想な巻き貝を靴の裏で消し、僕は今度はもっと写実的な貝の絵を描いてみることにした。

「へえ、そうなんだ。じゃあ今度はあたしから問題をだすことにするね。『わたしの耳は貝の殻、海の響きを懐かしむ』……さて、この詩の作者は誰でしょう？」

「どこかで聞いたことのあるようなフレーズだけど……作者まではわかんないな」

「ジャン＝コクトーよ」

山田はどこか得意げな笑みを浮かべると、僕が新たに描いた貝の横にカニの絵を描いていた。おまけに「ウンコ発見！」なんていう吹きだしまでつけてね。

その夏休みの日々、僕とマリエは寄せては返すさざ波のような毎日を送っていた。そして何度繰り返しても飽きることはないだろう時間をふたりで共有するようになると、僕は夏川が何故自殺したのかなんていう些細な疑問については、毛程も考えようとはしなくなっていた。あるいはそのことを考えるのはもうよそうと、夏川の記憶に関する思考の停止命令を自らに下していたのかもしれない。

マリエ、マリエ、マリエ……。

僕の頭の中の九十五パーセントは彼女のことばかりで占められていて、残りの五パーセントは<その他>といったような、日常生活に伴うくだらない雑念でしかなかった。

僕はマリエとの会話が途切れて、何も話すことがなくなったような時には、いつも決まって「愛している」と彼女に言った。普通はなかなかこうした科白は言いにくいものだと僕も思うけど、自分でも意外なことに体質的に全然平気なタイプだったんだな。自分でも彼女を好きになるまでは知らなかったよ。まさか自分がこんな齒の浮くような科白を連発してしまえるような奴だったとはね。

マリエは時々「もう聞き飽きた」っていうような顔を冗談でしたけど、僕の唇と舌は、彼女の美しさを称賛するのをやめようとはしなかった。

「マリエだったら絶対、本気で目指せばモデルとかアイドルとかになれそうな感じだよな。あ、でもやっぱ女優かな。マリエはそういうオーディションとかに自分の写真を送ってみる気ないの？」

せまいベッドの中で、彼女はまた始まったかというように、首を傾げている。

「どうかしらねえ。そんなものに写真を送ってみたところで、どこか違うところにまわされてポルノ女優としてデビューっていうのが関の山なんじゃないかしら」

「なに言ってんだよ。そりゃあ風俗とかの才能はありそうな感じだけど、マリエは見た目が清纯派っぽいから、そういうのは駄目なんだよ。マリエは日本のカリスマモデルとして海外の雑誌

を何誌もカバーするようになるとか、ハリウッドで女優デビューするとか、そういう路線でいかないと……マリエって英語の発音もかなり外国人っぽいだろ？海外で少し暮らせばすぐに英語なんてマスターできるんじゃないかな」

「じゃああたしのマネージメントはアツシがしてくれるっていうことなの？」

マリエはふとんを口許まで引っ張りあげると、声を押し殺すみたいにして笑った。まるでそんなことは絶対にありえないというような笑い方だった。

「僕は駄目だよ。僕は僕でね、大女優と結婚してもおかしくないくらいの社会的地位を確立してなきゃならないわけだから。稀代の青年実業家か何かになって、マリエと一緒に並んで写真を撮られても恥かしくないくらいの財産を築いておかないと」

「駄目よ、そんなの。アツシがそばにいていつもサポートしてくれるんでなきゃ、どんな社会的名声も無意味に近いもの。確かにあたしは大金持ちと結婚することが夢だけど、でも仕事が忙しくて留守がちの亭主なんて絶対嫌よ。お金があるのは当たり前、しかもそれでいて奥さんを大切にしてくれる旦那さまがいいわ」

「そりゃちょっと望みが高すぎやしないか？もちろん努力はするけど……でも人生で一番大切なものは愛だろ、やっぱり。お金はその次だよ」

かけぶとんの下で僕が彼女の柔らかい肌に触れようとする、マリエは僕の体の上に覆いかぶさるように抱きついてきた。

「じゃあ聞くけど、愛とセックスではどちらがより大切？」

……難しい質問だった。何しろ彼女は僕のものに繊細な指使いで触れながらそう聞いてきたから――目の前にこうした誘惑を置かれてしまうと、＜愛＞なんてものは快樂が伴わなければ存在しえないもののように思えてしまう。

「大切なのは……愛のあるセックスだよ」

僕は体勢を彼女と逆にすると、彼女の白い肌の上を唇と舌とで丹念に調べあげ、彼女の一番感じるところには特にそうした。マリエは官能を帯びた声色で僕の名前を何度も呼び、飽きることなく僕の愛撫を繰り返し求めていた。

その夏、僕とマリエは毎日のようにそんなことを繰り返してばかりいたけど、残念ながら僕には彼女とのセックスが本当に＜愛あるもの＞だったのかどうか、今はもうわからない。僕にわかるのはただ、少なくとも僕にとってはそうだったということだけだ。僕は文字どおり彼女にめろめろというやつで、おざなりなやり方なんていっぺんもしたことがなかったけど――それでもマリエが僕のことを本気で愛してそうしてくれたのかどうか、僕にはもうわかる術がない。思い出は日々美しく純化されていき、彼女に関しての記憶が完全に過去のものとなってしまった今では、マリエに関して覚えているすべてのことを、出来得るかぎり鮮明に書き記すことくらいしか、彼女に対して僕ができることは見つかりそうにない。どうして彼女が僕を選んだのか――愛しているだなんて、一生かかっても忘れられないような声で何度も耳許で囁いてくれたのはなんのためだったのか、僕には多分一生かかってもわかることはできないだろうって本当にそう思うよ。

セックス三昧の日々を過ごしたその夏休み、僕とマリエはそれまでの冷却期間を急いで暖めあおうとするかのように、実に色々な話を互いにしあった。

マリエが一番重要な事柄については心の奥深くに沈めたままで、それ以外のことについてなら、何ひとつ秘めごとにしたりなんかせず、なんでも話してくれた――夏川とのセックスがどんなものだったかに至るまでね。

「あたし、夏川の家初めて上がった時びっくりしたっていう話、アツシにしたっけ？」

「うん、したよ。目玉が飛びでて元通りに直すのが大変だったって話だろ？」

マリエが僕の脇腹のあたりを肘で突っついてくる。あんまりくすぐったくて僕は笑いそうになったけど、なんとかかろうじてこらえつつ、ベッドの上につぶせになった。

「僕はあいつの家の中を見たことはないけど、立派な石塀や瓦の屋根なんかを通りがかりに見かけるたんびに、いかにも昔のヤクザが住んでそうな家だなってよく思ったよ。なんでも親父は腕利きの弁護士らしいって噂だけどね。葬式の時も凄かったよな、見るからに堅そうなその手系の黒スーツの連中がやってきて、線香上げたりとかしてさ」

マリエも僕と同じようにつぶせになると、枕の上に両方の肘をついた。

「こう言っちゃなんだけど、夏川の親父さんて見るからに悪徳弁護士やってますっていうような面構えじゃなかった？実際のところはもしかしたら正義の熱血弁護士だったりするのかもしれないけど……まあそんなことはどうでもいいとして、夏川の家庭って、ものすごくよく整えられた日本庭園っていう感じでね、あたしが遊びにいった時にも庭師のおじさんがきていることがたまにあったくらいなの。そのくらい広くて、その上大きな池まであってね、橋の欄干に手をかけて下をのぞきこんで見ると、ニシキゴイなんてのがうようよいるわけなのよ。夏川が手をたたくとみんな橋の下に集合してきて、餌をくれるのをぱくぱく口をあけて待ってるの。あたしその時初めて思ったわ、『こいつって本当にお坊ちゃまなんだな』って。そのあと夏川の部屋に上がらせてもらったんだけど、高校生にしてはやたらと物のそろいすぎてる部屋だったわね。テレビにビデオとパソコンもある上に、云十万以上はするんじゃないかっていう新品のコンポまであっ

たわ。それに比べたらあたしの実家なんてひどいものよ？まず自分の部屋なんて妹と弟と一緒にないも同然だし、何しろ机なんて呼べるものは茶の間にあるちゃぶ台ひとつきりなんだから。貧乏すぎて恥かしい話だけど、あたし、受験勉強なんてみかん箱の上でやってたのよ！信じられる!?勉強を口実に妹と弟を子供部屋から追いだしてね、それこそ猛勉強したわ。父親が釧路で一番いい高校に入れたら下宿するのを許してもいいって言ったからよ。妹はブスな上に頭もあまりよくないから、来年中学を卒業したら働きにやらされるの……こんな話したの、アツシが初めてよ。美樹や他の友達にはね、適当にごまかして話してあるから。だからよく覚えておいてね」

よく覚えておいて、か——実際僕はそのあとつきあったどの女の子よりも、彼女のことを一番よく覚えていた。肩にかかる髪を耳のところにかけようとする仕種だとか、伏せた睫毛の長かったことだとか、しみひとつない健康的な白い肌の下に、綺麗な青い血管が浮きでていたことだとか……あんなに綺麗な体をしてる娘は、僕の知っている女の子の中には誰もいなかったな。彼女はよく自分には自分の体しか持ち合わせているものがないのだと言っていたけれど。今でもね、彼女のことを思い出すたびに、本気でこう思うよ。僕はマリエのためになら、どんなことだってしただろうなって。どこかの見知らぬボンクラな金持ちにマリエを奪われるくらいなら、死ぬ気で勉強してエリートコースを目指すことだってできたろうし、医者だろうと弁護士だろうと公務員だろうと、彼女のお望みの職業に就いて、金と時間と愛情のすべてを彼女に捧げつくことが僕にとっての一番の幸福だっただろうに——生まれて初めての女に、かなりのぼせあがっていたからね。

今はもうミツグくんとかアッシーくんなんて言葉は死語と化しているけど、ああいう馬鹿な男どもの気持ちがよくわかる気がしたな、マリエとつきあっている間は特に。ただ彼女は本当にエンゲル係数の高い家庭に生まれ育っていたから、そういう自分をとても恥じていたし、僕に対してもものすごく気を遣う娘だったんだ。

映画を観にいく時も喫茶店で食事をする時にも財布からお金をだすのはいつも僕のほうで——もちろん僕はそんなことを微塵も気にしてなんかいなかったし、むしろマリエみたいな美人がそんなことを気にするだなんて、意外なくらいだったんだけど。

「あとで体で払ってあげる」だなんて、マリエが冗談みたいによく言ってたのを思い出すな。あとあとになってよく考えてみると、彼女はいつも本気でそう言ってたのかもしれないっていうことに思い当たるんだけどね。

マリエは人を退屈にさせない天才で、話し方や表情なんかからはうまく読みとるのが難しかったけれど、本当は神経が人一倍こまやかで、情の深い女の子だったんだよな。そのことにマリエがいなくなってから気づくだなんて、僕は本当にもう……悔しくて悔しくて、やりきれなかったよ。

そしてそんな僕たちの夏の楽園期間はあっという間に過ぎていった。夏休みも今日で最後というその晴れた日曜日のことを、僕は今でも鮮明に記憶している。僕とマリエはプールで泳いだあと、いつものように僕の部屋で抱きあってた。この日ほど夏休みの終わるのが惜しかった日は、その後七年の経過した僕の人生カレンダー上にも存在しないくらいだ。でもこの日、何故かはよくわからないけど、マリエは夏川の話をよくしたがった。プールで泳ぎ疲れて僕の家へと

向かう途中にも彼女は夏川の話ばかりをし、僕が彼女のことを力をこめて抱いたあとですら、マリエはさらに夏川のことを話そうとしていて、僕にはそのことがはっきりいって面白くなかった。「あたし、初めて夏川とした時ね、その前にアダルトビデオを見てたの。あれって俗にいう裏ビデオっていうやつだったのかな。無修正のビデオで、ポルノ女優と男優がやってるその結合部がばっちり見えちゃうっていうやつだったの。セックスってこんなに気持ちの悪いものだったんだってびっくりしたわ。とても人間のしている行為とは思えなかったんだけど、みんなそうやって生まれてきたんだって思ったら、なんだか変な感じがしてきちゃってね、どうしてなのか体が全然動かなくなっちゃったの。それでビデオが終わる前に夏川に押し倒されて、あっという間に服も脱がされてしまって、気がついたら自分もテレビの画面の中の女優と同じことしてたの……もちろんあたしは初めてで、快感なんて全然なくってね、ただ痛いって言うそれだけだった。本当に期待はずれもいいところだったのよ。もっとこう人生のクライマックスみたいなものがセックスの中にはあるんだろうなって思ってたから、あまりにもつまらなくて拍子抜けしちゃったの。なんだかね、一度してしまったらあとはもう何回やっても同じなんだって思ったら、すごく悲しくなってきたって、下宿までひとりで泣きながら帰ったのよ」

僕はマリエが目の前にいる自分のことではなく、夏川のことだけを考えているような気がしていた。もし僕が夏川に対して嫉妬の情というものを一度だけ抱いたとしたら、この時がそうだったと思う。

「じゃあ僕とは何回しても同じで変わらないってということ？さっきはあんなに……」

マリエがベッドの上に寝そべる僕を黙らせようとしてくる。

「子供みたいなこと言わないで。ただあたしはね、本当いうとあんまりいい別れ方を夏川とはしなかったってことを白状したかっただけなのよ。終業式の前の日にね、とてもくだらないわかりきってることで大喧嘩したの。あたし、ひどいこといっぱい言ったわ。よくもまあこんなに相手を傷つける言葉が喉をついてでてきたもんだって自分自身でも驚いてしまうくらい、人として言ってはいけない言葉を夏川に投げつけてしまったの。それまでは自分を抑制して我慢してる部分が大きかったから、不満が一度堰を切ってしまうと止まらなくなってしまうって……夏川は腕のことで相当に落ちこんで悩みに悩み抜いてたから、できるだけ優しく接しようとしてたつもりだったんだけど、人が優しくしたらそうした分だけあいつはつけ上がっちゃってね、最後には大爆発してしまったのよ。『自分の病気や不幸に甘えるな』って、一番最低なこと言っちゃったの。言ってしまったすぐあとに後悔しても、もう後の祭りってやつよね。今からあやまったって、もう遅すぎるもの」

「そんなこと……だって夏川は家族にさえ遺書を残していないのに、マリエには自殺の間際にわざわざ家の郵便受けのところに挟んでいったんだろ？それで自分が死ぬのはマリエのせいじゃないって、そう手紙には書いてあったんだろ？」

何故かわからないけど、マリエはその時ものすごく悲しそうな瞳をした。僕はありきたりのことしか言うことのできない低能な自分に失望していたけど、それと同時に夏川を憎みかけてもいたな。もちろん奴が死んでいてくれなければ、僕がマリエと一夏の恋に落ちるなんてこともなかったわけで、そう考えれば考えるほど、腹が立って仕様のない話でもあったんだ。あいつを媒介

としなければ、僕らがこんなに親しくなることはありえなかったってことを認めなければならないことがね。

「ごめん、マリエ。ただ僕は本当にマリエのことが好きで、夏川のことなんかできるだけ早く忘れてほしかったんだよ。僕がいつもマリエのことしか考えてないみたいに、マリエにも僕という間は僕のことだけ想ってほしいんだ。あいつのことなんか思いだすなよ。頼むから……マリエ……」

ベッドの下に足を下ろして、マリエは下着を身に着けようとしている。そして僕がマリエの細い腰から胸に手を伸ばそうとすると、彼女は拒むように立ち上がった。水色のワンピースを頭からかぶり、ファスナーを上げている。この水色の服は、僕がマリエにプレゼントしたものだ——彼女が一度、あまり服を持っていないと洩らしていたことがあったから。

「マリエ、本当にごめん。もしマリエが夏川のことを忘れられないっていうんだったら、無理にそうしろなんてもう言わないよ。だけどマリエだって言ってただろ？夏川は僕が見抜いていたとおりの奴だったって。確かに顔も頭もよくて豪腕のピッチャーでもあったけど、性格的には……」

「どうしてアツシがあたしにあやまるの？アツシの言ってることはもっともだし、自分の彼氏の目の前で他の男の話ばかりして悪かったなとも思うわよ。夏川のことなんて忘れようと思えば今すぐにでも綺麗さっぱり忘れることができるけど、あたしはそうできる人間であればこそ、あいつのことをいつまでも憶えてなくちゃいけないのよ。アツシも明日になればきっとわかるわ。あたしが夏川と同じで、どうしようもなく嫌な部分を隠し持ってる人間だってこと。明日、アツシが話しかけてきても、あたしはきっと無視するわよ。美樹の手前もあるし、夏川と死に別れたばかりなのに、教室でアツシとべたべたするわけにはいかないもの。アツシが無意識のうちにも夏川に侮蔑の視線を送ってたみたいに、あたしもアツシに同じことをするつもりでいるから、覚えておいて。本当は最初からそのことが目的であたしはアツシに近づいたのよ」

裸のまま、ベッドの上で茫然としている僕に、マリエはまくしたてるようにそう言い切った。冷たく背中を向けたかと思うと、そのまま部屋を出ていく。

僕は急いで床に散らばっている服を着、マリエのあとを追いかけようとした。マリエは足が長い上に、歩く速度の速い娘だったから——自転車に乗っているにも関わらず、彼女の健脚に追いつくには、大分時間がかかった。

半分泣きだしそうな顔をして歩くマリエに追いつくと、自転車の後ろに乗るよう促す。彼女は押し黙ったまま、むきだしの白い両腕を差し伸ばして、僕の背中にぎゅっと掴まった。

僕は何も言わなかったし、マリエもただ無言で、夕暮れ時の生暖かい風の流れて感じていた。黄金色をした空気はまるで暖かい霧のようにあたりを包みこんで、目に映るものは皆、何もかもが美しさをその身に纏っていた。とるに足りない小石や、ラテン語の学者名などなさそうな雑草や、空き地に置かれた土管のオブジェ——そういった普段なんの感銘も与えない物たちに、太陽の残り火は不思議な力を最後に付与しているようだった。

僕はこの時ほど、自分がマリエとひとつになっていると強く感じたことはない。ある意味ではセックスをしている時などよりも、遥かに強い結びつきでさえあったかもしれない。僕はとても幸福で、愛しいという感情が枯渇することを知らない泉のように次から次へと胸から溢れてく

る自分を生まれて初めて知った。マリエに対してだけじゃなく、今自分をとりまいている日常の環境のすべてが、無機質なコンクリートの道や明滅する赤や青の信号機や建設途中の住宅地などのすべてが一目に映るもののすべてが愛しかった。すれ違う人全員の手をとって理由もなく「ありがとう」と感謝したくなるような、なんとも奇妙な気持ちでいっぱいだった。そしてその幸福力の源泉となっているのは、自転車の後部席に横座りをしている女の子で、彼女の存在していることと自分の存在していることが、僕には何より嬉しく感じられていた。

誰かとこれだけぴったりと体を寄りそわせていながら、沈黙がまったく苦痛ではないなんて、むしろその沈黙が心地好くすら感じられるだなんて、僕には本当に生まれて初めての経験だった。もちろんマリエが最後に言い放った言葉は、僕を憂鬱な気持ちにさせてしかるべきものではあったけれど、僕はマリエのあの言葉を、それほど深刻なものとして受けとめてはいなかった。

僕はマリエへの恋と愛にあまりにも夢中になりすぎていて、夏休みも終わりの今日この時になるまで気づかなかったけど、本当によくよく考えてみたら僕らが教室の中で仲睦まじくするわけにはいかないだろうし、橘美樹が冗談ではなく本当に僕のことを好いているというのなら、女同士の友情にひびの入るようなことはしないほうが懸命なのだろうとも思った。ただこの時、僕がそうしたことを何もかもわかっているということが、勘の鋭いわりに不器用なマリエにはわからなかったのかもしれない。たぶん僕のことを激しく傷つけてしまったと勘違いして、自分の言った言葉の重みに彼女自身のほうが深く傷ついていたのかもしれない。もしかしたら僕はこの時ずっと黙ってなんかいないで、何かを語るべきだったのかもしれないけど、彼女が僕の背中に身を寄りかからせながらどんな気持ちでいたかなんて、想像しようと思ったのはこれからずっとあとのことなのだから、本当にどうしようもないことだ。

駅裏の自転車置き場に到着すると、マリエは何も言わずに自転車をおり、「さよなら」とも言わずに僕から離れていった。手早く自転車の鍵をかけると、地下道に消えていく彼女の影を急いで追いかけることにする。地下道の半ばあたりでやっと追いつき、手を絡みあわせることができてほっとした。

変な話に聞こえるかもしれないけど、僕はこの時ほど女の子と手をつなぐのが照れくさかったことはないな。彼女の手のひらの白い柔らかさがなんとも恥かしくて、体全体の温度が急激に上がったのを、今でもはっきり思いだせるくらいだ。僕は涼しくて薄暗い地下道を熱い思いでマリエと一緒に通っていき、駅のどこか煙草くさい待合室で電車のくるのを待つことにした。厚岸行きの電車が発車するまでに、まだ一時間弱の時間が残されていた。

「明日、学校で会っても、今までみたいにお互い知らない者同士っていうような顔してたほうがいいに決まってるよな」

自販で買った紙コップのジュースをマリエに手渡ししながら、僕は彼女の隣に座った。駅の待合室には電車を待つ人の姿が二十人くらいあり、そのうち一部の人が高校野球のTV中継に見入っている。

「鈍くて悪かったと思ってる。ただその、僕はなんていうか……橘が僕のことを本気で好きだなんて信じ難い話だと思って聞いていたし、夏川のことは……できるだけ考えないように考えないようにって、頭の隅のほうへ意識的に追いやるようにしてたんだ。正直ってこの夏休みの間中

、僕はマリエのこと以外眼中になかったんだけど、マリエは僕と一緒にいる間でも、色々考えてたってことだよな。本当に無神経で悪かったと思ってる。でも僕は本当にマリエのことが好きなんだよ。もしマリエさえ嫌じゃなかったら、これからもずっとつきあってほしいんだ。学校にいる間は他人行儀な態度でも全然かまわないから……それならいいだろ？」

マリエはメロンソーダなんてちっとも飲みたくなかったというような、少し怖い顔をして、緑色の液体を凝視している。

「隠れてつきあうようにしたって、そんなのいずれはばれちゃうに決まってるわよ」

全然いつものマリエらしくない言い種だった。僕は一瞬無然として、

「じゃあどうしたらいいんだよ？もしかしてマリエは僕と別れたいって遠回しにそう言ってるのか？だからさっきはわざと僕を傷つけようとして……」

「違うわよ」マリエはまるで感情のこもらない、冷たい声で言った。「さっき言ったことは全部嘘なの。あたし、アツシとつきあうことで美樹にどう思われようと全然かまやしないのよ。夏川のこともそう。あいつが死のうと死ぬまいとあたしの知ったことじゃないわ。あたし、アツシのこと、夏川なんかよりも全然好きよ。だけどそれじゃ駄目なの。人を殺しても傷つけても自分さえよければなんて、決して許されていいことじゃないわ。アツシも騙されないで。あたしは本当は物凄く醜くて、嫌な人間なのよ。きっと最後にはきっと――……」

(アツシのこと、とり返しのつかないくらい、傷つけてしまうことになる)

その言葉は、マリエがはっきりと唇を動かして語った言葉ではなかったけど、僕の心の鼓膜にはっきりと響いてきた声だった。ほんの一瞬の、精神感应能力。

次の瞬間、僕はマリエの手をとって紙コップを奪うと、彼女を振り返らせてその唇にキスしていた。

「いいよ。僕はマリエになら、とり返しのつかないくらい傷つけられてもいいんだ。もう本当に、僕にはマリエ以外の人は見えていないから」

マリエは大きな瞳で魅力的にまばたきを繰り返しながら、僕の手からそっとメロンソーダの紙コップを奪い返した。そして僕の耳許に囁くように言った。

「今あたし、アツシとものすごくしたい」

自分でも頭に血が上るのがわかったけど、まさか駅の構内のどこかで……っていうわけにもいかないから、かわりに僕はもう一度、彼女の白い指に自分の不恰好なそれを絡みあわせた。僕はそれまで駅のホームでキスしたりベタベタしたりする恋人たちのことを軽蔑してたけど――「こんなところで馬鹿じゃないのか」と思って――でもその馬鹿のひとりに、どうやら自分もなってしまうらしい。

厚岸行きの電車のくる時刻になると、マリエは「じゃあね」と別れを惜しむ様子もなく、さりげなく僕の手を離していた。そして僕はといえば、マリエとどうしても離れ難くて、待合室のドアを出ていこうとする彼女の後ろ姿を、またしても追いかけていた。しかもわざわざ見送りのための切符まで買い、ぎりぎりの時刻になるまでマリエと一緒にプラットホームに立っていた。

電車がくるまでのわずかな時間に、僕らは軽い打ち合わせのようなものをし、学校では一学期の終わりとまったく同じ関係であるかのごとく見せかけるようにしようだとか、もし我慢できない時には屋上かどこかでこっそり会うことにしようだとか、そんなことを話しあった。けれども

マリエはその話し合いの途中でなんの前触れもなしに突然泣きだしてしまい、僕はすっかり困惑してしまっただ。

「どうしたんだよ？もしマリエが橘のことを欺くのがつらいついていうんなら……」

マリエは違ふの、と喉を詰まらせながら首を横に振った。アツシの優しいのがあたしにはどうしてもつらい、とマリエは言った。僕は自分は別にそれほど優しいというような人間ではないと答えた。僕はマリエのこと、もしくは自分とマリエのことしか考えていないだけなのだ、と。

「やっぱりもう少し一緒にしよう」

線路のずっと向こう、陽が沈んだ方角から列車の最初の車両が見えはじめると、僕はたまらない思いにかられて、マリエのことをなんとか引きとめようと思った。

マリエは夏川の話なんかをしている時に、時々うっすらと瞳に涙を滲ませることはあったけど、決してその涙を頬まで溢れさせるということはなかった。それなのに今はもうどうしようもないというくらいに肩を震わせて泣きじゃくっていた。

僕はマリエのことを例えようもなく愛しいと感じていたし、彼女が泣いているのにも関わらず、その泣き顔を美しいとも思っていた。こんなに綺麗に泣く女を見たのは生まれて初めてだとも。

マリエの横顔に半ば見とれ、半ば同情していると、どこことなく田舎くさい感じのする数両の列車が目前で停止し、マリエは僕の腕の中から急いで抜けだすみたいに、その車両のひとつに飛び乗っていた。そして扉のところで振り返ると「また明日ね」とうさぎのように赤く濁った瞳で笑った。やもするとまたすぐに涙が瞳の奥から溢れてきそうな、悲しい笑顔だった。

僕はそんなマリエの気丈な性格までもが愛しくてたまらなくなり——周囲の視線をまったく憚ることなく、彼女のことをぎりぎりまで追いかけていき、その姿が見えなくなるまで大きく手を振っていた。

まさか次の日には彼女のことを許せなくなるだなんて、電車の去ったあとの生暖かい風に吹かれていたこの時の僕には、少しも想像することなどできなかった。

第6章

僕はその夜、なかなか寝つくことができなかった。家へ帰ってから気もそぞろに夕飯を食べ、部屋に閉じこもってマリエのことを考え続け、さらにベッドの中でまどろみながら、夢の中であんまり会えはしないかと模索する始末だった。しかもこの夜、僕の夢の中に現れたのはマリエではなく夏川だった。学制服を着ている彼は、生前と同じくお調子者の道化師を教室内で気どっており、僕はそんな彼に対して相変わらず冷淡な侮蔑の眼差しを送っている、といったような内容の夢だった。僕の乏しい記憶力の覚えているかぎりでは、夏川優が僕の夢に登場したのは、この夜が初めてだ。

朝目が覚めて「何故よりもよって夏川が……」と顔をしかめながら僕は目覚まし時計を止めた。そしてこれはもしかしたら良心の呵責とかいうやつなのかもしれないな、などと自己反省気味の頭で登校し、2-Dの教室へと足を踏み入れた――マリエの姿を一瞬胸に思い描いただけで、心臓が打ち震えるのを感じる。

(知らないふり、知らないふり)

そう繰り返し自分に言い聞かせながらも、僕は盗み見るかのような視線で教室全体を見渡した。ちょっとした意味のある眼差しをかわすくらいなら、許されるだろうと思ったからだ。

僕は遅刻の常習犯とまではいかないまでも、本鈴の鳴るぎりぎりの際どい時間帯に教室へ飛びこむことが多い。我が聖城高校では遅刻三回で一日の欠席とみなされるのだが、その計算でいくと僕は一体これまでに何日欠席したことになるのだろうか……まあ先生方がとても寛容で、見逃してもらえる場合がほとんどではあったけれど。

2-Dの教室の窓際の席に僕は腰を下ろし、鞆を机の横にかけた。僕の座席が一番後ろの席だったから、その対角線上にある橘美樹の席にマリエはいるのではないかと予想されたが、僕の勘は的を見事に外してしまった。橘美樹の席には橘美樹ひとりしかおらず、マリエの席には誰も座ってはいなかった。本鈴も鳴り終わっているのに変だな、と思った。けれどもマリエがもし厚岸からの電車かバスに一本乗り遅れたのだとしたら、それは間違いなく遅刻となるわけで――釧路へのバス及び電車の便は決して多いとはいえないから――僕はこの時マリエの不在をそれほど深刻に考えたりはしなかった。ただ、始業式当日に何故下宿からではなく、わざわざ実家から登校するのだろうとは思っていて、きのうプールで泳いでいる時に、そう彼女に聞いてもいた。

「ちょっとね、実家のほうで家族会議が開かれることになってるの」

微かに塩酸の匂いのするプールの中へ飛びこむと、マリエは水泳選手のような速さであっという間に端まで泳ぎきっていた。僕も遅れて飛びこんだが、はっきりいってその差がなくても勝ち目はなかっただろう。

「母親がね、妊娠しちゃったんだけど、何しろうちは貧乏でしょう？出産するにしても中絶するにしても色々とお金がかかるし、親戚から一時的に用立ててもらおうってわけなのよ。まったく恥かしい話よね。親子四人が川の字状態で毎晩寝てるっていうのに、いつのまにやったのかって感じよ」

マリエが水の中から顔を上げ、他人ごとみたいに笑っていたのを思い出す。それで僕はもしか

したらその親族会議が思った以上に長引いてしまって、朝寝坊でもしてしまったんじゃないかな、なんてこの時思っていたんだ。

僕はこの夏、史上最悪といってもいいくらい友達づきあいが悪かったにも関わらず、福島と秀川はきのうの電話で宿題を写させてやってもよいと、快く引き受けてくれていた。まあちょっとした駆け引きはあったものの、カラオケとマックを二人分奢ればよいのであるから、受けるメリットは僕のほうが遥かに大きいといっている。

「おまえ、いつ電話してもいないんだもんな。どこかに長期で旅行にでも行ったのかと思ったよ」

英語のワークノートに長文理解の解答を手早く書きこんでいる僕を、机の上から福島が見下ろしながら言う。何しろもうとっくの昔に本鈴が鳴り終わっているのに、彼の言葉に答えている余裕など、今の僕にはない。

「なあ、フックと秀川にカラオケとマックおごるって本当か！？だったら俺のも写させてやるから……」

佐々木が言い終わる前に、僕は彼に現国と古文のプリントを手渡していた。

「秀川のを写してくれ。そしたら奢ってやるから」

我が母校の夏休みにおける宿題の量というのは半端ではない。来年のお受験に備えて、との名目の元に宿題がでないのは体育と美術と家庭科と音楽くらいなものだった。出された課題が二期の成績に関わるものすらすでにあるので、未提出ということになると中間と期末のテストでかなりの点数を稼がねばならないことになる。

僕はなかなか始業式の開始を告げる放送が流れてこないのをいいことに、ほとんど自動手記状態で右の手指を動かし続けた。

「それにしても遅くないか？」

ずっと黙って僕の宿題を手伝ってくれていた秀川が、ぽつりと呟くように言った。それで僕はふと、黒板の上、スピーカーの横にある時計に、一瞬目を走らせた。九時三十分。確かに僕にとってはラッキーなことではあったけど、流石に少しばかり不審な感じはした。

今日から館山先生が担任として復帰する予定らしいのだが、教室には最も有力な説として「ルパン再入院説」が飛びかい、先生の再起不能を危ぶむ声までが上がっていた。

「今朝、職員玄関のそばで先生見かけたんだけどさー、よくムチウチの人なんか首のまわりにつけてる装具あるじゃない？アレつけてたんだよねー、超ヤバくない？」

「ヘルニアの次はムチウチ！？ついてないよねー、プレスリーも。そのうち奥さんの不二子さんからも見捨てられたりして……」

館山先生の奥さんは、正確には美根子さんという。まあそんなことはどうでもいいとして、教室内に「プレスリー離婚危機説」がどこからともなく浮上した頃、ようやくモミアゲは教壇に立った。首を固定するための装具を着けての担任復帰だった。

副担の飯塚先生は、後ろの黒板のほうにいつもと同じ暗い表情で突っ立っていたけど、館山先生は見るからに沈鬱な面差しで、机の上に手をつけていた。それでみんなも流石に先生の病状が心配になり、誰もが静かに自分の席へと着席していった。

「せんせえ、大丈夫ですかー？」

一番前の席の女子がそう呼びかけると、なんとルパンは目頭を押さえて、オイオイと泣きだしてしまっただ。一度は静かになった教室が、再び騒然となる。

「……山田が……亡くなったそうだ。朝の早い時刻に崖から飛び降りて、海に……」

先生の声は、無理に絞りだすかのように押し殺されたものだったから、僕たちは先生の言葉の内容を組み立て直すのに、数瞬間の時を要した。そしてクラス中の生徒がうつむくか、隣の人間と顔を見合わせるかしている中で、僕だけが机を倒す勢いで椅子から立ち上がってしまい、皆の注目を一瞬だけ一身に浴びることになった。僕はそのあと信じられない思いで力なく椅子に座り直し、現実感というものが体内から四散していくのを強く感じた。

(マリエが死んだ……？いや、そんなはずはない。自殺だなんて、そんなことは絶対にありえない。だってきのうはあんなに……)

教室内からは早速といわんばかりに忍び泣きや啜り泣きの声が洩れはじめていたけど、僕には何故みんながそうもあっさり<死>という言葉だけの事実を認めることができるのか、不思議で仕様がなかった。

「死」。

「死」。

「死」。

死ぬ、ということ——それがどんなことなのか、僕にはわからない。

息をしていないということ、心臓が動いていないということ、まばたきをもう二度とは繰り返さないだろうということ……あのマリエの美しい肢体が氷のように冷たくなって、どんなぬくもりもあたたかみも受け入れられないということ……僕はそんなことを信じるわけにはいかなかった。

生命が失われる、損なわれる、奪われる……そんなことは透明なガラス一枚を隔てた向こうの世界の出来ごとで、気がついたら自分もそちら側にいたなんていうことは、僕には——いや、僕らには決してあってはならないことだったのだ。

体育館に全生徒が学年ごと、クラスごとに整列し終わると、まず最初に<校長先生のお話>があった。

「夏休みの始めと終わりに、大変残念な出来ごとが起きてしまいました……私の長い教員生活の中でもこれほど悲しくつらい出来ごとは他になかっただろうというくらいのことです……」

僕は文字どおり棒のように立ちつくして、校長先生の哀悼の言葉をいつになく真剣に聞き入っていた。校長は沈痛な面持ちで登壇すると、机上に重々しく両手をつけて「大変残念な」とまず初めに言ったけれど、僕は校長が本当に残念だと思っているのかどうか、あやしいもんだと思っていた。何しろ僕は夏川が死んだと聞かされた時、ちっとも残念だなどとは思わなかったからだ。もちろん喜んだわけでも「そりゃよかった」と皮肉めいたことを思ったわけでもないが、<自分には関係のない>ことと、切り離して考えていたのだ。

死とは無常なもの、とよく言うが、この無情の意味を僕が初めて知ったのは、マリエの死によ

ってだった。僕はこれ以後、「何故」という疑問に長く患わされることになるが、それは一生完治することのない病いにとてもよく似ていた。

「何故」。

「何故」。

「何故」。

本当に何故なのだろう……マリエは何故死を選びとらなくてはならなかったのだろう。それも僕になんの相談もなく。

校長の話がひととおり終わると、僕はマリエの〈死〉の経緯を知ることになった。

彼女は朝早く、いつもどおりに家を出、特別どこか変わったそぶりなど、微塵も見受けられなかったと家族は語っていたという。遺書というのもなく、ただ学生服は下宿のほうに置いてあるため、一度そちらに寄ってから登校すると言い、始発の電車に乗るために四時四十五分頃、家を出たらしい。随分早くに出かけるな、とは母親も思ったのだが、何しろ漁師の生活の朝は早いものだし、それほど不審にも思わなかったのだそうだ。

「家の手伝いをよくするいい子でした」とお母さんは涙ながらに電話口で校長に話したらしい……僕が校長の話で一番ショックだったのは、マリエが夏川と同じあの断崖の上、僕がマリエと本当の意味で知りあうことになったあの場所から身を投げた、という事実だった。

僕は何故だか体育館の自分の立っている場所が、本来自分のいるべき場所ではないような、なんともいえないいたたまれない思いに駆られて、同じ服を着てずらりと並んでいる生徒の群れから、無意識のうちに抜けだしていた。教員の何人かが突っ立って塞いでいる出口へ向けて歩きだす。

保健婦が後ろから小走りに駆けてきて、「どこか具合が悪いの？」と渡り廊下のところで声をかけた。まだ年若い保健婦は、僕が泣いていることがわかるなり、はっと息を飲んだようだった。強引に僕の手を引いて、保健室へと連れていく。

「……あなた、山田さんのことが好きだったのね」

なんて無神経なことを言う保健婦だろう、僕はそう思いながらも、しゃくりあげることしかできなかった。

「山田のことなんか、僕は本当はちっとも好きじゃなかった。夏川のことだって大嫌いだったのに……それなのに……」

水色のナイロンの張ってある衝立ての裏で、僕は思いきり泣いた。保健婦の篠原先生が隣に腰掛けながら、さも「わかっている」とでも言いたげな、同情めいた眼差しを向けてくる。

僕はこの時、篠原先生のそのような態度が悔しくて苛立たしくて、どうにもたまらなくなっていた。何故なら僕がいかに理路整然と冷静に話すことができたところで、先生の勘違いを正すことはできそうにないからだ。僕は以前から美しい容姿の山田に片想いであり、夏川に対して嫉妬の情を抱いていたと、そのようにしか先生には受けとめられないだろう。

僕は廊下のほうから生徒たちのどよめきやざわめきが聞こえるようになる頃、先生が貸してくれた水玉模様のハンカチを返して、お礼を言った。

篠原先生は「何か相談したいことがあったらいつでもいらっしゃい」と年上ぶった言い方をしたけど、僕はこの一回りと年の離れていない保健婦に何かを相談しようとは、卒業するまで一度も思うことはなかった。

保健室で思いきり涙を流してすっとしたせいか、僕はクラスメイトの誰もが喪中の雰囲気身を纏う中で、わりにひとりだけ平然としていられたように思う。

「先生は悔しい」

そう言って館山先生は説教の口火を切ったけれど、僕もまったく同じ思いだった。

泣く、という行為自体はマリエの厳然たる、犯すべからざる〈死〉というものを認める象徴的な行為ではある。でも僕にはどうしても実感というものが湧いてこなくて、少なくとも悲しいとだけは思えなかったのだ。

館山先生は首を曲げられないという不自然な姿勢のまま、右腕で両の目頭を押さえている。彼は演技やオーバーアクションというのでは決してなしに、本当に本気で、教え子の死に心からの涙を流していた。

「夏川は終業式の終わった午後、先生の入院していた病院にきてなあ、こう言ったんだよ……『腕をつけ根から切り落とす覚悟はできてます』って。『べつに大したことじゃない。今まで人ごとのように思っていたことが、自分の身にも降りかかってきたっていう、それだけのことです』ってそう言ったんだ。もちろん夏川が〈それだけ〉って言ったことがどれだけ重いことか、先生もわかってるつもりではあったんだよ。『病気からしか学べないこともある』って先生はそんな説教じみた言葉しか言ってやることができなかったけど、夏川は何もかもよくわかってるってそんな顔をして先生の話聞いてたんだ。『先生も大変ですよ』って大人じみた表情をして……それで最後に右手で握手を求めてきたんだよ。『次に学校で先生と会う時には、左手しか残ってないと思うんで』ってどこか吹っきたような印象を先生は受けたけど、そうじゃなかったんだな。『夏休み中に手術をして、病院に入院している間、自分の人生を俯瞰してみようかと思ってるんです。先生も頑張ってください』なんて、立ち去り際に言ってたけど、多分半分以上は本心じゃなかったんだらう……今にして思えば、多分夏川はもう心を固く定めていて、それでも最後の最期に〈生きる〉方向に傾く力を誰かから与えてほしかったんじゃないかと思うんだ。そういう言葉を先生はあいつにかけてやるができなかった……」

先生のせいじゃないよ、と誰かが泣きじゃくりながら呟くと、それまでぎりぎりのところで堪えていた連中まで啜り泣くようになってきた。

僕もかなり危ないところではあったけど、夏川などのために決して泣いてなんかやるものかと、必死にこらえた。それに僕は自分の教え子のためにみっともないまでに泣いてしまえる先生の姿に打たれたのであって、夏川の死に対して哀悼の意を表するような真似だけは絶対にしたくなかった。

館山先生はマリエの死に対しては「動機がはっきりとわかっているわけではないが」と前置きしてからこう言った――恋人だった夏川の死に引きずられたのではないかと。ふたりは互いに深い間柄にあったみたいだから……。

この頃になると僕の心は冬の湖に張る氷よりも冷たくなり、また不毛の大地のひび割れた表層のように乾ききっていたとっていい。

僕は初めてあることを悟っていた。

マリエと僕のことを知っている者は誰ひとりとしていないし——映画館やプールにはよく行ったけど、知りあいに会ったことは一度もなかったから——僕がマリエのことをどれほど愛していたか、知っている人間は僕ひとりきりということになる。しかも夏川なんかよりも僕はマリエのことを深く愛しているにも関わらず、人々の記憶の中に刻みこまれるのはマリエと夏川のツーショットなのだ。いや、人が記憶という名のアルバムをこれからどう処理するのかなんてことはどうでもいい。だがそう思いはしても、人々の脳裏に夏川とマリエの仲睦まじい写真が永久に残るかもしれないと思うと——僕はそれを全部半分に引き裂いてやりたいという激しい衝動に動かされた。

『夏川のことなんて今はどうだっていいの。アツシがそばにいてくれさえしたら、それだけで本当にいいの……』

——マリエ。君はもしかして嘘をついていた？それも選りすぐりの、一等残酷な、ひどい嘘を……。

『夏川の奴なんかよりも、アツシのことのほうがずっと好きよ』

——もしかして彼女は、ベッドの中でも嘘をついていた？

そんなことにまで思い至ってしまい、僕は教室から飛びだしたい衝動に動かされたけど、どうしたわけか足が石膏で塗り固められたみたいに動かなかった。まるで自分に与えられている机と椅子のある空間に閉じこめられてしまったかのように——僕は自分の頭をくしゃくしゃにすると、館山先生の説教を聞くとはなしに聞いていた。

先生は夏川とマリエの死について語り終えると、三人目の生徒の話をした。先生が教え子を失うのは山田で三人目になる、と先生は言った。その子は館山先生が初めて担任を受け持ったクラスの女の子で、学業成績が常にトップクラスの生徒だったという。性格も明るく、いじめられているようなそぶりもまったく見受けられなかったのだが、ある日突然不登校になったのだそうだ。直接的な原因はクラスメイトのひとりに「デブ」と言われてからかわれたこと——その女生徒は学校を休んでダイエットを始め、月に三十キロもの減量に成功していたが、やがて体のほうが食べ物を受けつけないようになり、最後には老衰に近いような形で亡くなったという。

「このことがどれほどのことか、おまえたちにわかるか」と先生は言った。「人によってはたかが<デブ>と言われたくらいでと笑う人もあるだろう。でも彼女が表面上は明るく振るまいながらも、その水面下でどれほど苦しんでいたか……それはきっと夏川や山田も同じだったんじゃないかって、先生はそう思うんだ。ただ、もし月に三十キロ痩せる努力をするんだったら……その強い意志と不屈の忍耐力をもっと別の方向にぶつけていてくれたらって、先生はそのことが残念でならない。そのことを思うと、今もいたたまれない、申し訳ない気持ちでいっぱいになるんだ」

おまえら、努力する方向づけを間違えるなよ——館山先生は、僕たちにそう言いたかったのだろう。断崖から飛び降りる勇気があるなら、生きていて恐れをなすことが、他に何かあるだろうか？

……—マリエは、一体何が怖かったのだろうか？

夏川が〈死〉を選んだのは、僕にはなんとなくわかるような気がするのだ。片腕を失ってまでも生きのびたくはないという、あまり誇り高いとはいえない奴の選択は、わからないでもない。けれどもマリエは？彼女は何を恐れ、怯えていたのだろうか？そして僕は何故彼女から読みとることができなかったのだろうか？……彼女がおそらく示していたに違いない〈死〉のサインを。

僕は始業式の翌日、朝一番に厚岸行きのバスに乗った。

バスの運転手はこの間のおじさんとは別の人で、僕は一番後ろの座席に腰掛けると、変わりゆく車窓の景色をぼんやり眺めていた。そして、きのう見た夢のことを思っていた。

僕はきのうの夜、マリエの夢を見た。それはとても悲しい夢だった。

彼女は白いワンピースを着ていて、赤い風船を手に持っていた。そして海へと向かう道の途中、あまりにも強い風に吹かれて飛ばされてしまうのだ。

マリエの体は地を離れ、まるでメアリー・ポピンズが傘で空を飛んでいるかのように、風船の浮力によってどこまでも空高く舞い上ってゆく。

彼女の視線は断崖を見下ろし、そして海の煌めく青さという青さを眼下におさめていた。マリエは最初に「あっ」というような驚きの表情を浮かべたあとは、ただただ不安げな、今にも恐怖にもみくちゃにされそうなくらいの恐れに満ちた表情をしていて—彼女はいつ風船が割れて、真っ逆様に自分が墜ちていくのかと、不安で仕様がなかったのだ。そしてふと、彼女の見つめる視界の端に、緑豊かな島々が見えはじめた—果たしてあそこに辿り着くまで、風船の空気は持つだろうか？突然割れてしまったり、一気にしぼんでしまったりしないだろうか？……マリエは祈るような気持ちで、風船の糸を両手でしっかり掴み、やがて彼女の後ろ姿は島へ向かって風に流されていった—……。

夢はそこで終わった。

夢の中の空の青さに溶けこんでいた僕の意識は、暗闇の中で目覚めるなり、湿り気を感じとって驚いた。夢を見て泣きながら目覚めるだなんて、これが生まれて初めての経験だった。

夢の中で風を吹かせていたのは紛れもない僕自身で、空の青さの中に溶けこんでいた僕の意識は、マリエが無事向こうの緑あふれる島へと辿り着けるよう、祈りながら風の吹く調子を整えていたのだ。

夢の中の出来ごとであったにも関わらず、僕はそのことが哀しくてたまらなかった。

そして目覚めて夢の記憶を辿りながら分析していくと、学制服姿の夏川が脳裏をよぎっていき、僕を不快な気持ちにさせた。

もしかしたらあの鍵島—真ん中に鍵の形をした湖があることから、そう呼ばれているらしい—に夏川はいて、マリエが来るのを待っているのではないかと、そんな気がしたのだ。そしてそう思い至るなり僕は、ベッドの中で獰猛な獣のように暴れだしたい衝動にかられた。結局、朝一番の陽の光が部屋の中に射しこむまで、まんじりともできなかった。

悲しみ—怒り—悔しさ……それらが渾然一体となって僕の身内を焦がし、精神的な死の淵へと僕の意識を激しく追いやろうとしていた。もっとも、自殺するための手段をどう講じたらよ

いかだとか、そんなことを具体的に考えていたわけではない。僕には自殺しようなどという意志はまるでなかったし、ただ死ねない自分、生きている自分という存在を腹立たしく疎ましく、忌わしく感じていたというそれだけだ。やれ生きるだの死ぬだのと、観念的なレベルでしか考えることのできない自分がたまらなくつらかった。

マリエが僕に残していった喪失感というものは、この時の僕にとって永遠という時間をかけても埋められぬもののように感じられていたし、無論、もし喪失感を感じている自分を消したいならば、それは死ぬしかなかっただろう。けれども僕は<死>という道を自分に許したマリエのことがどうしても許せなかった――夏川の死は許せても――だから、だからこそ、僕は生きながらえて証明してみせなくてはならなかったのだ。

<生きる>ということは<許す>ということに他ならないということ。

バスは市街地の建物の群れの中を進みゆき、やがて人工物よりも緑あふれる自然が道路の両脇を支配していくようになる――家々は野原や林や山々を背にして建っているか、あるいは畑に囲まれてぽつりと一軒建っているかのいずれかだった。あとは見渡すかぎりの大草原や森林の間を、バスはゆっくりと移動していく。気の早いカエデがもうはや紅葉しているのが時折見られたけど、こんなに悲しい夏の終わりを飾るもみじなど、すべて枯れてしまえばいいと僕は思った。

北海道弁と津軽弁と標準語の混ざりあった言葉を話すおばあさんは、今日はいつもの停留所にいなかった。当然のことながら、そのお嫁さんも。毎日欠かさずお宮参りしているとのことだったけど、もしかしたら祈り届かず、病気か何かで入院することになったのかもしれない……そんなことを心配しながら僕は厚岸駅でバスを降り、厚岸海岸へと足を向けた。

学校は今日から普通授業が始まることになっていたけど、当然のことながらサボリである。僕の全身からは見事なまでに気力というものが抜け落ちていて、鉛筆一本握ることすら、非常に困難な行為だったからだ――というのは流石に少々オーバーな表現だが、確かにそれに近い危機的感情があったとっていい。否、感情という感情が極限まで薄められていってしまいそんな恐怖ないし絶望感といったほうが正しいだろうか。まあどちらにせよ、この時の僕には自分の状態というものが手に負いかねていて、何もかもを放りださずにはいられなかったのだ。

べつに、マリエが身を投げた断崖へ向かったところで、何がどうなるといったわけでもない。実際、僕は崖の麓で地蔵なんかの手を合わせている自分が哀れというか、滑稽にさえ思っていた。それでもそこに片足をつきながら、随分長いこと呆然と佇んでいただろうか……不意に人の気配を感じて振り返ると、そこに花束を抱えた少女が突っ立っていた。

「場所、いいですか？」

一瞬、その女の子がなんのことを言っているのかわからなかった。それでも、反射的に少しだけ体をずらす。

少女はとても背が高く、よく陽に焼けた浅黒い肌をしていて、濃い眉毛と長い睫毛が強く印象に残る顔立ちをしていた。彼女はそこらへんの野原で摘んできたらしいリンドウや野菊なんかを霊前に供え、肉づきのよい手を合わせると、二三秒目を閉じて祈りを捧げていた。そして僕に軽くお辞儀してから、砂浜にどこまでも足跡を残して去っていった。

直感的に妹だ、と僕は察していた。べつに彼女がマリエの言ったとおりブスだったからでは

なく、それはもう本当に直感的な閃きによってそう感じたのだ。もちろんわざわざマリエの家まで行ってそのことを確かめたわけではなかったけど、おそらく間違いなかったのではないかと、僕は今もそう確信している。

僕は帰りの電車の中で、彼女に声をかけて色々な話をすべきだったかどうかと、考えめぐねていた。ただマリエが一家には絶対こないでね。恥かしいからあんまり家族とかにも会ってほしくないし……と以前言っていたのを思いだし、僕はマリエとの約束を絶対に破ったりなどするものかと、最後には自分の気持ちを納得させることができた。だから僕はマリエの家でしめやかに行われたであろう葬式に参列してさめざめと泣いたりなんかしなかったし、マリエと自分との間にあったことは決して誰にも語ったりすまいと心に強く決意していた。

ただ僕は、時々妄想の中で夢を見る。

夏川の時と違って、僕は棺に横たわるマリエの死に顔を見ていなかったため、彼女がもしかしたらどこかの岸に辿り着いて、まだ生きているかもしれない、そしていつかもう一度自分に会いに来てくれるかもしれない……というような、実現可能率が極めてゼロに近い夢を捨てきれなかった。時には彼女が記憶を失くすかどうかして自分に会いにこれないだけなのでは、とそんなことまで考えだす始末で、僕は夢の国の住人のように、それから暫くの日々を妄想の檻の中で過ごすことになる。

僕は始業式の翌日から二週間ばかりずっと学校をさぼり続け、親の声にも学校の声にも、友達の声にも耳を塞いで、毎日波の音を聴くためだけに、足しげくマリエの眠る海へ通った。

僕はそこでいたく幸福で、波間に輝く太陽の照り返しを眺めては、水平線の呼び声に耳を澄ませていた――「アツシ！ここまできてくれたら、あたしと会えるわよ！」――もちろん妄想の呼び声だ。それはよくわかっている。でも僕はマリエの声を一体いつまで正確にはっきり覚えていられるだろう？確かにマリエがどのくらい綺麗な娘だったか、僕は死ぬまで忘れないに違いない。だけど両の手で触れた時の彼女の顔の輪郭や、体の柔らかい線を永遠に忘れずにいられるかどうか、自分でも不安だった。

いつまでも、いつまでも、いつまでも、マリエが今目の前にいるのと変わらないくらい同じく、彼女のことを覚えていたかった。けれどもその強い思いとは反対に、記憶はすり抜けるように少しずつ遠のいていこうとしている。

マリエ、マリエ、マリエ……

僕は何度も心の中で、テレパシーのようにそう呼びかけては、彼女からの応答を待っていた。しかし返ってきたのは意外にも夏川の声で、僕は脳の思考回路に侵入を果たそうとする奴の言葉を、はっきり言語化される前になんとかして追いたしたいように感じた。

「夏川っ！僕はおまえのことなんてどうだっていいんだっ。マリエさえそばにいてくれたら、僕はおまえのことなんか……これっぽっちも……っ」

断崖の上から海に向かって叫ぶ僕の姿は、おそらくひどく滑稽なものだったに違いない。しかも夕暮れ時、水平線の彼方に真っ赤な太陽が今にも燃え尽きんとしている時刻ときたもんだ。まるで昭和三十年代の青くさいドラマのワンシーンみたいじゃないか。僕は自分があんまり惨めで

、哀れで……苦笑してから咽び泣きに暮れた。そしてひとしきり大声で泣き叫んだあと、崖下へと降りていったのだが、地蔵の前には手を合わせているひとりの老婆の姿があった。僕は人目で海女とわかる格好をしているババアの目の前で、何故だか地蔵を蹴り倒してやりたいような衝動にかられた。

(こんなものを拝んだところで、なんのご利益があるものか)

そう思いながら鼻をすすっていると、老婆は海に背を向けようとした僕に、おもむろにこう口を開いた。

「もし、あんた、あれかい？ マリエちゃんのお友達なのかい？」

僕はこの時「はあ、まあ、そんなところですよ」というような、はっきりしない声でもごもご答えた。何しろ崖の上での青春の叫びを聞かれていたに違いないと、ひどく恥じ入っていたからだ

。「マリエちゃんねえ、高校を卒業したら結婚することに決まっていたのにねえ。こんなことになって……それというのも全部あのバカ親父の借金のせいだっていうんだから、可哀想なことだよ。今時身売り同然に、三十以上も歳の離れた男に嫁ぐ娘がいるもんかね。周りの人間がもっとどうにかしてやってりゃあ、あの娘も死にはしなかつただろうに……」

まるきり初耳の話だった。そして老婆は呆然とした様子の僕にまるで気づかないまま、さらにこう続けた。

——あの博打狂いの親父が、闇金融をやってる高知のところで賭けマージャンに負けたのさ。なんでも、このマージャンで勝ったら借金は帳消し、負けたら可愛い娘を自分の息子の嫁にして条件だったらしいんだけどね、高知の奴、本当はハナからマリエちゃんを自分の後添いにするつもりだったのさ。まったく呆れてものがいえないよ。可哀想にねえ、あんなに可愛かった娘が、十六やそこらで死んでしまうなんて……本当に気の毒なことをしたよ。事情を知ってる連中はみんな、口を揃えてこう言ってるよ。マリエちゃんじゃなく、あのろくでなしが首でも括って死んでりゃよかったんだって。何しろ酔っ払わなきゃ女房の顔ひとつまともに見れない男なんだからね……

僕は愕然たる思いで、皺くちの老婆の顔を見返していた。

今は平成の世だというにも関わらず、そんな馬鹿げた話ってあるだろうか？ 賭けマージャンで娘を身売りだと？ ふざけるなと言ってやりたい。それから目の前にいる老婆にも腹が立って仕様がなかった。何故こんなに大切な話を、軽々しく通りすがりの人間に話して聞かせたりするのか、そのあまりの無神経さかげんに怒りを覚えた。

僕は老婆を絞め殺してやりたい衝動をкаろうじて堪えると、太陽が沈んだ方角、その残滓を留める紅を一瞬だけ眺め、砂浜を踏みしめた。泣きながら走り続けたため、スニーカーの中に砂がいだけ入ってきたけど、僕はそのままの足で電車に乗り、デッキの隅で忍び泣きを洩らした。

——どうして何も、一言も話してくれなかったんだ、マリエ……

まるで胸を絞られてでもいるかのように、涙が溢れてとまらなかった。このまま電車から飛び降りて死んでしまいたい、この世から自分という存在を消し去ってしまいたいとさえ思った。

どうしてなんだ、マリエ。どうして、どうして、どうして独りきりで死んでしまおうなんて思ったんだ。そんなコウチなんていう奴、どうだってよかったじゃないか。それとも僕のことが信

頼できなかったのか？そんなことを話したら、僕が君を見捨てて離れ去ってしまうとでも思ったのかよ？本当に君は、そんなくだらないことのために死を選んだのか？違う……そうじゃない。決してそれだけじゃないだろう、マリエ……

その時、涙に咽ぶ僕の眼窩に夏川の顔が一瞬閃き、そして消えた。と同時に、僕の涙も潮が引いたみたいに目の奥へと収まってゆき、頬を濡らしていたものはただの乾いた結晶へと変わった。

夏川のことをたまらなく憎らしかった。

マリエの死は夏川の死と切り離して考えることは絶対にできないことだったから、僕はその事実が恨めしくて仕様がなかった。マリエがもし夏川の野郎なんかのために死を選んだというのなら、僕は奴を墓の中から甦らせ、絞め殺してからもう一度黄泉の国へ下らせてやりたいような気がした……自分の力だけでは決して二度とは這い上がれぬ、地獄の底へと突き落としてやりたい。

――夏川。僕が何故いまだに学校へ行こうとしないのか、おまえはその理由を知っているか？それはおまえとマリエの噂話のせいだよ。なんでも『ふたりは互いに深く愛しあっていて、若さゆえに引き裂かれた』みたいなことになってるんだからな。おまえやマリエの名前が教室の片隅で囁かれるたびに感じる、僕の屈辱感がおまえにわかるか？僕はおまえなんかよりもマリエのことを深く愛していたのに、マリエはおまえのことしか愛していなかったってことになってるんだよ。さぞや満足だろうな、おまえは。無様に泣いてる僕を見下ろしながら、せいぜい喜ぶがいい。でもそれも第二の死が訪れるまでのことなんだから……。

僕はあの世で受ける、夏川の刑罰が厳しいものであることを願い、奴が地獄の業火とやらで焼き尽されるところを想像しようとしたけど、結局できなかった。夏川とマリエの受ける刑罰が同じものであるとするなら、当然ながら刑罰は軽いものであってもらわなくては困るのだ。僕が神なら、マリエを救うために、夏川をも血の川から救いだしねばならぬことになるだろう。べつに夏川など、針の山で串刺しになってようとどうだろうと一向に構わないのだが、天使のようなマリエなら、きっこう言うに違いないことが僕にはよくわかっていた。

「あたしを救ってくれるのなら、夏川のことも助けてあげて」

そして僕が、僕の救ってあげたいのは君だけだと言ったなら、君はあの悲しい瞳でこう訴えるのだろう。

「そう……じゃあいいわ。夏川のことを助けてくれないというのなら、あたしのことも放っておいて」

わかってるよ、マリエ。僕は君がそんな娘だったからこそ、好きになったんだ。いつまでも変わらずに愛してる……たとえ君の魂が海の彼方に沈んでしまったのだとしても。

第7章

その次の日、僕は久しぶりに登校することを余儀なくされた。

何故かといえば、マリエの親友が朝早くに僕を迎えにきたからで、その横にはどういうわけか秀川までが突っ立っていた。

「どういうことだよ」

登校途中、秀川にそう小声で耳打ちすると、

「クラス委員としての務めを果たすことに燃えているんだよ、彼女は」

とのことだった。そして僕が寝ぐせのついたままの髪をどうにかしようとしていると、数歩前を歩いていた橘が、不意に後ろを振り返った。

こうして秀川HR委員長と橘副HR委員長の間に挟まれ、僕は補導された非行少年よろしく、登校を余儀なくされたというわけだ。

まあ半分寝呆けてたようなせいもあって、登校途中までは何も考えずにいられたものの、いざ校門をくぐって教室の戸口に立ってみると、なんともいえない重い空気に肺を汚染されるような気がした。もちろん教室の中はとても明るくて、二週間前の喪中の雰囲気など微塵も感じられなかったけど――僕はクラスの連中が皆、それぞれ気の合う仲間と楽しく談笑しているのが、なんだかひどく哀しく思ってしまったのだ。

それでも久しぶりに登校した僕に気づくなり、僕の机の周りには一気に人だかりができた。

「どうしたんだよ、ハセベ。二週間以上も休んじゃって」

「みんな心配してたんだよ。ハセベくんて意外にデリケートだから、＜愛と死＞について深刻に悩んじゃったりしてるんじゃないかって……」

「そうだよなあ。夏川のこと山田のこと大して興味ないって顔しながら、結構心の中では思いやったりしてたんじゃないの、おまえ。顔で笑って心で泣く男だもんな、ハセベは」

「そうそう。ガラス細工のように脆く繊細なこのマイハートって感じでさ……おい、頼むから誰か突っこんでくれよ」

福島が胸をかき抱くような仕種でそう言うと、皆一様に寒さを訴えはじめる。

「フクちゃん、寒すぎ。あたしの体感温度、今マイナス三十七度だよ」

「っていうかさー、それ以前にあんた一体どこの誰って言いたくなるのはあたしだけ？」

福島がいつものように女子の標的にされているのを見て、僕は笑った。ははは……僕って意外に人気者だったりするのかもしれないな。もちろん福島には負けるけど――なんてことを思っ
てね。

とはいえ、それでいながらどうしても拭いきれない漠とした虚しさが、胸の中で波立っていたことも確かだった。

僕のいない二週間の間に、クラス内では席替えが行われた様子で、見ると、夏川の机とマリエの机とが、隣合わせにぴったりと並べられていた――そしてその上には美化委員の生けた、色とりどりの綺麗な花束が――この時の僕の気持ちがどんなものだったか、クラスの中の誰ひとりとして当てることはできなかつただろう。

ひどく苦々しくて、飲みこんだあとには必ず惨めで憂鬱になるという錠剤を、一瓶まるごと飲みこんじまったみたいな、そんな敗北感に僕は打ちのめされていた。

僕がひとり、離れ小島のような廊下側の席に着いているのに対して、ふたりの席は窓際の、一番陽当たりのいいところに並べられていて――しかも見たくもないのに、何かの拍子に視界に入ってくるんだよ、仲良く並べられているふたつの花瓶がね。はっきりいって授業の内容なんか馬の耳に念仏、馬耳東風って感じで、自分がひどく場違いなところにいるようにしか思えなかったな。本当のところ、逃げだしたくてどうしようもなく、イライラしたよ。

一次限目の物理の授業が終了した時点で、帰りたくて帰りたくて仕様がなかった。いきなり机なんかを横殴りに吹っ飛ばしてさ、戸口の音も高らかに、昇降口に向かって走りだしたい気分だった――まあそういう衝動はね、僕に限らず、誰もが持っているものだとは思っただけ。

ついでに言うならば、今の僕にとってそれを静まり返っている授業中に行うことも、そんなに難しいことじゃなかった。この時の僕にしてみたら、そんなことは本当に全然大したことじゃなかったんだ。ただ、あんなに朝早く迎えにきてくれた秀川と橘に悪いと思って、ふたりの顔を立てるために、退屈極まりない、有害無益な授業を六時間もだらだらと受けていたに過ぎない。だけど、やっとの思いで放課後になった時、やっぱり仮病でもなんでも使って適当に帰るときゃよかったって、心の底から後悔した。

何故かっていうとさ、黒板の水拭きなんかをしている時に――久々に登校したと思ったら、運悪く掃除当番だったんだ――女子たちの実にまことしやかな噂話を小耳に挟んでしまったからだ。

「山田ちゃんが実は妊娠してたって噂、本当なのかなあ」

「あーアレでしょ、アレ。夏休み前の調理実習の時間に、豚汁の匂いで吐きそうになってたってやつ。もしかしたらもろにつわりの症状だったのかもしれないよね」

「まあ今となっては確かめようのないことだけど、一言相談してくれたらさ、みんなでなんとかできたかもしれないのにね……」

――ミンナデナントカだって！？ふざけんなよ。そんなふうになんか噂話するような奴らに、一体誰が相談なんか持ちかけるかよ。おまえらなんかマリエの純粹さに比べたら、クズかゴミも同然なんだよ――僕はチョコの粉にまみれた手を薄汚いアルミバケツに突っこむと、それを宮元と久川と中山の頭にぶっかけてやりたい衝動にかられた。もちろんそんなことはせずに、男子トイレにある手洗い場にそれを勢いよくぶちまけたわけだけど、僕はマジギレ五秒前の衝動をどこにぶついたらよいかわからなかった。

宮元と久川と中山が根本的に悪い奴らじゃないってことは僕にもよくわかってる。三人のしていた話が、ある意味では他愛のない、罪のない噂話だっていうことも。ただ、僕には心当たりがあったのだ。一度だけ、マリエにこう聞いたことがあったから……。

『あのさ、変なこと聞くみたいだけど、排卵日とかそういうの、大丈夫？』

期待している時にいきなりストップをかけられるより、あらかじめ知っておいたほうがいいんじゃないかと思って、聞きづらいことをあえて聞いたんだ。

『べつにアツシはそんなこと気にしなくてもいいのよ。もともとあたしって生理が不順なほうだから、二十八日周期でピタっときた試しがないのよね。長い時だと二、三か月こなくて、もし

かして閉経しちゃったのかしらって疑いたくなかったこともあるくらいだから』

この時僕は、へえ、そんなものなのかなって曖昧に納得してたけど、そうじゃなかったんだっていう裏付けを、宮元たちの会話からとってしまったような気がした。

約一月弱の夏休み期間中、僕らはプールに泳ぎにいたり、映画館へ映画を観にいたりする一方で、毎日のようにセックスに耽っていた。だからもしかしたらそうだったのかもしれないという強い確信の気持ちが怒りと失望という感情とないまぜになって、僕は今すぐにでも校舎を飛びだして、裏の林にでも行って泣き叫びたいような気持ちになっていた。

――生理がこなかったのは、マリエが夏川の子を胎に宿してたからなんじゃないのか？そしておそらくマリエは子供を墮ろすことを考えていたはずだ。妊娠中に僕と繰り返し交わることによって、その子供が自然に流れてくれることを願っていたんじゃないのか？……

僕は男として女性の体に対する興味は大いにあるほうだと思うけど、でもそれはあくまでも外面的な、ある意味表面をなぞっただけの薄っぺらな興味に過ぎなかったのかもしれない。

母性的な大きく揺れる胸、くびれた細いウエスト、臀部から太腿にかけての丸みを帯びた官能的なライン……凹凸感があってゴツゴツしている男の体には消化器や肛門なんかがしまいこまれているけれど、女性の体がどんなに生々しいものであれ、僕はそこに何かとても素晴らしい受容の器が隠されている、というようにしかそれまで捉えていなかったのだ。だから子宮や卵巣などの器官が実際にはどんな形をしていてどんな役割を果たすために存在しているかなど、性的なファンタジーに夢中になっている時は、一度も思いだそうとさえしなかったとっていい。

「おいアツシ、どうした!？」

ガラン、と空洞を思わせる音を立てて、バケツが濡れた便所の床に転がった。

「……吐……く……」

ぐえっと喉の奥が鳴ると、胃腸がぎゅっと引き絞られた。不快な感触が食道を一気に這い上ってくる。

「大丈夫かよ。あんまり遅いからどうしたのかと思って迎えにきてみれば……本当に大丈夫か？」

カツ丼の成れの果てを吐きだした僕の背中を、島村は繰り返しさすってくれた。その上トイレットペーパーを三十センチほど千切ってくると、それで口許を拭くよう無言で差しだしてもくれた――親切な奴だ。

「あーあ、なんだったんだよもう、きったねえなあ」隣のクラスの松沢という奴が、モップを壁に立てながら言った。「今掃除終わったばっかなんだから、自分で片付けてから帰ってくれよ」

「仕様がないだろ、具合悪くて吐いちゃったもんは。病人に鞭打つようなこと言ってんじゃねえよ」

「どうせなら、便器の中に吐けばよかったのに……」

松沢はなおもぶつぶつぼやきながら、掃除用具を片付けている。

「気にすんなよ」

島村はそう言ってくれたけど、僕はやはりすっぱい匂いの元となっている物質が気になったので、排水口の蓋をとり除くと、その下にあるステンレスの容器を綺麗に洗い流すことにした。

「俺さ、てっきりおまえが休んでるのってただのサボりだとばかり思ってたけど、違ったのな。体がまだ本調子じゃねえんじゃねえのか？」

「いや、大したことないんだ。ちょっと風邪をこじらせたっていう程度の話でさ」

僕は親切な島村に、つい思わず嘘をついてしまった。確か母が三十八度近い熱が下がらないとかなんとか、頼みもしないのに学校へ連絡していたようだったからだ。

教室へ戻ると、ゴミ箱を囲んで女子の三人組と高橋とが、何か雑談している様子だった。僕と島村が戻ってきたことに気づくなり、ブーイングの嵐。

「遅ーい！っていうか遅すぎよ、あんたら」

「全員揃わないとジャンケンできないんだからさ」

「しかも島村、職員室に呼ばれて最後のほうちょろっと手伝っただけだし」

「長谷部も黒板拭きくらいしかやってねえだろ」

僕と島村は目と肩で会話を終えると、みんなと同じくジャンケンの姿勢に入ることにする。

「ジャンケン……」

ポン！

僕がだしたのはグーで、他のみんなはパーとチョキだった。あーいこで……

ショ！

「イエーイ！」

ひとり勝ちした島村が、さっさと鞆を手に教室をでていく。チッ、と舌打ちする女子三人組。

再び、ジャンケン……

ポン！

僕はパーをだし、他の四人はまるで示し合わせたかのようにチョキをだした——こんなことってあるだろうか？

「ラッキー！」高橋の奴は兎みたいにぴよんぴよん飛び跳ねながら喜び、そのまま教室を出ていった。

「ついてないねえ、長谷部くん」

「まあゴミ捨てという貴重な任務を終えてから帰ってくれたまえ……わっはっはっ」

「てゆーか宮元、あんたそれ、誰の真似？」

僕は皆が皆、速攻とばかりに教室をでていくのを見送ってから、呆然と自分の右の手のひらに視線を落とした。今、教室には誰もいない。たかがジャンケンに負けたというだけのことなのに、僕は何故かたまらなく惨めな思いを噛みしめていた。夏川とマリエの机を蹴飛ばして、その上にある花瓶から花をもぎとってやりたい衝動に駆られる——だが、そんなことはもちろんできない。もしそんなところを誰かに見られたら、僕はジャンケンに負けた悔しさとゴミを捨てる面倒くささのために暴れたということになってしまう。僕はぎゅっと右の手のひらを握りしめた。感情を押し殺し、プラスチックのゴミ容器ふたつを、片手にひとつずつ持つことにする。焼却炉は一階の、保健室の近くにある。

だが二週間以上も学校をさぼったことが祟ったのかどうか、その日、僕は実についてなかった。南階段を降りる途中で手を滑らせ、ゴミ箱の中身をすべてぶちまけてしまう。

フルーツ牛乳やコーヒー牛乳、あるいはカツゲンなどのパックから、白い液体やら小麦色の液

体やらが床にこぼれていく……けど僕はもうそんなのどうでもいいやって思った。鼻をすすりながら、誰がかんだのかもわかんないティッシュの丸まったのや、紙クズ、コンビニ弁当の容器なんかを拾い集めることにする。

「大丈夫？長谷部くん」

僕がぎくりとして声のした方を振り返ると、そこには橘がいた。まずいところを見られた、と思った。何故なら僕は泣きながらゴミを拾い集めている真っ最中で、こんなところ、誰にも見られたくななかなかったからだ。

「みんなもひどいよね。ゴミ捨てくらい先に手のあいた人だけで誰がいくか決めればいいのに。わざわざ長谷部くんをトイレまで呼びにいくんだもの」

「いや、僕も黒板拭きくらいしかまともに掃除やんなかったから、べつにいいんだ。それより、橘は委員会かなんかで残ってたわけ？」

「ううん、違うの」橘と一緒にゴミを拾い集めながら言った。「長谷部くんを待ってたの」

「なんでまた……」

「一緒に帰ろうと思ってたから。長谷部くん、今日一日なんだか元気ないみたいだったから、どうしたのかなと思って」

「べつに……どうもしないよ。僕がぼんやりしてるのはいつものことだし、ジャンケンで負けるのもゴミを撒き散らすことも、今に始まったことじゃないしね」

橘は多分、僕が泣いていたことに気づいていたと思う。でも彼女はわざと僕の顔から視線を逸らして、気づかないふりをしてくれたのだ。

ゴミを全部回収し終わると、橘はわざわざ生ゴミくさい臭気のたちこめる焼却場にまでつきあってくれ、話す言葉を何も持たない僕は、彼女の誤解というか、勘違いをどう解いたらよいかわからなかった。帰り道でもしよっちゅう話題が途切れがちになり、僕は橘とできるだけ共通の会話を引き出すことに苦労した。

「あのさ……」

「あのね……」

中途半端な沈黙が立ち往生していると、ふたり一緒にそう呟いてしまった――一瞬のあとの静寂と、それに続く笑い声。

僕はこの時、自分がどんな話を振ろうとしてたのかももう覚えていないけど、とにかく大した話題でなかったことだけは確かだ。適当なでまかせでも喋ってお茶を濁そうとしか考えていなかったのだから。だけど橘のほうはいつ言ったらいいのだろうというような間合いを徐々に詰めようとしていたに違いない。何度かお互いにイニシアチブの譲りあいをしたあと、橘はとても言いにくそうに、それでいて決意をはっきりと滲ませた声でこう言った。

「……長谷部くんて、なんていうかすごく、純粋な人よね」

「は？」

一体なんのことだろうというように、僕は隣の橘を見下ろした。

「夏川さんとマリエがああなってしまった時……長谷部くん、クラスの中で一番ふたりのことを考えてたんじゃない？夏川くんが亡くなる前は、マリエのことも彼のこともどうでもいいって

うような態度だったけど、すごくそのことを後悔したんじゃないの？マリエも前に言ったもの。『こっちが話しかけてるのにわざと無視するような人と初めて会った』って。それからこうも言ってたわ。『長谷部くんが自分のことをあまりよく思っていないのは、夏川とつきあってるせいかもしれない』って。長谷部くん、夏川くんとは小学校の時から一緒だったんでしょう？何かあったの？」

「べつに……何もないよ」僕は溜息を着きながら言った。できることなら回答を控えさせていただきたい質問だった。「ただ僕は人が自ら己の命を絶つという行為そのものに、昔から少なからず興味があったっていうそれだけだよ。そういう意味ではふたりの死についても色々考えたりしたけど、でもそれだってそれほど深い興味があったっていうわけじゃない。冷たい言い方かもしれないけど、僕自身は夏川っていう個人に対して、なんの興味も感慨も抱いたりしてないんだ。彼が死ぬ以前も、死んだあとの今になってもね」

じゃあマリエのことは？と鋭く尋問されるかと思ったけど、橘が言ったのはまったくべつのことだった。

「だけどやっぱり長谷部くんは優しいってあたしは思うな。なんの興味も感慨も抱いてないだなんて、そんなの嘘よ。むしろその逆だからこそ、そんな言い方ができるんだわ。じゃなかったらきっとこう言ってるもの。『夏川くんはクラスの人気者で、本当にいい奴だった。僕は彼のことを十年たっても心のどこかで必ず覚えているだろう』って。そうじゃない？違う？」

「違うよ」と、僕は即座に否定した。「橘の言ったことのさらにその逆だ。僕は夏川のことを十年後といわず、そのうち永遠に忘れるだろうね。奴が死んだ季節が毎年規則正しく巡ってきても、夏川と共有した思い出なんてものが僕にはほとんどないから、彼の顔の輪郭がぼやけてくるのも他の連中より全然早いだろう。ようするに、僕はそういう薄情な奴なんだよ」

橘が僕に対してがっかりと失望しているといい、そう僕は期待したが、ちらりと隣の彼女を盗み見たかぎりでは、そのような様子は窺えなかった。

「それだって結局同じことよ」

橘は屁理屈をこねる子供のような顔をして、口を尖らせている。僕はなおも言葉を並べ立てようとする彼女のことを軽く躲しながら、出世坂と呼ばれる坂を下り、幣舞橋を渡り、北大通りを駅へと向かっていった。

橘は最後に、美原線に乗る前に、僕に一通の手紙を渡した。僕が乗るのは白糠線だったから、彼女とは駅前のバス乗り場で別れることになる。

「よかったら、読んで。返事はいつでもかまわないから」

そう言って彼女は発車直前のバスのステップを上っていったが、実際にバスが一分後に発車するまで、窓から僕のことをじっと見つめ続けていた。僕は正直、嫌なものをもらってしまったような気がしたけど、まさか読まずに破るというわけにもいかず、白糠線のバスが農協ストアの前で止まるまでの間に、意を決して手紙の中身を読んだ。

――わたしは長谷部くんのが、クラスの違う一年の時からずっと好きでした……

僕は最初のその一文を読むなり、このラブレターとかいうものをぐしゃぐしゃに握り潰して、

窓から捨ててやりたいような衝動に駆られた。何故そんなふうに感じてしまったのかは僕にもよくわからない。ただうっとおしいとしか思えなかった。

——おいおい、ラブレターなんて生まれて初めてもらっちゃったよ。しかもあの橘美樹からだぞ？美人で女らしくて優しく、それでいながら優等生くささが鼻につかないっていう、素晴らしい娘じゃないか。つきあっちゃえ、つきあっちゃえ。

僕はそんなふうに分の心をけしかけ、出来る限り盛り上がりようとしてみたけど、やはり効果はないに等しいくらい薄かった。

実際、家に帰ってから自分の部屋で手紙の内容をきちんと読むまでは、僕はピンク色の便箋の上にとどのような心のこもった文字が踊っていようとも、彼女の気持ちに應えるつもりはまったくなかった。

——僕は橘から生まれて初めてもらったこの恋文なるものを、机の引きだしかどこかにしまっておいた記憶があるのだが、その後の度重なる引っ越しによってどこかに紛失してしまったのだろう（捨てた覚えはないが）、今手元にはない。それでも朧な記憶を復刻するなら、確か次のような概要ではなかったかと記憶している。

わたしは長谷部くんが、クラスの違う一年の時からずっと好きでした……月並みな言い方かもしれないけど、何度手紙を書き直しても、他にいい言葉が浮かんできません。もちろん長谷部くんがわたしのことをなんとも思っていないことは知っています。だから余計、口で直接そう伝えることが怖かった。わたしもマリエが最後に残してくれた言葉がなければ、こうして長谷部くんへ手紙を渡すことさえできずにいたと思います。マリエが海でいなくなってしまう前日——始業式の前の日——彼女から本当に久しぶりに電話がかかってきました……わたしにとってはそれが彼女の声を聴いた最後の電話です。わたしは夏休みのほとんどを祖母の家がある小樽の銭函で過ごしていたので、マリエとはその間、手紙のやりとりをしていただけだったのです。だからマリエと声と声を交わすのは、本当に久しぶりのことでした。マリエはどこかの公衆電話からかけている様子で、「あまり小銭がないから用件だけ手早く言ってしまおうね」というようなことを前置きしてから、はっきり大きな声でこう言いました。「夏休みが終わったら、必ず長谷部くんへ告白しなさい」って。そのことはマリエの手紙の中にも何度か同じように書かれていたことでした。正直、わたしは電話で「美樹はグズグズしている自分が嫌いだと言いながら、そのグズグズしていることを楽しんでいる」って言われた時、とてもムッとしました……それでどうしてそんなに今日に限って長谷部くんへ告白しなさいってしつこいくらいに言うのかはわからなかったのです。マリエは本当に手短かに「長谷部くんへ告白すること」をわたしに約束させると、一方的に電話を切ってしまいました。今、こうして手紙を書いている、その時のことが思いだされて、涙が溢れてたまりません。どうしてわたしはあの時、彼女にもっと色々なことを話さなかったのでしょうか？……そのことを思うと悔やまれてなりません。でもマリエの気持ちを無駄にしないためにも、こうして長谷部くんへ告白する勇気が持てて、本当によかったと思っています。もちろん長谷部くんがわたしの気持ちに應えてくれるとは思えないけど、マリエや夏川くんのこともある、わたしは自分の気持ちを整理するために、どうしてもこのことを長谷部くんへ伝え

たかったのです。迷惑だったらごめんなさい。でも特別な女の子じゃなくていいから、同じクラスの友達として、これから長谷部くんが仲良くしてくれると嬉しいです……なんだか自分の手に余る感情をごちゃごちゃと書き綴ってしまって本当にごめんなさい。長谷部くんが明日、もう一度学校にきてくれることを願って、この手紙を閉じることにしたいと思います。

じゃあ、また明日ね。

橘 美樹

僕は橘からの手紙を読み終わると、ぐしゃぐしゃに丸めて、満杯のゴミ箱の中に捨てた。そしてゴミ山から弾きだされたその紙クズを拾い上げると、手で皺を伸ばし、元のとおり四角く丁寧に折ってから、机の引きだしにしまいこむことにした——もう一度手紙の内容を読み返したいとは、とても思えなかった。

第8章

翌日の放課後、僕は橘に「つきあってもいい」というような旨を口頭で伝え、僕は橘とく高校生らしいおつきあい>を始めることになった。つきあう、といってもそれは本当に友達としてつきあうという意味で、彼女に手をだす気持ちなど、僕には最初からさらさらなかった。ただマリエが橘に僕とつきあえという遺言めいたものを残していったから、それがマリエの遺志であるのなら、彼女の願いを叶えようと、そう思ったまでのことだった。それに、僕は千里眼の能力なんてものを持ち合わせてるわけじゃないけど、この時にはもう、大体ある程度、先のことは読めてたんだ。誰かとつきあい始める時に、すでに別れる時のことを考えてるだなんておかしな話かもしれないけど、橘とはそう長く続かないだろうって僕にはわかってたんだ。なんでかっていうとさ、まあようするに不釣り合いだっていう、そういうことなんだけど……つまり彼女は夏休みに大学受験の特別講座のためにわざわざ札幌や小樽までいくようなお嬢さまなんだ。それに引き換え僕ときたら馬の骨だか口バの骨だかもわかんないような奴なんだからな。そんな奴のことはそのうち向こうから愛想を尽かすだろうっていう、なかなか的中率の高そうな予想を僕は立てていたわけだ。理想の王子さまが実は、ただのみすぼらしくて汚らしい乞食みたいな男だったって気づくには、そう時間はかからないだろうと思ってね。

実際、彼女の親父さんというのは僕の親父や兄貴と同じ公務員とかいうのをやってるらしく、なかなか堅く厳しい人物のようだったし、それだけじゃなく彼女の親類縁者一同の構造なんてものからして、台所に鼠一匹入れさせまいってというようなお家事情なんだな。医者、歯科医、弁護士、司法書士、警察官、大学教授、建設会社社長などなど……果てには某大物政治家と繋りのある地方議員が彼女の伯父であったりと、とてもじゃないけどこれから高校を中退しようかどうしようかっていう男がつきあっていいような女の子じゃないんだ。僕はこの頃、本気で学校を辞めようって考えはじめていて、それは両親が猛反対しようかどうかとどうしようか——それなら家を出ていくまでのことだったし——大の親友である秀川が止めようかどうかとどうしようか、変えることのできない運命であるように、当時の僕には思われていた。

僕はふたつのバイトを掛け持ちし、授業をしょっちゅうさぼってはバイトに勤む毎日を送り、橘とはつきあおうと言いはしたものの、日曜日にデートしたことなんか三か月にいっぺんあったかどうかとこだったと思う。それでも彼女はとても健気で、不思議と学校へこいとかなんとか、うるさいことは何ひとつ言わなかったし、ただ控え目に「もっと毎日学校で会えたらいいのに」と、何かの話のついでにぼつりと零す程度だった。

驚いたことに美樹は、アルバイトに日々勤む僕のことを真面目な勤労青年か何かと勘違いしていて、尊敬の念すら抱いているらしい。僕は彼女のそうしたお嬢さまぶりに、啞然とさせられることもしばしばだった。しかも彼女は大の少女漫画大好き少女で、語尾に思わずハートマークをつけたくなるくらい、その手の話を愛読しているんだな。つまり何が言いたいかっていうと、ようするにアレさ。僕のほうに美樹に対して手だしする気が毛頭なかったとしても、彼女には迂闊に手をだすことはできないと僕は言いたいわけだ。美樹の部屋の本棚に並ぶ少女漫画及び少女小説には恋愛をテーマにしたものが多いんだけど、その話の内容ってのがあまりに極端すぎるんだ

。大体のあらすじがみな似たりよったりで、やたら格好いい男がぞろぞろでてきて主人公のツューの女の子をとりあうってのが多いんだ。

僕はレースのひだ飾りのついたカーテンのある部屋で、たくさんのぬいぐるみに囲まれながら時々そうした本を読んだけど、正直いってちょっとばかしぞつとしたな。ようするにさ、女にも性欲というか、性的欲求っていうのは確かに存在する。でもそれは男が想像しているようなのは大分違うんだ。青年誌なんかには時々あるだろ？大して格好よくもない、モテもしないツューの男<あるいはツュー以下の男>がどういうわけだか様々なタイプの美女や美少女に誘惑されてやりまくる、みたいなやつ。あれの逆バージョンとでも言えばいいのかな……違うといえば、少女漫画誌においてはそれほどセックス描写が過激ではなくライトな感じで終わってるってところだろうか。セックスにおける肉体的な生々しさやリアリティといったものよりも精神的にひとつになることのほうに重点を置いて描かれていることが多いような気がする。だから橘も、僕と初めて現実的にそうなった時、何かが違う、こんなの、自分が想像していたものじゃないって、そんなふうに感じたんじゃないだろうか——まあ、これはもっと後の話になることではあるんだけど。

とにかく、僕は高次の二学期から高校を卒業するまでにかけて、実によく働いた。その間、忙しい合間を縫ってほとんど義務的な気持ちから橘とデートを重ねていたわけなんだけど、ある日彼女のほうからそれを求めているような気配があって、僕のほうからキスしたことがあるんだ。確か、冬のとても寒い夕暮れのこと、僕は映画を観たあと、彼女を家まで送って行って——その帰り道の別れ際、だったかな。いつになく二人の間で話が盛り上がってしまって、彼女の家のそばの公園でさ、熱い缶コーヒーなんかを飲みながら、とりとめのない話をずっとし続けていたってわけだ。会話が途切れても、橘は何かかにか話題を持ちだしてきては、繋げようとしてた。

その時どのくらい寒かったかっていうと、説明するのはあまりに簡単で、自販機から出てきた時は燃えるように熱かった缶コーヒーが、口を開けた三分か五分のあとにはアイスコーヒーと大して変わらないんじゃないかってくらいに冷たかったんだ。手袋なんてしてても、手がかじかんでくるし、缶コーヒーの缶は飲み終わってしまうと、手に持っているのがつらくてどうしようもないくらいだった。僕は橘のほうから「寒いからもう帰る」っていうような言葉のでのをずっと待ってたんだけど、なんだか彼女のほうも同じことを考えてるような気配があってさ、それで思わずキスしちゃったわけだ。流石にさ、彼女の長い睫毛に霜が降りてるのを見ると、そろそろ帰してあげなきゃなって気持ちになってね。

彼女の瞳が潤んで、凍った睫毛が一瞬にして解けたのにはびっくりしたけど、嬉し涙だったようなので、僕はほっとした。

彼女が家へ上がって少し暖まってから帰らないかと言うのを丁重に断り、夜が凍ったみたいな碧い空の下、真っ白い息を吐きながらとにかく僕はひたすら走った。虚しさを噛み殺すような気持ちでいっぱいになりながら——何故って、僕にははっきりわかったからさ。キスのひとつやふたつしたところで、これから橘のことを好きになったりすることはありえないってことがね。

正直いって僕はこの時、自分自身に愕然としたよ。冬のオリオン座が輝く夜の公園、揺れるふたつのブランコ、先ほど見たばかりの恋愛映画の甘い余韻……これ以上はなかなか望めないぞつ

てくらいの、ロマンチックな素晴らしいシチュエーションじゃないか。しかも相手は清楚で清純そのものっていう、この上もなく可愛らしいお嬢さんなんだぜ？何故何も感じないのか、僕は自分の心に聞いてみたけど、答えは返ってこなかった。

心の中が、冬の凍てついた夜空みたいにならんと、体は凍死寸前っていうくらいに寒くて――愛すべき彼女と熱い口付けと抱擁をたっただけで今交わしてきたところなのに、本当にこれは一体どういうことなのか、誰かに説明してほしいとたまらなかった。ただ、凍傷になっちゃったんじゃないかってくらいに冷たくなってる耳の奥に、マリエの切ない声が繰り返し響いていて――アツシ、アツシ……って、何度も繰り返し僕のことを呼ぶ、その切ない声があまりにつらかった。

まるで冬の夜空いっぱいにならんと鳴り響いてるんじゃないかってくらい、その声は両耳を閉じても追い迫ってきて――全速力で走ったところで無駄だとわかっているのに、そうせすにはいられなかったんだ。

僕が橘と初めてキスしたのは、つきあいはじめて約半年ほどがたった冬休み中のことだった。僕は冬休みの間中、一にバイト、二にバイト、三四も休まず五もバイトってくらい働き詰めに働いていて、橘とデートしたのなんか、冬休み最後のその一日だけだったんだ。当然のことながら、僕の成績は落ちるところまでガタ落ちに落ちまくってたし、優等生の彼女がそろそろ愛想を尽かしたとしてもまったく不思議はない――みたいに思ってたんだけど、残念ながらそうはならなかった。

そして来たるべき時がとうとうやってきたというべきか、僕は三学期早々からお先生方に留年を危ぶまれていた。

なんといっても出席日数が足りないし――平日の真っ昼間からお仕事に勤んでいたお陰で――学期末試験で三つも赤点をとったのでは、あまりにも当然な結果だったといえよう。

正直って僕は、学校を辞められる丁度よい口実くらいにしか思ってなかったのだが、赤点をとってしまった教科の先生それぞれが、どういうわけか教師風を吹かせてきたのだからたまらない。

「長谷部、おまえは二年の一学期まで数学と英語と国語を除いたら、どの教科も4プラス以上じゃないか。アルバイトをふたつも掛け持ちしてることは、先生のうちの誰もが知ってることだし、何故わざわざ留年しようとしたりなんかするんだ。何か悩みごとがあるんだったら……」

とまあこういった具合さ。はっきりって二学期の時点でもうすでに最後通帳突きつけられたも同然ではあったんだけど、何がなんでも僕のことを留年させまいとする先生方の熱血ぶりには、目を見張るものがあったね。それに極めて優秀な成績の持ち主である友人ふたりが――この場合言うまでもなく秀川と橘なんだけど――補習講義をさぼろうとする僕のことを両側からきっちり挟んで、それをほとんど強制的に受けさせた、と、まあこういったわけさ。

僕は春休みもバイトづくめの日々を送る予定だったというのに、お陰で掛け持ちしていたふたつのうち片方のバイト――二十四時間喫茶のウェイターの仕事――は首になってしまうし……何が悲しくて昼は補習、夜はレンタルビデオ店でバイトの二足のわらじを履かねばならなかったと

いうのか。

「いいか、おまえら！おまえらを落とすも救うも試験次第なんだからな！しかも補習最後の試験では、学期末試験とほぼ似たような問題ができるんだから、これで落っこちる奴はただの馬鹿だ！そこのところ、よく肝に命じて授業を受けろよ！」

数学教師の及川は、わざとらしくもガンガンとチョークを黒板に叩きつけながら、補習授業の最初にそう宣告した。しかもこの及川の野郎、＜ほぼ似たような＞なんて言うておきながら、なかなかひねた試験問題を作成しやがって……横柄極まりない奴の講義を受けながら、心の中で親指を下に向けていたのは決して僕だけではなかったに違いない。

次にEnglishの先公だが、こいつの授業は眠くて仕方がない。英語のテープと一緒にα派でも放出してるんじゃないかと思えない。生徒からは「必殺！睡眠授業」と呼ばれることもあるだけに、そのかったるい退屈な授業内容にはなかなか定評のある先生だ。しかも自分の授業中に眠った生徒のことは逐一チェックし、閻魔帳につけているらしいとのもっぱらの噂だった。なにせよ、おそらくこのティーチャー中松の英語の授業を死ぬまで永遠に受けたところで、海に向こうのヤンキーどもには通じないに違いない。

次に現国の石川。生徒のみんなからゴエモンとかタクボクと仇名されている、とても親しみやすい先生だ。普段の授業も文法中心にではなく、作者のもっとも訴えたかったこと、それを読んだ読者が何をどう感じるかを中心に授業を進める先生だ。文法についてはプリントを中心に、ツボを押さえて試験前に集中してやる程度。とてもいい先生だ。僕も石川先生については文句を言う科白が特に浮かんでこない。

まあそんなわけで、なかなか個性的な教師陣の講義を受け、さらに橘と秀川という強力なサポーターたちの助力をも受けた僕は、留年という憂き目にあうことなく、無事高校三年に進級することができた、まあこういったわけだ。

ちなみにその年、留年した生徒というのはひとりもでなかったわけなのだが――僕の他に六名ほどが留年予備軍に名を連ねていたにも関わらず――うち二名は最終試験後に反省文を書くことによって留年を免れることができたようだ。僕同様、先生方の寛大な措置に感謝すべきなのは言うまでもない。

もしかしたらクラスの連中の中には、僕と橘が放課後熱心に勉強しているのを見て、微妙に勘違いした奴がいたかもしれない。でも本当に全然そんなじゃないんだ。僕にはわかった――橘といくら親しくなったところで、自分の心がどうにも動かしようがないってことが。逆に橘と親密になればなるほど、自分が本当は心の底で誰のことを深く想っているのかということが。

僕はマリエを愛していたし、彼女は心の一番奥深くにある偶像とすら化していた。

寂しい時や悲しい時には、心の階段を下の下まで降りていき、秘密の扉を大切な思い出の鍵で開けて、彼女に会いに行く。

マリエは柔らかいソファの上で僕の話の黙って聞いてくれ、柔らかな太腿の上にある、僕の頭髪を優しく撫でてくれるんだ。

「大丈夫よ。アツシにはあたしがついてるし、目に見えなくても、あたしはいつもアツシのそばにいるんだから……」

それでも時々、僕はマリエの存在を身近に感じられないことがあり、そんな時にはいつも、厚岸の海岸へと出掛けた。飽きもせずに半日以上もの時間を海辺の砂浜で過ごし、波が一日に何万回打ち寄せるのかを計算したりなんかしてる。

僕の単純かつ、極めて当てにならない計算法によると、波はまず三十秒間に約七回ほど打ち寄せるってことがわかったから、それによるとこういうことになるのではないだろうか。

三十秒間に約七回ということは……
一分間に約十四回ということになり、
二分間には約二十八回、
三分間には約四十二回……
つまり五分間には約七十回ということになる。

とすると、十五分間には約二百十回ということになり、三十分間には約六百三十回……
一時間には約千二百六十回。
ええと、千二百六十×二十四ということで……
約三万二百四十回。

あまりにもいい加減な、信憑性に欠ける数字ではあるけれど、棒切れで砂の上に数字を書いて、そうやって時間を潰したりなんかしてたんだ。

もちろんこんな計算したってなんの役にも立ちゃしないし、ノーベル賞を獲得するためのヒントにすらなりはしない。でも少なくともこの時の僕にとっては、それはとても大切なことだった。特にその、なんの役にも立たなければ、なんの得にも利益にもなりはしないっていうことがね

。つまり、波の打ち寄せる回数が正確に把握できないように、マリエの死もまた、僕にはいまだに掴めていない部分が大いってことなんだ、多分。

こじつけがましいように聞こえるかもしれないけど、僕はそうやって色々なことをマリエに結びつけて思索することが好きだった——マリエの死の謎をもし解くことができたとしたら、彼女のことを僕は忘れられるに違いないってそんな気がしてね。

だからそれこそ様々なことを彼女と結び合わせて、静かな波の音符が辺りに漂う中、僕は瞑想を深めていった。

そしてその瞑想が最終的に打ち破られるのは、決まっていつも同じ事柄にぶつかるからなのだ。

——言うまでもなく、それは夏川が存在だ。

僕はいつだってマリエのことだけを考えていたのに、マリエの死に思いを馳せる時、奴の存在が闇の中の影のように背後から張りついて剥がれない。夜の波のうねりのように不気味に、奴はマリエの後ろから、僕に手をだしてこようとする。

『マリエはおまえなんかよりも俺を選んだんだ』

とそう言って――。

僕は初めのうち、夏川の死のことを考えるなど、マリエの死を汚すことにも等しいように思われて嫌だったけど、時が経過するにつれて、少しずつ奴の死んだことについても思いを馳せずにはおれなくなった。

出来ることなら認めたくはないが、マリエの死は夏川の死と切っても切り離せないものだったし、マリエの死の背後には夏川の死が絶えず潜んでおり、マリエの死の扉は夏川の死の向こう側に通じるものだったからだ。

夏川は何故死ななければならなかったのか、僕は僕なりに、マリエのためを思って少しずつではあるけれど、考えるようになっていた。

そもそも自殺というのは、死ぬ以外に道のない人間が行う行為である。だが、第三者的な立場から奴のことは見るかぎり、生きる道は他にいくらだってあったように思うのだ。

確かに、自分が十七年もの間愛用してきた利き腕を切り落とさねばならぬというのは、僕なんかの乏しい想像力では想像できないくらいの痛苦が伴うことではあるだろう――それは半分くらいなら、理解できる。僕には「そのような不幸に見舞われているのは君だけではない」などと大上段に構えて、奴の立場を俯瞰することなど、絶対にできない。

根本的な問題はおそらくそういうことではないからだ。

たぶん格好つけたがりの彼にとって、片腕を失うということは、普通の人を感じる百倍以上は屈辱的なことではなかったかと推察される。右腕を失っても左腕があるとか、日常生活に支障があるかないかといったようなことを越えて、精神的な意味での打撃のほうがより大きかったのではないだろうか。

僕は彼が小学校の時の卒業文集に「将来はプロの野球選手になりたい」と書いていたのを覚えていた。だが夢の実現を絶たれたことに対する失望感というよりも、何かもっと深い何かが夏川の死には隠されているような気がしてならない。

甲子園に今一步というところで手が届かなかったからとか、骨肉腫に利き腕が冒されてしまったからということの他に、多分まだ何かあったんじゃないだろうか……だけどそれは人に相談してどうにかなるようなことではなかった、あるいは人に相談できるような事柄ではなかったからこそ、夏川は死を選択したんじゃないだろうか……もしかしたら夏川にとっては骨肉腫だと医者から宣告されたことが<とどめ>っていうやつだったのかもしれない。

もちろんこうしたことは当然ながら、僕の憶測の域をでないことではあるけれど、マリエの死について考えるために、僕は思いだしたくもない夏川のことを一生懸命考えてたってわけだ。僕はマリエについて出来ればこんなふうに考えたりしたくなかったけど、マリエの死と夏川の死は固く密接に結びつき合っていて、そうおいそれと解いてしまうことはできないくらいの強さを持っていた。

マリエはおそらく夏川の死に引き摺られたのだろうと、そんなふうにありきたりの解釈をしてしまうことはつらかったけど、そう認めないわけにはいかない崖っぷちのところまで、僕の意識は追いこまれつつあった。

人は何故死ぬのかだとか、何故死のうとするのかだとか、死者の魂についていくら系統だてて思索を深めてみようとしたところで、そこには砂を噛むような虚無の世界が広がっているばかり

なのだ。僕は初めのうち、マリエの死をできるだけ夏川の死から遠ざけて納得できるように考えようとしてみたけど、この両者を引き離そうとすればするほど、ふたりは近づきあっていくかのように思え、敗北感という名の重圧が背後霊のようにずっしりと双肩にのしかかってくるのを感じた――マリエは夏川のために、奴をひとりにしておかないために、同じ海に身体を沈めたのか？

YesとNoというボタンがもし目の前にあったとしたら、僕は間違いなく<No!>のボタンを押しただろう。だがおそらく答えはほぼ間違いなくイエスなのだ。

――それは何故か？

夏川にひどいことを言った自分自身を許せなかったからか、それとも三十以上も年の離れた男と結婚しなければならなかったからか、僕には逆立ちして世界一周したところでわからない。

――マリエ。愛している、愛しているよ。

ただひとつだけわかっているのは、僕が心の中で魂の海に向かってそう語りかける時、まるで僕の心の言葉に答えを返してくれるかのように、波がたおやかに何度も何度も繰り返し、優しい言葉を与えてくれることだけだった。

『愛している、愛している、私も誰よりもあなたのことを……』

そう海は、人が一生の間に流す涙の数よりも多くの愛を、ただ無言のままに寄せては返す波の間に託してくれる。

浜辺には、役に立たないゴミのような海藻や、所帯じみて疲れた感じのする貝殻なんかが散らばっていたけど、浜辺に腰掛けてぼんやりしている僕は、彼らよりももっと役に立たない、所帯じみた粗大ゴミみたいに思えた。

夕暮れ時の海で哀愁を一身に背負い、暮れなずむ男――あまりに引き伸ばされてしまった僕の影は、頭頂部がぼやけて、僕自身以上に哀れを訴えかけているようだった。

そんなうらぶれた砂浜に僕はひとりで佇み、両の瞳に染みるほどの夕陽を浴びて、波の歌声が闇の中に吞まれてしまうまで、ずっとそこでそうしていた。

自分の意識のうちの10%くらいを残し、あとの90%を死者たちの意識や生前の思考回路といったようなものに同化させ、自然の奥深くへと馴染むように分け入っていく……そこでは地平線と水平線が同時に僕をとり巻き、僕は回転する独楽の回転軸みたいに自分の存在を把握した。そして再び意識の波打ち際に打ち捨てられた時、あたりには不気味な闇が押し迫っていたのだった。

僕は重い身体を引き摺るように汀を離れ、人間たちが『電車』と呼ぶ鉄の檻に揺られて家まで帰らねばならなかった。泣きながら車窓に映る闇の景色、遙か彼方に自分がいつか帰らなければならない故郷を見つめながら……。

第9章

僕は高校の三年に進級してからというもの、わりとマメに学校へ顔をだすようにしていた。

せっかくなんとかぎりぎりのところで留年せずにすんだのだから、残りの一年くらい、真面目に最後の学校生活なるものをエンジョイするのも悪くないと、そう思い始めていたのだ。

それに橘や秀川の手前もあって――僕が留年せずにすんだのは、このふたりの尽力によるところがあまりにも大きかったので――僕はそうそう嫌な授業をさぼるといふわけにもいかなかったのである。まあそうはいつでも、一応出席日数を計算して、適当に休んだり早退したりなんかは相変わらずしてたんだけどね。

二十四時間喫茶のウェイターのバイトを辞め、レンタルビデオ屋の仕事だけをするようになったので、収入が減ったかわりに自由にできる時間が増えた。だからといって僕は受験勉強に目覚めるといふこともなく、また時間に余裕ができたからといって、橘とのデートを増やしたりするようなこともなかった。橘は「バイトが忙しくて……」と言さえすれば、それ以上僕に文句や不満をぶついたりすることもなかったし、むしろ逆に「学校で会える時間が増えて、それだけでも嬉しい」と言ってくれるくらいだった。流石に僕もそんな言葉を聞いてしまうと、良心の痛むものがないではなかったけど、僕だってまったく何も考えずにそうした嘘をついていたわけではないのだ。

確かに橘は――僕はこの頃には美樹と名前と呼ぶようになっていたけど――とても可愛らしくてよく気の利く、優しいいい娘ではあったけれど、僕はそんな彼女の性格やそれを現すかのような容姿といったものに、あまり興味を抱くことができなかった。では性的な魅力もまったく感じないかといえば、それは感じないこともないと、極めて曖昧な返答をすることしか僕にはできない。

一度試しに彼女を抱いているところを想像しながら例のものを励まそうとしたことがあったけど、いまひとつうまくいかなかった。第一に、僕は美樹の裸を見たことがなかったし――それでもTシャツを着ている時の胸のラインやミニスカートををはいている時の脚線美なんかから、ある程度想像することは可能だったけど――そうなると、いくら美樹のことを相手にしようとしても、その身体はやがてマリエのそれへと瞼の奥ですり替わってしまう。

その熱い夢の中で、マリエは僕の耳元にこう囁く。

『美樹のことを考えながらあたしの中に入ってきてもいいし、美樹を抱きながらあたしのことを考えたって、全然構わないのよ……』　つまり、僕が心の奥底でしたいと願望しているのはそういうことだった。美樹じゃなくても、他のどんな女でもいい。僕はマリエのことを考えながら誰か他の女と寝たかった。けれどもそんなことを現実にするわけにはいかないゆえに――僕は美樹とは心の距離だけでなく身体的な距離をも置くように心がけていた。

彼女のほうはどうかといえば、美樹は常時清純な空気を纏いつかせているようなところがあって、僕らの会話の隙間にセックスのセの字も割りこんでくるようなことはなかった。

僕ははっきりいって、美樹の前ではなかなかの紳士だったといっても過言ではなかったと思う。僕にはある意味で、橘美樹の中にあるイメージとしての長谷部敦像を演じているような部分

があって、時々自分が昔の少女漫画にでてくるヒーローか何かのように感じることもしばしばだった。つまり、太陽の陽光を受けるたびに何故だか歯が白く輝いたり、必要以上に僕の睫毛が長く美樹の目には映っているんじゃないかと不安になることがよくあった。

そして当時の僕が彼女に対して思い描いていた計画とはこういうものだった――美樹は恋に恋する年頃の乙女であり、僕に寄せている気持ちなんてものは、一時的な熱病みたいなものに過ぎない。故に、僕は彼女が冷たい北風にでも出会って目を覚ますのを待てばいいんじゃないかと、そんなふうに思っていたのだ。

美樹は、保母になるという夢を叶えるために札幌の短大を受験すると話していたけど、それに引き換え僕には大学を受験する明確な意志や理由といったものがまるで存在しなかった。だから僕と美樹はいずれ季節が巡ってきさえすれば、自動的に、自然消滅的に別れることになるだろうと、漠然と考えていたのである。

さらに、僕の大学受験中止については、周囲の人間が実に色々と口やかましいアドバイスをしてくれたため、そのお陰で僕はますます『大学へなぞ絶対に行ってたまるものか』という決意を、意固地なまでに固めることになった。両親と御先生方の意見は一貫して「とりあえず」大学には行っておけ、という極めて説得力に欠けるものだったし、最後には母の泣き落としみたいなものまで加わったのには、いささか閉口させられた。

「十年後に後悔することになったらどうする？それからブランクをとり戻すには今以上の並大抵でない努力が必要になるんだぞ」

だとか、

「経済的なことなら何も心配しなくていいのよ」

だとか、揚句の果てには、

「世の中には大学へ行きたくても行けないような人が沢山いるんだ。おまえは恵まれてるほうじゃないか。今から勉強すればまだ間に合う。将来的には〈大卒〉という肩書きがものをいう時だってあるんだ。もし長谷部にまだ自分のやりたいことが見えてないんなら、大学へ行ってからその目的を探すという手だってあるだろう。おまえはもともとやればできる生徒だったし、聞けば親御さんも進学を望んでるっていう話じゃないか……自分が今どんなに勿体ないことをしようとしてるか、ちょっと考えればわかることだろう？」

とまあ、こうとまできたもんだ。

先生と両親が並べ上げた世間一般の緒論であるとか、何やら出所のあやしい、どこから拝借してきたのかわからない人生訓やらは、すべて僕の人生の枠には見事なくらい掠りもしなかった。ゆえに、僕は彼らの言葉が耳の穴を通過していくのを、黙って風の音を聞くみたいに聞いていただけだった。

もちろんなりたいものなら当時からすでに存在していたが、それは誰かにそうと伝えたところでどうなるという職業ではなかった。

――小説家になりたい。

もしそう告白して、僕がどれほど切々と小説家に何故なりたいかについて語ったところで、彼らは頭が痛い仕種をするか、両手を持ち上げて首を振るかのいずれかだっただろう。

できるだけ高いレベルの大学を卒業し、将来は一流企業とまでは言わないまでも、なるべく安

定した職業に就いてほしい……やりたいことをやるなどとは言わないが、あまり危ない橋を渡ってほしくない……それが親の願いであり、また本音でもあったりするわけだが、子供は親のそういった言い分を百も承知の上で反抗したり、あるいは親の二の舞になりたくないがために我が道を貫こうとするものなのだ。

僕は将来何になりたいのかを秀川にだけは打ち明けていたので、そのことについて相談めいたものをさりげなくしたことがある。彼はこう言った。

「確かにアツシにはものを書く才能があると俺も思うけど、でもそれはまだ荒削りで、全然磨かれてない原石みたいなものだと思うんだ。だからどこか適当な大学へ入ってから、在学中に書き続けるっていうのもひとつの手なんじゃないか？」

秀川の言うことは正しい。まさに正論ってやつだ。実際に僕も彼の言ったのとまったく同じことを選択肢のひとつとして数えていたし——今から猛勉強を開始すれば、なんとかぎりぎり間に合いそうでもあったから——それに大学進学は家を出るのにうってつけの理由でもあったからだ。

僕は高一の冬休み前くらいからバイトをはじめ、それはほとんど貯蓄に回されていたから、銀行通帳には結構な額の数字が書き込まれていて、それを元手に今すぐにも家を飛びだしたいくらいでもあったのだ。

何も我が家の両親や兄に落ち度があるというわけではまったくないのだが、ただ僕は高二の夏の終わりあたりから、自分が家族とは結びつかない、別の独立した場所に流されつつあることを自覚していた。そしてそれは次第に確信へと変わり、今では揺るぎのないある決意を僕の中に生みだしてさえいた。

「自分は彼らの中にはいけないのだ」と。

何故そんなふうに思ってしまうのか、感じてしまうのかは僕自身にもよくわからない。僕の両親は極ありふれた普通の人たちで、兄貴はよく出来た兄の標本のような人だったし、精神的にも物質的にもいわゆる中の上の家庭環境で僕は育てられたとってなんら差し支えない。それでいながら僕はどういうわけだか、自分の家族というものにうまく馴染めなかった。それは小さい頃から僕が漠然と感じ続けてきたもので、うまく言葉で表現できない類の事柄だった。立派な普通の両親と、誰にでも自慢できる立派な兄貴——けれども残念ながら、僕は彼らとは違う人種だったと言わざるをえない。あるいは僕の頭がおかしいのかもしれないが、僕は彼らの＜普通律＞のようなものについていけないのだ。

だから僕は彼らとはまったく異なったやり方で、できるだけ彼らの価値観から離れた場所で、自分の存在証明のようなものを証してみせなくてはならなかった——といっても、彼らの言うことも半分は正しいのだと、僕は社会にでてから認めざるをえなくなるんだけど。現実の壁の大きさや厚さといったものの重みを、実感として切実に受けとめて生きるのがどういうことなのか、僕は常に学び続けなくてはならなかったから。

まあそんなわけで、高校最後の一年は僕にとってとても穏やかな、周囲の緊張感や焦燥感とはまるで無縁のものとなった——お陰で、そのかわりに色々な役員だとか面倒で厄介な仕事を背負

わされるはめにも陥ったけど。

まず、どういうわけだか学級委員長の役割が秀川にではなく僕に回って来、それからアルバム制作委員の任まで仰せつかってしまったのである。しかもそれ以外にも何かというと「長谷部は進学しないんだから」という理由によって暇人とみなされ、こき使われるのが習慣化してしまったのである。ことに高三の二学期に入ってからというもの、その傾向が日増しに強くなりつつあったので、僕は出席日数を計算して学校を休むどころではなくなった。とにかくほとんどすべて委員と名のつくものに関しては、顔をださねばならないようになっていたからである。しかも役員を選出する日に欠席してみたところでもるきり無駄で、翌日には黒板にでかでかと文化祭委員だの体育祭委員だのと書かれた下に僕の名前があった。そして僕が「冗談だろう？」とか「嘘だろう？」とうろたえるたびごとに、みんなは受験勉強のストレス解消として楽しんでさえいるかのようだった。

僕の学校はいわゆる進学校で、生徒のうちの約90%が大学や短大や専門学校などを受験するのだという。実際、僕のクラスで就職するなんていう奇妙な奴は僕ひとりきりだったし、学年全体でも十人くらいしかいないみたいだった。

二学期の、体育祭もたけなわというある日の放課後、僕はルパンから進路指導室へくるよう呼びだしを受けていた。「きたな」と僕はすぐに思ったけど、ルパンが相手なら話はだらだらと長引くことなく手っとり早くすませられるだろうと思いながら、進路指導室のドアをノックした。

「失礼します」

儀礼的に会釈しながら入室すると、モミアゲ＝プレスリーは組んでいたマッチョな腕をほだき、自分の机の横に座るよう、パイプ椅子を勧めた。

あまり広いとはいえない指導室には、僕と先生の他には誰もいなかった。

「長谷部の意志はどうやら固いようだからな、先生もいくつか心当たりをあたって就職先を探してみただが……面接を受けてみる気はあるか？」

先生は〈本当に本物なのかどうか触って確かめてみたくなる〉と生徒間で評判のもみあげを撫でながら、僕に二枚の紙を渡して寄こした。

一枚目は電力会社の求人で、二枚目はガス会社のものだった。それぞれ給料や就業時間などの待遇について、細く書き記されている。

「どうする？先生としてはそれ以上の就職先を探すのは難しいし、長谷部がどちらを希望したとしても、面接でよっぽどのへまでもやらかさない限り受かるとは思うんだが。まあ御両親ともよく相談してまた明日……」

「両親に相談する必要はありません」先生の言葉を遮ると、僕はきっぱり言った。「僕は父や母に対して不満を持っているわけでは全然ないし、むしろここまで育ててくれただけでも十分に有難いことだと思っています。だけど、父や母は世間体であるとか、親戚に対する面子であるとか、そういったことを物凄く気にする人たちなんです。もし僕が今ここで親孝行したいと真剣に考えるなら、今からでも一生懸命受験勉強して大学に入るか、先生の今言われている就職先に落ち着くのが一番なんだろうなとは思いますが。でも僕はそういう生き方が嫌で嫌で仕方ないんですよ。もちろん僕なんかのためにこんなに立派な就職先を探していただいて、先生の御厚意にはとても感謝しています。せっかくの心遣いを無にするようで心苦しくもあるんですが、僕は……そうい

う保守的なことにはまるで向かない人間なんです。生意気を言うようで本当に申し訳ないんですけど、この求人以外の就職組の生徒に回してください」

先生は禁煙のはずの進路指導室で煙草を吸うと、やっぱりそうかと言いたげに、トントンと灰皿の縁に灰を落としている。

「長谷部おまえ、自動車の教習所に通ってるんだってな」

思ってもみない方面から話を切りこまれた僕は、一瞬ドキリとした。何故なら僕は正式な届け出なしに免許を取りにいったからだ。

「今、どこまで進んでるんだ？」

「この間、坂道発進を終えたところです」

改めてきちんと学校に申請書をだせと言われるのかと思ったが、先生は窓の外の夕景色を、遠い目をするように眺めやるばかりだった。

「そうか。坂道発進か……」

ルパンは煙草を半分も吸わずにもみ消すと、僕のほうに改めて向き直って言った。

「先生は先生をやっているのが言わば天職みたいなものだけども、それでも去年一年は精神的にかなりキツかった。ヘルニアの治療を終えた二週間後に事故にあって、今度はムチウチだ。しかも入院している間に教え子がふたりも続けて亡くなって……こんなことは教員生活を始めてから初めてのことだったな。正直ムチウチになってるのをいいことに、暫く療養しようかとも本気で思った。それから今担当している自分の学級の生徒が全員無事卒業したら、先生の職を辞めようかとも少しだけ考えたよ。でも自分には結婚したばかりの女房がいるし、教職以外の仕事に就いてる自分というものもうまく想像できなくてな。結局なんだかんだと日を送っているうちにムチウチのギブスはとれたし、クラスの中からも通夜の雰囲気はいつの間にか消えていた。だけど長谷部、おまえだけは違ったんだよな。おまえは高次の夏を境目に、すっかり変わってしまったように先生には思えたよ。べつにおまえは夏川と特別仲が良かったわけでもないし、山田とはろくに喋ったことがあるわけでもなかっただろう？それなのに、先生に山田と夏川の死を忘れさせなかったのは長谷部だった。高次の二学期からおまえはしょっちゅう学校をさぼるようになったし、三年に上がる時には留年すれすれの出席日数だった……先生の考えすぎかもしれんが、長谷部が無言で何かを訴えかけているように先生には思えたんだ。人が死ぬことの重みに比べたら、学校をさぼることがなんだろう、留年することが一体なんだろうってそんなふうにな。そういうおまえの気持ちは、先生にもなんとなくわかるような気がするよ。大学に落ちたからって死ぬわけじゃないし、安定した企業に就職できなかったからって人間死ぬわけじゃないものな。ただ先生はそういう長谷部が少しだけ心配なんだ——俺がこう言ったところで、長谷部には先生の言いたいことがうまく伝わらないかもしれない。つまり、先生も含めて大抵の人間は生死を基準にものを考えたりしないってことだ。みんなただなんとなく明日も普段どおり生きてるだろうくらいに考えて、だらだら生きてる。まあ言ってみればそれが＜普通＞ってことだ。でも長谷部は少し違うみたいに先生には思える。かといって刹那的というのでもなく、大袈裟な言い方かもしれないが、今からすでに死ぬための準備をしているというかな……いや、違うな。先生が言いたいのはそういうことじゃない。先生が心配なのはただ、長谷部の考え方が世間一般に占める普通の

人たちの考えとは微妙に違うってことだ。そして世の中にでた時に長谷部は、そういう普通の人たちとは根本的に話が合わなくてその違和感に苦しむかもしれないっていう、そういうことなんだ」

僕はプレスリーが意外にも洞察力があることに驚いていた。大学を受験しないと言った時には、通りいっぺんの御託しか並べなかったというのに、この変わりようは一体どうしたことだろう。

「長谷部いま、意外にこいつわかってないようでわかってるって、そう思っただろう？」

エルヴィスは煙草に火を点けると、少しだけにやりと笑った。

「……はい。正直、ちょっとだけ」

「まあ、俺としてはただ、可愛い教え子に荊の道を歩ませたくないっていう、ただそれだけだったんだ。ある程度決まったルールに乗ってたほうが、人間絶対楽だからな。それにそこから外れようと思えばいつでもできるし、何かあった時には親や教師のせいにすることもできる。あいつらがとりあえず大学いけて言ったから俺は……みたいにな。でも長谷部には誰かのせいでできる保証なんて全然必要なかったんだよな。まあまだ先の話にはなるけど、卒業してから就職に困るようなことがあったら真っ先に俺のところへこい。いくつか当てがないわけでもないからな」

最後にそう館山先生が夕陽色の顔で笑ったので、僕も窓の外の薄紫色の景色を眺めながら、一緒に笑うことにした。

それから先生は縦列駐車のコツや仮免許試験に合格するためのポイントについて教えてくれたけど――その後僕にわかったのは、理論だけ先に説明されても、実際にそれを自分の体を使って証明できなければなんの意味もないということだった。要するに僕は仮免許試験の縦列駐車でもヘマをやらかし、二度目の試験で合格したと、まあそういったわけだ。

「館山先生、なんて言ってたの？」

その日の放課後、体育祭実行委員会にちらと顔をだし、あとは帰宅するのみという時に、美樹がおずおずとそう聞いた。

「べつに……いい就職先があるからどうかって話だったんだけど、断ったから、べつにどうってことのない世間話をしてただけだよ」

「そう。その就職先って、札幌とかじゃなくてやっぱり釧路の会社よね」

「うん。まあそうだけど……それがどうかした？」

ううん、べつに、と彼女は軽く首を振って、じゃあもう帰ろうかと言った。

美樹は帰り道でも差し障りのない話しかしなかったけど、彼女が何を言いたいのか僕にはよくわかっていなし、その空気はずっと以前から感じていたものだった。

美樹はもうすでに札幌の短期大学に推薦入学が決まっていて、それは堅い頭の両親の意向もあってのことだったから、彼女は来年の四月には向こうで寮暮らしを始めることになる。保母の資格を取得するための短大は釧路にもあるが、美樹の両親は札幌の中でも特にレベルの高いお嬢さま短大に娘を通わせただけでなく、そうすると彼女としては僕に何かの形で札幌に来てもらいたいのであった。けれども僕はそのことについては微塵も触れず、彼女が何かを言いたがっている雰囲気を感じてもひたすら無視し続け、もっと別の、なるべく害のない話にすりかえては

かりいたような気がする。

おそらくそうした僕の曖昧な態度は、美樹のことを著しく傷つけていたに違いなかったけど、僕はなるべく早く彼女と離ればなれになりたいと願ってやまなかった。そしてそうすることが彼女にとっても一番良い、最善の道なのだと信じて疑いもしなかった。

僕は美樹とつきあい始めてから、いや、つきあい始める以前から、彼女は僕以外の他の誰かと――例えば秀川のような、高校生にしてすでに医者になりたいという志を持っているような頭のいい奴と――つきあうべきなのであって、僕なんかとではまるきり釣合いのとれてないことがよくわかってたし、彼女の僕に対する思いにしたところで、はしかか風疹のような一時的のものというようにしか受けとることができなかった。

はっきりいって、僕は美樹に恋などしていない。だから当然愛してなんかもいない。そのかわり、僕は美樹といると、息苦しいくらいマリエのことを感じる事ができた。僕が欲しいのは、今日の前にいる生身の女ではなく、その生身の体を失ったマリエのほうなのだと、はっきりと感ずることができた。正直いって僕はそのことを繰り返し確認し、少しでもマリエの残してくれたものを感じていたいのために、美樹とつきあってきたにすぎない。そしてそのことは生身の重い肉体を持つ僕にとって、ある意味試練でもあった。

いやらしい言い方になるけれど、僕は美樹が僕にキスされたがっていると感じられた時だけ、彼女にそうしていた。それにしても唇と唇を軽く触れあわせる程度のもので、僕は美樹に対して一度として自分から衝動的にキスしたいと思ったことはなかった。

もちろん、だからといって彼女に性的にそそられることがなかったかといえば、断じて否ではある。

彼女の背中にブラジャーの形がTシャツごしに透けている時や、短いスカートをはいた時にのぞける太腿なんかは、少なからず僕に性的な興奮を与え、意識的に彼女の体から自分の視線を逸らすことにもなった。

ただそうした時に生じる性的衝動は、理性の鎖を噛み千切るといふようなところにまで至ってはならず、僕は理性によって打ち立てた計画――互いに高校を卒業し、札幌と釧路に離ればなれとなり、自然消滅を狙うという計画――が水泡に帰すことがないよう、またマリエのことを裏切ることにならぬよう、恐れとともに気をつけていた。

「べつにいいのよ、わたし以外の女と寝たって」

マリエなら、生きていてもそのくらいのことは言ったような気がするけど、女が男に浮気してもいいと言うのは絶対的に自分に自信がある時だけだし、僕のほうはといえば、死んだってマリエに他の男と寝てほしくなかなかった。

だから僕は操を立てるとかそういうこととは別に、美樹と肉体関係を持つわけにはいかなかったのだ。いや、理屈っぽい綺麗ごとをいくつも並べ立ててしまったけど、結局はこういうことだったのかもしれない。僕は美樹と寝てみたくないわけではなかったけれど、肉体関係に不随する心の重みというものが面倒くさくてうっとおしかったのだと思う。そしてそういう矛盾した感情を抱えている自分自身のことを嫌悪してもいたのだ。

まあなんだかんだ言ってみたとこで、僕は最終的に美樹と寝てしまったのだから、自分のこ

とを正当化することなど、決してできはしないのだが。

それは冬休みも終わりに近い、ある日の出来ごとだった。

僕はいつものように美樹と他愛のないデートをし、夕刻、彼女のことを家まで送り届け、牡丹雪の舞う中で別れの挨拶を交わした。

その日、彼女はデートしている最中からなんとなくいつもと様子が違ったけれど、僕は特に気に留めていなかった。彼女と映画を観たり食事をしたりしている間、僕の頭の中にあっただのは性的なことではなく、雪があんまり降り積もると庭の雪かきが面倒くさいとか、そんなようなことばかりで、彼女のほうが僕のことを必要以上に意識しているだなんて、少しも考えていなかった。

別れ際、美樹は独り言みたいにぼつりと言った。

「今夜、泊まってかない？」

その声はあまりに自然なトーンを保っていたので、僕は自分の耳が寒さによっておかしくなったのではないかと思ったほどだった。それで手袋を外すと、冷たい耳を思わず手でごしごしこすってしまった。

「さっきも話したけど、今日、お父さんとお母さんは帯広の知りあいの家に行っていていないの。兄さんは出張で旭川に行ってるし……一晩くらいいいでしょう？」

僕はいいよ、と答えるかわりに、門戸に手をかけている彼女の手に、自分のを重ねた。そして数瞬迷ったあと、やはりキスした。

「入って……ね、入って……」

美樹は白い吐息を洩らしたあと、どっしりとした和風家屋の重厚なドアを開け、中に僕のことを導き入れた。

彼女のような人にとって男を誘うのがどのくらい勇気のいることかを思うと、僕はすぐにも美樹のことを抱きたい気持ちになっていた。実際、二階の彼女の部屋に通されるなり、すぐにそうした。美樹が部屋の明りを点け、ポータブルストーブのスイッチを入れ、寒そうに手をごしごし擦りあわせるその一連の動作を、僕はいつものように冷静に見守ることができなかった。

後ろから抱きついて、長い髪の間から白いうなじに唇をつけると、美樹は暫くの間硬直したように動かなかった。僕はまだ外の寒さで冷たく強張っている手の指をスカートの中、パンティストッキングとパンツの下に入れると、ゆっくりと愛撫を開始した。

その間、美樹は微動だにしないで、僕の指の動きに抵抗するでもなく身を委ねていた。僕の指は彼女の膣内から流れる暖かいものによってすぐにぬくもりをとり戻し、彼女のお尻には僕の硬くなったものがスカートごしに押しあてられていた。

美樹はベッドの上に力なく横たわると、青いモヘアのセーターを脱ぎ、その下の白いブラウスのボタンを外し始めた。僕もそれを手伝い、彼女のブラジャーのホックを外し、スカートのファスナーを下ろし、パンティとパンティストッキングを脱がせた。

そして自分もセーターを脱ぎ、最初に彼女の白い乳房に口をつけ、舌を這わせた。

美樹からはどのような反応も返ってこなかったけれど、僕は初めてだからなのだろうと思い、特に気に留めなかった。下腹部に手を忍ばせて、さきほどの続きをするように指を何度も反復さ

せる。それからもうそろそろいいだろうという時になって、彼女の中に侵入した。

「……痛い？」

耳元にそう囁くと、大丈夫、というように美樹は静かに何度か首を振った。唇を動かそうとしていたけれど、なんだかうまく声をだせずにいるみたいだった。

僕は彼女の中を何度もかき乱して射精を果たすと、その時になって初めて、部屋の中が異様な熱気に包まれていることに気づいた。ストーブの芯が熱く赤い炎を最大限に示している。

美樹は気を失ったか何かしたように固く瞳を閉じていて、起きる気配のようなものがまるで感じられなかったから、僕はティッシュでペニスを拭くと、裸のまま立って行ってストーブを小さくした。

それからふとシーツに血のしるしのないことに気づいたが、特別気にはしなかった。むしろ内心ほっとしていたというのが本音かもしれない。

僕はジーンズをはき、美樹がクリスマスにプレゼントしてくれた手編みのセーターを着た。そのセーターはオフホワイトで、茶色の鹿たちの上に雪の結晶が降り積もっているという労作だった。そして僕はそのセーターを受けとった時に感じたのと同じ罪悪感を、今目の前に横たわっている彼女の寝顔に感じていた。

僕は身勝手にも、急に美樹のことが可哀想になり、彼女の長い黒髪をそっとゆっくり撫でた。それからベッドの脇に散らばっている彼女の衣服もきちんと畳んで整えておいた。

正直って僕は、ベッドの上に眠っている美樹のことをこのまま置き去りにして、自分の部屋のベッドで一刻も早く眠りにつきたいような気がしていた。けれども彼女が目を覚ましたあとに優しい言葉のひとつでもかけてあげなければという冷たい義務感から――ストーブの小さくなった炎を、ベッドの縁にもたれてぼんやり眺めていた。

どのくらいの間そうしていたのかはわからないけれど、僕が美樹の目覚めたのを知ったのは、彼女が声を押し殺すように泣いている、その微かな震えによってだった。

振り返ると、美樹は僕のほうに背中を向けて、壁際に体を丸めて泣き声を洩らしていた。シーツと布団の間からは、彼女の白い背中が見え、ちょうど右肩の下あたりに少し大きめのほくろがあるのが見える。

「僕の何かが悪かったんならあやまるけど、そんなに嫌だった？一応僕なりに……その、なんていうかさ……」

美樹は僕の言葉を遮ると、壁際から振り返って言った。

「違うの。全然そんなんじゃないの。ただ……長谷部くん、初めてじゃないでしょ？だってすごく手慣れてる感じだったもの。あたし、ずっと思ってたのよ。どうして長谷部くんはふたりきりの時にも何もしてくれないんだろうって。キスだっていつも遠慮がちな感じで、あたし、すごく嬉しかったのに。でも今抱かれてみてよくわかった。長谷部くん、きっと他におつきあいしている人が誰かいるのね。それでそういうこと、あたしに気づかせたくなかったんだわ」

「ちょっと待てよ。そんなことあるわけないだろ！？もし……もしも僕が美樹以外の女とつきあってたとしたら、絶対もっとうまくやってるよ。男ってというのはそういうものなんだよ。アダルトビデオ見たりとか、その手の雑誌を読んでは夜な夜な自分の好きな女を抱いたりしてるんだ。

もし僕が手慣れてたとしたら、そういう耳学問っていうか、知識のせいだよきっと」

慌ててそう言い訳したものの、美樹は半信半疑といったような眼差しで、どこか恨みがましいような顔をしている。

「じゃあ……本当にあたしが初めてなの？」

「当たり前だろ」

美樹はやっと納得したのか、それとも何か別の疑問がわき上がってきたのか、毛布を一枚頭の上まで引き上げると、暫くの間じっと身を隠すようにしていた。

「……ねえ、夜の想像の中で、あたしも寝たことがある？」

「何度もあるよ」と僕は嘘をついた。

「本当に？」

美樹は毛布を首の下までおろすと、懐疑の消えた大きな瞳をこちらへ向けた——僕は溜息を着きたくなるのを抑え、

「本当だよ。でも想像の中ではなんでもうまくいくけど、現実の世界ではそうもいかないだろ？もしかしたら好きな人の前でとり返しのつかない大失態をやらかしてしまうかもしれないし、それにわりとうまくいったと自分では思っても、相手は心の中で傷ついたりするのかもしれないし……今の美樹みたいにね」

「ねえ、夜の想像の中ではあたしとどんなふうにしたの？」

美樹は毛布で胸を隠すようにしながら起き上がり、興味津々といった表情でベッドサイドの僕を見上げる。

「ええと……それは色々だよ」

「色々って？」

「色々は色々なんだけど……例えば僕が美樹のことを強引に押し倒して、嫌がってるのに無理やりレイプとか……あとは手首を縛って目隠しとか、SMっぽいことをちょっとやってみたり……」

佐々木から最近借りたばかりのAVについて喋っていると、美樹はおかしくてどうしようもないというように、ベッドの上で体を折り曲げている。無防備にも白い背中とお尻が丸見えだった。

「長谷部くんでも……そういうこと、考えるんだ」

「そりゃあ考えるよ。男は不能になったって、頭の中でだけはきちんと女を抱けるだろうからね、多分」

美樹はそれからもひとしきり笑ってたけど、ある程度笑いが収まると、不意に真剣な眼差しを僕に向けた。片方の手で胸元の毛布を押さえ、もう一方の手でベッドの上にある僕の手を握りしめる。

「ねえ、あたしのこと、本当にちゃんと好き？」

「……好きだよ、もちろん」

「じゃあ愛してる？」

「うん、愛してるよ」

——それからあとも僕はなんの罪悪感も感じるこゝとなしに、美樹に愛していると嘘をつき続け、さらに性交を重ねた。昔見たサスペンスドラマにこういう科白があったのを思い出す。

「人間は一度嘘をつく、その最初の嘘を隠すためにさらに嘘を重ねる。そして最後にはどうでもいような小さなことにさえ嘘をつかずに生きられないようになるんだ」

僕は法廷で偽証罪に問われたことがあるわけではなかったが、それでも女の人に対してはかなりのところ手ひどい嘘をついて騙したことが、それから何度となくあった。

よくなんでもうんうんとかはいはいとわかったように相槌を打ってる奴に限って実は何も話を聞いてないことがあるように、言ってみれば僕はその手のタイプの駄目男だったとっていい。やがて相手の女が僕のことを実は無責任でもっとも質の悪い嘘つき野郎だと気づく時——破局を迎えることになるわけだ。

でも僕は女が「サイテー！」と言って頬に平手打ちを食らわそうが、まったく動じることはなかった。僕のほうには最初からわかっているからだ。相手の女もまた一時的にせよ、騙されたがっているということが。

そして僕はそうした恋愛遍歴を重ねたあとで——最後には嘘をつけばつくほど金が転がりこむ商売を生業とすることになった。すなわち小説家である。

春は出会いと別れの季節だとよく人は言う。けれども僕は高校を卒業したばかりのその春、胸痛む別れを経験したわけでもなければ、心ときめく新鮮な出会いに恵まれたわけでもなかった。

美樹は「短大を卒業したら戻ってくるつもりでいるから、それまで待っててね」と別れ際に駅のホームで言った。「手紙も書くし、電話もなるべくするから……」そして少しためらったあとで、最後にこうつけ加えた。「あたしがいない間、浮気しないでね」

秀川は浪人することなく、無事第一志望の医大に合格し、卒業式では卒業生代表として答辞なるものを壇上のマイクに向かって読んでいた。

僕は美樹と別れることよりも、彼と別れ別れになることのほうが、よほど身に応えていたといっている——いかに夏休みや冬休みに再び会えるとはいへ。

秀川との別れは、確かにつらい、胸痛む出来ごとではあったけれど、それでも不思議と悲しくはなかった。もしかしたら会いたくなかった時には自分から札幌へ赴けばいいだけだと、そう思っていたせいかもしれない。

佐々木は介護福祉士の資格を取得するべく専門学校に進学し、福島は物好きにも教師となるべく地元の教育大学へと進学した。そして僕はといえば、相も変わらずレンタルビデオショップでしがない店員をやっていたというわけだ。

まあ身分は一介のアルバイトから準社員に一応格上げされてはいたものの、給料は時給制で、退職金も厚生年金の積み立てなんてものもない、将来がこの上もなく安泰な素晴らしい待遇だった。

なんといってもビデオとCDを貸しだすだけの、小さなレンタルショップ（しかもどちらかというとややマニア向け）のことだから、まあ仕方ないやな、といった感じだ。僕はこの店の気さくな店長のことが結構好きだったし、従業員の何人かとは音楽や映画の趣味があって仲良く交流もしてたし——それに時々馬の合わない奴が入ってきても、そういう奴は往々にして早く辞めることが多かったからね。今のところ、人間関係でイカイヨウとか十円玉ハゲというようなことはまったく無縁だ。

両親は猛反対したけど、僕は家出を決行し、今は一月の家賃が二万五千元というボロ安アパートで暮らしている。一月の僕の稼ぎは家賃や光熱費なんかの必要経費を差し引くと、切り詰めればなんとか貯金できないこともないという程度のものだ。でも僕はとても自由だし、自分の暮らしぶりには貧しいながらも満足してた。そして暇さえあれば小説を書き、図書館へ行って資料にするための本を漁るという日々を過ごしていた。

ところがある日、なんの前触れもなくそんな単調な毎日が崩されることになるろうとは……僕には思いも寄らないことだった。

それはバイト歴約一年半、準社員に採用されて三ヶ月になるかならないかの、いつもの平凡な朝に起こった出来ごとだった。僕はいつものとおり開店前に駐車場の掃き掃除をすませると、ゴミを捨てて店内の掃除にとりかかろうとしていた。

このCD&VIDEOと大きく看板の掲げられたレンタルショップでは、朝の開店が九時で、

夜の閉店が十二時である――まあはっきりいって平日の朝から押すな押すなの盛況だったなんてことは、オール百円レンタルフェアの時でもなければないことだ。つまり、朝のいの一番から店の前で客がたむろってるなんてことは滅多にないことなのだ。しかもその客というのが見るからにあやしい。

パンチパーマにサングラス、服装は黒のスーツーどこからどう見てもYA・KU・ZAといった風体の親父だ。いやらしい成金くさい大きな指輪をはめた手で、スパSPAと煙草を吸ってはそれを苛立たしげに投げ捨てている。

僕はたった今掃除したばかりなのにと、腹が立って、その親父の目の前でわざと吸い殻を箒で掃き、ちりとりの中へ入れた。

「よう兄ちゃん、店はまだ開かねえのかい？普通ビデオを貸しだしてる店ってのは、二十四時間営業で、客がいつ返しにきてもいいようにしてるってのが常識なんじゃないのかねえ？」

「うちは九時開店なんで、あと二分もすれば店長がドアの鍵を開けにきますよ」

「ふうん、そうかい」

ヤクザな親父は面白くなさそうに鼻を鳴らし、まだ吸い始めたばかりの煙草を指で弾くように投げ捨てていた。今度はあえて片付ける気にもなれず、僕は箒とちりとりを両手に持って、裏口から店の中へ入った。

ワイエーケイユーゼットエーさんとは対照的に、いかにも「善良な一般市民です、ハイ」といったような顔立ちの店長は、九時ちょうどに自動ドアの鍵を開け、「いらっしゃいませ」とどこか強張った表情で朝一番の有難い客を迎え入れた。

仮称ヤクザはアダルトビデオのコーナーをどことなくふてぶてしい態度で眺め、棚の上から好ましいと思われたものをカウンターまで持ってくると、返却するビデオの入った袋とともにレジの脇に置いた。

「兄ちゃん、悪いんだけどよォ、この借りていったビデオのうち一本が、実にいいところで映りやがらねえんだよ。ちょっと調べて、もし俺の言うとおりになら、今日借りてく分をタダにしてくんねえかな？」

おいおい冗談だろうと思いつつも、僕は店員として恥かしくない冷静な態度を貫き通そうと思ひ、慇懃な口調でこう言った。

「お客さまがおっしゃられているのは、お借りになっていかれたビデオのうちのどちらになるのでしょうか？」

返却用のビデオは全部で五本あった。

『ある悪妻の官能的な午後』、『エロティック・ハイジャック』、『犯されタイム』、『レイプはある日突然に』、『美少女看護婦～愛の診療時間～』……タイトルを見ただけでも、もういい加減そのへんにしとけコラ、というような代物ばかりだった。

ヤクザ、もとい大切なお客さまのひとりである男は、スチュワーデスの制服をあられもなく着崩している美女の肢体をなぞると、それだ、というように指で弾いて寄こす。カウンターに片腕を寄せ、凄むように一瞬睨みを利かせてきた。

「こちらですか……申し訳ありませんが、少々お待ちください」

店長を呼ぶために、僕はバックヤードのほうを覗いてみたのだが、そこにいつもいるはずの店

長の姿はなく、かわりに副店長の絹江さんがソファに座って煙草を吸っていた。

「すみません、店長知りませんか？」

絹江さんは機嫌悪そうにジロリと僕のほうを睨みつけ、それから煙草の灰を灰皿の上に落としている。ヴァージニア・スリムには彼女の赤い口紅が何かのしるしみたいにべったりとついていた。

「店長ならついさっき、上の事務室に上がっていったわよ。なに？なんか用なわけ？」

「えーとですね、お客さんがビデオの映りが悪いと苦情を申されてるんですよ。それで今日借りる分をタダにしると……」

正直って僕は、カウンターの前で待っているヤクザまがいの男よりも、副店長という肩書きのまるで似合わないこの女のほうがずっと苦手だった。ど派手な化粧に、自分のプロポーションの良さを強調するかのよう、肌にぴったりとフィットしている服装——見るからに水商売の匂いプンプンといった容顔の女だった。

「ふうん。それじゃあたしが適当に相手するから、あんたは店の掃除でも大人しくしてるのね」

上官に敬礼する一兵卒よろしく、僕はアイアイサーとばかり、副店長の指示に従った。

絹江さんはヤクザっぽい男——というより多分間違いなく絶対完璧にヤクザ——と堂々と渡りあい、相手の要求を飲むことなく、新しいほうのエロビデオを借りさせようとしていた。絹江さんの態度は『極妻』ばりにでかく、言葉遣いは一応丁寧ではあるものの、恐ろしくドスが利いていた。端で聞いている僕まで金玉が縮み上がりそうになったくらいだ。

「悪いんですけどねえ、お客さん。時々お客さんのような方が見えられて、音声が悪いだのなんだのいちゃもんつけてタダで借りようとする方がいらっしゃるんですよ。それで実際に店のビデオデッキで調べてみるとなんでもなかったりして、そういうのってほんっとーに、一番迷惑なんです。一応こっちでも調べてはみますけど、その間お客さまをお待たせするのもなんですし、今日はチケットをお渡ししますから、次回それをお持ちになってください。もしお客さまのおっしゃったとおりであれば、次に来られた時に一本無料でサービスさせていただきますから」

「だけどう、それじゃあアレじゃねえか。そっちで調べてトラッキングやなんかが入ったとしても、なんともありませんでしたって言われちまえばそれまでだろ。なんかそれはフェアじゃねえっつーか、いまいち納得できねえな。俺だってあんたみたいな美人の前で恥かきたくてわざわざこんなこと言ってんじゃねえんだ。本当にこれからいいところってとこで、大事な部分に線が入って見れねえようになってんだよ。それとも何か？俺が嘘ついてるとでも言うんじゃねえだろうな、あんた」

ヤクザも負けじとそう言い張るが、勝負は絹江さんがバックヤードから出てきた時点であったも同然だった。はっきりって貫禄負けといってもいい。

絹江さんはなおも食い下がろうとするヤクザのことを塩でもまくかのように追い払い、事の成りゆきを見ないふりをしながらじっと観察していた僕のことを最後に呼んだ。

「長谷部くん。悪いんだけど、ちょっと来てくれる？」

「はい」と、従順な犬のような顔つきで僕がカウンターまでいくと、絹江さんはレジをロックして、バックヤードまでくるよう指で示した。

「さっきのヤー公が言ったビデオなんだけど、本当にいいところでトラッキングが入って見づらくなってるのかどうか、確かめてくれない？まあどうしてもきのうの夜に返却されてきた分のビデオを全部元に戻したいっていうんなら、あたしがこっちの役目を引き受けてもいいけど...
...どっちがいい？」

「えーと、それはですね.....」

僕にしては珍しく、言葉に詰まってしまった。べつにどっちの仕事をやらされようと、それはまったく構わないのだが、女性に昼日中からアダルトビデオを見る仕事を押しつけるというのも、なんとなく気の引けるものを感じた。

「えっとその、どっちでもいいですよ、そんなの」

僕がはっきりしない態度でいると、絹江さんは僕の両肩を掴んでソファに座らせ、ビデオとテレビのスイッチをほぼ同時に入れた。

「それじゃあ悪いけど、頼むわね」

絹江さんは藍色ののれんをくぐってバックヤードから姿を消し、あとには真っ昼間からエロビデオを鑑賞する、いやらしい男がひとり残されることになった。

『エロティック・ハイジャック』というタイトルのこのAVは、まあ平たくいって要するにスチュワーデスレイプものだった。

飛行機をハイジャックした一団が操縦室に立てこもり、美人のスチュワーデスを次々に犯していくという、設定が大袈裟なわりには極めて馬鹿馬鹿しい内容のストーリーだった。

僕がこのビデオの映像の見張りをしなければならぬのは、ひとえに画面にぶれや乱れが生じないかどうかをチェックするためなので、音は消しておいた。なので、どういった会話が出演者間で行われているのかは正確にはわからないものの、まあそれでも大体のところ想像がついたし、話の筋を追うのになんの苦労もなかった。

短い前置きが終わって、スチュワーデスやら乗客やらが飛行機に搭乗し、それから頭にストッキングをはいたハイジャックの一団が姿を現したあと、いよいよ場面は佳境のセックスシーンへとなだれこみ、銃をつきつけられているスチュワーデスたちはひとりひとり全裸になるよう命じられていった。

ここまできると流石に音声のないのが惜しいような気がしたけど、仕事だから仕様がなないと、僕は自分を納得させることにした。

そしてその時絹江さんがのれんをくぐってバックヤードに入って来、僕の隣にどっかと腰を下ろしたのだった。

「調子はどう？」

「まだ終わりまでいってないんですけど.....」心持ち、背筋を伸ばしながら僕は言った。「今のところ、別段なんともないですよ。多分あのヤーコ.....じゃなくて、お客さんはただ単にいちゃもんをつけたかっただけなんじゃないかな。あるいはたまたまその時ビデオデッキの調子が悪かったかのどっちかだと思うんだけど」

「まあそうでしょうね」と絹江さんは溜息を息を吐いている。「長谷部くんて意外に律儀なのね。わざわざ消音にしてアダルトビデオを見るなんて」

「だってやっぱりまずいでしょう。向こうに音とか洩れてたらやばいし、一応これでも勤務時間中なわけですから、僕は」

「馬鹿ね。イヤホンして聞いてりゃよかったじゃない。べつに店長もあたしも何か言ったりはしないわよ。それとも怖かった？あたしや店長に『君はなんてイヤらしい奴なんだ』って思われるのが？」

「べつに……そういうのじゃないですけど、なんか悪いかなと思って。それじゃあとは絹江さんが見といてください。僕、レジ見ながら返却されてきたのを元に戻しておきますから」

そう、と素っ気なく相槌を打つと、絹江さんは煙草ケースからヴァージニア・スリムを取りだしていた。

僕はAV男優の上にスチュワーデスが跨がってるシーンをちらと見やってから、真面目に仕事をしようとのれんをくぐることにした

――昼休みまではあと約一時間半、勤務終了の六時になるまではあと七時間半もある。にも関わらず、僕はなんだかもう早々に仕事を切り上げて家に帰りたいような気分になっていた。一時間近くもAVを見て暇潰しができてラッキーと喜ぶべきだったかもしれないけど、なんだかどうしようもない倦怠感が全身を包みこんでしまっている。

一日のはじめにリズムを崩してしまうと、残りの時間が流れるのがやたらと遅く感じられることがあるけど、僕にとってまさにこの日がそうだった。

カウンターの後ろの棚に積み上げられていたビデオの山は絹江さんがすべて片付けてくれたので、僕のすべきことといえば、簡単な拭き掃除の続きと、レジ番くらいなものだった。

絹江さんの勤務態度にはかなりの問題が見受けられるように僕には思っていたけど、彼女は実際的な仕事のスピードが半端じゃないくらい速い。大体どこの棚になんというタイトルのものがあるか、頭の中にインプットされてるらしい。まあだからこそその副店長なのかもしれないけど、彼女の接客態度は事務的で冷たく、とても他の平の店員に模範を示しているとは言い難いものがあった。それに僕は二年近くもこの店で働いているにも関わらず、親しい口を聞いたのはさっきが初めてだった。つまり、彼女は実際的な仕事には長けていたけれど、客や一緒に働いている店員に対してはどうしても優しくなかつたりするのだ。

そういうわけで、僕は絹江さんが苦手だったし、彼女の醸し出す水商売的雰囲気にもあまり好意を持つことができなかった（水商売をしている女性のことが嫌いだというわけではなく）。

店員の間では、絹江さんは五十嵐店長の愛人なのではないかという噂が囁かれていたが、真偽のほどは定かではない。絹江さんは店長に対しても分厚い壁を一枚隔てたかのような喋り方をし、それでいて時々さっきの僕に対してのように、気まぐれに親しい口調で話すようなこともあり、そうした彼女の態度は僕や他の店員たちを困惑させた。要するに、絹江さんという人はそういう人だった。

そしてその日の六時過ぎに僕が一旦レジのお金を精算して売上金額などを報告書に記入していると――絹江さんが僕の座っている事務機の隣に腰かけて、なんの気まぐれからか、一緒に帰らないかと誘ったのだった。

とりあえず僕は断る理由を思いつけなかったの、いいですよ、とだけ答えた。

下のカウンターでは十二時に出勤してきた僕と同じ準社員の佐竹と、六時出勤のアルバイトの子がふたりレジに立っていて、店長はといえば、超娯楽大作のビデオを陳列しながらああでもないこうでもないディスプレイに頭を悩ませている様子だった。

僕と絹江さんは「お先に失礼します」とカウンターに向かって一声かけ、タイムカードを押すと裏口から外に出た。

裏の駐車場には店長のトヨタカローラと絹江さんのRV車とが並んで停めてあり、絹江さんがキィのボタンを押すと車の鍵が自動的に上がった。

「散らかってるけど、気にしないでね」

「気にしませんよ」僕は助手席からうさぎやきりんやとらのぬいぐるみをよけながら言った。「僕の部屋なんか絹江さんの車の五十倍以上は散らかってますから」

絹江さんは少し笑うと、後部席に散らばるテープのひとつを取りだしてかけ、音量を調節した。ジャニス・ジョプリンの『サマータイム』。

「長谷部くんてお家どこなんだっけ？」

「実家は鳥取なんですけど、今は駅の近くのボロアパートでひとり暮らししてます。だから実という逆方向だったりするんですよ、車の進行方向が……」

絹江さんは国道38号線に出ると、星ヶ裏・大楽毛方面に向けて車を走らせていた。つまり釧路駅へ行くとしたら、Uターンしなくちゃいけないことになる。

「そうね。でもせっかくだからこのまま少しドライブしない？コンビニでお弁当買ってもいいし、途中でレストランに入ってもいいし……お腹空いてるでしょう、長谷部くん」

「ええ、まあ」

「そうよね。あたしと違って長谷部くん真面目だから、あたしの五十倍くらいはお腹空いてるわよね。あたしはずっと立ってて疲れたなあって思ったら、バックヤードって煙草吸ったりしてるからね。じゃあどこかレストランにでも寄って何か食べてく？それかコンビニでお弁当でも買ってドライブしながら食べるとか……長谷部くんの好きなほうでいいけど」

その時ちょうど前方に7という大きな数字が見えてきたので、僕はそこでジュースとかおにぎりとか、何か適当なものを買って食べることにしませんか、と言った。

夜の空気は生ぬるくて心地好く、僕は疲れた体をもう少しだけ、この座り心地のいいシートで休ませたかった。

「長谷部くんて車の免許持ってるの？」

コンビニで煙草やビールやお弁当などを買ったあと、彼女は車に乗りこむ直前にそう聞いた。「免許は持ってるんですけど、残念ながら肝心の車のほうがないんですよ。このままいくとペーパードライバーになりそうな予感が今からしてます」

「じゃあ運転してみる？」

いいんですか、と聞くと、絹江さんはドラミちゃんの人形がついたキィを、投げて寄こした。

僕は発進直後にエンストしてしまい、少しだけ彼女の前で恥かしい思いをしたけど、そのあとは大体スムーズに運転を続けることができた——絹江さんのRV車は恐ろしく乗り心地がよく、僕はこの車を運転したあとでは、中古のボロな軽自動車などとても運転できないだろうとすら思った。

「このまま湿原展望台のほうまでいきましょうか」

僕が遠慮してスピードを抑え気味にしていると、絹江さんは「もっとアクセル踏んでいいわよ」とビールを飲みながら笑った。湿原展望台までの道程は車通りが少なく、ほぼ一直線の道路が続いているためだ。それで僕は九十キロほどのスピードで走っていたが、彼女にとってはそれでもまだ不満らしく「もっとよ、もっともっと」と繰り返し煽られた――僕の気のせいかもしれないけど、絹江さんは車が事故ろうがどうしても、その結果死ぬことになるのが怪我をすることになるのが、どうでもいいみたいだった。

湿原展望台の広い駐車場には、いわゆるヤン車やワゴン車など、全部で四台の車が停まっている以外、他に人の気配を感じさせるようなものはなかった。湿原展望台の史料館はとっくに閉館したあとだったし、あたりを包みこむのはひっそりとしたどこか無機質な暗闇だけだ。あとは青白い燐光のような光を放つ電灯が、ぼんやりとした明りを投げかけてくるだけ。

僕と絹江さんは蛾がたくさん群がっているその電灯のそばでビールを飲み、お弁当を食べながら色々な話をした。

車内は窓を少し開けているせいもあって、ちょうど心地好いくらいの暑さだったし、何よりも虫たちの音色が涼やかだった。コンビニの唐揚げ弁当が空きっ腹にこの上もなく美味しく感じられる。ビールもうまい。

「長谷部くん。なんでこんなところまでわざわざやってきて、これまで大して親しく口を聞いたこともないような女と飯食ってなきゃなんないんだって、そう思ってるでしょう？」

「いや、なんていうかその……」凶星を指された僕は、一瞬口ごもった。「絹江さんていつもクールじゃないですか。僕、絹江さんに口聞いてもらえたのって、バイトとして入ってきた最初の頃だけです。それも仕事でわかんないところ聞いて、絹江さんは『そんなこともわかんねえのか』って感じで、冷たく教えてくれただけだったし……」

正直にそう答えると、絹江さんは眼差しだけで笑った――とても自然な感じの、人を和ませる笑みだった。

「あたしね、自分でもよくわかんないのよ。というより、自分のことを人にどう思われようが全然構わないし、気にしない質の人間なの。長谷部くんが今あたしに対してどんな感情を抱いてるかも、大体わかってるつもりよ。普段仕事中はもの凄く無愛想で嫌な感じの奴なのに、今日は一体どういう風の吹きまわしなんだろうってそう思ってるんでしょ？違う？」

「ええ、まあ大体……」

「あとね、みんながあたしのことをどんなふうに思ってるのかも知ってるわ。店長の愛人なんじゃないかとか、実は水商売が本業で、レンタルビデオ屋のしがない副店長は世を忍ぶ仮の姿なんじゃないかとか、そんなことを休憩室で喋ったりしてるんでしょ？」

ズバリその通りではあったけれど、僕は何も言わずに黙っていた。

「だけどべつにそんなの全然平気よ。もしあたしが店長の愛人だったとしたら、それがなんだっていうのよ？もしあたしが水商売やってて、レンタルビデオ屋の店員やってるのが副業だとしたら、それがなんだっていうわけ？そりゃあ確かにあたしは普段感じの悪い女やってるわよ。だけどあんな回転率の高い職場ですぐやめるかもしれないバイトにまで愛想よくなってるわね」

いわよ。あたし、あそこで働き始めて五年になるけど、店長はこんなに長く勤めてくれた子は君が初めてだって言ってたわ。客に対していくら愛想よく接してくれても、短い期間勤めてふいっと突然辞められてしまうことが結構あるから、君はちょっと無愛想かもしれないけど、うちにとっては貴重な人材だってね。それで副店長にならないかって誘われたの。しかもこれ、二年前の話よ」

つまり、うちの店では三年以上勤務し続けた初の方が絹江さんだったというわけだ。確かに僕がこれまで働いてきた中でも、辞めていったアルバイトは七八人いたと思うので、絹江さんの今の話は物凄く頷ける話だった。

「絹江さんて、強い人ですよ。僕なんかこう見えても結構気を遣ってたりなんかするんですよ。あんまり顔を合わせる事のないバイトのひとりにまでいい印象を持ってもらおうとか、虚しい努力をしたり……」

「そう？長谷部くんははっきりいって全然そんなふうには見えないわね。来る者拒まず去る者追わずって感じで、そういう意味ではあたしなんかよりずっとクールよ。それとももしかしてあれかしら？新しく入ってきたバイトの女の子が結構可愛いからとか、そういうこと？」

「違いますよ。全然そういう意味じゃなくて、もっとほんとに人間関係的な意味において、です。僕、高校卒業したばかりですけど、正直いって高校生くらいの女の子とは全然つきあいたいと思わないですから。まあ向こうだって誰がこんなダサい奴とって思ってるでしょうけどね」

真面目な顔で僕がそう言い切ると、絹江さんはおかしくてどうしようもないというように、助手席で足をばたつかせている一ビールに酔ったのだろうか？

「大丈夫よ、長谷部くん。君は全然格好良いから。少なくともうちの店ではナンバーワンよ。あの新しく入ってきた女の子……なんかメグちゃんって言ったっけ？あの子も言ってたわよ。うちの店で多少なりともイケてるのは長谷部さんくらいだってね。それであたしに彼女いるかどうかって聞いてたわ。あたしは内心『そんなこと知るか』って思ってたんだけど、『さあ、多分いるんじゃない』とだけ言っておいたの。そしたらあの子、思いっきり乙女な溜息着いてたわ。長谷部くん、もし今あなたがフリーなら、狙い目かもしれないわよ、あのなんとかメグちゃんっていう子」

「やめてくださいよ。僕はああいうとりあえず黙ってさえいれば周りで男が適当になんとかしてくれるって勘違いしてるような子が一番苦手なんです。どっちかっていうと、男が放っておいてもバリバリ生きていけるような、バイタリティのある女の人のほうがずっといいです。

——そういえば、この間あの子に言われましたよ。一緒にレジの前に突っ立って、なかなか客がこないんで黙ってたら『長谷部さん、メグのこと嫌いなんですか？』って」

「それでなんて答えたの？」

「べつに嫌いじゃないけど、それが仕事と何か関係あるのかっていうようなことを言いました」

「冷たいわねえ。察してあげなさいよ、乙女心ってものを。それに長谷部くんだって、いくらなんでもそこまで言われたら気づくでしょうよ。『ああ、この子は僕に恋をしているんだ』って」

絹江さんは缶ビールを最後まで飲みほすと、ジュースホルダーの中にそれを置いた。

「だから嫌なんですよ、僕はそういうのが。はっきりいって面倒くさいし、話だって多分合わないだろうし……って、なんでこんな話してるんでしょうね、僕らは。でもとにかく今日は絹江さ

んと色々突っこんだ話ができよかったです。じゃなかったら僕、ずっと絹江さんのこと誤解したままだったと思うから」

そう？と絹江さんは、べつに誤解されたままでも一向に構わなかったというように、素っ気なく言った。化粧のとれかけた、少し疲れた顔の女がサイドガラスに映っている。

「ねえ長谷部くん、どうしてあたしが今日、君のことを誘ったかわかる？」

絹江さんが僕の太腿の上に手をかけたので、僕は煙草を吸おうとした手をとめた――車の外からリーリーと、虫がうるさく合唱する声が聞こえてくる。

「どうして、ですか？」

「べつにきのうまでは本当になんとも思ってなかったのよね、あなたのこと。だけど今日、アダルトビデオを見てる長谷部くんのこと見てたら、なんて格好いいんだらうって急に思っちゃったの。どうしてだかわかる？」

「わかりませんよ、そんなこと。僕、物凄くだらしのない顔して、食い入るように画面を見てませんでした？もう血走った目を爛々と輝かせて、今すぐどこかで独りきりになりたいっていうような……」

「ううん、全然よ。むしろその逆。あたしもてっきり長谷部くんが鼻の下のばしまくってるもんだと思ってバックヤードをのぞいたんだけど、長谷部くんたら音を消してる上に、とても凛々しい顔しててね、囲碁か将棋の対局でも見てるかのような表情なんだから。『こんなくだらねえビデオ、金払って見ようとする奴の気が知れない』っていう感じでね、長い足をテーブルに乗せて、ソファの肘のところに腕をもたせかけて……哲学の思想家かなんかが、小難しい理論を頭の中で構築してるころなのかと思ったくらいよ」

「まさか」と僕は笑ったけど、絹江さんはなんだか本気みたいで、僕の太腿をゆっくりと撫でる彼女の指が、そのことを知らせてもいた。

「ねえ、いい？今ここでしても？」

僕が何か答えるよりも早く、絹江さんは運転席のほうへ重心をずらしてきた。そして僕のジーンズのボタンを外し、素早くジッパーを下ろした。

「ちょっ……ちょっと待ってください、絹江さんっ。僕は同じ職場の人とそういうややこしい関係になるのだけは……」

避けたいんです、というよりも早く、シートが後ろに倒されていた。

「大丈夫よ。全然ややこしくなんかないわ。心配しなくても、あたしはあなたに何かを求めたりするようなことは一切ないし……あなたはあたしに対して責任めいたものを感じる必要もない。それでも嫌ならやめてもいいけど？」

昼間の余韻が残っていたのか、僕のペニスは絹江さんの手の中ですでに硬くなっていた。

「長谷部くんも触ってみる？」

僕は絹江さんに言われたとおりに、彼女のスカートの中にそっと手を差し入れた――中がしっかりと暖かく濡れて、何かを欲しがっていることがわかる。

絹江さんは僕の上になると、ぴったりとした感じのサマーセーターを脱ぎ、それを後部席に放っていた。彼女は僕が想像していた以上にずっといい体つきをしていて、その眺めは壮観といっ

てよく、彼女が早くブラジャーを外してくれることを僕は期待した。けれども絹江さんはそのままの格好で、僕に最初のキスをしてきたので、僕は自分の手で彼女のブラジャーを外さなくてはならなかった。それはフロントホックのストラップレスのブラだったので、彼女の大きな胸を見せてもらうのは造作もないことだった。僕は車の外から人が見てるかもしれないなんて微塵も考えなかったし、ただ自分の膨らんだ欲望のままに彼女の中に侵入し、心ゆくまでそこを探索し尽くしたいと思った。

絹江さんは僕の汗の匂いのするシャツをまくり上げ、乳首に舌を這わせ、胸の重みで僕の下腹部を刺激した。それからジーンズとトランクスを一緒に下ろし、どこか愛しそうに僕のペニスを口の中に含んだ。僕は本当は彼女が僕の突っ立ったものの中に入ってきてくれることを期待したけど、残念ながらそうはしてもらえなかった。彼女は僕のペニスを舌で味わい尽してから精液を飲みほし、口許を片方の手で拭っていた。

僕は恍惚状態を味わいながらも、それでいて半分くらい欲求不満の感じが体内に残るのを感じた。絹江さんのやり方はとても気持ちよかったけれど、僕は今度は自分のほうが主導権を握って、絹江さんの肉感的な体を貪りたいという欲求に駆られていた。

絹江さんは僕が射精を果たすとすぐに助手席へ戻り、後部席からモカ茶のブラと真っ赤なサマーセーターをとって、それを素早く身に着けている。

僕も仕方なくトランクスとジーンズを持ち上げたけど、なんとなく奇妙な感じだった。彼女はあんなにパンツの中を湿らせていたのに、これで満足なのだろうか、訝しく思ったのだ。

「絹江さん、あの……」

彼女はティッシュで軽く顔を押しさえ、ポーチの中から赤い口紅をとりだすと、鏡を見ながらそれを唇に塗っている。

「なに？もう一回したいとか、そういうこと？」

本当はそうだったけれど、はっきりそう言いだすことができなくて、僕は少し違うことを遠回しな角度から聞いた。

「いや、そういうことじゃなくて……その、どうして僕とこういうこと……っていうか、こういう関係を持つと思ったんですか？改めてこんなこと聞くのってなんか馬鹿みたいだけど……」

「さっきも言ったじゃない。でもそうね。強いていえばあなたのオルガズムに達する顔が見てみたかったからかな。いつも冷静で、アダルトビデオ見てる時でさえ涼しい顔してるこの人は、上りつめる時にどんな表情をするのかしらって思ったのよ。白状してしまうとね、あたし、朝からずっと濡れっぱなしだったの。欲求不満っていうのじゃないけど、長谷部くんに抱かれてみたくてたまらなかったの。ただそれだけ」

ただそれだけのこと、と絹江さんは言ったけど、僕はなんとなく釈然としなかった。もう一度寝てみたら、はっきりと何かわかりそうな気もしたけど、結局最後まで言いだせずに、その日のドライブは終わりを迎えてしまった。

車がラブホテルの横を通りかかるたびに、僕は絹江さんに声をかけてみようとしたけど、声が喉の奥につっかかっているみたいな感じで、やはり何も言いだすことができなかった。彼女も帰り道では言葉少なだった。

もしかしたら何も言わずに車をそのままホテルに乗りつけてしまえばよかったのかもしれない

けど、僕がそのことに思い至ったのは、自分の部屋に敷きっぱなしの、汗くさい布団に横になってからだった。

「散らかってるけど、よかったら寄ってきませんか？」

かろうじて最後にそう誘うことができていたものの、絹江さんには「今日はやめておくわ」と断られてしまうし……僕は布団の中で彼女のふくよかな肢体を思いだしては、自分の妄想の中に溺れていった。

次に機会があった時には、彼女の乳房に触れるだけではなく、その中に顔をうずめ、舌を這わせて舐めつくしたいと思った。そして彼女のなめらかに濡れたヴァギナに触れ、その暖かみの中に身を沈めるところを何度も何度も想像した……絹江さんがオルガズムに達した表情を、僕はなんの苦もなく思い浮かべることができた。

僕はその夜、絹江さんのことを抱く自分を想像しながらマスターベーションして、性的な興奮が収まった頃によく眠りへ落ちていった。

その翌日、絹江さんは仕事を休んだ。

僕は<普通にいつもどおりリラックスして>というようなことを百回くらい心の中で唱えてから事務室のドアを開けたのだが、絹江さんの姿はそこになく、かわりにいたのはいかにも今起きたばかりというような、寝ぼけ眼の五十嵐店長だけだった。

「おはようございます」

拍子抜けした僕は、がっかりしたことを隠すこともなく、儀礼的に挨拶した。

「おはよう、長谷部くん。なんか今日ね、絹江ちゃんお休みだって。生理が予定よりも早くきちゃったとかで、お腹が病んで病んで起き上がるのもつらいつて、さっき連絡があったんだけど.....あ、やっぱりこういうことを言うのはまずいか。まあ絹江ちゃんには生理休暇とってもらったから、お昼までは僕と長谷部くんとで頑張ろうな」

五十嵐店長は僕の肩をぽんと叩くと、他の店員に絹江さんの欠勤の理由を聞かれたら、風邪引いてダウンしたとでも言っておいてくれと言った。はあ、と僕はどことなく気の抜けた返事をし、レジの元金を確認すると、下の階へと降りた。

少なくともきのうまで彼女は生理じゃなかった——そうすると、突然朝になってやってきたか、真夜中にでもそうってしまったということなんだろうか？

僕には女性の生理の仕組みってものがいまひとつよくわからないけど、初日と二日目が一番きついというようなことを女友達から前に聞いたことがあった。女の人の中でも重い人と軽い人がいて、前者の場合でさらにひどくなると、一日中布団の中から出てこれないくらい腹部が痛むこともあるらしい。

僕は絹江さんの生理に、自分が何かの責任を負っているような気が一瞬したけど、いや錯覚だよなと考え直すことにした。

けれどもその日一日中、僕の頭の中では絹江さんの存在がたびたび思いだされていた——それも、まるでドアを開けたり閉めたりするみたいにしょっちゅう。そのせいで仕事が手につかないというほどではないにせよ、僕はいつもよりかなりのところ注意が散漫で、二度ほど釣銭を間違えて客から注意されるという始末だった。

そしてふと客足が途絶えるたびに、僕は絹江さんが僕に対してきのうしてくれたことを断片的に思いださずにはいられなかった。下腹部に彼女の胸の重みがかかった時のことや、彼女がサマーセーターを脱ぎ捨てた瞬間のこと——彼女が僕の乳首を舐め、ペニスに舌を這わせた時のことや、彼女のヴァギナの中の暖かい感触のこと.....僕はふと、もし今日絹江さんが店を休まずに、今自分の隣に同じように立っていたとしたらどうだっただろうと想像してみた。

絹江さんのことだから多分、きのうの夜は何事もなかったというような涼しげな顔をしていたに違いない——そして僕はひとり悶々たる表情で、時折彼女のほうをちらと意味ありげに盗み見たりしていたかもしれない。

そして.....それからどうしただろう。迷いに迷った揚句、クールな彼女に向かって「今夜、一緒にお食事でもどうですか」というようなことを帰り際に言ったりしたのだろうか。もしかしたら

食事のあとさらにラブホテルまで誘い「ごめんなさい。今日は生理なの」と断られていたろうか……。

果たして、僕は絹江さんのことが好きなのだろうか？いや、恋とかいうのとは少し違うもののような気がする。確かに僕は絹江さんのことを欲しいと思ってるけど、それはもしかしたら単に体が欲しいというだけのことなのかもしれない。でも不動産の売買契約を結ぶみたいに、心抜きで体だけの関係を結ぶなんていうことが、男女の間で可能なものだろうか？

「……おい、長谷部。聞いてんのかよ」

「ああ、何？」

半ば白昼夢に耽って朦朧としていると、隣にバンブー佐竹がいた。もう昼なのかと思い腕時計に目を走らせる——午前十一時ジャスト。

「早いじゃん、おまえ。なんかあったわけ？」

「ほんとに冷たい奴だなあ、長谷部は。人が義理難くも挨拶してやってんのに、無視したあとはそれかよ。なんかあったも何も、絹江さんが休みとかで、急遽早めに出勤してくれて店長から有難い電話がかかってきたんだよ。やってらんねえよなあ、まったく」

一時間くらいべつにどうってことないだろ、と僕は言いかけたが、あえて黙っておいた。これ以上何か言ってアイスマン呼ばわりされたくはない。

「そういえば長谷部さ、メグちゃんのことどうするわけ？」

「メグちゃんで誰だっけ？」

——この時、僕は本当に、その名前に該当する人物のことを思いだせなかった。

「決まってるだろ、及川恵のことだよ。俺、何回か相談されてるんだよな。彼女はいるけど、今札幌の短大に通ってて釧路にはいないって言ったらさ、相手はどんな人だとかなんとか、根掘り葉掘り聞かれちゃって……それで思わず色々余計なこと喋っちまったんだけど、気ィ悪くしないでくれよな。まあ喋ったっていても、高校の時の同級生だとか、凄く可愛い子だから諦めたほうがいいとか、そんな程度のことだけど。それとも諦めずにアタックしろって言ったほうがよかったか？」

「いや」と僕は相変わらずぼんやり言った。「どうせならこう言っといてくれればよかったのに。長谷部敦っていう男は水虫にインキンタムシに毛ジラミまで持ってるデンジャラスな男だから、半径一メートル以内に近づかないほうが身のためだってね。趣味は……そうだな。アニメのフィギュアを集めることで、部屋の押入れの中にはその手のオタクグッズがぎっしりだって、今度何か聞かれたら言っといてくれよ」

佐竹が突然カウンターの下に沈没したので、何かと見てみると、彼は必死に笑いをこらえているところだった。そしてちょうどその時やってきた客に「いらっしやいませ」と僕が会釈すると、彼もまたシャキーンと突然立ち上がり、同じように真顔で挨拶した。エロビデオを借りようとしていた客が一瞬びくついたのは、言うまでもない。

僕は午後の六時に仕事が退けると、壁に張られた店員の住所録から、絹江さんのところを素早くメモ帳へ走り書きした。意外にも彼女は僕の実家のある隣の丁目に住んでいたもので、探すのにそれほど時間がかかるとは思えなかった——そして実際、絹江さんの住んでいるマンションは、

すぐに見つかった。

鳥取北五丁目一一金城マンション……なんだか家賃の高そうなマンション名だなと思いながら探していると、まるでその通りと応答するかのように真新しい小綺麗な建物が視界の隅を掠めた。それで振り返って見ると、白亜の壁に塗り立てのような黒い文字で金城マンションとあった。

ここだ、と思った僕は、早速とばかりにドアを開け、ペンキとシンナーの匂いのするピカピカの階段を上がり、彼女の203号室を訪ねた――二十秒ほど躊躇したのちに、思いきってチャイムを押す。

「どちらさまですか？」

スリッパを引きずるような足音が聞こえたあと、そうためらいがちに問う声が続いた。

「あの、僕です」

僕ですと言っただけで、絹江さんにはどこの僕かがわかったみたいだった。鍵が解かれ、真っ白なドアがすぐ目の前で開かれる。

「いや、いいんです、ここで」中へ入るよう手で示す彼女に、僕は白とピンクの花束を渡した。

「今日はただお見舞いにきただけなので。体の具合のほう、大丈夫ですか？」

「全然平気よ」

絹江さんにはこりともせずスイーツの花束を受けると、僕に背を向けて廊下を歩いていった……これはとにかくいいから中に入れの意と解釈した僕は、スニーカーを脱ぐと、そっと絹江さんの部屋へ上がらせてもらうことにした。

左手にバスルームやトイレらしきもののドアがあり、右手にキッチンへと続く扉がある。壁にはドライフラワーが逆様に並び、額に入った手作りの小さな花束なども飾られていた……正直、ちょっと意外な趣味だなと思う。

廊下は薄暗くてひんやりとしたが、居間は山吹色の綺麗な照明で彩られていた。高価そうな硝子のキャビネットに並ぶ、イタリア製の食器や、サイドボード上に飾られた高級そうなワインボトル……キッチンは居間とカウンターによって仕切られており、壁には本格的な料理人しか使わないであろう調理器具がたくさん掛かっていた。

絹江さんの性格からいって、もう少しだらしないような感じの部屋を僕は想像していたのだが、少しばかり怖じ気づきそうになるような、洒落たインテリアの室内だった。

「……なんだか、通信販売のカタログにでも出てきそうな、素敵な部屋ですよ」

絹江さんは僕の心からの賛辞が気に入らなかったのか、からし色のソファに深く身を沈めると、不機嫌そうな顔をしてワイングラスをくゆらせている。

「あの、元気そうで良かったです。お腹痛いって聞いてたから、本当はお見舞いに食べ物を持ってくるのはどうかと思ったんですけど……ここのクレープ、本当に美味しいんです。よかったら食べてください」

僕は作りたての暖かいクレープをガラステーブルの上に置いたけど、テーブルの上にはすでにジャンボサイズのピザがあった。それもそこらへんのピザ屋で注文したのではない、手作りのピザだった。カウンターのほうを見ると、小麦粉にまみれた木製の板やのし棒などが片付けられずにまだ置いてあり、僕は少しばかり感動した。

「これ、絹江さんが作ったんですか？」

「ええ、そうよ。あたしひとりじゃ食べきれないから、長谷部くんも食べて行って。どうせ晩御飯まだでしょ？」

素っ気なくそう言い、絹江さんは花瓶にスイートピーを飾るために立ち上がった。ピンクと白のスイートピーは水色の透けるようなクリスタルの花瓶に飾られ、僕の買ってきた安っぽいクレープはウェッジウッドの皿に盛りつけられて運ばれた。

「お待ちどおさま」

絹江さんはぴったりとした白のちびTシャツに薄茶の網模様の服、そして下はジーンズという格好だったけど――多分彼女はエプロンドレスなどを着て、いかにも待ってましたというような演出をするのが嫌だったんじゃないだろうか。なんとなく、そんな気がする。

僕と絹江さんはTVを見ながら食事をし、それからとりとめのない話をした。そして食後のデザートにクレープを食べ、最後にコーヒーを飲んだ。

絹江さんはゴールデンタイムの二時間番組――『こんなことってあるんでしょうかスペシャル』――が八時五十分頃終わると、それを合図とするかのようにテーブルの上を片付けはじめ、キッチンへと立った。

「……何か、手伝えるようなことありますか？」

手持ち無沙汰にソファでぼんやりしているのもどうかと思ったので、僕はカウンター越しに絹江さんの後ろ姿へそう声をかけた。ステンレスの流しにお湯を張って洗い物をしている彼女は、どこか有能な主婦といった感じだった。実は結婚していて子供もいるのではないかと思えるくらい。

「べつに気にしなくていいわよ。それより一日中立ちっぱなしで疲れてるんだから、ソファの上で横になってたら？冷蔵庫のものを何か適当に飲んでもいいし……」

僕は、本当にそんなつもりで来たのではなかったのに、絹江さんの体を後ろから抱き締めていた。

「ちよっ……長谷部くん、悪いんだけど、あたし今日……」

「知ってます。でもいいんです。暫くの間、このままでいさせてください」

絹江さんの茶色がかかった長い髪は、とてもいい香りがした。彼女は薄化粧の今日のほうがいつもよりずっと綺麗で、いつもの厚化粧は世を忍ぶ仮の姿なのではないかと思えたほどだ。

「長谷部くん、もういい？なんだったら洗った食器を拭く係になってくれると助かるけど」

はい、と僕は素直に返事をし、絹江さんの体から離れると、白い布巾で調理器具や皿やコーヒーカップなどを大人しく拭いていった。そして業務用のオーブンやパスタの製造機、壁にかかる何に使うのかよくわからない料理器具などを、どこか不思議な気持ちで眺めた。

「絹江さんて今、いくつなんですか？」

追いだされる気配がないのをいいことに、僕は絹江さんとからし色のソファに再び落ちて着いていた――TVではバラエティ番組の司会が、くだらないジョークを連発している。

「いくつに見える？」

ジロリと絹江さんが隣の僕を一瞬睨む。

「ええと……大体二十三四ってところなんじゃないですか？」

丸型のクッションに両肘をのせていた彼女は、即座にそれで僕のことをぶん殴ってきた。

「ちょっとやめてよー！いくらあたしが店の上司だからって、余計なヨイショはやめなさいったら。もっと本当のことを腹を割って話しなさいよ。じゃなきゃ今度から長谷部くんのこと、腹黒大臣って呼ぶことにするわよ」

「確かに僕は腹を割ったら黒いかもしれないけど」殴られた頭をおさえながら僕は言った。「前から絹江さんのことは大体二十五歳前後なんだろうなって思っていましたよ。もっと上ってことなら、意外にもう三十路の山を通り越してるとか、そういうことですか？」

「バカ。いくらなんでもあたしだって、そこまで年くっちゃいないわよ。にじゅうしちよ、にじゅうしち。君よりも九つも年上なのよ」

「二十七歳ならまだ全然オッケーじゃないですか。三十になるまでに、まだあと三年もあるんだし」

「わかってないわね、長谷部くんは。君が二十一歳になる時あたしは三十で、君が三十歳になる時にあたしは三十九歳なのよ。若い子は年齢のことに鈍感でいられていいわね、なんて思うようになったらもう立派なおばさんじゃないの。ああやだやだ、これだから十代のやりたい盛りの男の子って」

絹江さんはベージュのクッションを太腿の間にぎゅっと押しこみ、前髪をかき上げている。

「べつに僕は変な意味で言ったんじゃないくて、その、なんていうか、絹江さんは実際の年齢よりもずっと若く見えるって言いたかったただけなんだけど……」

「わかってるわよ。優しいわよね、長谷部くんは。こんなオバサンにきのうもつきあってくれたんだから」

「……そういう言い方ってないんじゃないですか。確かにきのうは……」

そこまで言いかけて、いじけたように僕は口を噤んだ。これでは本当に年下扱いされても仕方がない。

「きのうは何？そうよね。きのうはあたしから誘ったんだから、何も長谷部くんが気を遣う必要なんてないのよ。じゃあ今日はどうなの？きのうと同じことをしてもらいにきたんじゃないの？」

「違います」僕はきっぱりと否定した。「ただ僕は絹江さんの気持ちを確かめるために今日はここへきたんです。絹江さんがきのうの夜にしたことは、単に僕が年上の女性に弄ばれたっていうそれだけのことなのかどうか……それに、もしそれだけだったとしたら、絹江さんだって店を休んだりなんかしなかったでしょう？」

一瞬、僕の目線と絹江さんのそれが結び合わさる——逸らしたのは彼女が先だった。

「……ねえ、この部屋のこと、どう思う？」

絹江さんはテーブルの上から灰皿をとり上げると、ヴァージニア・スリムに火を点けた。

「どうって……どういう意味ですか？僕にはとても……落ち着いていて、素敵な部屋だっていうふうに思えるけど」

「じゃあ家賃はいくらくらいだと思う？」

「多分、結構しますよね。居間の他に部屋がもうふたつあって……大体五六万は……」

「七万よ。それで車のローンやら保険のお金やら払って、あんな小さなレンタルビデオ屋の給料でやっていけると思う？副店長っていったって名前だけで、実質的には長谷部くんや佐竹くんとそれほど給料に開きがあるわけじゃないもの。まあ大体四五万くらいしか違いはないんじゃないかな。ボーナスっていったって、棒と茄子に毛が生えたって程度のものだし……想像できるでしょ？」

ええ、まあ大体は、と僕は答えた。

「じゃああたしって一体、どうやってここの家賃払ったりなんだりしてるのかしらね？」

さあ、どうやってるんでしょうね、不思議な話だ、と答えるわけにもいかず、僕は黙っていた。

「長谷部くん、正直にはっきり思ったこと言っていていいわよ。きつといやらしい親父が金をだしているに違いないって、今そう思ったでしょ？」

「べつに……もし仮にそうだったとして、それがどうだって言うんですか？たとえば――その、みんなが噂してるみたいに、絹江さんが夜は水商売やってるんだとしても僕はべつに驚きません。むしろ僕が驚くのはもっと別のことです。ここに来た時、廊下のところにドライフラワーがたくさんかけてあって、僕はそっちのほうがよく驚きでした。人は意外と見かけによらないなって……」

「ということは、長谷部くんはあたしが夜のバイトをしてるって思ったわけね？お水系の。それで、そっちの稼ぎがいいんで、こういう優雅な生活ができるんだらうって」

「あくまでも推測です。僕は今絹江さんに言われるまで、そんなことは考えもしなかったんですから」

ふうん、と絹江さんは感心してるのか馬鹿にしてるのかよくわからない表情で、煙草を一服した。鯨の形の灰皿に、トントンと軽く灰をこぼす。

「まあ当たらずも遠からずってところかな。確かにいるのよ、パトロンはね。でもその人はいやらしい下心のないあしながおじさんなの。それと母親がスナックを経営してるから、時々手伝って小遣い稼ぎをしてるのも本当。ここの家賃はスナックのママであるあたしの母親にぞっこん惚れこんでる人が支払ってくれてるの。ちなみに去年結婚したんだけど、お互いに子連れ再婚でね、向こうは中学三年生の男の子と小学五年生の女の子がいるの。そんでもって多感な年頃でしょ？こんなフェロモンの分泌量の多いおね一さんがいたんじゃ長男の教育にどうかってことで、あたしひとりだけ離れて住むことになったんだ。べつに家族の中でひとりだけ仲間外れっていうんじゃないのよ？わたしが自分からもういい歳だから離れて暮らすって言い出したの。そしたらおじさんが「じゃあ家賃くらい……」ってことで、自分の不動産の物件をひとつ買い上げたってこういうわけ」

そうだったんですか、と僕が納得していると、絹江さんは容赦のない目つきで隣の僕を睨んだ。

「ねえ、そんなにあたしって遊んでいるように見えるのかしら？あたし、ロストバージンしたのって十九歳の時なんだけど、その時も相手の男に言われたのよね、『初めてだなんて思わなかった』って。長谷部くんだってきのうそういうふう感じたんじゃない？『この人は多分こうい

うことをやり馴れているに違いない』って。そうじゃない？」

「そんなこと、一体誰にわかるんですか？」少しだけ余裕になりながら僕は言った。「さっきも言いましたけど、絹江さんの趣味がドライフラワー作りだっていうことのほうが、僕には余程意外でした。それに人間の中で魅力のあるのは多分、そういうギャップのある人なんだろうなとも思うし……ただ、僕には今もよくわからないんです。いつも店で客にも店員にも無愛想にぶすつとしてる絹江さんが本当の絹江さんなのか、今みたいに朗らかに明るく楽しそうにしてる絹江さんのほうがそうなのか。それとも……」

「それとも？」

煙草の火をもみ消すと、絹江さんは僕のほうに身を乗りだした。きのう彼女が僕にしてくれたことを思いだすと、照れて何も言えなくなる。絹江さんが僕の横顔をじっと見つめていることがわかるから、尚更。

「そうね」と一呼吸おいてから絹江さんは言った。「普段無愛想なのもあたしなら、仕事が退けた途端に明るく元気になれてしまうのも本当のあたしなんだと思うわ。それから九つも年下の男の子を車のシートに押し倒してしまえるのもあたしだし……でも誤解しないでね。あたしだっていつもあんなことしてるわけじゃないのよ。きのうのことは本当にあたしにとっても特別なことだったんだから。お陰できのうの夜は長谷部くんと別れたあと、ひとりでうじうじ悩んでしまったくらいなもの。『どうしてあんなことしてしまったんだろう』って。今日店を休んだのは、あなたにどんな顔して会ったらいいかわからなかったからよ。長谷部くんがきのうのことをどんなふうを受けとめたのかも、よくわからなかったし……一発抜かせてもらってラッキーっていう程度？それともなんでこんな女とこんな事態にっていうそんな感じ？」

「僕は……その、一応男だから貞潔だとか、そういうことにあんまり拘りを持ってませんが、女の人はどうなんですか？さほど好きじゃない男にでも、ああいうことって出来るものなんですか？正直行ってきのうシートを倒された時、僕が一番最初に思ったことは、こんな狭いところでどうやってセックスするんだろうっていうことでした。車の中でするっていうのは話としては聞いたことがあったけど、実際にはどうするのかなって……どうしてそこで笑うんですか、絹江さん」

気分を害したわけでも怒ったわけでもなく、ただ照れ隠しのために僕はソファーから立ち上がった。キッチンへいき、そこにある真っ赤な冷蔵庫からビールを二本とりだす。

「ごめんなさい。決して長谷部くんのことを笑ったわけじゃないの。ただ自分のことがあんまりおかしくて、笑いが止まらないだけなの」

絹江さんは僕から黒ラベルを受けとると、それをテーブルの上に置き、なおもお腹を抱えて笑い転げている。

僕はふてくされたような顔をして、缶のフタを開けた。

「長谷部くん。あたしね、あの時あなたに自分の中に入ってきてほしいって思ったわ。でも突然、自分はなんて恥かしいことをしてるんだろうって自覚的になってしまって、長谷部くんがなんだか嫌々あたしにされるがままになってるみたいなの、そんな気がしてしまったのよ。信じてもらえるかどうかわからないけど、あたし、本当にいつもあんなことしてるわけじゃないの。ただ、

自分から誘ったんだから、少し年上の女っぽいところを見せなきゃってそう思っただけのことなの。それにあたし——長谷部くんのこと、好きよ。女はただ好きってだけじゃなく、特別な相手にしかあんなことはしないわ」

「本当に？」

「本当に」

絹江さんは僕の両肩に腕を絡めると、ビールの泡のついた僕の唇を舐めた。それから繰り返し互いに唇を求めあううちに、ソファの上に折り重なった。頭の奥がどこか朦朧としているのに、背筋の線と局部だけが熱を持っているように熱い。

僕は絹江さんの上になると、彼女の乳房に触れたくてたまらなくなった。早く服を脱がせて、それを乱暴に優しく驚掴みにしたい。

生理中の彼女にそんなことをしてしまえば、自分をもっと息苦しく追いつめられるだけだとわかってはいたけど——それでもそうせずにはいられなかった。

「……寝室へいく？」

絹江さんがTシャツの下に滑らせようとする僕の手を止め、耳元にそう囁いた。

「でも今日は……」

「心配しないで。生理なんて十日も先の話よ」

僕は烈しく絹江さんのことを求め、彼女も僕の飢えた性欲を満たしてくれた——彼女の肉体はあまりにも素晴らしく、僕は夜が明けるまでの間に三度も交わりを要求していたけど、絹江さんは疲れた様子ひとつ見せることなく、快く応じてくれた。

「こんなに良かったの、初めてよ」

僕も、と口ごもるように答えると、絹江さんは母親のように優しく笑った——そしてまだ乱れた呼吸の僕を置き去りにして、ベッドの上に身を起こしている。

「どこへいくの？」

弱々しい、幼稚な問いかけだった。僕は内心舌打ちしたが、頭が朦朧としていてどうにもならない。

「もうそろそろ起きなきゃ。あなたは今日お休みだからいいけど、あたしは流石に二日続けてずる休みするってわけにいかないもの。時計を見て。もう五時半よ」

まだ五時半じゃないか、と僕は思ったけど、下着を身に着ける彼女を止める力はもう残ってなかった。うつぶせになったまま、ふてくされたように柔らかい枕に顔を沈めていると、不意にきのう亮子が言った言葉が脳裏に思い浮かぶ。

『これだから十代のやりたい盛りの男の子って……』

本当に、彼女の言ったとおりだった。僕は亮子のことを抱いている間中、自分のことしか考えなかった。といっても、自分は明日休みだからいいなんて思っていたわけじゃない。ただ、亮子ももう一日くらい休めばいいと、そう考えていたのだ。

——絹江亮子。

それが僕の好きな人の名前だった。きぬえりょうこ、絹江亮子、キヌエリョウコ……心の中で何度反芻しても響きのいい名前だと思った。そして僕は間違いなくこの名前の女性に恋をして

いた。不動産売買の契約書にサインするようにはなく、もっと不思議な目に見えない方法によって。

第12章

後日談としては、僕は亮子とは結婚には至らなかったが、それでも亮子は僕が二十四歳で結婚するまでの間、一番長くつきあった女性だった。十八歳から二十一歳までの約三年間……しかもそのうちの最初の二か月を除いた三十四か月あまりの時間を、同じ屋根の下で過ごした。つまり平たくいうと同棲していたということになる。市役所に婚姻届けを提出していないというただそれだけで、それ以外はもうほとんど結婚しているも同然の間柄だった。

決定的な破局を迎えることになった一番の理由、というか原因は、僕は亮子の嫉妬深さにあつたと思っているけれど、でもそんなことを言ったら、彼女にも僕に対して言いたいことが山ほどあつたに違いない。

まず同棲し始めて最初に大きな喧嘩をしたのは、及川恵のことであった。

僕と亮子が一緒に暮らしているということは、職場の誰にも秘密にしてあつたから、及川恵は僕がまだ札幌の彼女と遠距離恋愛しているものと思つていたらしい。それで、彼女がバイトを辞めることになった時、及川恵は一日だけデートしてくれないかと僕に言った。彼女にしてくれだなんて贅沢なことは言わないから、一日だけ本当の恋人みたいにおつきあいしてくださいと、両の瞳にうるうると涙まで浮かべられては断るわけにもいかなくて、僕は彼女の申し出を迂闊にも受けてしまった——といつても、僕は最初に事の成りゆきといつたものを、亮子にきちんと説明してあつたのだが。

「どうせオママゴトみたいなデートなんだから、男の友達とデートに行くようなもんだと思つてほしいんだけど」

「わかったわ」

朝御飯を食べながら無造作に亮子は言い、それ以上何か追及したりすることはなかった。

だが、僕が及川恵との退屈でつまらないデートを終えて帰宅すると、亮子はこれ以上もないくらい酒を飲んで酔っ払っていた。

しかもキッチンには、彼女が大切にしているワイングラスが幾つか割って置いてあつたし、その上居間にはクッションの綿毛があちこちに散らばっているという状態だった。

「やましいことは何もしてないよ」

亮子はグラスの中のブランデーを飲みほすと、腹立たしげな表情を隠すこともなく、僕の言つた科白を反芻した。

「<やましいことは何もしてない>ですって？」

僕は無言で頷いたけど、亮子は落ち着き払っている僕を見て、ますます怒りを募らせたようだった。

「そんなの当たり前じゃないのっ。だけど本当にそうだったのかどうか、間違いのないやり方あたしに証明してみせるっていうことはできないわよね？アツシは全然わかってないのよ、自分がどんなに無神経で鈍感な嫌な奴か。そんなに若い子がいいんなら、さっさと荷物まとめてこの家から出ていっちゃってよ」

どうしてそういう話になるのかと、僕は頭を痛めながらも、目の座った酔っ払いをなんとか懐

柔しければならなかった。

「確かにここは亮子の家で、僕は図々しくも居候させてもらってるわけだから、亮子が出ていって言うんなら、いつでも出ていくよ。でも本当に僕は及川恵のことなんかどうでもよかったんだ。そういう意味では亮子の言うとおりに、僕は無神経で鈍感な嫌な奴だと自分でも思う。だけど本当に仕方なかったんだ。泣きそうな顔で『一日だけ』って頼まれて、とても断りきれような雰囲気じゃなかったんだから」

「だったらこう言えばよかったじゃない。自分にはつきあっている人がいるから、その人を傷つけるわけにはいかないんだって。それにアツシは本当に全然わかってないのよ。一緒に暮らしてるあたしと、高校生のあの小娘と、一体どっちが大切なわけ？あの子が傷つくのは駄目で、あたしが傷つくのはいっていいの？」

「悪かったよ。本当に無神経で鈍感だった。反省する。でも本当に何もなかったんだよ。ただ映画見て食事してウィンドウショッピングしたっていうだけなんだから」

投げやりにはではなく、僕はあくまでも真剣な顔で信じてくれと言った。すると亮子の顔から憑きものが落ちたかのように陰しさが消え、少しだけ表情が和らいだ。

「ねえ、最後に一度だけキスしてください、なんて言われて、しちゃわなかったでしょうね？」

「してないよ」と僕は即答した。

「じゃあ本当の恋人同士みたいに腕を組んで歩いてもいいですか、とは言われなかった？」

「.....言われたな」

「それで、そうしちゃったのね？」

「.....してしまったな」

ほうら、やっぱりね、と亮子は何故か鬼の首をとったように喜び、僕の体にぴったりと身を寄せながら言った。

「もうひとつだけ聞くけど、もしあたしが——もちろんもしもの話だけど——誰かに一度だけでいいからデートしてくださいって頼まれて、土下座までされちゃったから、仕方なくデートしてくるけど、気にしないでね、女同士で映画を見に行くようなものだから.....って言ったとしたら、アツシはどうする？『ああそうかい、じゃあデートを楽しんでおいで』って気持ちよくあたしのことを送りだせる？」「できないだろうな、たぶん」

「それで帰ってきてから『予想どおりつまなくて退屈なデートだったわ』って言ったとしたら、アツシはあたしの言ったこと、そのまま信じることができる？」

「.....」

答えは断然否だった。それで僕は降参するように疲れた溜息を着き、ソファから立ち上がろうと思った。そしたら亮子は急に何を思いついたのか、僕のギンガムチェックのシャツを引きちぎるように脱がし始めた——ブランデーの匂いのする唇で、強引に奪うようにキスされる.....引っ張られた頭の毛が痛い。

「どうしたんだよ、急に」

「浮気調査よ」

亮子は僕のジーンズのボタンを外し、ジッパーを下ろして、トランクスの中に手を突っこんだ。そして例のものをぎゅっと力強く握った。

「痛いって」

亮子はずっと痛い思いをすればいいというように、ペニスに歯を立てたりもした。睾丸まで舐めまわされ、僕が耐えきれずに射精すると、彼女は最後の一滴まで余すことなく飲みこんでいた。

シャツのボタンを外され、ズボンを下ろされた格好の僕はなんとも決まりが悪く、しかも亮子は衣服一枚脱いでいなかったのだから、居心地の悪い思いがなんとなくそのあとも尾を引いた。

それで僕は亮子の服をなんとか脱がせて交わろうとしてみたけど、彼女は断固拒否するかのようになり、肩に触れた僕の手を払いのけていた。

「あたし、もう寝るわ」

素っ気なくそう言うと、亮子は寝酒にワインボトルを一本持って、寝室に引きこもってしまった。あとにひとり残された僕は、くだらないTV番組をリモコンで消すと、バスルームへ直行し、反省するかのように勢いよく頭からシャワーを浴びた。

そして立ったままの姿勢で髪を洗いながらこう思った。

多分、亮子が僕以外の男と友達感覚で遊びにいったとしたら、僕は面白くないだろうな。それで彼女の口から語られるデートの内容をなんでもないふりをして聞きながら、さりげなく探りを入れてみたりするに違いない。それから夜には自分のほうから誘いかけてセックスしてしまうのも、まず間違いないことだった。

我ながら配慮が足りなかったよな、と僕は思い、風呂上がりにビールを一杯飲むと、まずはキッチンから片付けることにした。居間の綿ゴミも綺麗に掃除機で吸いとり、使いものにならなくなったクッションはゴミ箱へと投げ捨てた。亮子に機嫌を直してもらうため、明日にでもちょっといい感じの新しいクッションを探してこねばならないだろう。

そして一仕事終えた僕が寝室に入っていくと、亮子は真っ暗な部屋の中で寝たふりをしていた。お互いにお金を半分ずつだしあって買ったダブルベッドの上、その一番端のほうに、拗ねたように体を寄せている。

僕は羽布団をまくりあげると、亮子のすぐそばまでいき、その引き締まった腰のあたりに手を回した。暫くすると亮子が身じろぎをして寝返りを打ち、ぎゅっと僕の背中に手を回す。

「もう一度同じことしたら、今度は絶対許さないんだから……」

わかってるよ、と僕は言い、彼女の首筋に口付け、ベッドの中にもぐりこんで彼女の胸を抱いた。

結局その夜はセックスして仲直りしたわけなのだが、僕はこのなんでもないデート事件によって、亮子の心に根深い不信感の種を蒔いてしまったみたいだった。

その後及川恵が店を辞めて、新しいアルバイトが入ってきたのだけれど、その子がまたとても可愛らしい女の子であったため、亮子は心中穏やかでないといったような様子を度々見せた。当然、その新しいアルバイトの女の子は仕事の勝手がまるでわからないわけだから、僕に色々聞いてくるのだが、亮子の目にはそうした必要最低限の会話すら、我慢ならないこととして映るみたいだった。

亮子は感情が嫉妬モードに入ると、僕のやることなすこと何もかもすべてが気に入らなくなる

らしく、そういう時は朝から一言も口を聞かないこともしばしばだった。そしてそれでいながら感じの悪い嫌な態度をとってしまった自分にも嫌気が差し、ヒステリックに物を壊すということもよくあった。

亮子の嫉妬は明らかにいきすぎではあったけれど、僕はそれを愛されている証拠として、なんとか自分を馴らそうと努力した。つまり、その90%が勘違いである彼女の嫉妬に繰り返しつきあい、自分は彼女が考えるほど世の女性から愛欲の眼差しを注がれてはいないということを、何度も力説しなくてはならなかった。

「あなたは自分のことをまるでわかっていないのよ」

その度に亮子はそう言ったけど、僕には自分のことがよくわかっていた。要するに僕は「ちょっといいな」という印象を最初相手に与えはするけれど、実際につきあってみると中身はさっぱりというタイプの男なのだ。もちろん、相手はその「ちょっといいな」という印象にかなりの長い間騙されるため、ちょっとやそつとでは僕の中身のなさに気づかない。だが一度そのことに気づくやいなや――僕は「ちょっといい」どころかサイテーの男にまで地位を転落させることになる。結局のところ亮子と別れることになったのも、そういう僕自身の人間としての至らなさが原因だったとも言えるだろう。

だが僕は僕なりにこれでも努力はしたつもりだった。なんとか最低ではない人間になろうとして、亮子を含め、つきあった女性ひとりひとりにできる限り誠実を尽そうとはしたのだ――でもやはり僕のサイテーさ加減というものは直らなかった。作家として世にその地位を認められ、結婚して安定した生活を送っている今も、僕には実はまるでわかっていない。自分が以前よりは少しはましになりつつあるのか、それともその本質はやはりサイテーな人間のままなのかどうか。

話を亮子との同棲生活に戻そう。亮子と同棲しているということは、僕がそれまで生きてきた人生の中でも、特に重要視されていい事柄だった。僕のように自己中心的で私の強い男が、まったく血の繋りのない他人と一緒に生活できているということ――これはもうなんというか、当時の僕にとっては二度と起きることのない奇跡のようにさえ思える事柄だった。

僕と亮子の間には共通する趣味のようなものがほとんどなく、お互いに愛聴している音楽のジャンルも違えば、読んでいる本や雑誌の傾向もまるきり逆方向を向いているといったような感じだった。しかしそれにも関わらず僕たちは実に馬が合い、相手の趣味や自由の領域といったものを尊重する術を、よく心得ていた。

確かに亮子は嫉妬深くはあったけれど、彼女にそれ以外で欠点があったかと誰かに問われたとしたら、ない、と僕は即答する以外にない。亮子は本当に実によい同居者であり、姉のような存在でもあり、妻のようでもあり、また二人と得られない友のようでもあった。僕はある時彼女に「もう結婚しているも同然だから、籍だけでも先に入れてしまおうか」と持ちかけたことがある。多分亮子もそれを望んでいるだろうし、僕の言葉を聞いて喜んでくれるだろうと思っていたのだが、彼女から返ってきた反応は、予想に反してあまり明るいものではなかった。

「あたし、出来ればそういうことはきちんとしたいのよね」亮子は何故か溜息を置きながら言った。「前からアツシの御両親には挨拶しなくちゃって思ってたし、籍を入れる前に結婚式も挙

げたいしね……もちろん出来れば、の話ではあるんだけど」

その時僕は初めて、彼女と自分の持っている結婚観の違いのようなものに気づいた。確かに僕は亮子に花嫁衣裳を着てもらいたいと思っていたが、でも結婚するのにいちいち親だの兄弟だの親類縁者だのを呼んで、大袈裟に祝ったりするのは嫌だったのだ。

第一、年の違いやら経済力のなさやらを引きあいに出されて、どちらの親にも反対されるだろうことは目に見えていたし——それだったらふたりきりで教会にでも行って式を挙げ、そのあとに記念として写真撮影でもしたほうがいいじゃないか、そう亮子に僕は言った。

「反対されたっていいじゃないの」キッチンで洗い物をしていた亮子は、振り返りながら言った。「あとから事後承諾みたいに『結婚しました』って言われるのは、凄く寂しいことだと思うわよ、親御さんにとってはね。まあうちは母が自分の好きな人と結婚したせいもあって、わたしがどこの誰と結婚しようと、あんまり文句言ったりしないと思うけど、でもアツシの家は全然違うでしょ。あたしとここでふたり暮らししてることも、まったく知らないわけだし……結婚したなんて突然聞いたら、絶対ショックよ。それにこういうことって最初にきちんとしておかないと、あとあと尾を引く問題でもあるしね」

「僕は家出したような人間だから、べつにいいんだよ」

口ごもるようにそう言うと、亮子は蛇口の水をとめ、僕から皿拭きの布巾をとりあげた。まったく子供なんだから、と言わんばかりにキッチンから追い払われる。

そして結婚の話はこの時以降うやむやとなってしまう、自分の経済力のなさが亮子には不安なかもしれないと思った僕は、レンタルビデオ屋の店員を辞めることにした。彼女の言うとおりに<きちんとした>正規の会社員の職に就こうと思ったのだ。

僕が生まれて初めて本採用となった会社は、小さな不動産屋で、僕はそこで営業兼事務員の仕事をやらされることになった。しかしこの不動産屋の職員はどいつもこいつも異常なくらい人使いが荒かった。職員は社長を入れてたったの七人という少人数であったにも関わらず、ひとりひとりの個性があまりにもどぎつすぎて、協調性なんてものは毎日ゴミと一緒に不正投棄してるような会社だった。

とにかく金、金、金。そのためには一件でも多くの契約をこぎつけるしかない。給料欲しくば契約をとれ、が毎日の合言葉だ。

しかも社長はとてつもない大の儉約家。ドケチどころかドドドドケチと、思わずもってしまいたくなるほどだ。その上僕をのぞいた六人のシャインズもひどいものだった。僕がもう少しで契約書を取り交わしそうだという段になって、平気で横から油揚げを奪っていく……。

「みんなそうやって競争してるんだから、長谷部くんも同じようにやり返したらいいのよ」

唯一まともだった経理事務員の美子ちゃんはそう言ったが、そういうことは僕のように気が弱くて小心な若い男にはとてもできない相談だった。結果として、僕はその不動産会社をたったの半年足らずで辞めた。

亮子は何も言わなかった。ただ「そう」と、冷たいような、哀しい声で一言いっただけだった。

その後僕は職を転々とし、ある時は日雇いの土木作業員、ある時は臨時の警備員、ある時は夜

の酒場のウェイター、またある時はクリーニング工……などなど、ありとあらゆる職種に手をだしては、実に熱心に働いた。

転職を繰り返しているからといって、僕は決して怠け者ではなかったし、むしろ逆に勤勉な働き者だったといってなんら差し支えなかったと思う。

一応ベースとなる基本の職場をひとつ持ち、あとは短期のバイトがあれば、とにかく面接に走ったものだった。それは二日～十日というきわめて短いものもあれば、三か月～半年、あるいは一年くらいのものもあって、時々その中には引き続き勤めてもらえないだろうと言われるところもあり、その度に大体僕はベースとしていた職場を切り替えてしまうのだった。

ただその際、亮子に何も相談せずひとりで決めてしまうことが多かったため、そのせいでよく喧嘩になりそうにはなった。

確かに、月の収入はそう悪いものではなかったけれど、僕のやり方はあまり要領のいいものとは言えなかったし、亮子はそのことをとても心配していた。そして僕も亮子の気持ちをわかりすぎるほどよくわかっているにも関わらず、そうした自分の転職癖を直すことがどうしても出来なかった。うまく言えないけれど『本能的な恐怖』とでもいうのだろうか。僕はひとつの職場に<落ち着く>ことに対して、何故かはわからなかったけれど、とにかく強い恐怖を感じた。ここに矛盾がある。僕は亮子と家庭的にとっても落ち着いた暮らしをしたいと願っていたが、家庭的に落ち着きたいと願う男にまず必要なのは、落ち着いた職業に就いているということなのだ。

僕は亮子との生活を大切にしていたかったし、また結婚資金を蓄えるために汗水流して労働に精を出してもいたのだが――僕のやり方は、あまりにも不器用すぎた。

ひとつの職場で安定した収入を得るよりも、バイトであれなんであれ、ふたつ以上の勤労の場を持つことのほうが、運動量的にはかなりきついものだ。二重三重の人間関係を持つことになるし、それらはいつもどこかに綻びを孕んでいることが多かった――そして僕は人間関係の雲ゆきが怪しくなるたびごとに、決定的な破綻を避けるかのように、すぐそこから身を引くことにしていた。

当時の僕にはそれがとてもスマートでクールなことのようには思えていたけど、今にして思えばなんのことはない、僕はただ単に逃げに逃げて逃げ回っていただけだったのだ。

そしてそんなふうにして、僕は亮子からも逃げた。

ある日僕はなんの前触れもなしに、一枚の書き置きだけを残して旅行へ出発した――その短い書き置きには『暫くの間、お互いに距離を置いて考えたほうがいいのかもしれない』というようなことを書いた。

でも今にして思えば、その簡潔極まりない書き置きは失敗だった。僕はもっと自分の気持ちを切々と正直に訴えた手紙を書き残していくべきだったのだ。自分の至らなさを反省したいから暫くひとりになりたいとか、誰が悪いというわけではないけれど、何故自分はこんな人間なのだろうとか、でも君のことを好きなのは本当だ、もしまだ愛想を尽かす気がなければ待っていてくれとか、そんなことを書き綴った長い手紙を。

第13章

僕は二か月半ほど東南アジア一帯を彷徨ってから帰国し、亮子にだけたくさんのお土産を買ってきたけれど、受けとるべき人はもうどこにもいなかった。

彼女は僕の知らない場所に引っ越してしまっており、部屋はもぬけの殻だった。しかも亮子が副店長をしていたレンタルビデオ屋までいつの間にか潰れており、手を尽した甲斐もなく、彼女と連絡をとることが僕にはできなかった。僕は亮子を失ったというよりは、自分の手の届かないところに体の一部を切り離されたかのように感じ、半死人のような生活をそれから半年ほど送った。そして貯金のほとんどを食い潰したのちに、一度実家へ戻ることにしたのだ。

本当は戻るつもりなど毛頭なかったのだが、僕が半病人のような顔つきで働いていたバーに兄貴が偶然立ち寄り、「帰ってこい」と背中を押してくれたのだった。

僕は罰の悪い思いで実家の敷居を跨いだのだが、家の中の雰囲気は想像していた以上に悪いものではなかった。

てっきり僕は、今の今まで一体どこをほつつき歩いていたこの放蕩息子、とばかりに、根掘り葉掘りこれまでの生活を追及されるに違いないと想像していたが――両親は予想に反して、何も詮索したりしなかった。

「三年以上もどこでどうしていたのかは知らないが、それでもなんとか自力で生活していたのだから、それはそれで立派なことだ」

というのが父・馨の見解であり、母に至っては、僕が家に戻ってさえくれれば、他にどんな理由もいらぬかのようだった。

さて、ここで僕の家族について、少しばかり話しておきたいと思う。僕の父さんは裁判所で裁判官をしており、その父の優秀な遺伝子を受け継いだ息子もまた、大学を卒業後、開発局とかいうところに就職した。

この父と息子には性格的な共通項が明らかに幾つか見られるが、僕と父、あるいは僕と兄の間には、血の繋がりが稀薄であるとしか言いようがない。

ふたりとも平等と博愛と尊敬と寛容を身に帯びているといったような徳の高い人物で、また別の意味では、至極平均的で面白味のない、つまらない面も多い堅物、と言うこともできただろう。

母の麻亜子はもっと人間らしいというか、もっと人間的に偏っていて、好みのはっきりしている人だ。彼女は僕と同じで――つまり僕はどちらかというとも母さん似なのだ――嫌いな人間をできるだけ排除し、自分が好ましいと思う人間とだけ深くつきあう傾向にある人だった。

僕には子供の頃、母が何故女優にならずに、父のように凡庸な男と結婚したのか不思議でならない一時期があり、母にこんな問いかけをしたことがある。

「ねえ、お母さん。お母さんはお化粧しなくても綺麗なのに、どうしていつもしているの？」

母は馴れた手つきでファンデーションを塗りながら、三面鏡に映る僕に向かってこう答えた。

「それはね、お父さんの前でいつも綺麗にしたいからよ」

「ふうん。でも僕はお母さんにお父さんって似合わないと思うな。どうしてもっと別の格好良い

人と結婚しなかったの？」

幼い僕があまりにも真剣にそう聞いたためか、母はアイブローを片手に笑いだした。

「決まってるじゃないの。お父さんのことが大好きで、ずっとこの人と一緒にいたいと思ったからよ。でもどうして急にそんなこと聞くの？」

ううん、べつに、と僕がもじもじしていると、母は最後に鮮やかな赤い口紅を塗り、後ろの僕に向かって優しい微笑みを浮かべた。

「アツシがお母さんのこと褒めてくれたからね、お母さん、お父さんにもお兄ちゃんにも秘密にしてることを、アツシにだけ教えてあげる。アツシはどうして自分の名前がアツシっていうのか知ってる？」

ううん、知らない、と僕は首を振った。

「アツシっていうのはね、お母さんが生まれて初めて好きになった人の名前なの。もう十年も前に死んでしまった人なんだけど、お母さん、今でもその人のことを心の中で愛してるの。正直いってね、心の中のその人には、お父さんだって勝てないの。お兄ちゃんの修っていう名前はお父さんがつけたんだけど、お母さんね、本当はアツシのことのほうがお兄ちゃんよりも好きなのよ」

僕には一瞬、母の言っていることがわからなかった。いや、論理的な意味においては、子供の頭にも十分理解できる言葉ではあった。でもうまくのみこむことができなかったというか、うまくのみこんでしまっていていいものなのかどうかわからなかった。それはわかってはいけないことのような気が、子供心にもしていた。

僕には今も、母が何故あんなことを言ったのかがわからない。もちろん母は兄と僕とを分け隔てなく平等に育ててくれたし、夕食の時に僕にはハンバーグを与え、兄にはめざし一匹というような、目に見える区別をしたようなことも一度としてない。

だから僕は母さんの言った言葉を、深い意味のない軽いものとして、子供なりに処理することにした。親にだって機嫌の良い時もあれば悪い時もある。それと同じように、兄貴よりも僕のことを可愛く思う時もあれば、その逆もあるだろうと。

僕の兄さんは恐ろしく出来の良すぎる人ではあったけど、幸いなことに、僕は彼との差といったものを、周囲からあまり強調されることなく無事成長することができていた。

その理由のひとつは、六つ年齢が離れていることもあっただろうけど、何より彼の性格の気さくさに負うところが大きかったと思う。

彼、はせべおさむ長谷部修は、明朗快活で誰からも好かれ、常にリーダーシップをとりながらも、それでいて嫌味なところがほとんど見受けられないという、とても僕と血の繋りがあるとは思えない、それはそれは立派な兄上様だった。

こんな書き方をするからといって、僕が僻んでいるだなんて思わないでほしい。僕は兄貴のことを心から尊敬しているし、とてもいい人間だと心の底から思ってもいる。だがそれにも関わらず、僕には彼が何を人生の中心点として生きているのかが、いまだによくわからなかった。つまり、僕の人生の中心点は小説を書くことであり、また秀川の人生の中心点は医者になることだと言っていると思う。でも兄さんは一土日も構わずボランティア活動に勤しんでいるような人

なのに、それが彼の人生の中心点であるようには、僕にはとても思えなかった。

このように、僕の家庭は極一般のどこにでもある普通の家庭ではあるのだが、あまりにまともすぎてどこかおかしいような、変な感じのする家庭だった。

いくら自分の馴れ親しんだ家とはいえ、三年以上も離れて暮らしていると、なんともいえないぎこちない、不器用な違和感のようなものがある。もっともそれは最初のうちだけではあったのだけれど、血の繋がった者同士がまるで赤の他人にでも対するように気を遣い合うというのは、どことなく肌寒くて奇妙なことだったかもしれない。

家族というのは一緒に暮らしていて、互いの動向をそれなりに把握していればこそどうにかうまくいくのだろうし、それに何かの大きな乱れが生じて、日々の微調整に助けられてなんとか乗り越えることができるものなのだろう。

僕は初めのうち、自分のことを部外者か何かのようにしか感じられなかったけど、でもそこにはまだ十八年間一緒に暮らした血の親密さのようなものが残っていて――母さんなど、僕が無一文のプータローとして戻ってきたにも関わらず、僕がただ食卓テーブルに座っているというだけで、他のことはどうでもいいというような態度をあからさまに見せていた。

両親には、これまで僕が三年ほど女性と同棲していたことは黙っておいたので（兄貴がそうしたほうがいと忠告してくれたので）、僕は孤独な独身者として三年半もの歳月をきゅうきゅうと過ごしたということになっていた。また仕事についても、何度も転職を繰り返し……などと本当のことは言わず、適当にごまかしておいた。

幸い、兄貴も口裏を合わせてくれたことだしね。

両親は就職のことについて特別口やかましく言うこともなく、暫く家に腰を落ち着けて羽を休めてから、ゆっくり自分のしたいことを探せばいい、と言った。しかし僕は寄食者になることだけは御免だったので、毎日足しげく職安に通い、自分の身の丈にぴったりとくる服を探すみたいに、仕事を探し求めた。

仕事をしていない者にとっては、職安に通うことが仕事みたいなもので、ハローワークではそんな人たちが入れかわり立ちかわり、毎日のように求人票を眺めている。

僕は父や母や兄の手前、今度こそは<まとも>といわれる手堅い職業に就こうと心に決めていたのだが、ふと気づくと僕の目は「ちり紙交換」であるとか「ごみ処理施設の分別作業」の仕事であるとか、ちょっとばかりやくざな方向へと向けられてしまうのだった。

結局僕はこの時、一月のうちに三社だったか四社だったかの面接を受け、そのうちふたつの会社から採用の通知を受けることができていた。そして両親と兄に相談した結果、某大手の建設メーカーに営業マンとして再就職することになった。

「営業の仕事なんてキツイし大変だし、いくらお給料がよくっても、お母さん心配だわ」

母はそう反対したが、父と兄が「何ごとも経験さ」と双子のように似たような反応を返したため、僕は家売りこむという、それまでまったく経験したことも興味もまるでない新しい仕事を開始することになった。

つまり、僕にとって「小説を書く」という以外の職業は、つまるところなんでも良かったのである。市役所の臨時職員だろうとちり紙交換の運転手だろうと、このふたつの間に差というもの

を僕は感じない。ただ今回に限って、周囲の人間をある程度納得させなければならなかったため――どうでもいいようなカラッポの職業を選んだという、それだけのことだった。

しかし、実際に職業的な作家になることができた今は、手当たり次第色々な仕事をしてきた過去の自分に対して、僕は感謝したいような気持ちでいっぱいだ。何故なら、当時はまったくそんなつもりなどなかったにも関わらず、そうした様々な経験が小説の中で実に生き生きと生かされることに繋がったからだ。

ちなみにこの大手建設メーカーの会社もなかなか面白味のある職場だったので、少しばかり多く紙枚を割いてこの会社での出来ごとを振り返ってみたいと思う。

僕が約八か月ほどの期間お世話になったこの会社では、はっきりいってどう控え目に言っても嫌な上司が支店長としてその座に君臨していた。その名は宮松重三（仮名・当時四十七歳）。

重三はとてもしゃべり嫌いな野郎で、部下のうち、誰ひとりとして彼のことを慕っていた者はなかったと思われる。しかし、僕のそれまでの経験から言わせてもらうと、どこの会社にも必ずひとは嫌われ者が存在するものなので、特別驚いたりはしなかった。もっとも入社したての頃はそんなことを露知らずにいたため、僕は宮松という小太りの上司に「よろしく申し上げます」と深々と頭を下げた。

そして他の同僚となる約四十名ほどの社員に紹介していただいたというわけだ。

僕がこの会社に入社して一番初めに感じたことは、やはり大手の企業というのは違うものなのだ、ということだった。それまで僕はバイトの肉体労働やサービス業にばかり従事してきたため、わりと責任というものは回避してこれたのである。だがこれからはそうもいきまいと思い、僕は生まれて初めて着たスーツ同様、身の引き締まる思いで入社挨拶をした。

この朝礼の時、僕はどんなスピーチをしたのだったか、あまりよく覚えていないが、とにかく極簡潔に「気合いを入れて頑張ります」というようなことを喋った記憶がある。

まあ、気合いだけで家が何棟も売れるほど、この業界甘かあね一んだよ、と内心思われていたに違いないが、そのあと僕は早速その気合いとやらを見せてもらおうかとばかりに、社訓をひとつずつ述べさせられることになった。

「ひとお一つ、我々は真心をもってお客さまのひとりひとりを大切にし……」

と僕が言うと他の約四十名ほどの社員が、

「ひとお一つ、我々は……」とやるわけである。なんとも御苦労なことであるが、この会社では社員のひとりが毎朝必ず前にでて、これをやることになっている。そしてそれが終わると今度は社員のひとりひとりが自分の今日の達成目標であるとか、予定やらを順々に素早く言っていき、最後にラジオ体操のメロディがスピーカーから流れることになるのだった。

極度の寝不足の時や宿酔いの時なんかは「やってらんねえな」とよく思ったものだ。元気なのは中性脂肪の気になる中年のおっさんだけで、彼らだけは毎日嬉しそうにおいっちにさんしと、体を動かしていたっけ。

僕がこの会社で一番最初に仲良くなった坂上祐二という男も僕と同じ口らしく、彼もまただらしなく緩慢に体を動かしていることが多かった。

支店長は「わからないことはなんでも奴に聞け」と言って坂上のことを紹介したが、宅建に合格するために勉強中という彼は、参考書を片手に「ヨロピクね」と眼鏡を上げていた。僕は今時「ヨロピク」なんて言っている人に面倒を見てもらって大丈夫なんだろうかと一抹の不安を覚えつつも、彼の真向かいの机に座り、社員バッチを胸につけ、社員手帳なるものをぱらぱらと斜め読みした。

新入社員がそんなに珍しいのかなんなのか、同僚となったばかりの社員が何人も質問攻めにしてきたが、宮松支店長に「おまえらさっさと外回りにいけっ」と一喝されるなり、人々はすぐ社外へと散っていった。九階建ての九階にある広いオフィスに残されたのは、支店長と営業部長と坂上、それから設計士が三人と事務員の女の子がふたりだけだった。

僕はしん、と静まり返った中で、住宅に関する基礎知識的なものを一から坂上に教えてもらい、その日は電話のキャッチセールスをして終わった。

「〇〇さんのお宅では、住宅のリフォームや建て替えのご予定はありませんでしょうか」

という例のアレである。僕は正直いって、この何気ない一本の電話がこんなに大変な仕事であるとは知らなかった。何しろ彼女たち一―テレフォンアポインターのパートのおばさんたち三人―は、電話帳を見て一軒一軒のお宅に順番に電話していくのである。つまり、五十音の電話帳をあから順に始めて顧客リストを作っていくというわけだ。そして青木進「あと五六年は建て替えの予定なし」だの、赤城登「去年増築したばかり」だのという気の遠くなるような作業をやっていくのである。はっきりいって「ちょうど今相談しようと思っていた」なんていう客に当たることはまずほとんどない。ただそこからなるべく詳しい住まいに関する情報を引きだし、相手が「来年くらいに……」なんて言おうものなら本当に一年後に電話をかけるという、そういう仕事である。

僕はテレフォンレディのおばさんたちと手分けして電話をかけ、顧客台帳を作成していく過程で、かなりのところ彼女たちと仲良くなった―そしてそうしておいて実に良かったと思う。僕はこの仕事を初仕事として三日間やらされたわけなのだが、そんなつもりはまったくなかったにも関わらず、その後彼女たちは耳寄りな情報をすぐに教えてくれようとしたからだ。

彼女たちの仕事は多分、外から見れば「ただのパートのおばさんの仕事」というふうに見られてしまうものなのだろう。だが僕はそれまでにいたどこの職場でも、パートのおばさんたちの仕事がいかに大変かということを見てきた。企業からは安い賃金でしぼりとられるだけ労働力をしぼりとられ、疲れて家に帰ると、夫や子供が母としての義務を果たせとばかりに待っている―その上、世間からは「たかが主婦のパート」というような、極めて低い評価しか与えてもらえないことが多い―僕はそうしたパートのお母さん方の職場や家庭に対する愚痴をよく聞かされていたので、彼女たちの気持ちはよくわかるつもりだった。時々「うちの息子は落ち着きがなく、何度も転職している」とか「うちの娘は八つも年上のよくわからない男と同棲している」といった、少しばかり耳の痛い話も聞かされなくてはならなかったけれど。

さて、それから約二か月ほどが過ぎた六月の中旬、支店の人間全員で―といっても都合がつかない者を除いて、ということではあるが―泊二日の慰安旅行に出掛けることになった。宿泊先は阿寒の温泉街にある、某有名ホテルである。

行きの貸し切りバスの中からして、もうすでに宴会ムード一色という感じだった。僕はあり余るオッサンパワーというものに気圧されながら、この漲るストレス解消パワーはいずこから来るものなのかと、訝からずにはおれなかった。多分彼らは――僕が思うに――たったの一泊でも家族や家庭の重みから解放されるのが嬉しくてたまらないのではないだろうか。

そして僕や他の家庭の縛りというもののない独身者は、親父たちが前のほうでマイクの奪い合いをしているのを尻目に、こそこそと内緒話をしあうことになった。時々、義理でマイクを握らされたり、デュエットさせられたりはしていたが。

「しかし、ムカつくよな――あのデブ公ときたら」

最初に坂上がそう口火を切った。

「さっさとどこか別の支店に飛ばされる予定はねーのかな」

「無理じゃない？だって宮松支店長ここにきてまだ一年にもならないもの。本人は早く札幌の本店に戻りたがってるみたいだけどね」

と事務員の太田里子女史。

「そういえば、モジャゴリラっていうネーミングは、一体誰がつけたんですか？」

今年大学の建築科を卒業したばかりの速水が、突然でかい声でそう聞いた。途端、

「しーっ」

とみんなが一斉に彼をたしなめる。

デブ公ことモジャゴリラこと、宮松重三支店長はマイク片手に十八番の五木ひろしを歌っているところだったので、まあ聞こえる心配はなかっただろうが。

「速水くん、声が大きすぎよ。いくら支店長がもじゃもじゃと毛深くて、ゴリラの中のゴリラみたいだからって、そんなことを本人に聞こえるように言うのはよくないわ」

「いや、だから僕はそのあまりにぴったりなネーミングを思いついたのは誰なのかなって……」

「俺だよ、俺。あんな奴は南アメリカのアマゾン支店にでも転勤になって、胸叩きながらゴリラたちと一緒にゴリってればいいと思ってつけたんだよ。まったく、中年野郎どもときたら、あんな下手くそな歌に拍手喝采なんかしやがって……みっともねえったらないよな」

「宮松支店長ってさ、奥さんと子供に逃げられて、札幌からこっちに転勤になったって噂だけど、無理ないわよねえ。会社であれだけ専制君主ぶってれば、大体家の中でもどんな感じが、想像つくもの。メシがマズいとかお茶がぬるいとか言っっては、星一徹ばりにちゃぶ台ひっくり返してんのよ、きっと」

いえてる、いえてる、と里子女史の相棒であるもうひとりの事務員、遠藤絵理子が頷いた。

「毎朝ヤクルト売りにくる、綺麗なおばさんいるじゃない？なんだか支店長、あの人に気があるみたいなのよね。毎朝ヤクルトだのジョアだのたくさん買っては、あたしや里子に一本ずつくれるの。あれってもしかして一種の口止め料なんじゃないかしら。営業員どもには絶対口外するなよって……」

その時僕は、やっぱりみんなもそう感じていたのかと思った。朝礼が終わると同時に、二十数名いる営業マンはみなそれぞれ営業活動のため外へ出ていく。しかし僕は新入社員ということもあり、色々なことを覚えるため、最初のうちは社内にいることが多かった。それでほとんど毎

日のように支店長からミルミルだとかフルールとかを奢ってもらったりしたのである。

毎日朝礼が終わった頃にヤクルトを売りにくる沢田さんは未亡人で、とても綺麗な人だった。そして時計の針が十時を指す頃になると、支店長は決まって「ヤクの売人は今日もくるかな、今日もくるかな」と落ち着きがなくなるのである。まるでヤク切れの中毒患者みたいに。

僕が初出勤の日にそんな様子の支店長を訝しく思い、「ヤクの売人ってなんですか」と坂上に小声で聞くと「いつものことだから気にするな」と同じように小声で返されたのを覚えている。支店長の机のそばにいた設計士が「またはじまったか」というようにスチール製の定規で肩を叩いていたことも。

正直って僕もモジャ公……じゃなくて、支店長があんまり沢田さんと馴々しく話をしているのを見ると、今にケツでも触りだすんじゃないかと心配になった。ああいうあからさまな態度を勤務中部下に見せつけるのもどうかと思ったしね。

「……あんまり喋らないわよね、長谷部くんて」

みんながひとしきり支店長の悪口で盛り上がったあと、里子女史がぼつりと言った。里子さんはこの会社に勤めて七年にもなる、ベテランの事務員である。ちなみに二十七歳で、眼鏡を外すとちょっと可愛い。

「支店長の悪口ばかりでつまらない？」

「いや、そんなこと全然ないですよ」慌てて僕は弁解した。「みんなが言ってることは、常日頃から僕も感じてることだし……ただ次にマイクが回ってきたら、なんの曲を歌おうかなって思っただけです。僕、レパートリー少ないから」

本当は歌のことなんか、これっぽっちも考えてはいなかった。正直って僕は――これが社会人のおつきあいというやつかと、少しばかり疲れていたなのである。腹の底ではクソミソに嫌な奴としてこきおろしているにも関わらず、中年親父どもは自分の上司に拍手喝采を送り、若い連中は義理のおつきあいとしてクールにマイクを握っている。僕はこれが大人になるということなのだと思い、急に虚しくなっていた。これの一体どこが慰安旅行なのだろうと。

僕は宴会場の一番隅のほうに身を寄せながら、何故みんながあんなに酒を飲んで酔いたがるのかが、よくわかるような気がしていた。

せめて酒くらい思う存分飲んで酔わなければ――あるいは酔ってるふりでもしていなければ――やってられないからだ。

確かにこの慰安旅行なるものを純粹に楽しんでいる者も数名いたに違いないが、そうした人は世渡り上手の薄っぺらなお調子者だけだったろう。そしてそういう人でもいなければ、こうした宴会というものは盛り上がらない。

まあ昼間あったパークゴルフ大会はそれなりに楽しいものでもあったので、こうした慰安旅行がまったくの無意味だと否定する気は僕にはないのだが。ただ、支店長のヘボショットに対していちいち拍手しなくてはならなかったのには、いささかうんざりさせられた。

宴会も中盤に差しかかってくると、ホテルの大広間は騒然とし、誰が何を喋っているのか、意志の伝達というものが次第に不明瞭になっていく。

「次はおまえが歌えよ」

「いや、俺が歌う」

とマイクを押しつけあったり、奪いあったり……きちんと順番通りに歌っていたのは最初の何人かだけだ。かと思えばビールが足りないぞ！と酔って大声で叫ぶ男がいたり、ホテルの仲居さんに馴々しく絡む男がいたり……見苦しいことこの上ない。

僕は坂上や速水、里子女史や遠藤さんと固まって飲んでいたのだが、坂上の奴はすっかり出来上がってしまい「うけけけ」ともののけみたいに繰り返し何度も笑っていた。しまいにはビールとコーラ、それに寿司のシャリとネタを突っこんで、わさびと醤油を入れたものを箸でかき混ぜ、速水太郎に「飲め！」と勧める始末だった。

「飲めませんよ、こんなもの」と速水は冗談ぽくかわそうとしていたが、坂上の目は本気だった。

「なにいっ！俺の酒が飲めねえっていうのか、てめえは」

里子女史と遠藤さんは止めるでもなく、事態を楽しそうに静観している。

「飲めませんてば、本当に……」

坂上が隣の木ノ下に目で合図すると、木ノ下だけでなくそのまた隣の上川までが、がしっと速水の体を押さえつける。まったく、悪い連中だ……ただ黙って見ている僕も同罪だったかもしれないけど。

結局速水はゲロまず飲料を無理やり半分ほど飲ませられ、ぐほごほと苦しそうに何度も咳をしていた——見かねた僕が彼の背中を撫ぜると、速水は目尻に涙を浮かべていた。ところが坂上は同情するでもなく、悪魔のように「うけけけ」と笑うばかりなのだった。

「大丈夫か？」

僕が里子女史に手渡されたハンカチで口許を拭いてやると、彼は本当に今にも吐きだしそうな仕種をした。それで僕が速水を連れて宴会場をずらかろうとしていると……

「アイムソーリー、アイムソーリー」

寝ぼけた外人みたいな営業部長が、何故か僕にぐりぐりとマイクを押しつけてきた。一体なんなんだと僕は思ったが、ふと気づくと宴会場の誰もが僕に期待の眼差しを向けている。

こうなりゃヤケだと思った僕は、速水の身柄を里子女史と遠藤さんに預け、カラオケを歌うことにした。しかも曲目まですでに決まっているときてる。

スマップの『青いイナズマ』

イントロが流れてくるなり舌打ちしなくなっただが、まさかここで違う曲にしてくれとフェイドアウトするわけにもいかない（何故かわからないが、そういう雰囲気だった）。

それでまあ適当に画面を見ながら歌っていると、さらに支店長が第二マイクを持ちだしてきて、横でゲッチューゲッチューと叫びだす始末……僕は歌いながら頭が痛い、本当にそう思った。

『青いイナズマ』を歌ったあと、何故か親父連から口笛つきのアンコールがかかり、僕はスマップのヒット曲を続けて二曲も歌わされるはめになった。そしてこれでお役目御免とばかりに僕が宴会場を出ようとする、その背中にも「よう兄ちゃん、もう一曲歌え！」というよくわからない無責任な声がかかった。

僕はやれやれと思いながら廊下を歩き、ひとつ風呂浴びたあとは、もう誰がなんといおうと一足先にぐっすり眠ろうと思った。同室者の速水は里子女史に連れられて先に部屋へ戻っていたし、具合の悪い彼に安眠を妨げられる心配はまずないだろう。

そして僕が大浴場の湯槽に思う存分つき、上機嫌で脱衣場へ上がっていくと――そこには宮松支店長のゴリラのように毛むくじゃらな姿があった。

「なんだ、もう上がるのか」

奴のその言葉にゾツとした僕は、会釈だけしてさっさと服を着ることにした。彼の顔にはあからさまに「背中を流してもらおうと思ったのに」という表情が浮かべられていたからだ。これ以上何か言われては大変と思った僕は、脱兎の如く脱衣場をあとにした。

「あ、先輩。さっきはどうもありがとうございました」

のれんをくぐりざま、浴衣姿の速水と擦れ違った。

「……もう大丈夫なのか」

「はい。部屋に戻って里子さんからオロナミンCを飲ませてもらったら直りました」

「そっか。よかったな」

僕は速水の肩を軽く叩くと、スタコラサッサとばかりにその場をあとにした。でもあとにして思うと、せめて彼に「ゴリラが浴槽に浸っているから要注意」くらいの忠告はすべきだったかもしれない、と少しだけ後悔した。それにしても、どこまでもついていない奴である。

僕は自分に与えられた部屋に戻ると、ベッドの上に大の字になって倒れ伏した。部屋はいわゆる和洋室というやつで、ベッドがふたつと、狭い床の間に布団が二組敷いてある。要するに、ベッドでも布団でも、どちらでもお好きなほうで寝てくださいというわけだ。

「そんな、女とくるんじゃなきゃ意味ねーよ」

部屋に入るなり、坂上がそうぼやいていたのを思い出す。

女か、と僕は思ったが、疲れてそれ以上何も考えられなかった。とりたてて何かしたというわけでもないのに、どうしてこんなに疲れているのだろう。

そして僕が泥のように眠ってしまいたいというより、むしろ泥そのものになってしまいたいと思っていると、隣の部屋のほうからどっと大きな笑い声が響き渡ってきた。うるせえなあ、と思いつつも文句を言う気力もなかったのも、ホテルの薄い壁をうらめしく思いながら、僕は布団を頭まで被った。

ところが今度はけたたましくドアをノックする音が響いて来、僕の安眠を妨害した。やっとうとうとしかけたのにと腹立たしく思いながら、鍵を開ける。

「ひどいですう、先輩っ」

速水は湯気が立っていてもおかしくないような赤い顔をして、室内に飛びこんできた。

「どうしてモジャが風呂場にいることを教えてくれなかったんですかっ」

悪い悪いと僕が寝ぼけ眼で頭をかいていると、彼はギロリときつい眼差しで睨みつけてきた。「モジャ公の垢こすりと背中磨きにつきあわされたのは、みんなみんな、みいいんなっ、先輩のせいですっ」

悪かったよ、と僕が速水に背を向けて寝入ろうとしていると、

「ちょっと先輩起きてくださいよ」

そう言いながら、彼は今度は僕の体を思いきり揺さぶった。

「しかもそのあと、サウナに三十分もつきあわされたんですよ。他にたくさん人がいるのに「おまえは童貞か」とか、そんなことまで聞かれて……これって立派なセクハラだと思いませんか!？」

ああ、そうだな、と僕はしぶしぶ起き上がりながら、投げやりな感じで返事をした。

「先輩、きちんと聞いてくださいよっ」

わかってるよ、聞いてるよ、とまたいい加減な返事をして、ベッドの背もたれに僕は体をもたせかけた。

「だけどさ、べつにそのくらいいいだろうよ。強制的に股間に手を持ってかれて、イチモツを握らされたってわけじゃないんだから……」

「先輩っ。なんてこというんですかっ。そんなことをもしされたら、僕は裁判所に訴えますよっ」

そうだろうとも、というように僕は何度も頷き、枕元のテーブルにあった坂上の煙草に手を伸ばした。一本くらいわかりやすまい。

「僕がドーティだからって、それがなんだっていうんですかっ。そのことで僕が誰かに迷惑かけたとでもいうんですかっ。『AVのチャンネルを見てもいいけど、料金はおまえ持ちだからな』なんて、見るとも言ってないのに、どうしてそんなこと言われなくちゃならないんですかっ」

僕は煙草を一服すると、溜息を着くように煙を吐きだした。

「もしAVが見たいんなら、斉藤さんたちの部屋にいつて見てくればいい。さっき宴会の席上で、「それだけが慰安旅行の楽しみだ」ってあの人言ってたからな」

そんなことはとんでもないという顔を見ると、速水は洗面所に急いで引っこんでいった。多分これ以上僕に何を話しても無駄だと思ったからだろう。あるいは、いい子は歯を磨いて早く寝るべしと幼稚園の頃教わったのを思いだしたのかもしれない。

その夜、坂上はどこへ行ったのか、深夜になっても戻らなかった。どうせ奴のことだからべろんべろんに酔っ払って、どこか別の部屋で隅のほうにでも転がされているのだろう。だからさして気にもしていなかった。

ところが夜半、どこかから人の啜り泣く声が聞こえてくると、僕は坂上の不在がやたらと気になった。ホテルの一室で自殺した死者の霊が……などという古くさい怪談の一節を思いだし、小心な僕はベッドの中で身を震わせた。

しかし、どうもそれが生身の人間のものに間違いないということがわかってくると、僕は体を起こして隣のベッドを見、それから床の間の布団に目を走らせた――誰もいない。

啜り泣く声は極めて近いところでしているようなので、僕はその声を辿り、思いきって押入れの戸を開けた。

「……びっくりするだろう。何してるんだよ、こんなところで。まさかひとりでドラえもんごっこをしてたなんて言うんじゃないだろうな」

「違いますよお」速水は浴衣の袖で涙を拭い、「先輩を起しちゃいけないと思ったんです」と、しゃくり上げながら言った。

流石にそこまで言われてしまうと、僕も速水がいじましいように思え、彼に心ゆくまで話をさせてやりたいような気持ちになった。

速水の手にしてきた常夜灯のスイッチをオフにし、室内の照明を点けることにする。

「僕、もうこんな会社なんか辞めようと思うんです」速水は押入れから転がるように布団の上へ落ちてきた。「僕、これでも一応は設計士なんです。それなのにみんな、僕をパシリか何かみたいにこき使うし……一階の自販機まで行って煙草買ってこいとかコーラ買ってこいとか、なんで僕ばかりそんなことしなくちゃいけないんですか。先輩、僕にだって一応、仕事に対する夢とか熱意ってものがこれでも入社当時はあったんです。でも周りを見てるとどんどんそういうものがかき消えていきました。だってみんな、マイホームに夢なんてこれっぽっちもかけてないんですから。とりあえず数字さえ上がればそれでいいですよ。より良い設計、より良い建築なんて本当は誰も求めてなんかいない。苦情のでない最低限の規格を守って、あとはできるだけいいこと言ってそれを購入者に高く売りつける……そういう利潤第一の企業体質みたいなものが、僕は本当に嫌で嫌で仕方ないんです。僕は本当は、お客さんに釘一本損をさせないような、そういう仕事がしたくて設計士になったのに……」

そうかそうかよしよしと、僕は可愛い子犬でも慰めるような気分で、速水の頭を撫でた。

「でもさ、それはやっぱり理想論なんじゃないかって僕は思うよ。速水の気持ちはよくわかるけど……釘の一本にまで拘ってたら、とても定められた納期までに仕事は完了しないし、当然ながら大口の仕事も回ってこないことになる。そしたら北日本ホームは従業員を大幅に削って国の失業率をアップさせるだけだろう。確かにうちの会社には職人氣質の大工さんみたいな人はひとりもないよ。それは認める。でもこういうシステムが間違いなく社会には必要なんだ。北日本ホームが業界二位の地位を保ち続けようと思ったら、これは仕方のないことだと僕は思う」

「……それはつまり、僕に会社辞めろってことですか？」

「いや、そうじゃなくて」

僕は恨みがましい眼差しで横から睨まれて、思わず立ち上がった。冷蔵庫からビールを二本とりだすが、速水はビールは飲まないと言う。

「マウンテンデューかジンジャーエールにしてください」

はいはいと言いながら僕はマウンテンデューを投げて渡し、再び布団の上に胡坐をかくと、缶ビールを一口飲んだ。

「つまりさ、速水は多分うちの会社には向いてないってことなんだ。特注の仕事だけを請け負ってるような、そういう会社に就職すべきだったんじゃないかな。でもだからといって僕は、速水に退社を勧めてるってわけじゃないよ。まだ入社して一か月にもならないんだからさ、もう少しここにいて盗める技術は盗んでおいたほうがいいと思う。それでもう北日本ホームからは学べることも教えられることも何もなかったら、転職したらいい。僕には設計の詳しいことなんかはよくわかんないけど、まあこの腹黒い連中の仕打ちに一年も耐えられれば、他のどんな会社でだってやっていけるだろうってそう思うよ」

「先輩……」

ごくありきたりの、世間一般並の話をしただけなのに、速水は何故か涙を流し、鼻水まで垂らしていた。仕様がなと思った僕は、ティッシュで彼の鼻を拭いてやった――彼は浴衣の袖で、涙と鼻水を一緒に拭っていたから。

「先輩。良いアドバイス、ありがとうございます。正直って僕は、先輩がいるからこそ毎日この会社にきてるようなものなんです」

あぶない奴だな、と僕が苦笑していると、速水は晴ればれとした顔をして立ち上がり、僕の寝ていたベッドに深く潜っていった。ここにもし坂上がいたとしたら、あいつもしかしてホモっ気があるんじゃないだろうかと僕に耳打ちしたのはまず間違いないだろう。

まあなにせよ、彼の単純な頭が納得したのならそれでいいと僕は思い、ビールの缶を握りつぶし、煙草を一本吸ってからそのまま布団の中で眠りについた。そして妙に冴え渡った頭の中で、速水の持つ傷つきやすい純粋さのようなものが少しだけ羨しいと思った……もっともその後、北日本ホームをやめることになったのは速水ではなく、実は僕のほうだったのだが。

第14章

それからさらに三か月後、僕は職場の雰囲気にもすっかり馴れ、仕事のほうもかなりのところ順調だった。まず営業部長が契約のひとつを僕にとらせてくれ、住宅の売買契約の一通りの流れのようなものを教えてくれたのだが、そのあとも僕はテレフォンアポインターのおばさんから有力な情報を仕入れることによって、なんの苦もなく契約を次々と得ることができていた――よもや自分にこんな隠れた営業的才能があるとは、と自分でも驚いたぐらいだ。

しかしそうした表面的にはうまくいっている状態というものに、僕は非常に抑鬱的なものを感じていた。それは顧客にぺこぺこ頭を下げて神経が磨り減るとか、そういうことではなく――要するに、僕の魂に深く根差す問題だった。つまり、僕は高い基本給に加えて、家の契約を一軒とるごとに結構な報奨金なるものまで得ていたのだが、それらの目に見える金や数字といったものに、僕はなんの感慨も抱くことができなかった。

もちろん契約がとれることは嬉しい――家族が新築の建売住宅を訪れ、「なんて素敵なの！」と目を輝かせたり、「これがわたしたちの家になるの？」と子供たちがはしゃぐ様子を見るのも好きだ。お客さまの資金にあったプランを用意するのもすっかり馴れたし――僕はなんとか（人生なんてこんなものさ）と自分の心を騙そうとした。

そうだ。これが僕の＜人生＞なのだ――僕は喜びはしゃぐ家族の影に、父親の悲しみのようなものを見た。そして彼は多分将来の自分の姿なのだと思う。確かに、マイホームを持って一国一城の主となることは、男にとってもロマンであるかもしれない。だが彼は家のローンの終わる定年までを抵当に入れ、それまで何があろうと自分の心を騙し続けて働かねばならない。

僕は契約書に父親が銀行印を押すのを見るたびに、心の中ではこう思ったものだ。（本当にこれで、いいんですか）と。ところが表面上の僕はといえば、にこにこへらへらしながらここは角地で日当たりのいいよい場所だの、二三年後にはとてもこの値段では購入できなくなっているでしょうだの――適当なことばかり並べ立て、相手の気が変わらないように、変な難癖つけられないように笑顔で防備していると、まあこういったわけなのだった。

といっても、僕が会社を辞めることになった直接の原因は、そうした矛盾に耐えられなくなったというような小難しいことではまったくなく、ただ単純に人間関係が原因だったのだが。

「モジャってなんであんなにもじゃもじゃしてんのかな」

と木ノ下。

「おまえ、それだからこそモジャって呼んでるんだろが」

と上川が笑いながら応じている。

しかもそこへ噂のモジャ大王が給湯室へやってきたからさあ大変！

「モジャってなんのことだ？」

何も知らぬ毛深き君は、そう部下にのたまうた。

木ノ下と上川は紙コップからコーヒーを吹きだしそうになり――給湯室の横で住宅資料のコピーをとっていた僕を、無理やり巻きぞえにした。

「こいつ、こんなに爽やかな顔してるんすけど、実は胸毛が生えてるんですよ。それでついた仇名がモジャ」

上川の横で木ノ下が一生懸命何度も相槌を打つ。そして僕に無言で同意せよ、とばかりに眼差しで訴えてくる。

「こいつ、顔のひげは大して濃くないでしょう？ところがどういいうわけか、胸毛は濃いんですよ。まあショーン・コネリーやニコラス・ケイジほどではないんすけどね」

――それは本当のことだった。慰安旅行の時に上川と胸毛やすね毛、脇毛なんかの話をして盛り上がったことも覚えている。

「そうか。長谷部も胸毛が生えてるのか。ここだけの話だけどな、男は毛深ければ毛深いほど、精力のあるのが多いんだ。頭髪の薄い男ほど、精力絶倫である場合が多いっていう話もまああるようだがな」

そう言ってがっはっはと笑い、宮松支店長は自分のデスクへ去っていった。

確かに宮松支店長は全身くまなく毛深い御仁ではあられるのだが、それに引きかえ頭頂部は薄かった――つまり、彼は自分がいかに精力絶倫であるかということに自慢して去っていったと、まあこういうわけだ。

「精力絶倫だってよ。それにしたってあんなゴリラみたいのに抱かれたがる女なんているのかね」

「いるわけねえだろ。ヤクルトの沢田さんだって、奴のムンムンしたフェロモンには辟易してるってのが一目瞭然だもんな。まったく、気づいてないのは本人だけなんだから」

ふたりは宮松支店長が遠ざかるなり、げらげらと笑いだした。無理やり話に巻きこんだ僕に、あやまるようなこともなく。

何故かはわからなかったけれど、僕はその時から、宮松支店長の悪口を言うのはもう金輪際やめにしようと思った。確かに宮松支店長は、この上もなく嫌味なところのある上司ではある。成績の芳しくない部下に対して、いやらしく肩を揉みながらプレッシャーをかけたり、かと思えば別名叱責部屋と呼ばれる物置に部下を連れこみ、何時間も人生訓を垂れてみたり――確かに人の上に立つ器としてどうかという人ではある。それでも彼とセックスしたがる女性がいるかどうかなんていう話は、あまりにもプライベートな話だ。僕だって影でこそこそ「あんなダサイ、胸毛のある男に抱かれたがる女なんていないよな」なんて偶然にも立ち聞きしてしまったら――人間不信に陥るだろうことはまず間違いない。

僕は社内の営業マンの中に、図体だけでかい、幼児的な大人がたくさんいるのに気づいていた。そして自分だけは絶対にそうなりたくないと思っていたのだ。

この当時、僕には<つきあっている>と呼んで差し支えない女性がいたけど、それでも彼女はあくまで「彼女」であって、僕にとって恋人とは呼びがたい人だった。

べつに相手が既婚者だったとか、道ならぬ恋をしていたとか、そういうわけではない。

相手の女の子は僕よりひとつ上の二十三歳で、「二十五歳くらいまでにできれば結婚していたいな」とぼんやり考えているような、いわゆる普通の平凡な結婚を志願している女の子だった。

けれども僕は彼女に対して――本当にずるいことだと思うけど――心の中である線引きをして

いた。

彼女は確かに「彼女」かもしれないけど、僕にとって結婚を考えられるような「恋人」ではありえないと……その上僕には会社のビル内にとっても気になっている女の子がいて、僕はその娘に対しては「もし彼女とつきあうということにでもなれば、間違いなく結婚することになるだろう」と、ある種の確信さえ抱いていたのだった。僕が名前も知らない〈彼女〉のことが気になりだしたのは、入社間もなくのことで、階段を急いで降りていた時に、肩と肩がぶつかったというのがその出会いだった。

彼女は箒とちりとりを手にしていて、ぶつかった拍子にぼったりと倒れた箒を、僕が拾い上げて――そしてぼちりと両の瞳と瞳が会ってしまったのだ。

(なんて可愛い女の子なんだろう)

僕はすぐにそう思った。

もちろん向こうは

(まあ、なんて格好良い人なの)

なんてことはこれっぽっちも思わなかったに違いないが、そう悪くない印象が彼女の中に残っているといいな、とそんなふうに僕としては思わずにいられなかった。

そう、彼女はその品性慎ましい美しさにも関わらず、まるで灰かぶりのシンデレラでもあるかのように地味な掃除服を着、毎日毎日くる日もくる日もビルの階段やら手すりやらを一生懸命磨いているのだ。

正直って僕は(なんでこんなに可愛い子が……)と思った。どう見ても年の頃は二十代前半で、その美しさをもってすればモデルや女優も夢じゃないというほどの娘なのに――何故汗水流して似合わぬ掃除なんてしているのか、とても訝しく思った。そして大いに好奇心を刺激された僕は、以来エレベーターを使わなくなったと、まあこういったわけだ。

僕は彼女がビル内の共用部分を清掃している姿を見るたびに、今日も仕事をがんばるか、そんな気になっていた。ところがある日――僕は彼女の目の前でモジャの奴をぶん殴ってしまうのである。精力絶倫のゴリラが僕の清らかな乙女のケツを撫でたとか、馴々しくその口臭を近づけていたとか、そんなことが理由ではない。正直って僕にもいまだによくわからないくらいだ。何故あの時、モジャの奴をぶん殴ってしまったのかが。

でも物事の外側をまず分析するとしたら、僕は自分の恋する乙女が丹念に集めたゴミをモジャがふんずけたという、ただそれだけの理由によって、自分の上司を殴り飛ばしたことになるのだろう。

そのクリスマスも近い十二月の小雨の日――僕が寒さに震えつつ外回りから戻ってくると、さえぐさ三枝さんが階段の上から下までをどこか几帳面な手つきで掃いているところだった。僕は煙草の自販機にさりげなく隠れて、彼女の灰かぶり少女のような美しさをそっと盗み見た――彼女はどこかミステリアスに沈黙しながら、ひたすら健気に掃除をし続けている。

そして僕が今はふたりきりだと思い、彼女に声をかけるべきか否かと迷っていると、上からドタバタと忙しない足音が響いてきた。それは体脂肪燃焼のため、くだりはエレベーターを使わな

いという上司デブゴンの足音で――彼は美人に目のないデブであったが、この時は何故か三枝さんの纏う美にまったく気づかなかったようだ。そして彼女が踊り場のところに集めたゴミたちを、無神経にも粉微塵にふんずけていったのである。

その時、僕の心の内に、瞬発的に憤怒の情が巻き起こった。煙草の自販機の影から飛びだすなり――モジャの奴に向かってなんの加減もなしに右の拳を見舞ってやる。

上司デブゴンは部下の不意打ちに鼻血を流しつつ、何が起こったのかわからないという顔をして、その巨体を床の上にだらしなく投げだしていた。

僕は驚いた表情の三枝さんとばっちり目が合ったのだが、まるでそのことを合図とするかのように、恐ろしい勢いでロビーから出ていくことしかできなかった。

自分は一体なんということをしてしまったのかと後悔する気持ちより、自分が偉大なことを成し遂げた英雄のような、誇らしい気持ちのほうが遥かに強かった。それで僕にはとても、自分が悪いことをしたというようには全然思えなかったのだ。

――とはいえ、会社のビルを勢いよく飛びだした僕の足どりは、次第次第に重いものへと変わっていき、自分の家に帰り着く頃には、足の先に十トンばかりの重しがないのが不思議なくらいだった。

モジャ公に手をついてあやまるにせよ、このまま会社を辞めてしまうにせよ、どちらにしてももう一度会社に顔を見せねばならぬことを考えると――灰色の雲がもやもやと脳味噌のあたりにかかるのを感じた。

そしてどうやっても拭い去ることのできない憂鬱感の中で、僕は自分の部屋に引きこもり、今後の身の振り方を考えていた。

(モジャの奴をぶん殴ってしまった以上、もはやあの会社に僕の居場所はない)

それが最終的な結論ではあったけれど、会社を実際に辞めるには、色々と面倒な手続きを踏まなければならない。それとそのことを家族に説明せねばならないという面倒くささが――何より僕を憂鬱にさせた。

僕はその夜、「具合が悪い」と嘘をついて――ある意味では本当のことだったけど――家族とは夕食を共にしなかった。

父と兄の間には、できるだけ一緒に朝夕の食事を共にするという習慣があるようだったけど、そうした家族としての模範回答みたいなものが僕は苦手だった。だから毎日営業の仕事で遅くなるといっては、わざと食事の時間帯をずらしていた。あの三人と食卓に着いていると、どうにも糊ががっしりときいたワイシャツを着ているようでいけない。

政治経済の動向なんて僕はあまり興味がないし、新聞で入手した情報なんかをそらんじてみたところで、彼らの頭の中にインプット済みの情報を無意味に書き替える程度のものでしかない。

母はふたりの間のやりとりをうまくとり持ち「あらそうなの？」とか「怖いわねえ」と女らしくワイドショー的な見解を示せばいいだけだけど――僕は同じ男としてそういうわけにもいかないんだよな。結局、何か塩味のきいた言葉を話すようなこともなく、やりきれない思いで箸を置くことになる。

まあ高校生くらいの時まではふたりの話を黙って横で聞いてればよかったのだが、社会人とな

った今では「そんなことも知らずに営業の仕事が勤まるのか」と暗に非難されているような気分になることが、時としてあった（もちろん僕の被害妄想ではあるのだが）。

僕は結局モジャの奴をぶん殴ってから三日続けて会社を無断欠勤し、両親と兄には病人のふりを装い続けることにした。クビならクビで会社のほうからそうお達しがあるはずだったし、もし母が会社からの電話にでてクビの事実を知ったとしても、話す手間が省けてちょうどいいくらいにしか思っていなかった。しかし流石に四日目の朝にもなると、僕は次第に焦りはじめるようになった。

少なくとも三日以内には会社の誰かから連絡があって――坂上からでも速水からでも――モジャ公大怒りだとか、とにかくもう一度会社にこいとか、何かそうしたリアクションがあるものと僕は思いこんでいたのだ。もしかしたら「モジャ公をよくぞぶん殴ってくれた！」と賛辞の言葉さえ聞けるかもしれないと思っていた――けれども何もない。つまり、モジャを敵に回した僕とは、誰も関わりを持ちたくないということなのだろうか？みんなあんなにさんざん奴の悪口を叩いていたにも関わらず？

僕が段々と人間不信の沼に沈みこもうとしていると、インターホンの鳴る音がした。母が外出中なのを思いだした僕は、階段を早足で下りてゆき、玄関のドアを開けた――訪問販売が何かだったら、とっととお引きとり願おうと思った。

「こんにちは。具合どう？」

ドアの向こうにいたのは太田里子女史で、彼女は会社の事務用鞆を持ちながら、スーツ姿で立っていた。

「いや、どうってということもないけど……」

「みんな心配してるわよ。三日も無断で休むなんて、辞める気でないんじゃないだろうなって。まああたしは社員一同の代表として、宮松門左衛門から長谷部くんの様子を見てこいって仰せつかったわけなんだけど」

そういうことか、と思いながら中に入るよう僕は里子女史に促した。

「ううん、話はすぐ済むから玄関先でいいの。長谷部くん、宮松支店長のことぶん殴っちゃったんでしょう？あ、でも心配しないでね。そのことはあたし以外、誰も知らないことだから。支店長はわけのわからない連中に絡まれて喧嘩になったなんて言ってたけど、今日の朝、こっそりあたしだけ叱責部屋に呼びだして、本当のことを話してくれたの。『何故かはよくわからんが、突然ぶん殴られてな』とか言って笑ってたわ。日頃の不満あつてのことだろうから、今回のことは大目に見るし、何もなかったような顔して堂々と会社にでてこいって。それでももしどうしても辞めたいっていうことであれば……」

里子女史は鞆の留め金を外すと、書類ケースを取りだした。

「これ、雇用保険のカードに年金手帳。あと盲判として使わせてもらってた三文判ね。これを長谷部くんに返して、辞表届けもらってこいって言われたの。一応、事務的な手続きとしてはね」

「つまり、建前では辞めるなど言いつつ、本当のところは辞めろってこと？」

里子女史は玄関マットのところに腰かけながら、少し困ったように笑った。

「誰も長谷部くんに辞めてほしいだなんて思ってないわ。むしろ長谷部くんに殴られて良かったみたいよ、あの人は。まあ速水くんが支店長の頭を叩いたのも、多少は効いたのかもしれないけど……」

「なに？何かあったの？」

口許を押えて笑いをこらえる仕種の女史に、僕は話の先を促した。

「きのうね、また宮松支店長がぐだぐだと文句を言い出したの。まあ月末報告の前にはいつもなることではあるんだけど……それで図面を引いてた速水くんに当たり出したのよ。『おまえはいいな。家を実際に建てることもなく、売ることもなく、ただ定規で線さえ引いてりゃいいんだから』って。そしたら速水くん、どうしちゃったのか、いきなり怒りだしてね、『設計士の仕事を馬鹿にするんですか』って支店長に詰めよったの。そ、それで……」

「それで？」

もうこれ以上はこらえきれないとばかりに、里子女史が吹き出す。

「なんだよ？ひとりで笑ってないで早く言えよ」

「ぼ、『僕だって僕だって一生懸命仕事してるんだあっ！』て言いながら、速水くん、支店長の頭モノサシでビシバシぶっ叩いちゃったのよ。しかもあの製図用の硬い定規で」

僕は一瞬呆れ、そして次の瞬間には彼女と一緒に大爆笑した。それはおかしい。完全に完璧におかしい。その上僕には面白すぎるくらい、ふたりのその時の情景をまざまざと思い浮かべることができた。

「ねえ、だから長谷部くんも戻ってらっしゃいよ。なんだか宮松支店長も心を入れかえたような節があるし、みんなも長谷部くんのは風邪か何かで休んでるだけだって、そんなふうにしかなってないんだから」

ひとしきり笑ってから、里子女史は真顔に戻るとそう言った。でも僕はその場で辞表届けを書き、それに三文判で印を押すことのほうを選んだ——それが僕が三日三晩考えた末にだした答えだったから。

「なあ、少し上がっていかないか？もう少しでお昼休みだろ。面白い話を聞かせてくれたお礼に、何か御馳走するよ」

「そうしたいのは山々だけど」と里子女史は肩を竦めた。「これから銀行回りをしてJRに切符も買いにいかなきゃならないから」

「そっか。残念だな」

「わたしも、長谷部くんが会社辞めるの、ものすごく残念よ」

「ありがとう。お世辞でも、そう言ってもらえると嬉しいよ」

「お世辞じゃないわ」

里子女史はもう一言何か言いかけ、ふと左手首の時計を見た。そして僕の辞表届けをファイルに入れると、革の鞆の中へそれをしまいこんだ。

「離職票とか源泉徴収票なんかは郵送で送るけど、あと何か必要なものがあったら遠慮なく言ってね。それと机の中のもので、何かプライベートなものってある？」

「いや、特にないよ。どうせ契約絡みの書類以外、大したものは何も入ってないから」

「そう」と、最後に里子女史はどことなく名残惜しそうな顔をした。「じゃあまた、何かあった

ら連絡するわ」

「ああ。それじゃまた」

その後僕は以前と同じようなフリーターの生活に戻り、以前と同じようにボロ安アパートでひとり暮らしを始めた。

北日本ホームに勤めていた頃つきあっていて彼女とは、北日本ホームを辞めるのと同時に、何故か別れることになっていた――彼女の極めて退屈で一方的な別れ話によると、自分に一言の相談もなく突然会社を辞めたのが納得いかないと、まあそういうことらしい。そしてこのような男とつきあっていてのでは自分の婚期は遅れるばかりと言わんばかりに別れを切りだされ、僕は内心とてもほっとしていた。

自慢じゃないけど、僕はこれまで自分のほうから女性に別れを切りだしたこともなければ、「つきあってほしい」なんて言ったことも一度もないのだ。ただなんとなくその場の成りゆきでつきあい始め、そしてなんとはなしに自然消滅するということが多かった。

だけど二十三歳という年齢を迎えたこの時、僕は生まれて初めて自分から熱烈なアプローチを女性に仕掛けようとしていた。モップを手に、毎日飽きもせずクリーム色のタイルを磨いていた三枝さんのことが、どうにも忘れられなかったからだ。あの娘ならきっと自分のすべてをわかってくれる――何故だかそんな気がした。

もちろん、彼女は僕が思い描いているような女性では全然ないかもしれないし、それにあれだけ可愛いことから、彼氏のひとりやふたりいても、全然不思議ではないかもしれない。だけど、僕にとって<振られる>ということはそれほど怖いことではなかったし、もしかしたら良い返事を聞けるのでは、という期待感のほうが遥かに大きかった。

そこで、僕は彼女の勤めている清掃管理サービスの会社に電話をかけ「中学の時の同窓会のこと、三枝さんと連絡をとりたいのですが……」と大嘘をついた。そして聞くからに無愛想極まりない事務員はこう対応した。

「そんな人、うちの会社にはいませんよ」

ガチャン、プープーパー……。

これは僕があとから聞いて知ったことだけど、三枝さんには蒸発したお父さんの作った借金如山とあったらしい。この時僕は事務員の怠慢な態度に腹を立てただけだったが、清掃管理サービスの人はおそらくそこらへんの事情をよく知っていたのだと思う。

北日本ホームのビルに三枝さんを訪ねていくわけにもいかず――モジャ公やその他煩しい元同僚に会う危険性が極めて高いため――僕は悶々とした日々を幾日か送ったあと、彼女とつきあって結婚するという計画を断念した。しかし運命による不思議な星の巡りあわせというべきか、彼女のことを諦めた翌々日に、僕は深夜の居酒屋で三枝さんとばったり再会することになる。

強く心に思い願ったことは必ず叶うというが、これがそれなのかと僕は思ったくらいだ。

その日、僕はバイト先の仲間ふたりと仕事帰りに飲んでいたのだが、そのうちのひとりが「自

分が今物凄く惚れこんでいる女の子がいる店」に連れて行ってやると言ったのだ——もはや説明するまでもないと思うが、そいつが「惚れこんでいる女の子」というのが三枝さんであり、彼女はスナック『胡蝶蘭』のママ、三枝純子のひとり娘だった。

雑居ビルのあまり広いとはいえない一室に『胡蝶蘭』は店を構えており、その紫色のネオンの下には、いつも花が飾られているようだった。アンティークなガラスの花器に生けられた、ドラセナやアルストロメニア、バラやガーベラ、スターチス……男でこれだけ花に詳しい奴はそういまいと思いながら、僕は渋い光沢を放つ、櫛の扉に手をかけた。

扉を開くなり聴こえてきたのはしっとりとしたジャズのピアノ演奏で、そのピアノを弾いているのがなんと、かの三枝蘭子本人だったというわけだ——といっても、僕は彼女のことをすぐに掃除服を着た三枝さんと同一人物だと認めたわけではなかったが。

店は全体に小ぢんまりとした印象で、店内の照明や壁に飾られている絵画に、特にこれといった高級感があるでもない。しかしそれにも関わらず、『胡蝶蘭』の雰囲気は極めて良かった。落ち着いた照明に映える桜色のレザーソファや、ニスを塗ったばかりといった感じの艶やかなカウンター、壁にかかるルノアールの贋作みたいな絵画……流れるのはピアノの生演奏。

客はカウンターに二名と四つあるボックス席のひとつに三名。しかもそのうちの誰もが声を大きくすることなく、小さな囁くような声で話をしながら、酒を楽しんでいるようだった。

僕はバイト仲間のウェイターである大崎や横山と一緒に、ピアノのすぐ隣にある席へと通された。よくわからないが、おそらく大崎は常連なのだろう。着物姿のママは目配せをひとつしただけで、こちらに挨拶するでもなかった。

「リクエストは何がいいかな」

ピアノの演奏に集中している三枝さんはにこりともすることなく、鍵盤を柔らかく弾き続けている。そして曲が終わってから初めて、大崎に優しく微笑みかけた。

「大崎さん、今日のリクエストは？」

まるで自分の女を自慢するかのよう、大崎が僕の太腿を蹴ってよこす。僕は頭の中であまり騒がしくない上品な曲を三秒ほどで探した。

「……じゃあ『ムーン・リバー』なんて弾けますか？」

いいわよ、というように彼女が頷いた時——向こうのはっとしたような気配がはっきりと伝わった。それで僕も今目の前にいる素敵な女性が、実は灰かぶり娘であることに気づいたのだが——だからそれで何がどうしたということもなかった。そのあと三枝さんは僕のグラスにウィスキーを注ぐ時も、知らぬ存ぜぬといったような態度で、今年の六月に結婚する予定だという話を、大崎としていたから。

「いわゆるジューン・ブライドってやつか。羨しいねえ、相手の男が。新婚旅行には行くのかい？」

「ううん、そんなのナシよ。だって相手は貧乏歯科医師ですもの」

「そうかなあ。歯医者ってやつは儲かるだろ？少なくとも食いつぱぐれるってことだけはないだろうしさ」

「それがそうでもないのよ」三枝蘭子はウィスキーボトルにマジックで名前を書きながら笑った。OZAKI。「今歯医者っていっぱいあるでしょ？彼の勤めてるデンタルクリニックも結構や

ばいらしいの。もし潰れたら退職金なんてでないと思うってそう言ってたわ」

「へえ……そういえば思いだしたけど、南大通りにある檀齒科って知ってる？あそこの歯医者 of 院長、経営にいきづまって首吊り自殺したらしい。遺書にさ、自分の保険金を従業員みんなで分けて退職金にしてくれて書いてあったんだと。何もそこまでって思うけど、真面目な人だったんだらうなあ、たぶん」

「うちの彼も残念がってたわ。檀院長はとても勉強熱心な、感じのいい人だったのにな」

ふたりの間に一瞬しんみりとした空気が流れた時、櫛の扉から新しい客が現れた。こちらも常連といった感じの、スーツ姿の中年男ふたり組——三枝さんはママに手招きされると「ちょっと失礼します」と向こうに挨拶しにいった。

「どうだ？いい女だらう？」

べつにおまえの女ってわけじゃないだらうと思いつつ、僕と横山は首肯した。僕以上にシャイな横山は、大崎と三枝さんの話を聞きながら、黙ってグラスを傾けるのみで——いや、僕も外面的な反応は彼とまったく一緒ではあった。ただ違うのは、僕が彼女の美貌にむしろがっかりしていたことだらうか。

「あれほどの女はそういるものじゃないよ」大崎は得意気に続けた。

「店の入口に花が飾ってあるだろ？あれは毎日蘭子ちゃんが店の始まる前に自分で生けてるんだ。ピアノは弾けるし可愛いし……その上、夜だけじゃなく昼も働いてるんだぜ？さっきも言ったけど、蒸発した父親の借金をかわりに返済してるんだと。いやあ、泣かせるったらないよなあ」

横山は感嘆の眼差しでマドンナの姿を追っていたけど、僕はもううんざりした。彼女が僕に対してまったく知らないふりをしたからではなく——いや、それも多少はあるのだが——とにかく三枝蘭子の支配力の強い空間にいることに、これ以上我慢できないものを感じた。

「……悪いけど、もう帰るよ」

へ？と寝ぼけたような顔をしている大崎を尻目に、僕はスタスタ歩いて櫛の扉へと向かった。健気で控え目な美人を演じる三枝蘭子には、もはや少しの興味も抱くことはできなかった。

僕は決して、ロマンスの当てが外れたから怒っていたわけじゃない。ただ彼女は——僕に永遠に忘れられない人の影を思いださせた。そしてそれこそが多分、僕が灰かぶり娘に恋をした理由だったのだ。

——三枝蘭子は山田真莉絵にそっくりだった。

具体的に髪型がとか、顔の輪郭がとか、目鼻立ちが、といったようなことではない。彼女の醸し出す雰囲気や仕種、そういった何もかもが三枝蘭子はマリエにそっくりだった。

多分、マリエが十六歳という若さで死なずに生きていたとしたら、おそらく三枝蘭子のような女に成長していたことだらう。僕が彼女のことを隣で見ていて感じたのは、つまりこういうことだった——<何故彼女が今ここに生きていて、マリエは死ななければならなかったのか？>

確かに三枝さんの人生も、これまで並大抵ではなかつたらう。アル中の暴力夫に忍従する妻とその娘——しかもその男は経営していた水産会社の借金まで押しつけて蒸発。母娘は昼となく夜となく働いて借金を返済する日々……でもやっとそんな苦勞が報われて、今年の六月、娘は幸

せなジューン・ブライドに。夫となる人は、彼女に毎月給料の半分の半分を寄こして、これで少しでも借金を返すようにと励ましてくれた人……こんなにいい話って、そこらへんにそう転がっているものじゃない。

でも僕はこうも思うのだ。じゃあマリエは？と。

マリエだってあの年齢にして既に、幾つもの大変なものを背負っていた。なのに彼女は幸せになって、マリエは――何故僕のマリエは、不幸なまま死ななければならなかったのだろう？

幾つもの飲み屋が軒を連ねる末広で、僕は路地裏の暗がりには転がりこむと、そこでおえっと吐いた。

吐瀉物と一緒に涙までこみ上げてきて、何故だかたまらなく惨めな気持ちだった。

(マリエが幸せになれなかったように、僕も多分、幸せになんかなれない)

酔って感傷的になっていたせいもあるだろうが、僕は本気でそんな気がしていた。おそらく三枝蘭子に与えられた条件も、マリエに与えられていた条件も(そして僕に今現在与えられている条件も)、実際にはみんな同じだったのだ。でもそんな中で三枝蘭子は、うまく蛹から蝶に羽化することができた……でもマリエは羽化してたったの半日か一日で死に、僕に至っては蛹の殻をみっともなくぶらさげたまま、どうにかこうにか今日まで生き延びているような、そんな感じがした。そして、同じ条件の元に生まれながら何故そんな<違い>が生じるのか、僕にはその<違い>がたまらなく憎らしく思えて仕方なかったのだ。

僕が三枝さんのことを逆恨みし、自分とマリエの運命を感傷的に嘆いた夜から三か月後――僕はウェイターとして働いていた店で、バーテンダーの見習いに昇格していた。そしてその店に深夜、高校時代のクラスメイトである福住と田村がやってきた。

高校を卒業してから暫くの間は、電話のやりとりや行き来のあった連中だった。

「しかし、びっくりしたよなあ。会社の接待でこの店にやってきたら、長谷部が『お待たせしました』なんて澄した顔して、ビール運んでくるんだから」

田村は今、某生命保険会社で営業の仕事をしている。ほんの数日前にも僕の鄙びたアパートへやってきて、自分の会社ではこれが一番損をしない商品だと言うと言い、生命保険の話をやめたとしていった。

「毎月そんなに払う余裕ないよ」

再三に渡ってそう断りの文句を述べるも、まるで効き目なし。

「いやいや、そんなことはないでしょう。未来の大作家が」

揉み手を繰り返す彼に詰め寄られた僕は、結局半強制的に一番安い（しかも掛け捨ての）生命保険に加入させられた。

「でも本当に驚いたよ。新聞や雑誌でアツシの顔を見た時は。しかも掲載されてる写真は間違いなくアツシのものなのに、名前が長谷川聡になってるだろ？人違いかなと一瞬思いもしたけど、実家に電話してみたらおふくろさんが「ペンネームなんですよ」なんて笑っててさ……まあ、とにかくにもおめでとう。未来の大作家に乾杯！ってとこだよな」

ふたりは僕の作ったカクテルの試作品――そのミストグリーングラスをカチン、とぶつけ合っている。

実際のところ、僕はもっと自分の名前と異なるペンネームにしておけばよかったと、少しばかり後悔した。そうすればあんに大騒ぎにならなくて済んだかもしれない、と。

紫雀社という出版社の設けている新人賞に僕が入選した時、実家の電話は丸一日滝のように鳴りっぱなしだったという。僕は誰にも小説を書いていることを打ち明けていなかったのも――秀川だけは別として――賞を受けることが確定した時も、母にさえ連絡しなかった。

そして母は最初「人違い」としてそれらの電話に対応していたという。ところが実にお節介好きの親戚が、雑誌の切り抜きを手にとってきて、こう言っただけ。

「どっからどう見ても、これはあっちゃんじゃないか！」

そこで母もようやく納得し、早速出来の悪い息子が書いた処女作を三十冊ばかり購入すると、親戚中に配って歩いたと、まあこういったわけだ――まったく親バカだと思う、我が親ながら。

「でもさ、なんでまた長谷部はバーテンダーの仕事なんて続けてるわけ？俺が長谷部ならシェイカーを振る仕事なんかとっとと辞めて、執筆活動に専念するけどなあ」

「俺も福住と同じこと考えるね。自分がアツシの立場だったとしたらさ。昼は小説書いて夜はバーテンダーなんて、どう考えてもあまり割のいいライフスタイルとは言えないじゃん」

カウンター席に座るふたりは、ポテトやピザを摘みながら互いに頷きあっている。一体何人の

人間がこれまで、彼らのように同じ質問をしたことだろう。

「作家なんて、世間一般の人が思ってるほどいい商売じゃないと僕は思うよ」

グラスを磨きながら後ろの棚に並べ、その他皿やスプーンなどを所定の場所に素早く片していく。

「それに自分が文章書いて食っていけるかどうかなんて、全然自信がないんだ。僕が思うに作家ってというのは『書きたくて仕方ない人間』と『仮に書きたくなくても書かざるをえない人間』に大別されるものだと思う。僕にはまだよくわからないんだよ。自分がそのうちのどっち側の人間なのかっていうことがね」

福住はふうん、と言って頷いたが、田村は僕の言葉を単なる謙遜として受けとめたのだろう、一瞬嫌な気どり屋を見るような目つきをした。

「そういえばさ、来月クラス会があるだろ？高校の時の。結局全部で何人くらい出席するわけ？」

「えーと、今のところ返事がきてるのは二十七、八人かな。そのうち出席に丸してるのが二十人くらい」

「何かと大変だよな、幹事やるっていうのも。あれだろ、突然ルパンから電話がかかってきて『長谷部は三年の時、後期の委員長だったから是が非でも幹事になってもらう』って、半強制的に頼まれたんだよな？」

「まあね。本当は断りたかったし、僕の元に同窓会の葉書なんてのがきたら、用事がなくてもまず欠席に丸をするね。秀川が釧路にいさえしたら、奴に押しつけるところだけど、そういうわけにもいかないし」

溜息を着くようにグラスに息を吹きかけていると、テーブル席のほうから注文の声がかかった。オーダーストップの時間がとくに過ぎてることを告げると――実はあと十分ほどで閉店の時刻だったので――その二十代半ばくらいのカップルは、石畳みの階段を手を繋ぎながら上っていった。

「そろそろ店じまいか。じゃあ俺らも帰るとするか」

「そうだな」

田村と福住は切株のような椅子から立ち上がると、「またな」と言ってふたり同時に手を上げていた。

そして僕がやっと帰ったかと思い、内心溜息を着いていると、

「長谷部くんも一躍有名人だね。ほとんど毎日切れ目なしに誰か彼か知りあいの人やってくるんだから」

マスターが厨房ののれんをくぐって出てくるところだった。腰に巻いたエプロンで手を拭きつつ、いつもの人好きのする笑顔を浮かべている――厨房のほうは掃除が完了したってことだ。

「本当は嫌なんですよ、僕はこういうの。小説家なんて文章を書かなければただの人なんだってことが、みんなわかってない」

カウンターやテーブルに椅子を逆様にして乗せ、僕はモップを片手に掃除を始めた。マスターはというと、スピーカーから流れるジャズの曲に合わせて、おどけたように指を動かしている。

「どうだろうね、長谷部くん。僕としては客が多くきてくれてウハウハ状態なわけだけど、やっ

ぱり君は文章というものを書くべき人間なんだと思うよ。『書きたくて仕様のない人間』と『書かざるをえない人間』のちょうどその中間とでもいえばいいのかな。僕は職業柄、これでも人間を見る目はあるほうだと自負してるんだけど――君がうちに初めてきた時、なかなか面白い好青年が入ってきたって僕は思ったんだよね。その上カクテルの作り方が実にユニークだ。例えば、十人の人間にまったく同じ分量の材料を与えてカクテルを作るとするね？そうしたら長谷部くんはどうなると思う？」

バケツにモップを突っこんで絞りながら、店長は一体何が言いたいんだろうと僕は思った。

「至極平均的な味になるんじゃないですか」

「ブーッ、それは違うね。大違いさ。それぞれシェーカーを振った時の気持ちは表れるものなんだよ。僕はこれまで何回か長谷部くんの作ったものを飲ませてもらってるけど、これが実によくわからないんだ。うまいとかまずいとか、そんなことは問題じゃないんだね。『一体なんだこれは』っていった感じさ。それで僕はその謎がいつか解けるかもしれないと思ってずっと待ってたわけなんだけど、やっとわかったよ。長谷部くん、君は小説のことを考えながらシェーカーを振っている、そうだろう？」

「まあ、たまにはそんなこともあったかもしれないけど……」

カクテルと小説の間に、一体なんの因果関係があるんだと僕は思ったが、マスターの言いたいことは大体察しがついた。

「長谷部くん、僕が何を言いたいかわか、勘の鋭い君にはもうわかっているね？」

「……早い話がクビってことですか」

「ピンポン」

店長はまるで両の指が波にさらわれでもするようにピアノの演奏を締め括ると、最後に口笛つきで拍手し、セロニアス・モンクに賛辞を送った。

――こうして僕はバーテンダー見習いという職を失い、小説一本で食べていかざるをえない道へと追いこまれたわけだ。

翌日、僕は正午過ぎに目覚めると、自分の住んでいる部屋の素晴らしい惨状をまず目の当たりにした。まあ毎日飽きもせず眺めざるをえない光景であるとはいえ、まったくもってひどい。テーブルの上の、何日前に食べたのか飲んだのかもわからない、正体不明の固形物やゼリー状のもの……三つある部屋はどこも足の踏み場もなく「早くわたしたちを片付けて！」とか「わたしを磨いて綺麗にして！」と物のほうで叫びださないのが不思議なくらいだった。

台所に立つと、三角コーナーがなんともいえない異臭をたたえ、洗い物が山を築いて迫ってくる――バスルームを開けるとそこには衣類の群れが、汗の匂いとともに洗濯籠からはみだしている有様だ。

(とりあえず、もっと人間らしい生活をしないと。小説のことはまたそのあとだ)

深い溜息とともにそう考えた僕は、まず三つある部屋を徹底的に大掃除することにした。

ここに引っ越してきてから一度も干したことの無い布団をベランダに干し――部屋に散乱するゴミはゴミ箱に分別して投げ、本や雑誌やCDなどはそれぞれ所定の棚に片付ける。それから掃

除機をかけ、洗濯物を干し、台所では山と積まれた食器類と格闘した。

こうして、大掃除を約三時間半ほどでスピーディに終わらせた僕は、パンと目玉焼きとコーヒーという食事をとりながら、スミスのセカンドアルバムを聴いた。

(そうだな。明日は海岸線に沿ってドライブでもするか。そして砂浜に車を停めて、そこで小説を書くことにしよう)

気の早い僕は、原稿用紙と筆記用具、それから画板を用意し、さらに本棚から資料にするための本を何冊かとりだした――実は書きたいことなら山ほどあった。でも何故だかいつまでもその気になることができず、時が満ちるのをずっと待っていたのだ。

そしてその時僕はふと、自分が今手にしている本が、とっくに図書館の返却期限を過ぎているのに気づいた。なんと借りてから半年以上も経過している。部屋中片付けてキッチンとした気分になっていた僕は、いつもと違ってこういうことではイカンと思い、すぐに図書館へ本を返しにいこうと思った。時刻は四時十分前。閉館時間までには余裕で間に合うはずだった。

僕がパソコンに向かっていて図書館員の前に五冊の本を置くと、彼女は軽く目を上げて「返却ですか？」と聞いた。

頷いていると「ご苦労さまでした」とにっこり笑って本のバーコードをスキャンしている――人好きのする娘だな、と僕は思った。年の頃は大体僕と同じくらいか1コか2コ年上といったところか。

僕は賞を受賞するまでわりと足しげく図書館に通っていたため、二階の一般閲覧室や三階の郷土資料室の職員なら、大体のところ顔を見知っていた。でも彼女のことは初めて見る顔だな、と思った。多分司書の研修生か臨時職員、でなければ今年の四月に入ったばかりの正規の図書館員に違いない。

僕はパソコンの前に腰かけると、自分が探している本のキーワードを入力して、検索のボタンを押した。十数冊現れた項目の中から、目当ての本を二冊見つける――そしてメモ紙にその番号を書き記した。

――星野道夫の写真集。

それが僕の探している本だった。僕はアラスカの探検家、星野道夫さんの大ファンなのだ。彼の写真集や著書を何冊か自分でも持っているけれど、まだ手にとったことのないものが二冊あると、たった今パソコン上で明らかになっていた。

しかし、メモした数字とアルファベットの棚を見ても、僕の探している本は見当たらなかった。誰かが借りているのなら、貸出し中の赤い文字がパソコン上に提示されるはずだし――おかしいなと思いつつ、僕は棚の隅から隅までをしつこく探し続けた。

「あの、すみません。この本なんですけど……」

ワゴンに積んだ本を整理中の職員に声をかけてみた。先程カウンターにいた感じのいい女性が、紙切れの数字とアルファベットを見て首を傾げる。

「なんていう本ですか？」

「イチュニックっていう本と、表現者っていう本なんですけど……」

「ああ、星野道夫さんですね。こちらになります」

彼女はブラウニングの詩集を手に持ったまま、図書カードの木棚の上を指し示した。そこには星野道夫フェアと称して、彼の本や写真集がブックエンドに幾冊も立てかけてあった。

この時、僕は彼女のことがなんとなく気に入って――一目で恋に落ちたとか、そういうことではなく――結局図書館が閉館になる六時まで、二階の一般閲覧室で本を読み耽っていた。

窓際の椅子のひとつに陣どり、時折彼女が脇を通りかかるのを、じっと観察する。彼女はカートに山と積まれた本を整理整頓するのに忙しく、僕の盗み見る気配にはまったく気づいていない。

白いブラウスに黒のタイトスカートという格好の彼女は、名前を『紅林』と言うらしい。ミッフィーの赤いエプロンの胸に、バッチでそう名前を留めてあった。

背は多分155センチくらいで――あとで彼女から157センチと訂正されたけど――肩のところで切り揃えられた髪が、彼女の細身の体を余計ほっそりを見せているような印象がある。

そして大江健三郎の本を読んでいる僕のそばを、彼女が通り過ぎようとした時――通路の向こうから、突如として猛突進してくる老女の姿があった。

「すみませんけどっ」もはや逃がさないとばかりに、おばあさんは紅林さんに詰め寄っている。「ぎょうじゃにんにくの本を探してるんですっ。なんとかあれを探してもらえないでしょうかっ」

「ぎょうじゃにんにく……」

紅林さんは理解できない呪文を唱えるように、口の中で何度かそう繰り返した。

「もしかして北海道新聞社のですか？」

「そうです、そうです。それがわたしは欲しいんですっ」

おいおいばあさん、ここは貸し出すだけで、あんたのものにはならないんだぜ、なんてクールに思いつつ、僕は微笑ましい気持ちになりながら、ふたりのやりとりを見守った。

一分の隙もないような、身綺麗な着物姿のばあさんは、目当てのものが手に入るなり実に喜んだ。よほどその本を手に入れたくて仕方なかったのだろう。

「わたし、この本が欲しくて今日、本屋を何軒も回ったんです。でもどこもうちには置いてませんなんて、冷たく言うんですよ。そしたら息子が図書館にでも行ってみたらどうだということで、来てみたんです。ああもう、本当に良かったわ。灯台もと暗しってこういうことを言うんですよ。実はわたしこのそばに住んでいて……」

紅林さんは嫌な顔ひとつすることなく、老婆の話に最後までつきあっていた。白髪頭のばあさんは、最初一種異様なほどのオーラを漲らせていたが『ぎょうじゃにんにく』の本が手に入るなり、いつも通りのまともな人間へと戻ったようだった。僕はぎょうじゃにんにくが何かこの時まったく知らなかったので、ばあさんの頭のネジ加減を大いに疑っていたのだが。

「ありがとう、ありがとう」

老女は繰り返しそう紅林さんに礼を述べ、幸せそうに『ぎょうじゃにんにく』の本を着物の胸に抱いて帰っていった。

そして僕はギョウジャンニクってなんのことだろうかと、最後まで疑問に思いながら、閉館間際に七冊ほど本を借りて図書館をあとにした。

夕焼け空の中を、ポロアパートまでシビックを走らせていると、夕闇が目に見えて濃くなっていき、やがてそれは完全な闇の支配下へと移行していった。僕は住吉町にある『川柳荘』というアパートの自分のねぐら――201号室にまで辿り着いた時、ふと何故かある種の既視感に襲われて、あたりの薄暗がりを見渡した。うまく説明できないが、誰かの視線をはっきりと感じたような気がした。暗闇の中に潜む絶望感や虚無感といったものが人格を持つ影のように、僕のことをじっと見つめているような気がする。

(これは、一体なんだ?)

たぶん僕は夢の中で、今自分がしているのとまったく同じシーンを演じたことがあるはずだった。でも深く思い出すということができない。それで僕は軽く頭を振ると、<彼ら>がどうやら僕に訴えたいらしいこと――それを原稿用紙に書き表わしていくことにした。

何故かはわからないが面白いように筆は進み、こうして僕は受賞後第一作目となる小説『ルリビタキの泉』を書き始め、一週間ほどで完成させた。

初夏の爽やかな風吹きぬける、ある金曜の夜――釧路市内の某ホテルで、聖城高校第四十七学期卒業生、三年D組の同窓会は行われることになっていた。

僕は足取りも重く、嫌々ながら幹事としてその同窓会の現場へ、誰よりも早く到着しなくてはならなかった――ロビーで出席者たちと落ち合い、全員揃っているかどうか、名簿をチェックしなくてはならないからだ。

僕の心が楽しみにしている唯一のことといえば、久しぶりに秀川に会えるという、ただそのことだけだった。秀川とは高校卒業後も、彼が釧路へ帰省するたびに遊んでいたし――僕は自分が引っ越すたびにその住所を、彼にだけは必ず教えていた。一年ほど前から互いにパソコンを所有するようになってからは、Eメールのやりとりが白熱化していて、僕は秀川から実に適切な小説の批評を受けたりしていた。

紫雀社という新進の出版社が設けている賞で僕が入選した『ナイト クヴァスト』も、彼の適切な助言があればこそ完成した作品だった。確かに書き上げたのは僕でも、精神的なある部分においては秀川と二人三脚で書いたともいえる作品だった。彼は僕が一次や二次、そして最終選考に残ったということを伝えるたびに、自分のことのように喜んでくれ、最後に入選したことを伝えた時には――Eメールではなく、携帯電話にすぐ電話がかかってきた。

それと秀川といえば、もうひとつ気にかかっていることが僕にはある。それは秀川の彼女のことだ。名前を松本清美さんということと、看護学生で十九歳だという以外、秀川の彼女について僕はほとんど何も聞かされていない。実習で知りあったと言っていたが、僕はその「松本清美」さんについて、彼の口から直接情報を仕入れたくてたまらなかったのだ。

考えてみると、僕は秀川と女の話というものを一度もしたことがなかった。いや、橘のことは昔、厳しい注意のようなものをされたことはある。彼女が秀川に僕のことをしょっちゅう相談していたためだ。札幌の彼から何度も電話がかかって来、振るつもりなら態度をはっきりさせろと迫られた。

その橘美樹は短大卒業と同時に結婚して、名字が立川に変わっている。相手は研修先で知りあった保育士ということだったが、旦那が実家の酒屋を継ぐことになったため、今は九州のほうに

いるらしい。

その話を同級生の八木沼から聞かされた時、僕は正直いってほっとした。それと美樹が同窓会には欠席すると、葉書に丸をして送ってきたことに対しても。

釧路リバーサイドホテルのロビーで、僕が入口の回転扉を眺めつつ煙草を吸っていると、突然後ろから背中を叩く者の手があった。振り向くと、その手の主はルパン……もとい、エルヴィス＝モミアゲ＝プレスリーこと、館山浩幸先生で、彼は相変わらず素敵なモミアゲの持ち主だった。

「いやあ、おまえは変わらんなあ。詰襟の学生服を着たら、今でも高校生で通用するんじゃないか？新聞で長谷部の写真を見た時、名前が長谷川聡になってたけど、先生にはすぐわかったよ。いやあ、おめでとうおめでとう」

「はあ、どうも」というような気の抜けた返事をしていると、館山先生はいかにも体育教師らしい馴々しさで、僕の肩を叩いた。

「まさか長谷部がああいう手合いのものを書くとはなあ。先生は昔から体育バカだから、文学なんて苦手だったんだ。でも長谷部の書いたものは頑張って最後まで読んだよ——いや、誤解しないでくれよ。長谷部の書いたものが面白くないからがんばらなきゃならなかったんじゃない。実際、中盤を過ぎてからはほとんど一气読みだったよ。一匹狼の騎士、クヴァストが死ぬところ、感動的だったなあ。一国のために命を賭すけれど、誰もその暗躍については知らないんだ。しかもラストが最高に泣かせる。自分のことは早く忘れて、違う男と幸せになるよう、烏に言伝てを頼むんだもんなあ。それでその言伝てを聞いたお姫さんが泣き崩れるところで物語は終わる……いやあ先生は感動したなあ、うん」

僕は真正面から紋切り型に賛辞され、穴があったら入りたいとさえ思った。いや実際、もしここが屋外で、スコップさえあったら僕は地面に穴を掘り始めていたことだろう。

そして先生と僕が小説の話から離れ、積もる世間話をしているうちに、ホテルのロビーには昔の懐かしき面々がひとりふたり三人……と増えていった。館山先生はそのひとりひとりに気さくに声をかけ、男子の元教え子には体育教師らしくボディタッチを含めたスキンシップを図っていた。女子たちは暫く会っていない級友との再会に「キャー」などと声を張り上げては抱きあっている。出席者二十八名のうち、十六人が女子で、そのうちの半分以上が結婚していることに、館山先生も僕も驚いた。しかも男子出席者十二名のうち、結婚しているのはたったのひとり……。

「やれやれ。モテないくんが多いんだなあ、我がクラスは」

先生が輪の中心になってそう言うと、昔の男子たちは皆一様にブーブー言いだす。

「モミアゲにそんなこと言われたくないよな」

「そうだよ。先生だって結婚したのは三十過ぎてからのくせにさ」

「保健体育の授業で、先生が初体験の話をした時のこと、思いだすなあ」

そして館山先生が富永にヘッドロックを食らわせていると、将来のエリートドクターがホテルの回転扉をくぐってやってきた。

「秀川くんよっ」

「やっぱり今も格好いいわねえ」

「旦那と別れてつきあっちゃおうかしら」

実際のところ、秀川に対するみんなの反応というのは、他の誰のものより違っていた。まあ僕に対しても「長谷部くんが作家？ウッソー」というような反応はあったのだが、やはり彼がダントツにみんなの注目を集めた。

「遅れてすみません」

クールな彼が謙虚にあやまりつつ差し出した手を、館山先生ががっしりと握る。

「美味しすぎるなあ、まったく秀川は。おまえがラストワンだぞ。宮本武蔵流に遅れてきやがって」

「いや、べつにそういうわけでは……」

秀川は札幌からのバスが事故による渋滞に巻きこまれたこと、さらにスリにあって財布を盗まれたことなんかを話した。

「じゃあおまえ、会員費……」

思わず僕がそう口走ると、

「悪い。立て替えといてくれ。実家に戻ってる時間も全然なかったんだ」

人気者の彼に拝まれたのでは、喜んで了承するしかない。二十八名の団体は幹事の事務的なフォローのことなど最初から念頭にないらしく、館山先生と秀川を中心に、そろそろと宴会場へ歩いていく。

(やっぱり幹事なんてのは、秀川のような奴がすべきなんだよな)

僕は内心溜息を着きつつ、後ろからみんなを追いかけ、〈若竹の間〉という広々とした畳敷きの部屋に上がった。

これから幹事として司会なるものの責任まで果たさなきゃならない。

「えー、久しぶりにみんなに会えて、先生もとても嬉しく思う。みんなが卒業した次の年に先生は帯広の高校に転勤となったわけだけど、このクラスの話は今でも先生の胸に強く残っている。えー、先生は二年D組のクラス担任に決まる三か月前に今の奥さんと結婚し、その四か月後にはヘルニア、さらに三か月後には交通事故に遭って首がムチウチになった」

ここで元教え子たちの間から、どっと笑いが巻き起こる。

「えー、まあ当時先生はもう再起不能かと君たちに危ぶまれていたわけだが、その後見事復活を遂げ、今では二児のパパだ。上の子が四つで、下の子が三つ。今日来てる女子たちのうち四人が子持ちと聞いて、先生もびっくりしてる。男子は冬野以外、誰も結婚してないんだなあ。みんな、そんなにモテないのか？」

うるせえ余計なお世話だ、モミアゲ男に言われたくない、などと野次を飛ばされつつ、先生は笑いながら続ける。

「でもまあ、みんなの顔を見て先生は安心した。佐々木は先生と同じように高校で教師やるし、福島は介護福祉士、近藤は理学療法士、斉藤は路上でギター弾いてるし、医者のおもいれば、作家になった奴もいる……大川と坂下は大学卒業後に進路を決める時、わざわざ帯広の先生のいる高校までやってきてくれたよなあ。教師やって何が楽しいって、そういうふうに関り

にされることほど嬉しいことはないぞ、はっきり言うけどな。まあ、そんなわけで、みんなに再会できたことを先生は本当に嬉しく思う……というわけで、とにかく乾杯だ！」

先生がビールのジョッキを高く掲げると、皆陽気に近くの者とカチンカチンとコップの口をぶつけ合わせた。

僕は近くに座る先生や秀川や佐々木や福島と祝杯の杯を交わし合い、和食の膳に舌鼓を打ちつつ、積もる四方山話をみんなとした。

一応幹事であるとはいえ、僕は最初に先生からの挨拶を案内しただけで、あとはほとんど司会の任を解かれていた。それでもこのクラス会があまり盛り上がらないようなら、時々マイクを握って「えーと、カラオケ大会を始めたいと思います」だのと言わなければならなかったのだろうが、その必要性はまったくなかった。

とりあえずひとり一曲ということでカラオケは歌わされたものの、全員が歌を歌い終わる頃には無礼講といったような雰囲気になり、マイクはもはや誰のものでもなくなっていた。

そんな中で僕は、もっぱら秀川と話をし——もちろん福島や佐々木とも色々話はしたが——特に先生が他のグループの間で盛り上がっている時に、小説の話や、その他彼が今大学でどんな研修をしているかについて、突っこんだ会話を交わした。

「へへへー、長谷部くんも秀川くんもお久しぶり」

ジャケットを脱いでワンピース姿になった八木沼が、ビール瓶を片手に僕の隣に座る。座敷の片隅で何故か腕相撲大会が突如として始まり、ほとんどの者がそちらに注目を移している時だった——それとカラオケ好きの連中がザ・マイクハナサーズを結成してもいたが、そちらへの注目度はあまり高くないようだ。

「あのねえ、長谷部くん。もう五年も前のことを蒸し返すようで悪いんだけど、長谷部くんてなんで美樹と別れちゃったわけ？遠恋で自然消滅っていうのは一番卑怯な別れ方だと思うんだけど」

八木沼はマリエが亡くなったあと、美樹が一番親しくしていた女子だった。僕もまあ『彼女のお友達』という感じで、高校三年の時は八木沼と結構親しかった。

「……なんていうかさ、やっぱり遠いだろう、札幌と釧路って。つまりそういうことだよ」

ごまかすようにそう答えたが、八木沼は追求の手を緩めない。

「何よ、それ。カンケーないじゃんよ、そんなの。とどのつまりは長谷部くんの都合ってことでしょ？美樹が死ぬほど悩んでる時にさあ、長谷部くんは他の女と同棲生活エンジョイしてたって話だし。あたしと秀川くんがどれだけ美樹の泣きごとにつきあわされたか、わかってるんでしょうね、あんたは？」

ああん？とビール瓶片手に凄まれて、僕は言葉に詰まった。返す言葉もない。

「まあそうアツシのことをいじめるなよ」

見かねた秀川が、助け舟を出してくれた。

「それにもう五年も前のことなんだから。今は橘も結婚して、幸せな結婚生活送ってるんだろ？」

「いや、それがね」実はそっちの話がしたかったというように、八木沼は秀川のコップにビール

を注いでいる。「なんかさあ、うまくいってないらしいのよ、向こうの旦那のお姑さんと。この旦那ってのがさあ、あたしも一回会ったことあるんだけど、とても九州男児には見えないのよねえ。確かに優しいといえはすごーく優しいんだけど、そのかわり気が弱くて優柔不断っていう、よくいるタイプっていうか……まあ九州に住んでるすべての男性がオレについてこい！ってタイプの亭主関白だとは思わないけど、同窓会の出欠のことで電話したら、美樹泣いてんだもん。美樹さあ、長谷部くんとあやふやなまんま別れちゃった時、言ってたんだよねー。『多分、一生の間でこんなに誰かを好きになるっていうことは二度とないと思う』とか『これから誰かを好きになったとしても、長谷部くんほど好きになったりしないと思う』……ってさ。もし離婚したら釧路の実家に帰ってくるっていう話だから、長谷部くんに美樹のこと慰めてもらいたいなー、なんて思ったわけよ。親友としてはね」

「……まだ正式に離婚するって、決まったわけじゃないんだろ？」

「だって今長谷部くんフリーなんでしょ？このチャンスに頼んどかないとさあ。なにしろ作家ってのは駄文を綴ってるってだけでも、大層おモテになるってお話だから」

ぶっ、と僕がビールを吹きだしていると、横で秀川が声を立てて笑った。

「八木沼も人のことより自分の心配しろよ。俺だっておまえの失恋話に一体何度つきあわされたか……」

「いいわねえ、ラブラブハイテンションの真っ直中にある人は余裕がおありになって。相手の女の子、まだ十代のピチピチギャルだもんね。看護学生ってところがなんともいやらしいわ。実習と称してお医者さんごっこかやってんじゃないの？あーイヤらしい」

今度は秀川がビールを吹きだす番だった。そして八木沼に続いて僕も、話の矛先を転じるため、秀川いじめに荷担することにした。

「そうだよなー、僕もまだ会ってないんだよなあ、秀川の愛しの彼女に。写真とか持ってないの、おまえ」

「……持ってない」

秀川がそう答えるまでに五秒間があった。僕と八木沼は互いに顔を見合わせてニヤリと笑うと、ほぼ同時に秀川を押し倒しにかかった。

「長谷部くん、ジーパンの右ポケットよ。いつもそこに秀川くんは定期入れてるはずだから」

「オッケー」

八木沼が秀川の動きを封じてる間に、僕は素早く彼のジーパンから定期入れを盗みだし、その中を物色した。

「……あった、あった。プリクラと生写真が。おお、可愛いじゃん。看護婦の制服がいかにも似合いそうって感じ」

「でしょお？あたしも何回か会ったことあるんだけど、リアクションがなんとも独特でねえ、面白い子なのよ。ちょっとトロくさいから、将来ほんとに看護婦としてやってけるのかどうか、不安な感じではあるんだけど」

八木沼は秀川のトレーナーの袖を肘まで強引にまくりあげると、「ほらほら見てよこれ」と彼の静脈を指差した。

「注射の練習台になってあげてるんだって。ここまでくると本当にラブよねえ。ひしひしと愛を

感じるわ」

「うるさいな」

秀川はトレーナーの袖を下ろすと、どこか不機嫌そうに僕の手から定期入れを奪い返した。

今のは少しからかったという程度のものだけど、彼女のことを冗談でもこれ以上何か言ったら、秀川は本気で怒りだすに違いないと僕は思った。僕みたいに軽い気持ちで女性とつきあったり、いとも簡単に別れたりというようなことは絶対にしない、今時珍しい誠実な奴なのだ。そしてそのことを思うと僕は――秀川と秀川の彼女とに、ほんの少しばかり嫉妬を覚えた。

宴会が始まって二時間半ほどが経過し、雰囲気少しダレ気味になってきた時、館山先生が「二次会はどこでやるのか」と僕に耳打ちしてきた。僕は二次会をやることなどまったく考慮に入れてなかったので、腕相撲大会で優勝し、いとも御満悦の先生を適当にかわしつつ、

「えーっとまあ、少々お待ちください」

と宴会の座敷をでた。相手はもう先生というよりただの酔っ払いの親父だ。いい娘を用意しろよ、なんて冗談でも言わないだけ、理性は残っているようだと思ったが。

「もしもし？神さんですか？僕です。アツシです。実は僕、無理やり同窓会の幹事をやらされておまして、先公の奴がですね、二次会はどこでするんだと酔って絡んでくるもんですから、なんとか助けていただけませんかと……」

つい一月ほど前まで働いていたバーのマスターに、僕はそう協力を要請した。神さんが「店は混んでるけど、なんとか客席を用意して準備してやってもいい」と言ってくれた時は、まさにこの人こそ神さまだと思ったくらいだ。

「恩に着ます」と返事をして電話を切ると、僕は再び宴会席場へと戻った。そしてマイクハナサズたちからマイクを奪いとり、二次会の会場へ移動することをみんなに伝えたのだった。

同窓会は午後の六時から始まったのだが、ホテルの宴会場の座敷にいられるのは九時まで、と決まっていた。それで僕たちは九時近くになると、だらしなくぞろぞろとホテルのロビーをあとにし、二次会組と帰宅組とに別れることになった。

二次会へは出席者の半数以上の人間がなだれこむことになったので、僕は秀川や八木沼と並んで歩きながら、携帯でその人数を十七名と神さんに伝えた。僕に小説一本で食っていけと助言してくれた じんひとし 神仁 のバー、その名も『Z I N』は、リバーサイドホテルから歩いて十分程度の場所にある。外に『Z I N』と看板が出ているだけなので、いかがわしい店と勘違いする人もいるようだが、地下一階にあるそのバーは、ただのジャズ好きの髭親父が経営する健全な居酒屋だった。

館山先生は僕が一月前までここでお世話になっていたと知るなり、神さんに頭を下げ、

「いやあ、うちの教え子がお世話になりました」

などと素面に戻って世間話をし始めた。

「実をいうと、俺はこいつのことが一番心配だったんですよ。順調にいったら本当は、結構いい大学だって狙えたはずなんです。それなのにフリーターになる道を選んだんですからね。今は

作家なんてものになったので、結果オーライでなんとでも言えますが……そうですか。長谷部はこういうところで社会勉強しつつ、小説書いてたのか」

切株の形をした椅子に腰かけた先生は、岩窟洞のような店内を見渡ししながら、感心したように何度も頷いている。ノームの住みかをイメージして作られたという店内は、本当に地下の洞穴といった雰囲気の内装だった。

「どうだ、長谷部。新作のほうの執筆ははかどってるか」

「ええ、まあ……」

頼むから僕以外の生徒の話か、せめて小説以外の話をしてほしい、僕は切実にそう思った。だが神さんまでが僕のそんな胸中を察することなく、見離そうとは。

「長谷部くんは肝心なことは何も喋らないんですよ」マスターはグラスを十七個並べると、それぞれの注文の品を作りながら言った。「ここで働いている時もずっとそんな感じだね。なんていうか、人に裏を見せないというか、弱味を見せようとしらないんだな。でもさっき、酔っ払った先公に二次会の場所を用意しろと脅されたと言って、僕に助けを求めてきたんです。それで僕はすぐ店の外に『CLOSE』の札をだすことにしたんですよ」

ははは、とマスターと先生は笑いあい、周りで話を聞いていたみんなも爆笑した。それからさらにみんなが僕の小説を読んでどう思ったかについてディスカッションを始めたため、僕は追いつめられた鼠みたいにいたたまれなくなった――針のむしろってのはまさにこのことだ。

「最初はさあ、長谷部のやつがねえって思ったんだ。俺は長谷部と仲が良くも悪くもなかったからさ、何考えてんのかわかんない奴くらいの記憶しかなかったんだけど……本読んだらさ、へえこういうこと考えてたのかってちょっと尊敬したな」

「あたしも。なんていうか、高校時代の長谷部くんて、ちょっと近寄りがたい感じしたもの。でも主人公の研ぎ澄まされた孤独っていうの？ああいうのを書けるのってほんとに凄いて思った。国家のために命を賭けても誰からも感謝されない影の存在なのに、それでいいってクヴァストは思うんだもんね。そういうとことか、ちょっとだけ長谷部くんに似てると思う。普段表にださないってだけで、気持ちとしては人一倍思ってる部分があるのよね」

みんながあんまり褒めてくれるので、僕は照れ隠しに「あんなものはただの小説だよ」と謙遜することもできず、ただ黙ってジントニックを飲んだ。自分はこんな恥ずかしい思いをするためにあの小説を書いたのだろうか、訝しく思いながら。

二次会は僕の書いた小説の話から始まって、しんみりとした真面目な、とても感じの良いものになった。カウンターを中心に、十七名の同窓生が切株の椅子を並べ、酒を飲みながら人生について語りあったりした。

そして話がある時ふと、夏川とマリエのことに及んだ時――僕は心臓から鮮血が滲んでくるのを感じた。同窓生の誰も彼もが、また秀川や館山先生までもが、夏川とマリエのことを『過去にあった悲しい出来事』として心の中で処理しているのがつらかった。

「なんで死んだりしたんだろうなあ。生きてさえいてくれたら、今こうしてみんなでいい酒が飲めたのに……」

館山先生が重い溜息とともに呟くと、青灰色の洞窟内が一瞬しーんとなった。そして八木沼ががっかりとした様子の先生を慰めるように、あとを受けた。

「でもある意味『永遠の愛』ってこういうことを言うのかなっていう気もするのよね。ロミオとジュリエットだってそうでしょ？あの物語が優れてるのは、ふたりの人間が愛しあっているから結ばれないってところだもの。もちろん夏川くんと山田さんの間のことは、ふたりにしかわからないことだと思うけど……生身の愛って本当はドロドロしたものだから、もしかしたらふたりはあの歳にして既にそれを知っていたのかもしれないって、そんなふうにも今は思うのよ」
——『永遠の愛』か。

僕は夏川とマリエのことを、他のみんなのように決して過去形で語ったりすることはできなかった。自分がもしこの同窓会の幹事なんてものじゃなかったとしたら——ふたりの話がでた時点で、間違いなく席を立てていただろう。だがそういうわけにもいかず、僕はひたすら黙ってジンを飲み続けた。

僕の心の中に、いや魂にあのふたりは今も住んでいる。そして現在形の住人として、時々ひょっこり顔をだす。今も精神的な血液が、リアルに心に溢れだすくらい……僕はみんなの話を聞きながら、そんな自分の心の動きに驚き、動揺してもいた。それだけ生の激しい怒りを、彼らのために今も保つことができている、ということに対して。

僕はせめて彼らのかわりに、わかったようなことを言う連中を殴ってやりたかった。おまえらにこの気持ちがあわかってたまるかと……だが実際の僕にできたのは、自分だけはあいつらとは違う、そのことをせめてもの慰めとしてくれと、酔いの回った頭で考えることだけだった。

僕がタクシーで真っ暗な自分のアパートへ辿り着いたのは、十二時を少し過ぎてのことだったけど、この夜僕は朝になるまで寝つくことができなかった。

すでに遙かな遠いところにある、どんなに呼んでも帰ってこない思い出の群れが、闇の中、影たちの間で踊っているような気がした。

僕は自分が不意に、涙を流していることに気づいて驚いた——そして自分が夏川とマリエのことを思いだしているせいだと思い、一体なんだこれとは、ろれつの回らない舌のような思考回路に目が回った。まるで走馬燈のように、高校時代のことがまばゆい光の如く駆け抜けていく。

「ごめん。夏川、マリエ……」

僕は結局のところ、彼と彼女に何もすることができなかったのだ。夏川のことは確かに嫌っていた。今だって大嫌いだ。だけど、もし彼が生きていて、今日同窓会に来ていたとしたら？それでもし彼が「小説家になったんだって？おめでとう」と左手で握手を求めてきたとしたら？……きっと僕は奴のことを心から許しただろう。いや、そもそも僕がひとりで勝手に夏川のことをいけすかない奴、と一方的に決めつけていたのだ。夏川はそのことがどうしても理解できなくて、僕の目の前でデモンストレーションを繰り返していたのだと、マリエも言っていたではないか。

アルコールのせいでひどく感傷的になっていると、わかってはいる。でも僕は涙がとめどなく溢れるのを、止めることができなかった。

高校二年のあの夏と秋に、彼女のための涙は流し尽したと僕は信じて疑ってなかったけど——こんなにも熱い涙がまだ、魂の奥深くに眠っていた。そして僕はこの夜、夏川のためをも思って

涙を流した。夏川のことを悼んで僕が涙を流したのは、彼の死後、これが初めてだった。

しかし夜明けと共に懐しい思い出たちの輪郭は薄れ、僕は現実を支配する薄き闇の世界へと引き戻された。でも僕はまだ眠りたくなかった。まだ追いかけていたかった。あのふたりの姿が吸いこまれた魂の入口――消えゆく闇の門の中へと、できることなら僕も一緒に入っていたかった。

ちょうど鍵の形になっている、湖の一部を覗きこんで、夏川とマリエは微笑んでいた。

でもふたりが何故そんなにも幸福そうなのか、僕にはまったく理解できなかった――ふたりでとても楽しそうに、歌でも歌うみたいに話をしていたけれど、ふたりが実際にどのような会話を交わしているのか、僕の耳には届いてこない。

僕は「おおい、おおい」と大声で呼びかけてみたけれど、ふたりには無色透明の空気の振動としてしか伝わらないらしい。

鍵島の夢は、夏川とマリエが死んでから時々見るがあったが、ここ一年くらい、ずっと見る事がなかった。鍵島の夢を見て目覚めるたびに、僕はいつもこう思ったものだ――もう二度とこんなに美しい場所を夢に見ることはないだろうと。

けれども決してそうではなく、いつも忘れた頃にこの夢を見る。まるで忘れないでと薄紫色のメッセージでも託すかのよう。

僕は鍵島本島のあちこちの景色を断片的に夢見るか、あるいはマリエのことを鍵島の景色を背景にして夢見るかのどちらかだったけど、今回初めて夏川が夢に姿を現した。

自分たちはこうして幸福に暮らしているから泣く必要はない、ただ記憶の隅のほうで忘れないでいてくれと、彼らはそう言いたかったのだろうか？

夢の中で僕は、透明な空気のような存在としてしか、彼らに関わる事ができない。そしてそんな自分を悲しみながら、いつも目が覚めるのだ。

もしかしたら僕はこれからも、五年後も十年後も二十年後も、忘れた頃に鍵島の夢を見続けるかもしれない。けれども夢の中の彼らは永久に若く、年老いることなく、僕が苦しみに苛まれてようと悩みの世界に溺れてようと、美しい世界で幸福そうに微笑んでいることだろう。

同窓会のあった翌々日、僕は八気沼と秀川のことをマイカーで送っていくことになった。

この同窓会のためだけにわざわざ札幌からやってきたふたりは、幹事の僕にそのくらいの任は果たすべき、と執拗に迫ってきたのである……というのは冗談で、実際には小説の取材のために、僕は札幌までいく用があったのだ。

秀川と八気沼に札幌の隠れた観光スポットを幾つか教えてもらい、それから小説の設定や登場人物のことなども話して、それに見合うと思われる場所を紹介してもらった。もちろん、秀川のガールフレンドである松本清美さんのことも紹介してもらった。

「看護学校のみんなにはねえ、マツモトキヨシって仇名されてるの」

秀川にフルネームで紹介されたあと、清美ちゃんはそう言って僕に握手を求めてきた。

秀川は清美ちゃんのことをキヨミ、と呼び捨てにしている、彼は彼女から「ユキちゃん」などと呼ばれているのがおかしかった。そして彼女が「ユキちゃん」と優しく呼びかけるたびに僕がニヤニヤ笑うので、秀川は最後にはうんざりするよう眉間に皺を寄せていた。

「だからアツシにキヨミのことを紹介するのは嫌だったんだ」

「へっへっへっ、そうですかダンナ」と僕が秀川の肩を叩くと、彼は汚い妖怪の手でも振り払うように、僕の手を振り払っていた。

ちなみに清美ちゃんはそんな僕らのやりとりを見て笑っていたけど――彼女は思っていた通りの、いや思っていた以上に可愛らしい女性だった。一目見て、僕は自分が札幌に住んでなくてよかったと思ったくらいだ。何故かといえば、もし三人で飲みに行くだの食事をするだの、映画に行くだのというようなことを繰り返していたとしたら――もしかしたら僕は彼女に苦しい恋心を抱くようになっていたかもしれないからだ。

もちろん僕には親友の彼女に横恋慕するような趣味はないし、仮に清美ちゃんが秀川の彼女でもなんでもなかったとしても、やはり手をだすのはためらったかもしれない。彼女にはどこかアコヤ貝の中で純粹培養中といったような純真さがあり、ふたりが肩を寄せ合う姿を見ていると、僕は本当に自分が薄汚れた妖怪になったような気がした。ふたりの美しい愛の光に照らされ、そのシンフォニーに耳を傾けていると――自分がいかに恋愛的に醜く汚れているかがよくわかる。

僕は小説の取材として写真を撮りまくり、幾つもの文献をコピーしまくったあと、一週間ほどで帰釧したわけだが、その帰り道に車の中でこう思った。

世の中は実にうまくできている、と。秀川と清美ちゃんは多分、このまま何年かつきあい続けて、お互いに医者と看護婦として一人前になった頃に結婚するだろう。でもここでも僕にはやはりよくわからなかった。『運命の相手』とほぼ一直線にストレートで出会う者たちもいれば、目隠しでもされてるみたいにならなくても出会えない者たちがいるのは何故なのだろうと。

そして僕が自分はもしかしたらこのまま一生独身で終わるかもしれないな、などと悲観的になりながら車を下りると――ボロアパートの駐車場とも呼べない駐車スペースに、白のセフィーロが停まっているのが見えた。

(もしかして、兄貴か?)

五時間半ものドライブで、軽く疲れていた僕は、なんだってこんな時にと正直いって少しだけ思った。赤錆びた階段を上っていくと、長身のハンサムな青年が、手摺りの錆をじっと見つめている――その様子はまるで、飛び降り自殺を思案中とでもいったような、思いつめたものであった。もし彼が自分の兄貴でなかったとしても、何か一言声をかけずにはおれなかっただろうというくらい。

「どこかへ旅行に行ったのか？」

兄貴は手摺りから手を離すと、僕の手にはボストンバッグが握られているのを見て、そう聞いた。

「うん、まあね」

室内は一週間前と同様、散らかりまくったままだが、何分相手は血を分けた実の兄弟である。べつに気にするような必要はない。

それよりも、と僕は思った。多分これは家族の間で何かがあったんだろうな、と。

兄貴の顔からは先ほどの切羽詰まった様子は消えていたが、それでもどことなく落ち着かなげで、無理にいつも通りを装っているような感じがした。

「どこへ行ってたんだ？」

「札幌の秀川のところ」

答えながら僕は、冷蔵庫を開けた。中から烏龍茶をとりだし、百均で買ったグラスにそれを注ぐ。

「しかし、汚い部屋だなあ」

この部屋へ来るたび、兄貴はいつも同じ感想を洩らす。彼のように掃除洗濯大好きという男もどうかと、僕なんかは思うのだが。

雑誌などを蹴飛ばしてひとり分の座る場所を確保すると、僕は兄貴に烏龍茶を手渡した。

「で、なんか用なわけ？」

空気の入替えをするために、ベランダに通じる窓を開け、そこに腰かけることにする。

「なんだ、その言い種は。用のある時以外、俺は弟のアパートを訪ねちゃいけないのか」

「いや、いけなかないけどさ。用のある時以外、これまでだってほとんど来たことないだろ？」

「まあ、それはそうだが……」

いつものように堅い口調で言うと、兄貴はマイクテストでもするみたいに、何度も咳払いを繰り返している。

「その、兄さんはな、こう、なんというかその、結婚を考えている相手がいるんだ」

「ふうん」

それで、というように眼差しで促すと、兄貴は何故か視線を逸らしていた。

「でもその人とは入籍するわけにはいかないから、ずっと一緒に生活するっていう形になると思うんだ。この間アツシ、書いてただろう小説の中に。だから父さんや母さんよりも、ずっとそういうことにも理解がきくんじゃないかと思って……それで相談にきたんだ」

「結婚するわけにはいかないって……」自分の書いた短篇小説の内容を、僕は頭の中でつまぐった。「つまり相手は人妻か何かなわけ？相手の離婚が成立してから籍を入れるとか、そうい

う話？」

「いやそうじゃないんだ」

違うんだ、と兄貴は深刻な顔で俯いた。

「相手の人は柳田正平さんといって、男の人なんだ」

意を決したように兄貴が赤い顔を上げた時、僕は馬鹿のようにぼかんと口を開けていたと思う。

「……軽蔑するか？」

とりあえず首を振ると、兄貴はいたたまれないようにその場所から立ち上がり、落ち着かなげに部屋を行ったり来たりしだした。

「そうだよな。嫌に決まってるよな、兄貴がゲイなんて。でもこの間アツシがエイズの恋人同士の話を書いたから、もしかしたらって思ったんだ。いや、おまえにそういう傾向がないのはわかってる。でも俺は他にどうしようもないんだ。こんなこと、父さんや母さんには絶対に言えない。だから俺のかわりに家へ戻ってきてほしいんだ」

冗談、と言いかけて僕は、頭の後ろで組んだ腕を解いた。

「なんでだよ。父さんや母さんには黙って家をでてけば済むことだろ？それで相手の……柳田正平さん？彼とふたりでマンションでもアパートでも借りて、一緒に住めばいいじゃんか」

長い睫毛に縁どられた兄貴の目に、うっすらと涙が浮かぶ――兄貴が泣いているのを見るのなんか、一体何年ぶりだろう。

「べつに僕は反対しないよ。兄貴がゲイだからって絶縁する気もまったくないし、気持ち悪いとも全然思わない。僕はこれまでずっと自分の好きなようにやってきたし、これからもそれは変わらないと思う。だから兄貴も自分の好きに生きたらいいんだよ」

「……ありがとう」と兄貴は泣きながら言ったけど、僕は礼を言われるほどのことは何も言っていなかった。

「父さんと母さんにわざわざカミングアウトする必要はないと思うけど、もし兄貴がどうしても隠してるのが嫌だっていうんなら、その時は応援するからさ。今度その柳田さんって人に会わせてよ」

おそらく僕がこんなにあっさり、彼との関係を認めてくれるとは思わなかったのだろう。兄貴は――というか、普段あれほど冷静沈着な兄貴が――突っ伏して号泣している。

人の悩みというのは様々だなと、僕はつくづくそう思った。そして兄貴がティッシュの箱を空にしたのを見て、新しいのを彼の膝の上に置いた。

兄貴はひとしきり泣いてしまうと、大分気持ちが落ち着いてきたのだろう、改めて理解を示してくれた僕に礼を言い、それから柳田さんとの出会いから現在に至るまでの愛の推移を長く語って帰っていった。

兄貴と柳田さんの出会いこそまさに＜運命＞と呼ぶべきもので、ふたりは半年ほど前に交差点での交通事故がきっかけで知りあったのだという。

その時、兄貴は右折しようとして車が通り過ぎるのを待っていた――そして青色の矢印灯火がでると同時にアクセルを踏み、ハンドルを右方向へ回した。ところがそこへ猛烈な勢いで一台

のスカイラインが交差点に突っこんで来、兄貴の車の左側面にぶつかった、というわけなのだ。

あまりのことに愕然としつつも兄貴はとにかく車を出、同じく慌ててスカイラインを出てきた柳田さんと目が合った。そして恋に落ちたのだ……男同士でんなアホなと思う人もいるかもしれないが、とにかくこれは事実だ。

ふたりは即座に直感でお互いのすべてを理解しあってしまった。事故に遭ったこの相手は、おそらく自分と同じ傾向にあると。しかし、ほぼそうであろうとの確信があっても、はっきりとした確証を得るまでに、ふたりは事故の後処理などを通して互いに探りを入れあわねばならなかった。そしてそうこうするうちにふたりの間には愛が育まれていった……というわけなのである。

僕は兄貴のそんなのろけ話を聞かされながら、純粹に彼のことを羨しいと思った。柳田さんのことを話す兄貴は本当に幸福そうで、相手が男か女かなんてことは、まったく低次元な話であるように思われた。

兄貴はこれまで僕にとって、極めて模範的な、非の打ちどころのない人であったので、親孝行という分野においても、僕はすべてを彼にまかせきりにしてきた。つまり僕はなんとなく漠然と、兄貴は美人でもブスでもないまあ普通のどこにでもいる女性と結婚し、両親に可愛い孫でも抱かせてくれるだろうと、そんなふうに想像していたのだ。

兄貴が帰ったあと、僕はやれやれと思った。兄弟そろって同じことを考えていたのか、と。

実の兄貴がゲイであることを即座に受け入れることのできる弟、というのはもしかしたら世間では珍しいのかもしれない。でも実は前から兄貴には、もしかしたらそうなのかもしれないと思わせるものはあったのだ。

あれは僕が中学二年生くらいの頃だったろうか。肉体的な刺激を求めて、兄貴の部屋にエロ本を探しに入ったことがあった。いくらお堅い兄貴でも、エロ本の一冊や二冊隠し持っているに違いないという確信があったからだ。ところが、押入れの中とベッドの下から見つかったのは、ゲイの専門誌のような雑誌だけだった。

(なるほど、そういう趣味ですか)と僕は納得し、それ以後兄貴の部屋を物色するような真似はやめることにした。でもその時兄貴のことを正真正銘のゲイだというふうにはべつに思わなかったし、まあちょっとそういうディープな方面にも興味があるんだよ、といった程度のことに違いないと思っていた。

何しろ当時兄貴には美人のガールフレンドがいたし、また大学に在学中だけでなく、卒業して就職してからも、きちんとそういう女性がいたのである。僕の知るかぎり、兄貴にはこれまでつきあったことのある女性が三人以上はいるはずだった。

でも今にして思えば――すべてカムフラージュだったのかもしれないな、とも思うし、真面目な兄貴のことだ、自分は本当に女では駄目なのかと、真剣に悩んでもいたに違いない。

もしも兄貴が両親の前で「アイムゲイ」とカミングアウトしたとしたら――父は自分の好きな俳優、ゲイリー・クーパーがどうかしたのかと思い、母は疑問符を一億個以上も頭に浮かべることだろう。それでもふたりの意見は、顔を見合わせた瞬間に一致する。

「まさか、うちの息子にかぎって」

あるいは「ゲイにするためにこれまで二十九年間も育ててきたのではない」といったところだ

ろうか。いずれにせよ、もし兄貴が僕にしたのと同じように、真剣に柳田さんとのことを告白するとしたら――ふたりも認めないわけにはいかないだろう。

これまで素行も成績も何もかもが優秀で、これといった問題ひとつ起こしたことの無い兄貴の、生涯ただ一度の我俚なのだから……。

翌日の夕刻、僕が原稿の書きすぎでへばっていると、電話のベルが鳴った。一瞬東京の編集者かと思ったが、受話器から聞こえたのは兄貴の声だった。

「今、何してた？」

「まあ、ちょっと原稿書きをね」

僕の声が不機嫌なものだったせいも、一瞬間があった。

「……これから、柳田さんの家に夕飯食べにいかないか？仕事してたんなら、メシまだだろ？」

「うん、いいよ。ちょうど切りのいいところまで書き上げたところだから」

受話器の向こうで、ほっと安堵している気配が感じられる。僕が「冗談じゃねえ。ゲイの晩餐会になんて誰がいくか」とでも言うと思ったのだろうか。

電話を切ったあと、僕は兄貴が車で迎えにきてくれるまで、ビールを片手に暮れなずむ夕陽を眺めていた――特にあらたまって身仕度を整えたり、整髪料で髪を決めたりする必要はないように思えた。何しろこれから新しく兄貴になる人に、僕は会いに行くのだから。

柳田さんの家は、宮本町にある美味しいケーキ屋さんの近くにあったので、僕はそこでケーキをお土産として買うことにした。そして近々ふたりの愛の巣として改装予定の、中古の一軒家へと兄貴の車で急な坂道を上っていった。

高台にあるその家からは千代の浦海岸が一望でき、景色がいいばかりでなく、とても広い庭までついていた――丈高い雑草がぼうぼうと、我が物顔で土地の所有権を主張してはいたけれど。でもそのことを除けば三角屋根のこの家は、中古にしては悪くない物件であるように思われた。

残照の差す庭からリーリーとコオロギの鳴く声を聴きつつ、僕と兄貴と柳田さんは夕飯の準備をすると、ホットプレートで三人で囲んだ。真夏日和の夜に、男三人で焼肉……というのは、もしかしたら少し暑苦しい光景だったかもしれないけど、僕たちにしてみればとても楽しい晩餐のひとつだった。

柳田さんというのはなんというか、まあフツの、とてもマトモそうな人だった。看護師という職業柄かどうか、とても人当たりがよく、その上スマートでハンサムで――もしこれでゲイでさえなければ、面食いの八木沼あたりにでも紹介したいくらいだった。

僕はてっきりまたナヨナヨしたカマっぼい男か、筋骨隆々のマッチョマンがエプロン姿でドアを開けるものと覚悟していたのに――僕の予想はとてもいい意味で裏切られる結果となった。

「でもさあ、アツシくん。君は作家だからわりにリベラルな思想ってものを持ち合わせてるのかもしれないけど、正直ってどうなの？お兄さんが男好きってことに関しては？」

「男好きってことはないだろ。俺には正平しかいないんだから」

……正直って僕は、ふたりの間に入りこめなかった。彼らが隣あってひとつの皿で肉や野菜

を食べているのを見ると。

「僕がアツシくんだったら悩んじゃうと思うけどなあ。こんな格好いいお兄さんが、男の恋人にこんなめろめろだったりなんかしたら」

「一体誰がめろめろなんだよ。きのうの夜、俺なしには生きられないって言ったのはおまえのほうだろ」

自分がますますどこか場違いなところにいるような気がして、僕にはやはり何も言えなかった。彼らふたりの間にある空気は、男と女のそれよりもあまりに濃すぎるのだ。

「あ、ごめんねアツシくん。ショックを受けた？君も知ってたのとおり、お兄さんは真面目だからねえ、人が軽い冗談で言ったことでもすぐ本気にすんの。僕はオサムがいなくなっちゃって生きていけるもんね。明日も明後日も明々後日も」

「嘘つけ。喧嘩したあとすぐ折れてくるのはそっちだろ。そんな強気なこと言っといて、あとであやまっても受けつけないからな」

「すみませんねえ。どうせ僕はオサムがいないと生きていけませんよ。もしオサムが不慮の事故か何かで死んだとしたら、あと追って自殺しちゃうかも……」

「勝手に殺すな。縁起でもない」

――はっきりいって、僕にはふたりの間に入りこむということが、とうとう最後までできなかった。

野球のナイター中継を見ながらの食事だったので、時々野球のことを話したりはしたのだが、あとはずっとふたりのアツアツぶりに当てられっぱなしだったとっていい。確かに柳田さんの仕事のことや、僕の書いてる小説の話なんかもあったけど――柳田さんが知りたかったのはどうも、自分たちのような人間に対するノーマルな人の反応だったようだ。

「これからも兄貴のこと、どうかよろしくお願いします」

最後に玄関のところでそう頭を下げると、柳田さんはアメリカナイズされた日本人よろしく、僕のことを抱きしめた。そしてお互いの間に偏見や嘘偽りがないことを確かめるように握手を交わし――こうして、兄貴の男の恋人との初顔合わせは大体において成功したと、まあそんなわけなのだった。

「びっくりしただろ」

帰りの車の中で、兄貴が静かに言った。

「正平が言ったんだ。ありのままを見せたほうがいいって。それで受け入れてもらえなければ仕方ないってさ。俺が言うのもなんだけど、正平はあの通り結構イケてるだろ。女ばっかりの職場だから、これまで言い寄られることも多かったらしくて……ある時、今勤めてる病院でカミングアウトしたらいい。でも周囲の反応はサバサバしたもんだって言ってたな。俺がもし今のポストで「実はゲイです」なんて言ったとしたら、白い目で見られるのはまず間違いないだろうけど」

「そんなに拘ることないんじゃない？カミングアウトに」

車窓に映る闇を見つめながら僕は言った。ライトアップされた ぬさまい 幣舞橋やフィッシャーマンズワ

ーフが美しいのは、この闇あればこそと思った。

「まあ、そうなんだがな……」

兄貴のことだからきっと真面目に悩んでいるのだろう。実家までの道すがら、僕はこれまで自分が兄貴を含めた家族についてどう思ってきたかを話すことにした。

「なんていうかさ、僕は兄貴のことも母さんのことも父さんのことも好きだし嫌いじゃないよ。でもこうも思うんだ。自分の家族のことを好きでも嫌いでもなく普通ですってというのは、それ自体おかしなことなんじゃないかってね。うまく言えないけど、僕は小さな頃からその違和感みたいなものが嫌で仕方なかったんだ。でもガキだからうまく言葉で説明することもできないし、べつに家の中で誰が悪いっていうのでもないんだよな……兄さんはさ、父さんのあれ、どう思う？正義と善のヒエラルキーの頂点を目指すみたいな生き方」

ああ、あれな、というように兄貴も頷いている。

「正直、あれは凄い生き方だと思うよ。大抵の家族ってというのは必ずどっかに黒い点ってというか、黒い染みみたいなものがあって普通だと思うんだけど、うちは違ったからな。俺だってもちろん気づいてたさ。アツシが食卓でいつも居心地の悪い思いをしてるってことは。多分母さんもわかってると思う。でも向こうが正しくて一点の染みもない以上は逆らえないし、向こうに合わせるしかないってということなんだ」

「……やっぱりそれって、裁判官っていう職業も関係してるのかな」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」兄貴は西港方面へと交差点を左折しながら言った。「俺、小学校六年生くらいの時、母さんのラブレターを盗み見したことがあるんだけど、その内容にかなりびっくりしたんだ。多分あれ、五十束以上はあったと思う……しかも相手が斎藤敦さんって言って、父さんじゃないんだよな。その上住所が東京でね、本当は敦さんと結婚したいんだけど、このままいったら馨さん——要するに父さん——と結婚することになる、みたいな内容なんだ。子供心にもショックを受けてさ、俺は母さんが家を留守にするたんびに、こっそり筆筒を開けてその手紙を読んだんだ。本当は母さんは父さんのことをちっとも愛してなくて、それなのに自分が生まれてきたのかもしれないって不安になったからね」

兄貴は僕の反応を窺うように、ちらと助手席に視線を送り、そして話を続けた。

「その手紙の中には一通だけ父さんの手紙が混ざってて、あなたが自分ではなく他の人を愛しているのは知っているけれど、それでも自分と結婚してもらえないだろうか、みたいなことが書いてあった。俺はそれまで散々母さんがどんなにその人のことを愛しているかについて読んだあとだったから——ある意味その父さんの言葉によって救われたような気がしたんだ。それとその手紙に「死んだ彼のことは本当に気の毒だと思う」ってくだりがあって、ああなるほどなって思った」

「……母さん、そういえば昔言ってたことがあるよ。僕の名前は初恋の人からとった名前だって」

「俺も、その手紙の束を読んだあとにこう思ったよ。もしかしたら、母さんは自分よりも敦のことのほうが心の中では可愛いのもかもしれないってね。それと父さんがなんだか物凄く気の毒な感じがした。あの手紙の内容からいって、母さんの敦さんっていう人に対する想いは、とにかく半端なものじゃなかったから——それを知ってて結婚したのかと思ったら、父さんが物凄く立派な

人のように感じられた。以来、俺は父さんに右に倣えの人生を送り始めたと、まあこういったわけだ」

僕は兄貴が涙を流していることに気づいたけど、あえて見ないふりをした。兄貴が少しも嫌味じゃない優等生を続ける中でも、そんな苦悩があったなんて、考えてもみなかった。むしろ自分こそ彼らの正しさの犠牲になっているとさえ思っていたのに――自分は本当にどうしようもない放蕩息子だと、僕はこの時初めて自覚した。

この夜はどうしても兄貴が家に泊まっていけというので――実家にあまり寄りつかない僕を、母さんがいつも心配しているからと――久しぶりに僕は二階にある自分の部屋で眠ることになった。

(そうか。父さんと母さんの間には、そんなドラマがあったのか)

斎藤敦、という母さんの昔の恋人がどんな人だったのか、興味を持った僕は車の中で色々兄貴に話を聞いていた。どうやら売れない作家だったらしいこと、自分の文学的な才能が世に認められないことを悲観して、自殺したらしいこと……。

「その人の書いた手紙自体がすでにもう、一種の文学みたいな感じなんだ。でも俺はその時まで十二だったからね、かえてその文章の巧みさに腹が立った。こんなことを臆面もなくすらすら書けるような奴は、きつとろくでもない奴に違いないって、その時はそんなふうにししか思えなかったんだ」

白のセフィーロが実家に辿り着く頃には、僕は兄貴にすっかり脱帽していた――兄貴からその話を聞いて、それまでオブラートのようにくるまれていた家族の内情が、はっきりと見えてしまったからだ。

今なら、僕が文学賞を受けた時、母さんが異常なくらい大喜びしたのが何故なのかがよくわかる。そして兄さんや父さんにもよくわかっていただろう。それでいながら何も知らないふりをして「凄いよ、アツシ。おめでとう」なんて、僕が兄貴の立場なら、言えただろうか？……確かに互いにもう、年齢的にはいい大人といって差し支えない年齢かもしれない。でも多分僕が兄貴の立場だったとしたら、十代の半ばあたりで心がねじけて、家族の厄介者になっていたんじゃないかって、そんな気がする。

ベッドの中でごろりと寝返りを打ち、母さんが週に一度は必ず掃除しているという室内を、僕は見回した。今は真っ暗で何も見えないが、いつきても自分の部屋は昔とまったく同じままだった。母さんは僕が家の敷居を跨ぐなり、特別なおもてなしで迎えてくれることが多かったけど――でもそれはたまにしか顔を見せないからだ、そんなふうにししかこれまでは思わなかったのに。

突然肩に＜家族＞というものの重みがのしかかってきて、僕は溜息を着いた。ある意味ではこれまでのツゲが回ってきたのだというようにも感じる。十八歳から二十三歳になるまでのこの五年間、一時期家に戻っていたこともあるとはいえ、それ以外ではほとんど寄りついたことがなかった。

兄貴が何故自分のかわりに家へ戻ってくれと言ったのかが、今はよくわかる。つまりそれはこういうことだった。自分は両親が期待しているように普通に結婚して孫の顔を見せたりというこ

とができない。アツシ、おまえは賞をとって立派な作家にもなった。これからは俺のかわりにおまえが、人並みの親孝行といったものをしてもらえないだろうか……もちろん兄貴はこんなことを口にしたりするような人じゃない。でも兄貴がそういう人であればこそ、僕は彼の気持ちに応えなければならないような、そんな気がしていた。

べつに両親に可愛い孫の顔を見せるため、というのじゃないけれど、その頃の僕が激しい恋愛をしたいような衝動に駆られていたのは確かだった。まず秀川と清美ちゃんに会ったことが第一にあり、第二が兄貴と柳田さんにディープな世界を見せつけられたこと、第三が母さんと斎藤敦さん、それと父さんの三角関係——他者から恋愛的能量を一方向的に浴びせられっぱなしだった僕は、自分の内側に溜ったそのエネルギーを消費したいような気持ちになっていた。つまり、与えられるばかりではなく、自分も与える側にまわりたいというわけだ。

とはいえ、僕はそれから二か月ほど部屋に籠りきりで小説を書かなくてはならなかったため、実際には恋愛どころではなかった。そしてようやくの思いで『運命の翼』という二百五十枚程度の小説を書き終えた時——僕は内側に蓄積していたはずの恋愛エネルギーをすべて使い果たしてしまっていた。いってみればまあその二か月の間に、小説を導く詩の女神と恋に落ちていたといってもいい。

しかし、脱稿して憑依現象が一時的にぬけた僕は、今度は脱け殻のようになっていた。『運命の翼』は我ながら改心の出来栄ではあったものの、この物語に精魂吸いとられていたお陰で、随分長いことまともな食事をしていない。加えて、いつものように散らかり放題の、かろうじて足の踏み場だけはあるといったような部屋に、出しそびれたゴミの溜った押入れ、異臭を放つキッチンの排水口——なんてのをぐるりと一通り見渡してみると、自分がなんだか妖怪じみた生き物のように思えてくる。その上、鏡に映った僕の顔自体が思わず「ギャオッ！」と叫びたいほどのひどいものであった。

一週間も風呂に入らず髭ぼうぼう、油ぎった顔にフケいっぱい素敵な頭髪……三日前にコンビニへ行った時の、従業員の奇妙な表情が今も思いだされる——まあヨレヨレのシャツにくたびれた半ズボンといった格好で、浮浪児のような目つきをしていたのだから無理もないが。

(……ここはひとつ、恋でもするか)

頭をかいて、フケの雪を降らせながら僕は思った。といっても、かいがいしく部屋を片付けてくれるような彼女が欲しいとか、僕はそんなことを言ってるわけじゃない——小説を一本書き上げるたびごとに、僕は部屋の掃除をかなりきちんとやるのだ。そして再び小説を書くようになると散らかり放題というサイクルが繰り返されるという、それだけのことなのだ。

その日も僕は、狂人が突然正気に目覚めでもしたかのように、三つある部屋及びバスルームを隅から隅までピカピカにした。そして激しい恋に落ちる前準備として、風呂に入って髭を剃り、全身こざっぱりとすることにしたのである。

実をいうと、僕の心の中で、僕が激しい恋に落ちる相手はずっと前から決まっていた。図書館の彼女である。僕は彼女のことを<紅林>という名前以外何も知らなかったけど――他に声と笑顔が可愛くて、ウエストが細いという以外――個人的な知り合いにさえなれば、かなりのところ良い友人関係を築けるような気がしていた。恋は心の交通事故と言っていた人があるけれど、いってみればまあ、自分からわざと車に轢かれてみようと、僕はこの時そんなふうに思っていたのだ。　　といっても、僕が彼女のことを考えて眠れぬ夜を過ごしたり、彼女に会いたいがために借りたくもない本を何冊も借りるといようなことはなかった。ただ、それでもとても惹かれるものがある、というのは動かし難い事実だった。

彼女はとても魅力的だったし、僕は彼女の体の線を本棚越しに視線でなぞったことが何度もあった。

まああのくらい可愛くて気立てもよいのだから、三枝蘭子同様、彼氏や婚約者のひとりやふたりがいてもなんの不思議もなかったけど――僕はその日、自分が生まれて初めて告白する女性は彼女にしようと、朝ごはんに納豆をかけながら心に誓った。

しかし<告白>というのは、想像以上に緊張を要するものであることがわかった。頭の中でシミュレートしていたことを、いざ実行に移そうという段になると――「何も今日じゃなくてもいいじゃないか」とか「図書館は明日になっても逃げはしないよ」などという弱腰な意見が心に渦を巻きはじめる。実際、このことによって僕は三日も時間を無駄にした。

でも四日目の金曜日――開館時間の十時から閉館時間の六時間際までねばった甲斐あって、僕はようやく彼女に声をかけることができた。

おそらく閉館時間五分前ということで、特別何もすることがなかったのだろう。彼女は哲学書や宗教の本などが並んでいる棚の前を通過して、窓際の、僕が座っている椅子のほうまでやってきた。

その時僕はカヴァフィスの詩集を読むとはなしに読んでいて――自分が心の中で八時間近くも念じていた力がようやく通じたかと、本からすぐに顔を上げた。

彼女は窓から外の、茜さす光景をぼんやり眺めていて――僕は半分彼女の横顔に見とれていた。夕陽によって彼女の髪は黄金と薄茶に染まり、その憂いを帯びた面差しには、人が人生で経験しなければならぬ何かの湛えられているような気がした。

彼女は僕の眼差しに気づいたのか、こちらのほうを一瞬振り返り、それからカウンターのほうへ戻ろうとした。

今しかない、と僕は思った。これを逃したら僕は明日もまた、朝の十時から閉館時間まで神通力のオーラを高めねばならない。

「あの、ちょっとすみません」

思いきってそう、声をかけた。彼女は本のことでも訊ねられると思ったのだろう、

「はい、なんでしょう」とにっこり笑った。

「あの、このあと時間をもらえませんか？なんていうか、その……胃にもものを詰めるのにちょうどいい時間だなあとって……」

一瞬の間のあと、彼女はぷっと吹きだし、くすくすと笑いだした。自分でも決まらない誘い文句だと思った。

「ごめんなさい、笑ったりして……隣の学習センターでもいいですか？確か今、バイキングやってるはずだから」

うん、いいよと僕が答えると、彼女はじゃあ先にいって席をとっておいてください、と言った。あと十分か十五分くらいで行きますから、と。

僕は道路を挟んだ斜め向かいにある建物――煉瓦色をした生涯学習センターという近代的な施設――まで歩いていき、エレベーターに乗ると9のボタンを押した。エレベーターで昇るうちにも、釧路川が海へと流れこむ景色が窓越しに見えてくる。

この巨額の税金をかけて建設された施設には多目的ホールが多数あり、色々なコンサートや市民の集会などに利用されている。他に美術館や喫茶店もあるし、僕がこれから向かおうとしている九階にはレストランもあるのだが――駐車場が狭いことだけが玉に瑕だと思っているのは、僕だけだろうか。

さて、僕が紅林さんと約束したポルトという名前のレストランに到着すると、ウェイトレスが実に見晴らしのいい席へと案内してくれた。釧路川の河口にゆっくりと夕陽が沈み、あたりを淡い紅色に染めている。こんな贅沢な景色を眺めながら食事のできることを僕は心から喜んだが――紅林さんが実際にやってきたのは、夕陽が完全に水平線に没した、宵闇があたりに漂いはじめる頃だった。夜景が美しく映えるようになるには、まだ時間のかかる、中途半端な時間帯。

僕はウェイトレスにもうひとり人がくることと、食事はふたりともバイキングで、と告げてはあったのだが、奥のほうから食欲を刺激するいい匂いが流れてくると、胃袋の要求に逆らうのが難しくなってきた。何分、昼におにぎりを二個食べただけで、あとは念力を送ることと読書に集中していたから、お腹が空いて仕方なかった。それで次期すぐに彼女もやってくるだろうと思った僕は、トレイに皿を乗せると、一足先にマッシュポテトだのピザだのラザニアだの、美味しそうなものを一通り、とって回った。そして先ほど注文したビールが横にあるのを見るとどうにも我慢ができなくなり、僕は自分の旺盛な食欲との戦いを放棄した……だがよもや彼女が、もぐもぐ、ああうまいなんてやってる真っ最中にやってこようとは。

「ああ、べつに気にしないで」

決まりの悪い思いをしている僕を気遣うように、紅林さんは自分もすぐにトレイを手にとると、洋食系バイキングの世界へと旅立っていった。幌付きのワゴンには、パスタやグラタンやドリア、ポトフやラタトゥイユなどなど、その他サラダやデザートも目白押しだった。

彼女はトレイに並べた皿いっぱい、デザートのケーキやアイスまでも乗せて、いと御満悦な様子で僕の隣に座った。

「色々なパスタの味が楽しめるのが嬉しいわね」

「カルボナーラにボンゴレに、ミートソースにペペロンチーノ……あとそれ、ナポリタンとシーフード？」

「なんかよくわかんないけど、適当にとってきちゃった。また行って今度はステーキやポテトやチキンなんかもとってくるつもり。あとアップルパイやパンプキンパイなんかもね」

「……すごいな。いつもそんなに食べるの？」

「こう見えて意外に大食いなのよ。体質的に太らないっていうのもあるけど、ダイエットしようなんて一度も思ったことないわ。嫌味に聞こえるらしいから、誰にも言ったことはないけど」

僕は軽く自己紹介すると、彼女の下の名前を聞いた。彼女はフルネームを「^{くればやしゆうこ}紅林夕子」と言った。

「いい名前だね」

「そうかしら？長谷部さんのほうが格好よくない？アツシなんて、いい名前だわ。夕子なんて名前、全然平凡よ」

「いや、なんていうかさ、一幅の風景画みたいな名前だなんて思って。森の林に紅色の夕陽が沈んでいくっていうか……」

「上手いわね、長谷部さんて」紅林さんはフォークにパスタを絡ませ、ぱくりと食べながら言った。「その調子でいつも女の子を口説いてるんじゃない？」

「まさか。自分から女の子の人に声をかけたのなんて、これが初めてなのに」

「本当に？」

いかにも疑いそうな眼差しで見つめられてしまい、僕は少しだけ慌てた。

「本当だよ。今日も開館時間からずっと張りこんで、いつ話しかけようかって本を読むふりをしながら、考えこんでばかりいたんだから」

「ふうん」と紅林さんはナプキンで口許を拭っている。

「じゃあ、カヴァフィスの詩の中ではどの詩が一番好き？」

「『イタカ』かな。多分ほとんどの人がそう答えるんじゃないかと思うけど」

「そうね。わたしも一緒だわ」

イタカへ旅立つなら

祈れ、旅路が長くありますように、と。

冒険に満ちていますように、

新しいことにたくさん出会えますように、と。

ライストリュゴネス族や

一つ目のキュクロプス、海神ポセイドンの怒りを恐れるな。

志が高ければ、そんなものには出くわさない。

身も心も勇気にわきたっているならば。

ライストリュゴネス族も、

キュクロプスも、猛り狂ったポセイドンも出てこない。

出くわすとしたら、それはきみの心に棲んでいるから。

きみの心が、行く手にそいつらを呼び出すのだ。

祈れ、旅路が長くありますように、と。
初めての港に胸おどらせて着く
夏の朝に何度も恵まれますように、と。
フェニキアの市場に立ちよって
上等な品物を買入れろ。
真珠母に、珊瑚、琥珀、黒檀、
それから、心地よい香料を
ありとあらゆる芳しき香料を
買えるだけ買うがいい。
エジプトの町のあちこちを訪れて、
知恵を持てる者からその知恵を学べ。

つねにイタカを忘れるな。
そこは最後の目的地。
だが急いで旅をするな。
旅は何年もかけたほうがよい。
この島に錨をおろすのは年老いてからのほうがよい。
旅の途中でさまざまなものを得て豊かになったのちに。
イタカが富をくれるとは思うな。

(カヴァフィス『イタカ』 浅岡政子さん訳)

僕と夕子は――夕子、と名前と呼んでくれて構わないと彼女が言ったので――お互いの記憶を繋ぎあわせて、カヴァフィスの詩をボールペンでナプキンに書き綴っていった。それは実際の『イタカ』とは微妙に訳の違うところもあったけど、ほぼ大体のところ、その意味はあっていた。「今時の若者にしては珍しく、読書家なのね、アツシさんて。ねえ、年はいくつなの？」
「二十三。君は？」
「同じ。二十三よ。あたし、てっきりアツシさんのほうが年下だとばかり思ってたんだけど……アツシさんて、学ランとか着たら今でも十分高校生で通用しそう」
「どうせ僕は童顔だよ」

少しだけいじけてみせると、夕子は「ごめんごめん」と言って、食べかけのチェリーパイを半分切り分けてくれた。それとチョコレトムースに抹茶のババロアも。

夕子は自分で大食いだと最初に宣言したとおり、僕以上に実によく食べた。そして実によく喋った。彼女は食事を食べるリズムと話す時の間の置き方なんか僕とよく似ていて、すごく話がしやすかった。僕の自惚れでなければ、多分彼女もこの時、僕と同じことを感じていたと思う。

僕たちはたっぷり食事を摂って、それぞれ千五百円分以上の元をとると、駐車場のところで別れることになった――僕は彼女とまだ話し足りなかったし、夕子も同じ気持ちのはずだという強

い確信が僕にはあった。それで、思いきってこう切りだした。

「あのさ、深い意味はないんだけど、これからうちにこないか？まだ話したいこともたくさんあるし……」

「ううん。今日はもう帰らないと。バイキングごちそうさま。またたくさん本を借りにきてね」

夕子があまりにあっさり踵を返すので、思わず僕は彼女の後ろ姿を捕まえていた――会って間もない女性にこんなことをするなんて、自分でも少し驚きだった。

「次、いつ会えるかな？」

「……明日、図書館にきてくれたら、また会えるわ」

「いや、僕は公共の場所じゃなくて、個人的な場所で君に会いたいって思ってるんだけど」

夕子は僕の腕をゆっくりふりほどくと、振り返って言った。

「ねえ、それって一般にいう『つきあう』っていうことなのかな？それともお友達として時々会ってお茶でも飲みながら、本の話でもしようっていうことなの？」

「両方だよ」と僕は言った。そして気づいた。自分が彼女にまだ好きだとも何も言っていないことに。

「だからその、つまり……こういうのって苦手なんだ。図書館で君と会うたびに、すごくいいなとはずっと思ってた。その上、話してみたらとても話しやすく、本の話とかも合うし……僕は友達はわりといるほうだと思うんだけど、文学の話とかできる奴はほとんどいないんだ。いるっていったらひとりだけかな。さっきも本当にびっくりした。カヴァフィスの『イタカ』をほとんど丸暗記してるなんて、そんな娘は……そんな女の子には、この先二度と会うことはないだろうってそんなふうに思うんだ」

――三十秒くらい、沈黙があった。彼女はその間顔を伏せて、身じろぎひとつしなかった。そばに立つ電灯の薄青い光に舞う、蛾たちの白い羽音が聞える。

ようやく、彼女は顔を上げた。

「あのね、多分アツシさんはとても――勘違いをしているのだと思うの。確かにあたしは……図書館で司書の仕事をしている時のあたしは、職員の中でも親切なほうだと思うわ。自分で言うのもなだけど。でもそれは仕事だからよ。本当のあたしと働いている時のあたしは違うし、アツシさんと食事をした時のあたしと本当のあたしも違うの……もちろん、まるっきり別人ってこともないんだけど……ごめんなさいね。あたしも自分で上手く説明できないの。ただ本当のあたしは脱け殻で、今ここにこうして立ってるあたしはそれを隠すための代用品みたいなものなのよ。多分あたしの言っている意味、アツシさんにはわからないと思う。でもわかってしまったら――アツシさんのいう『おつきあい』っていうようなことは、あたしには出来ないの」

じゃあさよなら、と彼女は最後に言った。微かに泣いてるようにも見えたけど、僕にはもう一度彼女を背中から抱きしめるような勇氣は、とてもなかった。

その夜、僕はなかなか寝つかれず、何度も布団の中で寝返りを打った。夕子の意味深な言葉を心の中で何度も反芻しては、彼女の心の暗い影を追おうとした。

――でも結局、何もわからなかった。

脱げ殻？代用品？本当の自分？わかってしまったらつきあえない？何か……なんでもいいからヒントが欲しいと思った。

僕は時の経過とともに、夜の闇が濃密になっていくのを見つめながら、今夜はもしかしたら鍵島の夢を見るかもしれないな、とぼんやり思った。僕は夕子のことを考えるうちに、マリエのことを考えていた。僕にはマリエが何故死んだのか、いまだによくわかっていなかった。

夕子のこと、こう考えていた。

脱げ殻だってなんだっていい、死んでしまうよりはずっといいじゃないか、と。

でもそれはあくまでも一般論だ。

彼女には何か――おそらく死にたくなるようなことがあったんじゃないだろうか。あるいは日頃明るく振るまいながらも、それを隠しながら心の底では苦しんでいる？

溜息とともに寝返りを打ち、蒼黒い海の底のような部屋の空気を見つめ、僕は眠れぬ頭で考え続けた。

これまでの人生で、僕は本気で死にたいと思ったことが一度もない。

適当に生きて適当に死ぬ、それが僕の人生の大命題だった。

一生懸命生きて一生懸命死ぬ、などという生き方は僕には崇高すぎたし、またいつ死んでもかまわぬよう一秒一秒を大切に生きる、という考え方にも、激しい疲労感を覚える。

夕子は――いつもとても楽しそうに仕事をしているように見えた。本を借りにきた人が書名をうるおぼえでも、一緒になって一生懸命探したり、「空はどうして青いのか」という謎の小学生に対しても、本の在処を親切に教えてあげたり――そうした彼女の行為がもし偽善だとでもいうのなら、この世に本当の善意や親切心などないといっているだろう。

やがて睡魔によって思考回路が混濁してきた僕は、最後には夕子がもしエイズのキャリアであったとしても、彼女と性交したいように考えていた。そして彼女を抱きしめた時の柔らかい感触のことを思いだし、掛け布団を抱きしめながら眠りに落ちていった――鍵島の夢は見なかった。

翌日の土曜日、僕は彼女に言われたとおり、開館時間前から図書館の入口に立っていた。時計を見ると十時十分前。自販機の前にある椅子に座り、自動扉が開くのを待つことにする。

もちろん僕は、勤務中の彼女を困らせたくて朝一番に図書館へきたわけではない。ただ十時から十二時まで二時間、夕子と同じ空間で似た空気を吸ってからお昼の食事に誘いたかったという、それだけのことだった。今日もまた閉館時間まで待つ、というような気長な真似はとても出来そうになかったから。

しかし、図書館の玄関の鍵が開き、僕が階段を上っていくと――二階の一般閲覧室に、紅林夕子の姿はなかった。本棚と本棚の間をくまなく調べてのち、奥の閉架図書の方にいるのかもしれないと思い、職員のひとりに声をかけてみることにする。

「あの、すみません」

漫画本の棚を整理していた若い職員が振り返る。

「紅林さんは今日、出勤なさってますか？」

「いえ、紅林は今日病気で休みをとってますが……」手塚治虫の『火の鳥』を片手に彼女は言った。望郷編。「多分定期検診だと思うんですけどね」

「定期検診？」

インテリな雰囲気彼女は、眼鏡を上げながら神妙な顔をしている。「あの、こんなこと聞くのはどうかと思うんですけど、あなた紅林さんのなんなんですか？きのうも何か、ふたりでお話してらしたみたいですけど」

「いやその、友達なんですけどね、一応」

「本当ですかあ？」疑いの眼差しでじろりと睨まれる。「くれちゃん言ってましたよ、あなたのこと。いつも哲学と宗教の棚のそばに変な男が座ってるって。ここのところ十時から六時までずっといるけど、働いてないのかしらって」

「なるほど」

これはごまかしがきかないと思った僕は、すぐ脇にある給湯室へ彼女の顔を引っ張りこんだ。

「実に申し訳ないんだけど、彼女の住所なんて教えてもらえるかな？僕は決してあやしい者ではなくて、その……」

この際仕方がないと思い、僕は自分の秘密を彼女に耳打ちした。

「ええ————っ！」

静かな図書館に女の叫び声が響き渡る。するとその夕子と仲のいい司書は、実に愛想よく色々なことを教えてくれた。夕子が市立病院で定期検診を受けていること、もし白樺台の自宅を訪ねるなら午後からにしたほうがいいこと、彼女には今つきあっている相手はいないけど、元カレが時々現れてはねっとりした視線で本を借りていくこと……。

「やだ、なんかもうドラマみたいっ。長谷川さん、もし夕子に本気なら、ストーカーから彼女のことを守ってあげてくださいねっ」

冴木さんはどこかルンルン気分といった様子で給湯室をでていき、最後にくるりと振り返ると、

「今度サインくださいっ」

口許に手を立て、ひそめた声でそう言った。

冴木さんから聞いた白樺台の住所に、僕は午後から訪ねていくことにした。眺めのいいスカイラインを駆け抜け、昔の太平洋炭鉱の錆びれた住居跡を通りすぎると、そこに夕子の実家はある。夕子のお父さんは太平洋炭鉱が閉山するまで働き続けたが、今は本州のほうへ出稼ぎにでているのだそうだ。なんでも弟が札幌の医大に通っているため、その授業料を工面するために、失業保険さえももらうことなく工場勤めをすることにしたという。

夕子の住む家はどこか昭和初期に建てられたといったような趣きで、周囲にも同じような台形の屋根が、コピーのように何軒も並んでいた。違うのは屋根の色だけで、そのうちの多くの家が扉や窓に板と釘で封がしてあった。そして夕子の家はそうした幽霊屋敷に囲まれた一画にあり、正直なところ内心僕は

(よくまだこんなところに住んでいるな)とその家を見て思った。

たくあん色の薄汚れた壁はひび割れによってあちこち剥がれ落ち、赤銅色の屋根のてっぺんに

は実に古い昔のアンテナが煙突の横に突っ立っている……しかも二階の窓は割れている上、破損箇所をガムテープでかろうじて塞いでいるというような、そんなひどい有様だった。

でも僕がそのどこも褒めようのない家を見た時、嬉しいような親近感を覚えたのも事実だった。何故って、彼女がこれから僕のオンボロアパートへ招待されたような時には――彼女は少なくとも自分の家よりはましと思うに違いなかったからだ。

雑草が伸び放題の幽霊屋敷の脇にシビックを止め、僕は花とケーキを持って夕子の家を訪ねた。確かに家は褒めようがないものの、彼女の家の庭は少し素敵だった。コスモスやダリアや百合などが自然な感じで咲き、サルヴィアやマリーゴールドやパンジーなどの鉢植えが、玄関のところで客を待ち受けている。

そして水色の網戸越しに僕と目が合った夕子は――僕がチャイムを鳴らすより先に、その窓を大きく開けていた。

「どうしたの？」

夕子はすっぴんで、デニムのミニスカートにピンクのTシャツという寛いだ格好をしていた。片手にソーダアイスの棒を持っている。

「元気？今日の朝図書館へ行ったらさ、冴木さんが定期検診にいったんじゃないかって教えてくれたから……これ、一応お見舞い」

あのお喋り、というように夕子は顔をしかめたが、次の瞬間には諦め顔になってケーキの箱と花束を僕から受けとった。

「それで、あのお喋りはどこまで喋ったの？まさかとは思うけど、安っぽい同情でこんな辺鄙なところまでわざわざやってきたんじゃないわよね？」

「冴木さんは何も悪くないよ。僕が強引に聞いて住所を教えてもらったっていうそれだけなんだ。体のどこが悪いのかとか、そういうことは直接夕子の口から聞いたほうがいいって言われたしね」

「そう」とかけたアイスを食べると、夕子は元氣なく笑った。「まあなんにしても、とりあえずこっちへこない？ケーキのお礼にお茶でも入れるわ」

夕子が立っている窓辺に腰かけ、僕はそこから茶の間の様子を見渡した――室内アンテナのついた古い型のTVに、暗い色をした木製のサイドボード、色褪せた薄桃色の絨毯、懐古主義的な柱時計……目につくもので「新しい」と呼べるものは何ひとつなかった。サイドボード上に飾られた藤娘の人形も羽子板も、壁に飾ってある浮世絵も、十年前から何も変わりませんというような顔をしている。「よくこんなところに住んでるなって、そう思ったでしょう？」

アイスコーヒーをお盆にのせてもってくると、夕子はそれにガムシロップを入れてかき混ぜた。

「べつに何か特別な事情があってうちが貧乏だとか、そんなことは全然ないのよ。なんていうかまあ、うちの両親の主義みたいなものね。よほどのことがない限り新しいものは買わない、買い替えない、そういう夫婦なの。ようするにケチなのね」

「へえ」僕はアイスコーヒーを飲みながら、庭先をゆくアゲハ蝶に目を留めた。「でも僕は結構この雰囲気、好きだな。車通りもほとんどないから静かだし、近所づきあいに煩わされることも全然なさそうだしね」

「まあね。でもここ、わたしが小学生くらいの時までは結構たくさん周りに人が住んでたのよ。たったの十年かそこらでこんなに変わってしまうのかってびっくりするくらいね。アツシさんはどれがいい？」

ブルーベリーパイを僕は指差し、それを皿にとり分けてもらった。夕子はレモンケーキを選んでいる。

「で、アツシさんは一体何を聞きたいわけ？あたしが去年子宮ガンの手術をして、そのあとずっと仕事を休んでたとか、そんな暗い話を聞きにきたのかしら？」

「それもあるけど……」動揺を隠すように、僕は違う話題を探した。「冴木さんに聞いたんだ。前つきあってた人に、ストーカーみたいに尾けられてるって。車のタイヤの空気を抜かれたりとかしたんだって？夕子は何も言わないけど、あれは絶対元カレの仕業だと思うって冴木さんが言ってたから」

「証拠はないけど、多分そうなんでしょうね。ちなみにアレもそうよ」

夕子はサンダルを履いて立ち上がると、二階の窓を指差した――ヒビの入ったガラス窓に、応急処置的にガムテープが貼ってある。

「いくらうちの両親がケチケチ夫婦でも、窓ガラスくらい割れたら取り替えるわよ。でもね、新しくしたらまたやられるかもしれないでしょ？だから暫く相手の様子を見て、何も起きなくなってからって母さんと話しあったの」

「……相手の人ってどんな人？」慎重に言葉を選びながら、僕は聞いた。

「べつにどうってことのない普通の人よ」夕子はほっそりとした白い足を組むと、軽く肩を竦めている。「でもよくいうフツーの人がちょっと切れたみたいな感じだから、かえって手に負えないのかもしれないわね。つきあったきっかけは、あたしが高校二年の時に「先生、好きです」って言って告白したから。それで……」

「ちょっと待って。先生っていうことはつまり……」

「うん、そう。高校の数学教師。よくあるでしょ？ちょっと優秀な生徒が先生のこと好きになって先生も……みたいなやつ。今はもう気持ちが冷めきってるから、あんな人、ただの気味の悪いストーカーのおっさんだけど、当時はとても好きだったの。それに今はストーカーなんてやるけど、もともとはほんとに凄く優しい人だったんだから。あたしが高校卒業するまで、本当に何もしなかったのよ、あの人。でも健康診断でガンの疑いがあることがわかって、病院で検査したら悪性で、子宮を全部摘出することになったの。あの人、がりがりに痩せて骸骨みたいな顔してるあたしのところに、毎日お見舞いにきてくれたわ。でももう子供も産めない体になっちゃったし、別れましようってわたし言ったの。あの方は退院したら結婚しようなんて言ってくれたけど、わたしにはどう考えても精神的に無理だった。一応婚約してたから、うちの母さんと向こうの――清人さんの御両親とで話しあってもらってね、別れることがお互いのために一番いいみたいな話になったの。清人さんもその時は別れることに同意してたのよ。自分もつらいけど、夕子はもっとつらいよな、なんて涙ぐんじったりして……でもなんなのかしらねえ。わたしがようやくそのつらさを乗り越えて職場復帰したと思ったら、ストーカーされるようになったの。この間なんてあやうく「言いたいことがあるんならはっきり言いなさいよ」って、図書館で怒鳴

「っちゃんところだったわ」

淡々と明るく、なんでもないことのように夕子は喋っていたけど——彼女がこれまでどのくらいいつらかったか、僕には想像することさえできなかった。きのうの夜後ろから抱きしめてしまったことが、改めて恥かしく感じられてくる。

「だからね」と、僕の心のすべてを見透かしたように、優しく夕子は言葉を継いだ。「わたしの場合、どうしても順序が逆になっちゃうの。べつにあたしとアツシさんがおつきあいしたからって結婚するとは限らないわけだけど、最初に話しておかないのはフェアじゃないでしょ？でもこんな話聞いたら大抵の男の人はびびっちゃうと思うのよ。あたし、退院してから一度もセックスしてないし」

「……やっぱりさ、女の人にとっては子供を生めるか生めないかって、大切なこと？」

セックス、という言葉に一瞬ドキリとしながら、僕は聞いた。

「そうね。多分アイデンティティの問題なんだと思うわ。これはわたし個人の考えなんだけど、女はべつに結婚してなくても子供さえいたらいいのよ。夫がいて助かるのは、経済的に便利だからってという一語に尽きるわね。でもある一定の年齢になっても子供がいないと、なんだか自分が本能の呼び声に逆らってるみたいな、そんな気がしてきちゃうんだわ」

「……僕が今、心の中で思ってることを言ってもいい？」

ええ、どうぞ、というように夕子は頷いている。真夏の麗らかな陽気の中を、アゲハ蝶がまた一匹、花壇の上を横切っていく。

「これは僕個人の意見なんだけど、そんなに子供って大切かな。一応最初に断っておくと、僕は夕子の気を引きたくてこんなことを言うんじゃないんだ。単に僕が心の底でそうとしか思えないって話。僕ははっきりいって子供なんか死ぬまで永久に欲しくない。ただ時々、頭の中で理性の声がするんだよな。そんなふうにししか思えないおまえは、心の冷たい、エゴイスティックな駄目人間だってね。そこでこう考える——人並に家庭を築いて子供でも持てば、そういう理性の声は聞こえなくなるのかもしれないなって……」

「ようするに、女のあたしとは逆ってこと？」

「そうかもしれないね」と僕は頷いた。「もちろん、世の中のすべての男が僕みたいに考えるわけじゃないと思うけど。ただ僕は、自分がもしこれから小学校からもう一度やり直せって言われたら——首吊って死ぬよ、間違いなく。今の世の中で子供を育てるっていうのは、僕にとってはそういうことなんだ。多分僕が雑誌のコラムにでもそう書いたとしたら、物凄い反対論が押し寄せるだろうけどね」

「……雑誌のコラムって？」夕子は大きな瞳をぱちくりさせた。

「一応作家なんだ。これでもね。夕子は僕のこと、昼間からブラブラしてる能なしのプータローだと思ったみたいだけ」

この時、夕子は冴木さんとまったく同じ反応をした。冴木さんのようにミーハーだというのではなく、同じ音量、声音で「ええ————っ！」と叫んだというわけだ。

それから一月もしないうちに、僕と夕子は愛しあうようになった。子供のできないことが結婚の障害にはならないと、夕子にはそれがわかっていたし、また僕が作家だからとか、そういう外

面的な理由で彼女が僕とつきあっているのではないことが、僕にはよくわかっていた。

ある夜、夕子は事の終わったあとで、一生懸命笑いを堪えながらこう言ったものだ。

「……素敵ね、アツシの胸毛って」

そしてもうこれ以上耐えきれないというように、ブーッと吹きだす。

「ひどい奴だな。傷ついた。もう立ち直れない」

「ごめん、ごめん。でもほんと、可愛いんだもの、アツシの……」 夕子はケラケラと笑い続け、僕の乳首と乳首の間に生える、ふさふさした胸毛をつまんだりしている。布団の中で僕がそばを向くと、そっと後ろから白い腕を回す。

「冗談よ。わかってるでしょ？だっていつもはエチケツトとして剃ってるなんてアツシが言うから……見てみたくなったの。それに、これからは剃る必要なんてないわよ。浮気防止にも役立つし」

「浮気防止って？」

「つまりね、あたし以外の女と寝ようっていう時には剃らなきゃならないわけでしょ？そういうことよ」

僕は笑われた仕返しに、布団の中へもう一度もぐると、彼女がもう何もいえないようにあの手この手を駆使して愛撫した。

オンボロアパート『川柳荘』で、夕子が僕と一緒に暮らすようになるには、ひとつの経緯があった。それは夕子が以前つきあっていた数学教師のストーカー行為がひどくなったからで、一日に三十回以上無言電話はかかってくるわ、仕事帰りに尾けまわされるわで、彼女は避難同然に僕のアパートへ逃げこんできたというわけなのである。いや、無言電話と尾行くらいなら、まだ対処の仕様がよかったかもしれない——だが夕子の愛車に見るのも聞くのも書くのも恥かしいような傷を大々的につけられた時、僕は自分と一緒に暮らさないかと夕子に持ちかけた。

「でも……迷惑じゃない？それにあたしたち、まだ知りあって三週間にもならないのに」

「一緒に暮らしてみても、嫌になったらでていけばいいよ」なんでもないことのように、僕は言った。「一応、その……仲村清人さんだっけ？その人が公務員である以上、できれば警察沙汰にしたくないっていうんならさ、他に手はないような気がするな。これは僕の勝手な推測だけど、彼は僕のことも知ってると思うし、それでああいうことをしたんじゃないかって思うんだ」

ああいうこと、というのは夕子のカローラIIにヤリマンだのサセコだのビッチだのアナルセックスだのという傷をつけられたことだ。ちなみに僕がこのヤリマンでサセコでビッチでアナルセックスな車を修理工場まで持っていった時——顔見知りの工場長は「よう兄ちゃん。いい車に乗ってんな」と意味ありげににやりと笑っていたっけ。

夕子は僕の同棲の申し込みを「少し考えさせて」と言ったけれど、僕はその翌週にはエンゲージリングを購入し、彼女にプロポーズしていた。プロポーズの言葉は、カヴァフィスの詩『イタカ』だった。

「祈れ、旅路が長いようにと」

「……夏の朝に何度も恵まれますように、と」

夕子は戸惑いながらも、小さな声で僕の祈りに答えてくれた。僕たちはまるで聖書の詩篇を交読するかのように、『イタカ』の詩を交互に暗唱した――この時、見えざる力の不思議な働きかけによって、僕も夕子も一度も詩を間違えたりはしなかった。

「イタカがなければ君はきっと旅には出なかつたろう」

「そしてイタカが貧しい土地だとわかってても」

「イタカが君を騙したことはない」

「君は知性と経験をたくさん積んで……」

「その時にはわかっているはずだ」

「イタカが意味するものを……」

途中から何故か泣きだした夕子の手をとると、僕は詩の最後の言葉を引きとるように、彼女にこう囁いた。

「夕子にはわかる？イタカの意味するものが何か？」

彼女は泣きながら何度も頷き、そして僕から婚約指輪を受けとってくれた。小さなブルートパースのついた、プラチナ製の指輪を。

こうして僕たちは同棲生活を始め、頃合を見計らって入籍する、ということにした。夕子の言うとおり、何分知りあったばかりでもあるし——いきなり結婚して突然離婚というよりは、とりあえず婚約して同棲したほうが賢いのではないかと、夕子も僕も認識していた。

そして夕子が僕と一緒に暮らすようになるなり、仲村清人さんの執拗なストーカー行為もぱったりやんだ。僕のシビックも夕子のカロラIIも傷ひとつなくピカピカで、タイヤの空気を抜かれるようなことも二度となかった。もちろん無言電話もなければ尾行されることもなく、郵便受けに鼠の死骸が入っていることも、窓ガラスに石を投げられることも、不幸の手紙が届く、というようなこともすっかりなくなった。

僕たちの生活はとても平穏な、淡々とした幸福なもので——同棲を始めた一月後には正式に籍を入れていた。もちろんお互いの両親にそのことを理解してもらってからのことである。だが、ひとりだけ婚姻のことを聞かされていなかった夕子のお姉さん——舞子さんが、ある日突然川柳荘を訪れ、物凄い剣幕で怒鳴りだしたのには驚いた。

「あんた、あたしの妹を馬鹿にしてるんじゃないでしょうね！？結婚式も挙げずに籍だけなんて、まさかとは思うけど自分は不妊の女をもらってやったんだからとか、優越感に浸ってたらあたしは承知しないわよっ」

舞子さんは自分が知ってさえいたらきちんと式を挙げさせてやったのに、と言わんばかりの口調でちゃぶ台をどん！と叩いた。ちなみに彼女は結婚して厚岸町に住んでいるため、それで報告が遅くなったという程度のことだったのだが。

「そんなこと、思っやしませんよ」あくまでも冷静に、煙草に火を点けながら僕は言った。「第一僕がそんなことをほんの僅かばかりでも考えていたとしたら、勘の鋭い夕子はすぐにその匂いを嗅ぎ分けて、僕との結婚を承諾したりはしなかったでしょうから」

落ち着き払った僕の態度をふてぶてしいと感じたのか、夕子とひとつ違いの姉はいらいらしたようにさらに文句を連ねる。

「大体ねえあなた、女房には外で働かせておきながら、自分は一日中ごろごろしてるって法はないでしょう？このオンボロいアパートがすべてのことを証明してるわ。作家なんていったって、売れるもの書かなきゃただのヒモも同然なんだから」

軽蔑したように散らかった室内を見回し、

「ついでに言わせていただきますけどね、炊事や掃除や洗濯なんかは一体いつ誰がどういうふうにしてらっしゃいますの？まさかとは思うけど、外から疲れて帰ってきた女房にすべて押しつけてるっていうんじゃないでしょうね！？」

(参ったな)と正直僕は思った。お義姉さんは洗い物の溜まっている台所やガスレンジの上の油ぎったフライパン、そして今現在自分が正座している古ぼけた座布団などを、さも汚らしいものでも見るかのように順繰りと眺めている。もしこの住居が可愛い妹の新居だというのでもなかったら、自分はこんなボロっちいアパートには近寄りさえしなかつただろうと、その険しい眼差しは物語っていた——しかし言い逃れのできない厳しい状況ではあるが、このことには僕なり

にれっきとした理由があるのだ。

理由その壱：きのう、僕は夕子がぐっすりと眠っているその傍らで、徹夜で原稿を仕上げていた。

理由その弐：故に、お義姉さんが訪ねてきたこの午後三時十分前、僕は死んだように眠っていたところを叩き起こされたわけで――いかにもヒモっぽい印象を与える資格好をしてもやむをえなかった。ヨレた感じのトレーニングウェアの上下に寝癖のついたぼさぼさの頭、ついでに顔さえまだ洗っていなかった。

「あのですね、お姉さん」目頭をこすりながら、僕はなんとか欠伸だけはかみ殺した。「一応家事のほうは完全平等分担制ということになってます。まあなんとも説得力に欠ける室内の散らかりようではありますが、僕はこの部屋を夕子が帰ってくる六時頃までに片付けておけばいいんですよ。ついでにこう言うてはなんです、僕はきのう徹夜で原稿を書いていて、ついさっきまで泥のように眠っていたんです。というわけで、これ以上の追求はご勘弁願えませんか？」

「ふうん」とお義姉さんは隣の部屋に敷きっぱなしの布団を一瞥し――ちゃんと洗ったコップなんでしょうね、という疑わしげな目つきで烏龍茶のグラスを手にとっている。

「まあ、そういった夫婦間のこまごまとしたとり決めに口を挟むのは、あたしもよしておくとしましよう。でも、あたしがなんとしても譲れないのはあなたたちが結婚式を挙げないってことなんです。あなた、一応は作家なんでしょう？ だったら少くく無理のできる経済的余裕がおりなんじゃなくって？」

そんな無茶な、と思いつつ僕は吸いさしの煙草をもみ消した。

「それは僕に借金しろってことですか？ あの、こう言うてはなんです、お義母さんのほうからもう大体、事のいきさつのようなものは聞いてらっしゃるんじゃないですか？ 僕と夕子は、夕子さんが以前つきあっていた仲村清人さんのことがなければ――もっと時間をかけておつきあいを重ねて、将来のことを考えていこうと思ってたんです。でもこうして狭い部屋にふたりで暮らしてみると、これじゃあ結婚してるのと変わらないからってことで、籍だけ先に入れることにしたんです」

「じゃあ<籍だけ先に>っていうことは、これからきちんと結婚式を挙げるっていう、そういうことなのね！？」

「いや、だからそれは……」

二本目の煙草に火を点けながら、お義姉さんは一体何を言いたいのだろうと思った。結婚式を挙げるか挙げないかというのは、僕たちふたりの問題であって、よその家に嫁いだお義姉さんにはまったくとっていいほど関係のない話ではないか。

「ぶっちゃけた話、僕は結婚式とか葬式とか成人式とか、ナントカ式っていう形式ばった物ごとが大嫌いな人間なんです。でも結婚式を挙げないからって、僕の夕子に対する気持ちが生半可だとか、そういうことではまったくなくて、僕は夕子さんのことは自分の力の及ぶかぎり幸せにしたいって、本当にそう思ってます。しかしですね、僕もまだ商業作家と呼ばれる人間になったばかりの身ですし、経済的な余裕っていうのはほとんどないのが現状なんです」

「わかりましたけど、わかりませんね」お義姉さんはわけのわからないことをきっぱり言った。

「それであなたは……ええと、アツシさんでしたっけね？ 夕子の気持ちをきちんと聞いてあげ

になったのかしら？あの子はあなたの手前、何かと遠慮してるんですよ。ええ、もうそうに違いありませんとも。自分が子供を産めない体だっ てことを気に病んで、何をするにもあなたに引け目を感じているに違いないんですから。もしあなたがそこを汲んでくださらないとしたら.....」

「いや、ちょっと待ってください」話が奇妙な方向に進みつつあるのを感じ、僕はお義姉さんに抗議した。「じゃあ夕子がお義姉さんに.....何か言ったんですか？本当は結婚式を挙げたいけれどお金がないとか、何かそんなようなことを？」

「そんなこと、あの子が言うはずないじゃありませんか。だからわたしが今こうしてあの子のかわりに、あの子の気持ちを代弁しにきてるんじゃないじゃありませんか」

舞子さんはぴしゃりとそう言うと、黒のスーツの襟元を正した。ボロアパートには似つかわしくない正装だった。なんでも旦那方の実家で法要があったのだとか。

正直なところ、僕は早く舞子さんに帰ってもらいたいと思いつつ、心の中で塩をまいていたが――経済的に余裕ができれば必ず結婚式を、などとその場限りの約束をするわけにもいかず、その後もお義姉さんとの言葉による激しい攻防戦が続いた。

舞子さんは決して理屈屋ではないのだが、ああ言えばこう言うといったタイプの負けず嫌いで、僕が何度そのことについては夕子が 帰ってきたら話をするとっても、なかなか食い下がらなかった。そしてだんだん話は脇道へと逸れていき――いや、逸れていくように僕が仕向けたのだったが――お義姉さんは夕子が小さい頃の話や 学生時代の思い出について次から次へと物語ったのち、ようやく漬物石のように重い腰を上げた。

「あらやだ、もうこんな時間？」などとお義姉さんがどこか白々しく我がボロアパートをでたのは、陽も傾きかけた頃合だった。そしてお義姉さんとほぼ入れかわりになるように、夕子が西日のいっぱいに広がる部屋へ帰って来、その部屋の朝と変わらぬ散らかりようを見て、深い溜息を着いたと、こういったわけなのだった。

「お姉さんにそこで会わなかった？」

スーパーで買って来た食料品をしまう夕子に、僕はそう訊ねた。

「ええ、会ったわよ。階段のところだね。一体なにしにきたのあの人？」

「何しに.....って、なんていうかさ、僕たちのこと、あれやこれや 心配してくれてるみたいだったよ。結婚式っていうのは女にとっては一生に一度のことだから、男の僕にとってはどうでもよくても、女の夕子にとってはとか、そんな話をしていたんだ」

「ああ、そう」と夕子はいかにも素っ気なく答え、台所の食器の山にとりかかろうとしている。

「なに？もしかしてなんか怒ってんの？僕が掃除当番であるにも関わらず、部屋の中が相も変わらずこんなだから？」

「誰も怒ってやしないわ。大体、大方のところは想像がつくもの。姉さんのお喋りがえんえんと続いて、さりげなく帰るように勧めても、今の今までずっと居座ってたってわけなんでしょ？それに、きのう徹夜して疲れてるだろうから、あたしが帰ってくるまでぐっすり寝てたとしても、べつにあたしは怒ったりなんかしなかったと思うわよ、多分」

「じゃあ、お姉さんのことが原因？」

「まあ、そんなところ。あたしが作家と結婚したっていうんで、びっくり仰天して様子を見にきたんだと思うわ——多分、とても満足して帰ったんじゃないかしらね。この部屋の美しい散らかりようを御覧になって」

妻と一緒に後ろの部屋の惨状を眺めやると、僕は「オーマイゴッド！」というように、頭をくしゃくしゃにした。

「ああ！この僕に甲斐性がないばかりに！君にまで惨めな思いを……」

夕子は茶碗を洗いながら、腰を折り曲げて笑っている。

「アツシ、『劇団ひまわり』にでも入団したら？」

「冗談だろ？まあそんなことより……」僕は彼女の泡のついた手からスポンジをとり上げた。「これは僕がやるよ。今日は僕が茶碗洗いと掃除の当番なんだから。新婚早々甘やかすのはよくないよ」

「そう？じゃあわたしは晩御飯の仕度にとりかかるとにしようかな。ちなみに今日はビーフシチューなんだけど」

それも僕が、と言いかけたが、やはり黙ることにした。新婚早々甘やかすのがよくないからではなく、僕が料理のことに口をだすと、決まって夕子はナーバスになるからだ。

彼女は料理の本を開くと、ビーフストロガノフとか書かれたページを開いている。そんなの、ただのカレーかハヤシライスでいいじゃないかと思うのだが——彼女には彼女のやり方があるようなので、僕は食器類をすべて洗い終わると、ちゃぶ台の前で新聞の夕刊を読むことにした。彼女の料理している様子が少しでも目に入ると、あまりに危なっかしくて、どうしても手と口をださずにいられなくなるためでもある。

同棲三日目にして、僕は夕子が特異な料理オンチであるということを悟っていた。彼女は多分この先どんなに料理修業を積んだとしても、その腕前が上達することはないだろうとすでに今から僕は諦めている。しかし、世の中というのは実にうまくできているもので、夕子の料理の出来栄があまり良くなくても、僕はべつになんとも思わなかった。

自分が食べたいと思うものは自分が食べたいと思う時に作ればいいし、夕子の作った料理を食べたくない時は、外食に彼女を誘うという手もあるからだ。

まあそんなわけで、僕が新聞の朝刊と夕刊を隅から隅まで読み終わり、軽く部屋の掃除をしたあとも、彼女のビーフシチューはまだ出来上がっていなかった。

「本には三十分くらい煮込むととろみが出てくるって書いてあるのに、四十分以上たった今も、ちっともとろみが出てこないのよ」

いらいらしたように夕子が言うので、水を入れすぎたんじゃないかと僕はやんわり指摘することにした。すると彼女は「きちんと分量通り量って入れたのに」とぶつぶつ文句を言っている。

内心（それがいけないんだよな）と思いつつ、僕はなんとか夕子のことを説得して、市販のハヤシライスのルーを入れることに成功した。

あまりに当然のことだけど、いかに分量通りでも、水が多いように感じたら少し減らしてみるとか、逆に心もち少ないように感じたらその分足してみるとか——その単純な匙加減といったものがどうも夕子にはわからないらしい。

結局料理ができたのは、陽もとつぷりと暮れた午後の八時半で——窓の外は星を散りばめた藍

色のカーテンに包まれていた。その景色を僕は橙色の人工的なカーテンで閉ざし、妻とちゃぶ台越しに腰を落ち着けた。今日のビーフシチュー（いや、はっきりいってハヤシライス）はなかなかの出来栄で、僕は最後に入れた市販のハヤシルウがよかったのだろうと思ったが、夕子が隠し味に入れた赤ワインがよかったに違いないというので、まあそういうことにしておこうと思った。

「ねえ、姉さんは結婚式のことの他に、どんな話をしていたの？」

食事中、くだらないバラエティ番組などをザッピングしながら、夕子がそう聞いた。最終的に、NHKの手話ニュースに落ち着くことになる。

「なにして……まあべつに。これとってとりとめのないようなことを話して帰っていったよ。君が小学生の時に野球部のチアリーダーをやった話とか、中学生の時に生徒会副書記をやった話とか、高校生の時に、放送部だったある男子生徒に校内放送を通して大告白された話とか…
…あと、幼稚園の運動会でおもしろしちゃった話とか、まあそんなところかな」

夕子は一瞬、そんなことまで話していったのあの人、というような呆れた顔をした。そして疲れたように軽く溜息を息を吐いている。

「姉さんは……とてもいい人なんだけど、少しお節介なところのある人なのよね。今日ここへきたのも、純粋に妹の生活を心配してきたっていうのとは、少し違うと思うの。こんなことを言うからって、あたしのこと意地悪な妹だと思わないでほしいんだけど——ううん、べつにアツシがそう思ったからって、どうっていうこともなくはあるんだけど、姉さんは昔からあたしに対して対抗意識のようなものが強すぎるのよ。何しろ、自分があたしより先に結婚した時に初めて、あたしに勝ったって、そう思ったような人なんだから。姉さんはあのおり悪い人ではないんだけど……なんていったらいいのかな。自分よりもほんのちょっぴりでいいから、どこか劣ったところのある人でないと、その人に対して優しくできないっていう、そういうところのある人なのね。でもそのかわり、自分が相手に対してほんのちょっぴりでも優位に立てたとすると、その人に対してお節介なくらい優しくなるっていう、そういう人なのよ」

食後のコーヒーを入れるためにグラインダーを回し始めた夕子に、僕は「なるほど」と頷いた。

「なんとなく、わかるような気はするよ」

「だからね、わたしとしては姉さんがどんなに自分が妹のことを思っているかっていうことを盾に、あれやこれや世話を焼いてくれたとしても、ちっとも有難くなんかないの。もしかしたらアツシは、なんて冷たい妹だって思うかもしれないけど、親戚づきあいをしていくうちにいずれわかることだと思うから、最初に言っておくわ——あたしと姉さんは表面上はどうあれ、水面下ではとても仲が悪いのよ」

夕子はエスプレッソマシン——彼女の嫁入り道具——に挽いた豆を入れると、スイッチをオンにした。食後に必ず飲める美味しいコーヒーのことを思えば、夕子の作る料理が時々まずくても、どうということはない。

そして僕は美人姉妹の心の確執についてそれ以上何か言うかわりに、夕子に完成した原稿を手渡すことにした。六百枚弱の、四度推敲を重ねたファンタジー小説。

「この小説の原稿料が入る頃にはたぶん、ここから引っ越すことができると思うよ」

それから一年後、夕子がエスプレッソコーヒーを飲みながら読んだ小説、『月の王子 太陽の王女』が、とある権威ある大きな賞を 頂けることが決定した。権威あるといっても、ジュブナイル小説の〈読者が選ぶ〉と名の冠された、その名のとおりホームページ上で読者の得票数がもっとも多かった小説に授けられる賞である。まずこの賞を受けるためにはノミネートされなくてはならないのだが、ノミネートされた十作品のうち僕の書いた小説がもっとも獲得票が多かったため、この賞を与えられることになった。

以来、あちこちの雑誌や新聞の書評欄にとり上げられ、必ずといっていいほど〈大人から子供まで読めるファンタジー〉という謡い文句が副題のように掲げられることとなった。某文芸評論家の文章を抜粋すると「科学と魔法の発達した国を舞台に、現代の我々が抱える問題のすべてを極めて鋭く描写した意欲作」ということになるらしい。

格好つけるつもりはないけれど、僕は自分の小説がノミネートされてから半年間、そのホームページ上の今何票入っているかがわかるページを、一度も覗いたりはしなかった。ただ夕子が毎日チェックし、他の九作の小説もすべて読み「自分は必ずアツシのが賞を受けると思う」と励ますばかりだった。

僕がこのジュブナイル小説のファンタジー賞を受けて何より嬉しかったのは、読者が直接選んでくれたというその一言に尽きるかもしれない。全部で七万七千五百六十六票。銀賞を受けた『異次元戦士レイルーク』との差は約九千票だった。票を投じた人の中心年齢層は十代から二十代の人が一番多く、そのほとんどが紫雀社の文芸総合雑誌『文芸帝国』の愛読者、ということがアンケートの集計で明らかとなっている（この賞に票を投じるためにはその権利を得るため、ホームページ上で幾つかの質問に答えなくてはならないので）。

僕は〈受賞の言葉〉として「若い人の活字離れ防止のため、これからもとにかく理屈抜きで面白いものを書き続けたい」というようなことを話し、副賞賞金百万円の使い道は？と聞かれた時は「妻と結婚式を挙げて、新婚旅行へ行きたいと思います」と答えた。『月の王子 太陽の王女』というこの小説は、夕子の実の的を得た優秀な助言によって変更、加筆修正された物語でもあったので――つまり彼女の適確なアドバイスがなければ賞の受賞もありえなかった――このお金の半分は彼女のものと言ってもなんら差し支えなかった。それに公務員である夕子の安定した収入や、精神的な支えといったものが及ぼす影響も極めて大きかった……というわけで、入籍後、一年以上も経てから、僕と夕子は改めて結婚式を挙げ、新婚旅行へ行くことにした。

何しろいくら夕子が「そんなことはもういいのよ」と繰り返し言ったところで、僕ではなくかのお姉さんが承知しなかった。それで僕と夕子は舞子さんの暖かいお節介に心から感謝しつつ、お互いに顔を見合わせて「ノー」とは言わないことにしたのだ。とはいえ、このことによって彼女はたぶん「妹夫婦に感動的な結婚式を挙げさせたのは自分だ」と、白髪頭になってからも親戚中に言い続けるだろうことは、ほぼ間違いない。

しかし、新婚旅行の行き先についてはもめにもめた。それも僕と夕子の間で、ではなく、僕とお義姉さんとの間で意見の食い違いがあり、最後にはこれもやはりお義姉さんの意見がまかり通ることとなった。

「僕の〈夫婦でアラスカへオーロラを見にいこうツアー〉のどこがいけないっていうんですか」
「あなた、夫婦で鼻水たらしながらオーロラ見て何が楽しいっていうのよ？あたしだったら絶対冗談じゃないわ。新婚旅行はずええったいに南国よ！暖かい土地じゃなきゃ駄目なのっ！」

「それはまたどうしてですか？」

「アツシくん、あなた作家のくせにどうしてこんなこともわからないのよ？新婚ホヤホヤのカップルが何故ハワイやグアムへ行くのか、そんなことも知らないわけ？」

「知りませんよ、そんなこと。第一、新婚旅行にフィンランドでムーミンに会おうツアーとか、ノルウェーでスキーをしようツアーを計画したカップルだってきつといるんじゃないですか」

「シャラップ！お黙り」舞子さんはちちち、と右手の人差し指を振った。「ハワイやグアムは常夏の国。それと同じように夫婦仲がいつまでも今のまま熱く保たれますようにっていう、世間一般のげんかつぎを知らないなんてまあ、作家が聞いて呆れちゃうわね。それをあなた、新婚早々アラスカになんて行ってごらんささいよ。夫婦間の愛情が年を経るごとに下がる一方なのは火を見るより明らかじゃないの。あんたたち、べつにアラスカだろうとロシアだろうとアイスランドだろうと、どこでも自分たちの好きな国へ行っていいけど、そのあと離婚でもしてごらん。新婚旅行に寒い国へ行ったせいだって、親戚中に言いふらしてやるから」

.....新婚ホヤホヤのカップルがげんかつぎのためにハワイやグアムへ行くのかどうかはともかく、この時の舞子さんの理屈には説得力があった。それで僕は内心悔し涙を流しつつ、屈伏せざるをえなかったのである。

（べつに僕とお義姉さんが旅行へ行くってわけでもないのにな）とぶつぶつ文句を言いたいのを我慢しながら、お義姉さんが旅行会社からとり寄せたパンフレットを開く。夕子はといえば、特に何を言うでもなく僕と舞子さんのやりとりを静観しているのみだった。何故かといえば、彼女はもともと国内がいいと言っていて、海外なら場所は問わないと言っていたからだ。それで他人ごとのようにコーヒーを飲み、熱海や伊豆などのいかにも新婚旅行っぽい写真風景を眺めていたのだった。

夕子はハワイやグアムへ行くことに反対しなかったが、僕は断固絶対に大反対だったので、その後も自分の妻ではなく何故か舞子さんを相手に、ああでもないこうでもないと言ったことになった。〈オーストラリア、コアラとカンガルーの楽園紀行〉だの〈ヨーロッパ美術館紀行〉だの〈バリー—灼熱の王国紀行〉だのと話し合いを重ねた末、最終的に僕と夕子が行くことになった土地は.....ボラボラ島というタヒチにある小さな島だった。

何故僕と夕子がアラスカでもなくハワイでもなくグアムでもなく、ボラボラ島へ行くことになったのか、実は僕にも夕子にも（多分そのことを言いだした舞子さんにも）あまりよくわかっていない。ただ「ハワイとグアムが嫌ならタヒチにしなさい！」と舞子さんが強行に言い張り——ちなみに彼女はタヒチがどこにあるのかすら、この時までよく知らなかったようなのだが——言い争いに疲れていた僕を、最後には同意させたのである。

結果としていえば、僕と夕子はボラボラ島で最高のバカンスを楽しんだ。旅行のパンフレットに〈誰にも邪魔されない、ふたりだけのランデブー〉とあったとおり。僕たち夫婦はそこで水上バンガローを借りると、日がな一日透きとおるような美しい海を眺めて過ごした。

『月の王子 太陽の王女』の番外編にあたる『太陽の娘』という中編小説をボラボラ島で僕は書き上げ、それ以外にも幾つもの素晴らしいアイデアが次から次へとここボラボラ島では閃いた。僕はたぶん――これから先作家としてスランプに陥るか、まったくのネタ切れになったような時には――再び夕子とこのボラボラ島を訪れるに違いなかった。もちろん、ふたりの新婚旅行の思い出の地としても。

僕と夕子は『月の王子 太陽の王女』の原稿料が入った頃――つまり今から一年以上も前に――住吉町の川柳荘から同じ市内の緑ヶ丘という土地に引っ越していた。近くには母校の聖城高校があり、夏場はグラウンドから野球部員たちの元気のいいかけ声やバッティング練習をする音なんか聞こえてくる。昔は学校の見える距離に住むなどまっぴらごめんだと思ったものだったけど――今は時々、自分の母校のグラウンドの土手で、野球の練習風景を見ていたりするのだから不思議なものだ。

そして首からかけた画板の上で原稿を書いたり、ふと手をとめては哲学的な思索に耽ったりする――優しいそよ風に吹かれながら、この風はどこからやってくるのだろう、などと。

夕子は緑ヶ丘の中古の一軒家――白樺台の彼女の実家ほどではないにせよ、大して褒めどころのない5LDKの平屋――に越してきてからも図書館に勤め続けている。家事のほうは相変わらず完全平等分担制をとっており、料理をする時に彼女が必ず分量に拘ることも変わっていない。

そしていつまでも単調にこのまま永遠に続きそうに思える生活が怖くなったような時には――僕は夕子と海を見に行く。夏川とマリエの身体を飲みこんだ、厚岸の海を。もちろん、厚岸にきた以上は舞子さんの家に顔を見せないわけにもいかないので、釧路へ帰る前に必ず、彼女の家を訪れては親戚づきあいの煩わしさを満喫している。

舞子さんと厚岸役場に勤める旦那さんの間には、一歳九か月になる双子の子供がいて、上が男の子で優太くん、下が女の子で毬亜ちゃんという。僕があんまり楽しそうに子供の相手をするため、そのたびに夕子は帰りの車の中で無口になったが――義理の姉の子供を本当に心から可愛いと思いつつも、僕は自分の子供を欲しいようにはやはり思えなかった。それでいつも夕子に「他人の子供だから可愛いんだろうな」と話していた。

「どういうこと？」

酒を飲んだ僕のかわりに運転しつつ、闇の中へ夕子が問いを発する。

「つまりさ、責任がないってことだよ。自分にもし孫がいたらこんな感じかなって思う。これがもし自分の子供だったら甘えさせるばかりじゃなくて厳しくもしなきゃならないだろ？でもただ可愛い可愛いって可愛がってればいいんだから、気楽なもんだっていうこと」

「ふうん」と夕子はまだ疑いの残る横顔でいる。そんなこと言いながら、やっぱり子供っていいなって思ってるんでしょ、と言いたげに。

「夕子が心配するようなこと、何もないよ。それとも僕が子供欲しさのあまり、外に愛人でも作ると思ってる？」

「思っていないわよ。ただ……」

「ただ？」

「心配なだけよ。だってわたし、あんまり幸せすぎるんだもの。本が大好きだから一生懸命勉強

して司書になって、しかも結婚した人が作家だなんて、こんなパーフェクトなことって他にある？しかもあなたは才能があって、いつも思うわ。一体頭のどこでこんなこと思いつけるんだらうって。自分の仕事のほうはいつも単調かつ順調な感じだし——この単調さに飽きでもしないかぎり、わたしは永遠に幸せよ」

「じゃあ、なんで泣くの？」

「泣いてないわよ」と夕子は泣きながら言った。「きっと女性ホルモンのバランスがばらばらで、エストロゲンが分泌されないんだわ」

「……車、その路肩に止めて。運転かわるよ。僕が飲酒運転で捕まるより、夕子が事故を起こす危険性のほうが高そうだから」

昆布森へと至る道の別れ道で、僕は夕子にサイドシートを譲った。そして真っ暗な闇の中、情緒不安定な彼女と一時間くらい話し合った。時折、月の光に照らされながら。

夕子は僕の父や母が早く孫の顔を見たいと切望しているのを強く感じることを、また僕がそのことに対してあまりにも鈍感だと言って責めた。

「アツシはあえて言う必要なんかないって言ったけど——でも言わなかったらやっぱり、騙したことになるんだわ。お義父さんやお義母さんがいい人で、実の娘みたいに可愛がってくれるから余計、そのことがつらいのよ」

「悪かったよ」またこの話かと思いながら、僕もやはりいつもと同じ言葉を口にのせるしかない。「言ったろ？うちの兄貴はゲイで、夕子には正平さんのことを紹介したけど、うちの両親にはまだなんだ。僕たちに子供ができないことも、もしそういう時期がきたと思ったら言えばいい。何も夕子が自分から言う必要なんてないし、僕の体のほうに欠陥があって子供ができないって言ったっていいんだから」

「……………」

厚い雲が流れて、闇の中に十六夜の月が姿を現した。さっと流れた月の光に、夕子の頬に流れる涙が淡く光る。

「さっき、夕子は単調な生活に飽きさえしないかぎり永遠に幸せだって言ったけど、永遠に続く幸せなんてありえないと僕は思う。そもそも幸せになるには応分の代償を支払う必要があるんだ。そして夕子は十分その代償を毎日支払ってる。今のところ体のどこにもガンの転移は見られないけど、次に検査した時には見つかるかもとか、そしたらまたあんなにつらい治療をとか、不安になったらきりが無い。でも不安でいないと不安だって気持ちは、僕にもわかるよ。のんきにのほほんと構えてたら、ある日不幸の金属バットで不意打ちにされるんじゃないかって、そのことが怖くなるんだ」

「おかしな例えね」夕子はガーゼハンカチで目元を拭くと、くすりと笑った。「いつものことだけど」

闇の中、それからずっと沈黙が続いた。ここの道路は車通りが少なく、道を照らす街灯などというものもない。車を停めた目前には、月の光に濃い影を落とす森の樹々……時折、カラスだろうか？ギャアギャアと不気味な鳥の音が聞こえてくる。

やがて強い月の光によってある種の魔法が解かれると、僕は車のエンジンをかけた。緑ヶ丘の

中古の平屋に戻るまで、それからずっと夕子と僕は無言で――お互いの間に横たわる、その神聖な闇の静けさを楽しんだ。

僕には夕子が何を考えているかある部分わからないし、夕子にしてもそれは同じだったろう。ただお互いにわかっているのは、この相手とはどうやら離れられそうにないということだけだった。

そして車のヘッドライトしか導くものがない闇の中、僕は考える。何故自分はこの女と離れられないように、自分の生まれ育ったこの釧路という土地から離れることができないのだろうか。

十代の頃はよくこう思ったものだった――こんな魚くさい田舎町、一度でたら二度と戻ることはないだろう、と。だが逆に、僕は旅行以外でこの土地を長く離れるということが今まで一度もなかった。これからおそらく、結局は自分の故郷であるこの釧路から離れることはできないだろう。

たぶん、その理由はおそらく海だ。濃い藍色のそれを見たいと思った時に、また潮の匂いを嗅ぎたいと思った時に、そばにそれがないと僕は生きられない。

そして永遠ということを生まれて初めて僕に教えてくれたのも、海だった。陽が昇る朝も、闇の支配する夜も、僕が目覚ましても眠っていても……海だけは決して変わることなく寄せては返す。

僕は自分の意識の海をさざ波に浸蝕されながら、遠く鍵島のことを思った。鍵島が僕の心の地図にしかない島だったとしても――いつか必ず僕はそこに辿り着く。そして夏川と握手を交わし、マリエと三人で魂の島で仲良く暮らすかもしれない。時々、子供みたいに喧嘩をしながら……

。

終わり

永遠の海

<http://p.booklog.jp/book/29761>

著者：ルシア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lmnlive/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29761>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29761>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.